文學博士 佐佐木信綱
文學博士 五十嵐力
文學博士 吉澤義則
文學博士 高野辰之
文學博士 本間久雄
共著

日本文學全史

題簽・吉澤義則
裝幀・小林古徑

日本文學全史刊行の辭

文學はあらゆる意味で、一國文化の象徴である。それはその國の一般民衆が、その時代々々に於て、何を惱み、何を憧れ、何を苦しみ、何を求めたかを、最も端的に表示したものだからである。一國の文學史は、この意味に於て、あらゆる歴史の精髓であり得る。吾等は、實にこれを學ぶことに依つて、始めて最も妥當に、直截に、その國民の精神生活の跡を辿り得るのである。

今日の我が日本が、將來に於て更に一層の飛躍と發展とを敢てする爲には、何よりも先づ、過去三千年に亙る我が文學の歴史を精細に檢討することを以て、その急務の一つとする。かくすることによつて日本文化の眞髓を把握することなしには、一切の飛躍も發展も、つひに空疎に終ることを免れないからである。

吾等が、日本文學研究の領野に於て、現代日本の持つ最高權威者たる五先生の熱心な援助の下に、ここに『日本文學全史』の刊行を企てた微意亦こゝに存する。卽ち重ねて云ふが、吾等はこれに依つて、日本文化そのものの相を最も正當に認識し、その現れを最も豐潤に鑑賞し、その本質を最も的確に把握し、そして又、かくすることに依つて、吾が當來文化建設についての誤らざる批判と、輝かしき希望とを贏ち得ようとするのである。

願はくは吾等の意のあるところを諒とせられ、絶大の同情と聲援とを賜らんことを、文藝家各位、敎育家諸彥、並びに日本文化に關心を持たれるあらゆる知識階級に向つて、衷心希ふものである。

株式會社　東　京　堂

内容及執筆者

日本文學全史　卷三

平安朝文學史

上卷

五十嵐　力著

（本文五〇四頁參照）

猿のやうにかいつきて（四天王寺扇面古寫經より）

ありのまゝを記して序にかへる。

序

私は三十年前に於いて、精密なる日本文學史を書くことを空想した。その後、能力不足の自覺と繁雜な外境の壓迫とから、段々この空想の領域を狹められて、到頭せめては平安朝の文學史だけでも、幾らか氣に合つた程度に書きたいと考へるやうになつた。この考を起してから、もう十幾年かになる。さうして其の十幾年を少しも豫想しなかつた傍系慮外の仕事に執掌し盡くして、その殘務の、まだ可なり積もつてゐる中に、今度の著述を引受くべく餘儀なくされたのであつた。

私は困りながら悅んで引受けたが、殘務をかたつけて、いよ〳〵此の大切な仕事にかゝつたのは、私の擔當部分の出版期日が目睫に迫つた時であつた。私は猪を見て矢を矧いだ。且つ讀み、且つ考へ、且つ書いた。その間しみ〴〵考へさせられたのは、わが準備の足らなかつた事、讀書力の不十分な事、蘊蓄の乏しい事等であつたが、番へた矢は放たねばならぬ。そ

れから、私は諸學者在來の研究の締め括りに、わが意見の決定に、表現姿態の考慮に、慊たしき焦躁の幾月かを閲して、やうやく此の流産書ともいふべき、恥かしい結果を見ることとはなつたのである。

この書を草するに當たつて、私はまづ專ら文學的に取扱はうと考へた　これは、一つは時間の切迫と、紙數の制限と、他の方面に於ける準備の不足との結果ではあるが、第一には、今までの文學史に最も缺乏して居るのは、此の文學第一義の檢討及び表現の不足であると考へたからで、また此の方面に努力しなければ、自分としては書く甲斐がないと考へたからであつた。

私は努力の標準として「新」「完」「警」の三義を選んだ　而して此の三義の一つもしくは二つ以上を具備した作に對して、特に詳細なる研究を捧げることにした　「新」は自ら古を作して、一種一類の祖先となつた魁の文學である。「完」は出現の先後にかゝはらず、一種一類の中の最も優れた、最も完全なるものである「警」は作自身はさまでの價値を持たずとも、或る新しきものを含蓄し、もしくは示唆し、暗示して、他を刺摩する力を持つてゐるもの

である。眠れる者を覺まし、躊躇する者を前進せしむる刺撃力を持つてゐるものである。誘發、警策、促進の力あるものである。新しきものは、高き價値をもたずとも、新しき事それのみによつて、特別の取扱を受ける資格があるであらう。完きものは其の優勝性のみによつて特別の取扱を受ける資格があるであらう。警醒示唆の要素を具へたものも、また其の刺戟性のみによつて、特別に取扱はるゝ資格があるであらう。これらの二つ若しくは三つを備へたものが、更に特別破格の待遇を受くべきことは云ふまでもない。吾等は右の第一の資格者を『竹取物語』に於いて見る。第二の資格者を『源氏物語』に於いて見る。第三の資格者を『大和物語』に於いて見る。而して三者を兼ね備へた稀有の資格者を『枕の草子』に於いて見出だすことが出來る。

私は此の書を草するに當たつて、常に走馬燈式といふ事を考へた。文學史家は、たとへば或る一點に立つて走馬燈を見るやうなものである。走馬燈の物像は、その一點の前に來た時に於いて、最もその大きさを增加する。而して、子供も、大人も、車夫も、馬丁も、船頭も、猿廻しも、軍人も、女給も、大臣も、ほゞ同じ大きさを現はすであらう。而してその一點を遠ざかるに從ひ、段々小さくなつて、遂にその影を消すであらう。代々の文學が文學史家の前に現はれる

いも、たとへば其のやうなものである。時代を離れて遠目に見れば、見る影もないやうなものでも、時の環象背景に擁せられて、文壇の檜舞臺に立つた時の姿は、意外に大きなものであつた。文學史家は五百年千年を遠目に見遙かして、全體から見た比較の量差を公平に決定すると共に、また發表當時に於ける始現の大きな姿をも見ねばならぬ。醞釀累積された時代の趨勢に乘じ、現はるべくして現はれた舞臺一ぱいの大きな姿を、一たびは認め、描き、說明して後、更にその缺陷を補つて後至の文學の現はれ出づる趣を認め、描き、而して說明せねばならぬ。これが私の、出來るならば企てたいと、常に思つてゐた一つの希望であつた。而してこの心構で代々の文學を見ると、私は彼等がそれ〴〵時代必然の趨勢に導かれつゝ、當當てられた最善を盡くした姿の貴さに打たれて、曾て遊離的に考へてゐた非難酷評などをすつかり忘れるのを常としたのであつた。

私は形式內容に通じて、常に文學潮流の推移を跡づけることをつとめた。これはあらゆる史的研究に當然の事であるが、時々潮先を長追ひして、相伴ふ同時代の現象を馳け拔ける亂暴振をも發揮してゐるので、特に一言するのである。

私はまた、常に藝術的の具體描寫を念とした。代々の文學を取扱ふに當たつて、智的、理的のメスを加へる間にも、同時に一種の同情と風味とを加へて、當の文學特有の姿態を讀者の幻に描くやうにしたいと考へた。作の中心特色を考へ、それを證據だてる最善の例を選び舉ぐることにより、有情の筆觸を加へることにより、新しく說明し直すことによつて、一種の創作的風趣を帶びさせたいと考へた。これは私に取つて恐らく一種の及ばぬ戀であらう。けれども私は先師坪內逍遙先生の實示された活きた例を幻に眺めつゝ、かやうな企圖を棄てることの出來なかつたことを、白狀せずにゐることが出來ないのである。

私は國として日本を第一に愛すると同じやうに、日本の文學の中では、第一に平安朝の文學を愛するものである。而して此の愛を、そのまゝ同胞に傳へたい希望から、殊にその特別なる文致を玩味して貰ひたい希望から、もう一つは之れによつて我が文學の國威、時代威を發揚したい希望から、しば〳〵短からぬ文例を引いては、拙い現代語譯を添へることを敢てした。稀には外國文學の梗概を叙することさへも敢てした。これは賢明なる多くの讀者に取つて、餘りに啓蒙的に、餘りに道草的に、また餘りに低級に見えるであらう。けれども私が、低級の笑に甘んじつゝ、敢て之れを試みたのは、その中に、親切とも、妥當とも、或は寧ろ高級

ども見らるべき一面のあることを意識したからである。世には著者自身、引例を理解せず、肝心な或は誤解してゐる場合が少なからずある。讀者にもまた、抽象論の部分のみを見て、引例を理解せず、往々は之れを邪魔物扱ひして、飛ばし〳〵躍進する場合が少なからずあるであらう。私は是等の實例を見て、常に之れを遺憾とした、而して我が小著にはせめて此の遺憾なからしめたいと思つて、此の企てを敢てしたのである。

右は私が筆を執りつゝ、ひそかに考へてゐた事の主なる一部を、そのまゝに記したので、此の小著は要するに、わが甲羅に似せて掘つた蟹の穴のやうなものであるが、從つてその中には自由な、大膽な、我儘勝手な一家言が少なからずあるであらう。例へば桓武天皇の御製、日雄人の『睡覺記』、古今集假名の序等に關する臆說の類で、細かに擧ぐれば無數であるが、これらの愚見に對して、大方の教示を與うすることが出來れば近頃である。

本書は一字一句悉く著者の筆に成つた。挿畫に關しては、今井卓爾君、堀江知彥君、岡一男君、田中重久君、森直太郎君等、わかき學友諸君の多大なる助力を得た。この方面には特に疎き著者の著述が、とにかく是れだけの圖版に飾られることの出來たのは諸君のお蔭である。

私はまた圖版掲載について、帝室博物館、宮内省圖書寮、北野神社、その他公私諸家の御許しを得たことに對して甚深の謝意を表する。最後に特にお禮を云はねばならぬのは、東京堂出版部の増山新一君の厚意である。増山君はこの小著に關して、著者との直接交渉に當たつてくれられた人であるが、半年餘りの間、いやな顔一つせずにお百度を踏んで、著者を勵まし慰めつゝ、八方に力を藉された勞は多大なものであつた。私は、良書は必ず廣く行はるべきものといふ信念を以て其の業に盡瘁される君にお守りされつゝ、此の小著の上半を完了したことを、近頃の悦びに思ふものである。

昭和十二年六月十八日

五十嵐力

目次

先行文學――『寶樓閣陀羅尼經』『㮈女祇域因緣經』『月上女經』の荒筋――彼等を攝取したる『竹取物語』の態度――『竹取』に取られたる日本の文獻及び史實、傳說――『竹取物語』はあらゆる資料を日本化、王朝化、自己化したり――『竹取』の構想の整齊、莊麗、雄大――その文學性の多方面――『竹取』の文章の風致の由來――『古事記』『靈異記』との對照――假名の活用――『竹取』の作者が文章上の建前は「現用の平易な國言葉で面白く書く」にあり――『竹取』の文章に於ける短、强、直の三昧――同じ調子を疊む間に見する變化――緩急――特得のユウモア――人物の性格の取合はせ――成立の年代――作者――源顯はあやし、或は僧正遍昭か――『竹取』の劃期的なる諸方面

第九　愛情の珠玉を聯ねた『伊勢物語』……………………………………二二四

『竹取』の缺陷を補へる『伊勢物語』――一意愛情躍動の機を捉ふ――『伊勢物語』成立段取の想像――此の物語に現はれたる男女愛三樣の姿――一、素直に言ふ――二、美しく求め美しく受く――三、男は强ひず、女は辱かしめず――愛の表現の幼なさ、愛くるしさ――「けり」と「昔男ありけり」――親切、寛容なる心の現はれ――「あら玉の年の三年」、その譯――英のテニスンの『エノック、アー

創造――異彩ある文章の誇り――ころ〳〵並べ、ぽつ〳〵書き――單語單句を並べて立派な文學となせる第一人者――むつかしげなるもの――ありがたきもの――開闢以來の獨壇場――奇警、妥當、簡潔無類――清少納言は自然人事に對して科學的分類を試みた第一人者――分類的な物の見方の原由――李義山の「雜纂」――「古今和歌六帖」――彼等より影響を受けたりとしても、此の草子の價値にも獨創の資格にも累ひなし――題材接離の形式に關して作者の持つてゐた創作意識――群々割據――內容四種――一、單語、短句、短章の一群――二、逸話、物語式なる長文の一類――三、自然描寫――四、一種の論說文――その例――獨自第一性の現はれ――「第一の人に又一に」原文及び譯――「宮にはじめて參りたる頃」原文及び譯――清少納言と定子中宮と、機智と趣味との合作――「香爐峰」、原文及び譯――一種の組織ある物語、準短篇小說「草の庵を誰れかたづねむ」原文及び譯――種々の點より見て言語道斷の技巧美――戀愛に對する清少納言の不思議なる超越態度――「などか實をまほに近くは語らひ給はぬ」原文及び譯――震旦、天竺を左右に侍らせて我が國粹の綜合美を成す――古典暗示の最高境――清少納言に於ける「をかし」の特殊味――傳說記事――蟻通明神の緣起――立派な國文を成した傳說記の敍事

圖版目次

挿畫目次

平安朝文學史 上卷

第一　遠　望

一

西天の法(佛法)を我が國におきて第一の臣下とし、震旦の儒道を吾が國におきて第二の臣下として、神明の左右をはからせ、神道の潤色とするものなり

これは『倭論語』の著者が、平安京を奠めさせられた桓武天皇の神託として記すところである。自尊廣攝、まことに高遠無比の御言葉であるが、記すところの書物については、暫らく問はず、事實の跡について見れば、天皇の大御心には、おそらくかうも思召したであらう

また平安朝といふ時代の理想はまさしく、かうもあつたであらう。日本といふ國の理想は、もとよりかうであつたのであらう。同時に、平安朝の文學の理想も亦まさしくこゝにあつたので、この時代の生んだ勝れた作は、立派に之れを實現してゐるのであらう。最澄、空海は我が朝に於ける日本佛教の創建者であるが、彼等の偉大なる事業は主として天皇御庇護の賜物であつた。彼等が外來宗教の理解と日本化とに努めつゝ、同時に佛教による國家鎭護、

皇化翼贊に對して、いかに其の眞心をさゝげたかは、空海が其の奏狀に於いて、一生々に陛下の法城と爲らん、世々に陛下の法將と作らん―と云つてゐるのを見ても知られる。天皇は漢學者を優遇遊ばされた。而して遣唐使を派遣せらるゝ時には、漢禮によつて餞宴を設備させつゝ、同時に御詠和歌の美しき御製を賜はつて、彼等の凡てを感涙に咽ばしめられた。

永久の皇都奠定は恐らく、神武東遷このかたの國民的希望であつたであらう。橿原以來、大和の各所に、攝津に、河內に、近江にと、幾度も都を遷され、奈良七代七十年の間においてすら、聖武天皇の近江遷都の御企てがあり、最後に山城の長岡を暫らくの試みとして、やがて山河襟帶四通八達の葛野宇太に千年の帝都を奠められたのを見ると、京都はまさしく、吾等の遠祖が千四百五十餘年の長い〳〵暗中摸索をつゞけて來た約束の都であつたかのやうに思はれるが、天皇は過去千四百五十年の國民的要望を成就して、帝都問題を美しく解決された上に、蕃別の英雄將軍坂上田村麿を起用して、神武天皇以來、日本武尊以來の國民的恐怖であつた蝦夷を平らげられた。文學について見れば、奠都以來、弘仁期を中心として、貞觀、延喜、天曆、長保、寬弘と、朝野を擧げて文選、白氏等に傾倒したのは、之れによつて、一條朝を中心とする假名文學に豐かな色彩を添へんが爲めであつたのであらう。佛教とても同じ事で、その信仰や儀式は、此の時代の文學に對して多くの美しき氣分と趣致とを與へた。歌道に於いても

其の通りで、此の時代の末期に俊成、西行等が出でて、或は和歌に天台止觀の深義を寓するといひ、或は寂しさに徹した心の味を詠み出づるといひ、或はあるかなきかの燈火にむかひ、桐火桶をかき抱いて、白氏が廬山の夜雨を微吟しつゝ、思ひを錬るといふ類ひも、その奥底の眞意義は、やはり佛教、儒教、道教を藥籠中のものとして、我が本來の歌道に深き新しき特殊味を加へるにあつたのであらう。

桓武天皇は千年の帝都を奠め、建國以來の宿憂蝦夷の難を除き、外來の二大文化を尊重し研究し、馴致して、後至の子孫と共に四百年がかりで美しい新文化を成就された。我々は平安朝四百年の文化の基礎を置かれた此の聖帝に對して、實に拜頌の辭を知らないのである。

二

平安朝は延暦十三年(一四五四)に於ける桓武天皇の平安奠都と、文治二年(一八四六)に於ける源頼朝が鎌倉幕府の開設とを頭尾の劃期線として、其の間に挾まれた約四百年の稱呼である。それは上奈良朝を承け、下鎌倉時代に繼がれた王朝最後の四百年である。奈良朝は大體に於いて外國の文化をそのまゝに模倣した時代であつた。本邦在來の文化が輸入文

化と互に深く影響せずして、不相關焉の態度を取りつゞけた時代であつた『古事記』と『日本紀』と『萬葉集』と『懷風藻』とが、隣接的に現はれて並存し、萬葉集に於いては漢文の序辭と本文の和歌とが仲よく連接して、少しも怪まれない時代であつた。平安朝は之れに對して同化創造の時代である。外來文化を我が物として、新たなる生命を吹き込んだ時代である。吾等の遠祖が外國の文化に久しく接觸した結果、やうやく自性に目ざめて、獨立の臍を固め、先づ猛然として起つて、其の精神的消化液の効目を試さうとした時代である。この試みは着々と成功した。彼等は先づ手始めに彼土の天台、眞言から胎を奪ひ骨を換へて、すつかり面目を異にした日本式平安朝式、比叡式、高野式の新天台、新眞言を育て上げた。また之れと前後して、あの複雜な、四角な表意式の漢字から、簡單圓曲なる標音式の片假字、平假字を創製した。唐朝の衣冠禮裝を倭ぶりにして、我が束帶、衣冠、袿袴、五衣の優雅婉麗なる新樣式に作りかへた。假名の文學が唐土の手振を人知れず取り入れたことはいふまでもないことであるが、彼等が漢詩文その物までを、角をたふし、持前を柔らげて、王朝式の歸化文章を作りあげた事は、一部の『倭漢朗詠集』を讀む者の容易に首肯する所であらう。

　平安朝は大體かやうな外國文化の同化、新文化の創建を、思ふ存分にやり了せて、之れを後至の鎌倉期に手渡しした時代である。而して彼等の文化の本領は情本位、美本位のもので

あり、公卿式、女性式、幽玄式のものである。從つて彼等が外來文化に施した消化液も、主として情化、美化、公卿化、女性化、幽玄化式のものであつたが、之れを受け繼いだ鎌倉時代はすつかり其の面目を異にした。平安朝が、譬へば優美な女性であるのに對して、鎌倉時代は筋骨逞しき偉丈夫兒であつた。これを定朝作の柔和な慈悲佛とすれば、彼れは運慶、湛慶作の仁王像であつたであらう。從つて鎌倉文化の本領は意志本位、義理本位のものであり、武人的、男性的、剛健的のものであつたので、もし四百齡を一期とした平安朝に言葉があるならば、遺跡相續の鎌倉時代に對して、かうも言つたであらう。「我々は大和民族の具有する情的、美的の性能をば、極度に開發し盡くしたつもりである。われらは花月遊宴の四世紀に疲れて、もう新生活の試みに振ひ起つ勇氣がない。意志的、男性的なる新生活、新性能の開發についてはー切を君等に委ぬるであらう」と。

三

奈良朝七十年を背後に振り分けた延暦十三年の分水嶺に立つて、遙かに平安朝四百年の日本を見渡すと、先づ著しく目につくのは、地理的には、王城の繁榮の爲めに、あらゆる地方部

落が身を粉にして帝都に見繼いでゐる有樣である。人文的には、凡べての民草や武人、地下人等が、手をかざし指をくはへて大宮人を尊み羨んでゐる有樣である。遷都早々から鎌倉幕府の創立に至るまで、類別された長い〳〵人間の隊列が幾流れも續いて居る間に、中央部を貫通して最も太く、著しく、美しく見えるのは、束帶衣冠に身を飾つた此の大宮人の一群であるが、彼等が時代の開け初めに於いて、暫らく右往左往の混亂を見せたのは、遷都の騷ぎに勢力爭ひの加はつた不安の影の現はれであらう。やがて世の中が落ちつくと、君臣和樂の雍々たる輝きが見えて、狩獵、詩賦、遊宴の會合が頻りに行はれて來た。弘仁前後に於ける唐土式文化光耀の現はれであらう。やがて平安京の隆昌が奈良の古京を凌ぐやうになる而して百敷の男女の大宮人達が詩歌管絃に、草子物語に浮かれつゝ、競つて花をかざして太平に醉ふ間に、此の中央群の美しい大流れの中から、一筋特に著しく、俄に膨脹擴大して、他の仲間を威壓するのが見えて來た。源平橘菅の諸家に對する藤原氏專權の影であらう。さる程に、此の一筋の勢力は年と共に加はつて、傍系他流の仲間々々が、爭つて之れに合流した稀には彼等に反抗し、彼等に取つて代はらうと企てる者が、中央にも地方にも現はれたが、現はれるやがて出先を挫かれ、或は遠國に追ひ拂はれ、或は無殘に討ち滅ぼされて、その度毎に、彼等の勢力はいや增しに增すばかりであつた。かくして彼等の全盛橫暴がいつまで續く

ことかと、汗を握り眉を顰めてゐると、見よ！　此の滔々たる時勢の流れの中に、微かながら神々しい光を放つ一筋があつて、忽ち赫奕の輝きを見せて來たのを。同時に全盛の一團が俄に威勢を失つて消極後退の氣運を見せて來たのを。院政の勃興によつて、御堂關白の子等が周章狼狽する大勢改變の現はれであらう　その中に、世間の様子がいよ／＼複雑に物さわがしくなつて來る。やがて延暦の分水嶺からの遠望にも、三筋の集團の大流れが、あざやかに見えて來た。その一つは仙洞禁裡を奉ずる、やんごとなき光の流れで、一つは藤原氏を中心とする一群の、氣息は奄々たりながら、歴史の惰力で、ともかくも支へてゐる大集團の流れ、更にもう一つは、久しく養つた武力によつて、藤原氏にも力にされ、仙洞からも憑まれ奉つてゐる源平の武人等の流れである。此の三つの流れ、それ／＼に一筋では立ち得ぬ數奇の運命を持つてゐた三つの流れが、暫らく合ひつ離れつ、撚れつもつれつするよと見てゐると、三つの流れの各々に深刻な内訌が起こつたのであらう、やがて彼等の間に骨肉相食む非倫殘酷なる殺し合ひが、しかもつゞいて二度までも演ぜられた　保元、平治、二つの劃期的大亂の遠望に相違ない。

二度の戰雲が收まると、遠見の形勢がすつかり變はつてゐた。仙洞を奉ずる一列と、藤原氏を中心とする一列とは、もう見る影もなく痩せ細つて、代はつて著るしく目につい［て］來た

のは、赤旗を靡かした武人の大集團である。此の集團は、初め甲冑弓箭の武人姿を誇つてゐたが、いつの間にか束帶直衣の公卿姿に豹變して、歌舞音曲の風流を誇るやうになつてゐた。武人として起こつた平家が公卿に早替りした大勢の遠見であらう。赤旗の勢力はすさまじかつた。そしてその榮華全盛は前代の藤原氏をも凌ぐばかりであつたが、物の二十年を過ぎると、白旗を擁した武人等が東西南北から群り起こつて、瞬くひまに王城に迫つて來た。赤旗の團隊は戰はずして走り、戰つては逃げして、その影が次第に遠く薄くなるうちに、遙か西國の海の中で、一道の光が、ちらと閃いて、忽ち波濤の中に沈むのが見えた。壽永の秋に於ける幼帝のお痛はしい御最期に相違ない。

やがて世間の樣子が見る〳〵中に變はつて、今度は關東に集まる白旗の武人等が矮幅大頭の一將軍に率ゐられて、勇ましく進んで行く蜿蜒たる勢揃が遙かに〳〵見える。時代の英雄源頼朝によつてまさに開かれんとする新時代の紅拂曉の光景である。

四

平安朝四百年の間に起伏興亡した文學は、一面複雜を極めてゐるやうにも見えるが、同時

にたやすく一線に撚り集められるやうにも見える。

皇朝の文學の淵源は『古事記』にある。『古事記』は太古當時の記錄としては美しく開き切つた花であつたが、同時に後代を含蓄する種子典としては、未笑の花であつた。『古事記』の歌謠は二音より十一音に至る、あらゆる音數の句を含み、また五七、七五、五五、七七、短長、長短、短短、長長等、あらゆる組合せの句法を含んでゐた。また片歌、旋頭歌、短歌、混本歌、長歌、その他いろ〳〵の歌體を含んでゐて、之れを分岐開展せしむれば、神樂歌、催馬樂、今樣、小歌、謠曲、淨瑠璃、新體詩、口語詩、自由詩のいづれにもなり得べきものであつた。『古事記』の散文の方面にも、短句、長句、流暢句、佶屈句、莊嚴句、好笑句、感覺式、靈覺式、着々式、飛躍式等、いろ〳〵の體製樣式が備はつてゐて、平安朝の日記、草子、物語等に見える國風の諸樣式はいふに及ばず、漢籍、佛典に見える典雅莊嚴なる樣式をも、種子としては其の中に見出だすことが出來た。　内容から見ても、戀愛、遊宴、戰爭、旅行、自然愛、人間愛、道德感、藝術感等、大抵は同じ事で、唯だ精粗、純雜、單複、大小が違ふばかり、種子雛形としては、平安朝文學の題材が悉く『古事記』の中に見出ださるべきものであつた。

『古事記』が平安朝の文學に對して、特に包容含蓄の振合を見せたのは、歌謠を附帶事情と聯ね寫した書きざまである。例へば、

この大神、はじめ須賀の宮作らしゝ時に、その地より雲立ち騰りき　爾御歌よみし給ふ其の御歌は、

八雲立つ、出雲八重垣、

つまごみに、八重垣つくる、その八重垣を。

と書き連ぬる類の樣式の如きは、奈良朝の文學では、『萬葉集』に於ける山上憶良や、大伴旅人、家持等の、長い漢文の前置を附けた歌の記述法の濫觴とも見るべく、また平安朝の『伊勢集』『檜垣嫗集』『成尋阿闍梨母集』等に於ける、長い詞書の副うた歌の種子的樣式とも云ふことが出來るであらう。また此の見方を廣く推し進めると、『古今』『後撰』に見る詞書は、概して古事記式の先立てる附帶句を要約して、本尊たる歌の端作としたものであり、『伊勢物語』『大和物語』等は同じ附帶句を伸べ長めて、讀切物語の體裁を成さしめたものである從つて『枕の草紙』も、『源氏物語』も、『土佐日記』も、『かげろふ』『和泉』その他の女流日記も、『大鏡』も、『榮華物語』も、地の文と歌との交互する點から見れば、感情の高まる要處々々に歌を鏤めて、心理進展の曲折を示し、行文に變化を與へ、散文律語の間に於ける交互起伏の旋律を奏でしめる點から見て、全く『古事記』の遺鉢を嗣いだものと云ふことが出來るであらう。極端にいふと、先立てる附帶記事と歌とを、切れ目なしに書きつゞけたのが

先祖なる『古事記』の混沌未分式、附帶記事を簡單にして、低く下げて書き、歌を上げて書いたのが歌集式、附帶記事を委しくして、高く上げて書き、歌を低く下げたのが物語式とも云へば言ふことが出來るので、謂はゆる歌物語の種子形式は、已に『古事記』に、語部の語りぶりに、神代の言傳の中に存在してゐたのである。

歌謠そのものについては、改めていふまでもないことであるが、平安朝の散文文學に歌の挿入されぬものは殆んど無い。而して此の歌文交互といふ事が、平安朝文學に於ける最も重要なる要素の一つであるとすれば、四百年の王朝文學を一線に撚り集めて見ることが出來るといふのも、あながち不當ではあるまいと思はれる。

しかしながら是れは假りに或る一面から見た十把一束の平等觀である。標準を異にして、他の一面から見れば、四百年の文學は無限の差別相を現ずるであらう。

五

差別相から見た此の時代の最も主要なる文學の一種は歌謠である。而して當代に於ける歌謠現象の最も主要なるものは短歌である。

短歌は平安京草創の初めから上流の間に玩ばれて、重要な場合に於ける有力な役廻りをつとめたが、初めの大部分は惜しいかな忘れられて、極めたる少數のみが辛うじて記錄された。それは主として漢文の隆盛に抑壓された爲めであつたが、短歌が此の抑壓から脫して芽を吹き始めたのは、貞觀前後の謂はゆる六歌仙時代であつた。六歌仙の中特に名高いのは在原業平、小野小町、僧正遍照等で、若々しい情緒を放膽に美しく詠み出でたのを、彼等の特色とすべきであらう。此の期に次いで榮えたのが、延喜の古今集時代である。『古今集』は紀貫之の新しい見識によつて統一的に編纂されたもので、その歌風は長く我が歌界を支配して明治時代に及んだ。純なる詞を用ゐ、趣向の巧みを見せて、美しいみやびた調子に詠み出でること、言ひ換へれば、純粹、智巧、風雅、この三つを併せて美しい調和を成すことが彼れの思想の中心で、而して此の思想を最も美しく實現したのは『古今集』である。『古今集』に次いで平安朝の間に出來た勅撰歌集は後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載の凡て六種、いづれも『古今集』を眞似て及ばぬものであつたが、最後の『千載集』は編者藤原俊成等の新しい趣味が加はることによつて一種未曾有の特色を建立することが出來た。而して鎌倉期に入つて出來た『新古今集』は『千載集』を承けて更に其の特色を廣め深めたものである。俊成の趣味は禪味、茶味、俳味などいふものに似通つた一種の曲味で、形式の曲折を多くし、外

來味を餘意に持たせて、歌の感應を奥深くするにあつたともいふべきであらう。天台止觀の凝念、白氏の名句の低誦、古名句の攝取移入など、皆これを證するものであるが、要するに彼れ及び同時代の優秀者の和歌感は、一面は依他的であつたが、他に依り、人から借りながら、同時に之れに超越し、之れを棄揚する趣があつたので、新に一種特別の風趣を成すことが出來たのである。俊成が『古今集』を稱へつゝ之れに傚はなかつたのは、貫之が萬葉集に禮しつゝ之れを學ばなかつたのと相對して、自ら古を作す者の意氣を見るべきものであらう。

當代に於ける歌謠現象として第二に注意すべきは謠はれた歌の群である。それは多くは定められた節により、或ものは定められた儀式に伴ひつゝ諷誦された歌謠の群で、神樂、催馬樂東遊、和讃、朗詠、民謠等がその主なるものである。それらの多くは短歌の所々を繰返して拍子詞を添へたもの、或は七五調を本位とし、長短句の變化ある添加によつて興を添へたものであつた。槪していふと、短歌を中心として、形式內容兩方面の變化を加へたものであるが、自由な感情の發露と口誦諷詠の面白味とを、その特色とすべきであらう。

歌謠現象の第三は前代を承けついだ短歌以外の歌で、その主なるものは長歌及び旋頭歌である。これらは貫都の數十年後から試みられて、代々の歌集の一隅に載せられ、而して長歌の中には、長さに於いて『萬葉集』を凌ぐものも現はれたけれども、大抵は前代の眞似事

で、形に囚はれた、命の無いものであつた

歌謠現象の第四、第五は歌合と歌論とである。歌合は花合はせ、草合はせ等の遊戲から起こつた、短歌を翫弄する一種の催しで、歌人を左右の兩班に分かち、兩方から提出した二首ずつを順次に番はせて、判者に勝負を判ぜしめる風流遊びであつた。而して、その判定は修辭批評の一面に當座の思付を添へたといふ風の、半ば眞面目、半ば遊戲的なる短歌翫弄の會合であつたが、當時の歌人等はこれを一期の大事として命を賭けて輸贏を爭つたものであつた。

歌論は奈良朝末期に出來た藤原濱成が『歌經標式』の後を承け、空海が『文鏡祕府論』などの影響を受けつゝ、一方歌合などの刺激によつて、次第に發達したものであるが、數多き所說の中、最も意義深き代表は紀貫之が『古今集』の假名の序、藤原公任が『新撰髓腦』及び藤原俊成が『古來風體抄』などであらう。『古今』の序は、皇朝の歌謠を人間心情の發露としてそれは鳥蟲の啼くのと同じ自然の活動であり、唐土の詩と同じく六種に大別されるもので、眞情をあらはし、風流を翫びつゝ、人界の融和に貢獻すべきものであることを說いたものであり、同時に、それが如何にして起こり、いかにして發達し、いつの時代に、如何なる名手が出でて、如何なる特色を發揮したかを說いたものである。『新撰髓腦』は視域を歌の詠み方

の方面に限つて、「歌は心ふかく姿きよげにて、心にをかしきところあるを、すぐれたりといふべし。」といふやうな詠歌心得の神髓を手短に說いたものである。『古來風體抄』は『新撰髓腦』に二三十倍する長篇であるが、その卷頭に、歌の良し惡しは述べ難く知る人も少ないが、天台止觀といふ書物の始めに、章安大師が止觀の明靜なること前代も未だ聞かずと書いて居られるのが、一先づ打ち聞くより言の深さも限りなく、奧の義もおし量られて、たふとくいみじく聞こゆるやうに、この歌のよきあしき、深きこゝろを知らん事も、詞をもてのべがたきを、これによそへてぞ、同じく思ひやるべき事なりける」と書いてある。これが俊成の歌道觀の髓腦の、少なくとも最も主要なる一部であらう。以上三者の歌道觀を見比べて、この時代の歌學の足取の大體を辿つて見ると、平安朝の歌學は、先づ廣く生物界や、先進隣國を見渡し、歌の本領、利益、歷史等を考察した後、貫之に代辯者を見出だして、大摑みに大體觀を發表させたのであらう。第二に、『古今』を墨守した『拾遺』の編者にして、歌道の知識者なる公任をして、實際詠歌の指針として、深き心、清き姿、味な趣向といふ『古今集』の生命を爲す三大要素を表明させたのであらう。それ以來『古今』の模倣、添加、離叛、いろ〳〵の向上策を試みて、そのいづれもが無駄骨折なることを悟つて後、『古今集』の以上以外に出づる唯一の方法は、宗教的哲學的、人生觀的ともいふべき、一種の超文學的精神を加味するにあるこ

とを悟つて、その藝術的具現及び理論的表現といふ二つの大任を俊成に負はしめたのであらう。我々は此の歌學の變遷發達が和歌その物の變遷發達とほゞ符節を合はせてゐるのを見て、理體併進の妙趣に無限の興味を感ずるのである。

六

差別相から見て、歌謠と相對すべき此の時代の文學に、物語、草紙、日記、紀行、鏡、世繼等のいろいろがあつた。これらは總稱して假名の散文文學ともいふべきものであるが、その各々の本領、異同、境界は實に曖昧、模糊、自由、亂雜を極めたものであつた。讀者は『伊勢物語』が『在五の日記』とも呼ばれることを知られるであらう。『枕の草子』が『清少納言の物語』とも呼ばれ、『和泉式部日記』が『和泉式部物語』とも呼ばれることを知られるであらう。鴨長明の『無名祕抄』によれば、古人は『大鏡』を日記扱ひして、「日記は大鏡のことざまを習ひ」と云つたといふことである。かう考へると、此の時代に於ける物語、草子、日記その他の本領境界はもう滅茶々々で、明確な定義の施しやうもないわけであるが、かりに目ぼしい特色によつて類別を試みると、此の時代の假名の散文文學の中、空想によつて趣向された

創作、及びかやうな創作的傾向の勝つたものを、物語と云つたのであらう。個人本位の出來事を、時の順序に從ひ、一定の年月日のもとに記錄したもの、及び此の日錄式の傾きの勝つたものを日記と云つたのであらう。草子は消閑遊樂の爲めの書き集め物の意味で、後世の謂はゆる隨筆の名が相當してゐるやうに思はれる。紀行は旅行の日記である。平安朝の假名散文に類名として用ゐられたのは、以上の四種位のものであるが、その中で最も汎く自由に用ゐられたのは「物語」の稱で、例へば『和泉式部物語』『榮華物語』『今昔物語』の如きは、その用法の最も放漫なるものである。思ふに「物語」には廣狹の二義があつた。廣義の物語は面白い話といふ程の意味で、それは時の古今を問はず、事の單複を問はず、また內容の虛實をも問はず、苟も興味のある話ならば、片端から之れを物語と云つたのである。『和泉』『榮華』『今昔』等は、皆この普通の廣義に用ゐられたので、和泉式部の日記は、その第三人稱式に仕組まれ、趣味に富んだ戀愛材料の、巧みに選擇、整理、表現されてゐる所が、いかにも面白い所から、此の名を負はされたのであらう。『榮花』は、人物も事柄も一々事實に據つた假名の歷史であるけれども、その風流な卷々の名に統べられた藤氏榮花の記事が、「源氏物語」などに似た花やかさを見せて、面白く讀ませるところから、物語とは云はれたのであらう。『今昔』は天竺、震旦、本朝、三國に傳はる逸話傳說の斷片的大集成で、興味本位とはいへ、とに

かく事實そのまゝの記載を本領としたものであるが、その不思議な、感心な、風流な、やさしい、美しい、面白い、或は極端に怪奇的、蠱惑的、隱事暴露的なる、思ひ切つた筆致が、頗る面白いので、物語とは名づけたのであらう。

狹義の物語は、丁度今日の小説に當たるので、一種の趣向に纏められた空想的作り話の意味である。それはころ〳〵した斷片的の談話ではなく、また事實の記載ではなくして、天才作家が人情を寫し人生を教へる爲めに、材料の選擇、描寫の工夫に骨折つた結果の創作でなければならぬ。『源氏物語』が「物語」を說いて、「その人の上とて有りのまゝに言ひ出づることこそなけれ」といひ、「見るにも飽かず、聞くにも餘る事を、後の世にも言ひ傳へさせまほしきふし〴〵を言ひおく」といひ、「よきさまに言ふとては、よき事の限りを擇り出でて、人に從はむとては惡しきさまの珍らしき事を取り集め」と云つたのは、此の狹義の、高義の、從つて藝術的に見て特に「物語」と稱するに足る物語について言つたのであらう。平安朝の假名文學の中、此の意味から見て、物語と云はるべきものは『竹取』『伊勢』『宇津保』『落窪』『源氏』、及びその脈を引く文學の一類で、前に擧げた『和泉』『榮華』『今昔』等が物語と稱せられるのは、一つは彼等が此の狹義兼高義の特性を、多少でも分前してゐるからの流通であつたやうに思はれる。

「鏡」は史實に對し明鏡をさゝげて、有りのまゝを寫し取るの義、「世繼」は御代々々の記錄の義、ともに漢文ならば「記」、「紀」、「史」、「書」などいふべきを柔らげて國風に稱へたのであるが、これらは、當時まだ「物語」、「日記」などの如く、一類に通ずる定まつた稱呼となつてゐたのではない。

七

平安朝に現はれた、以上各種の散文文學の中、最も重く取扱はるべき一群は、謂はゆる狹義雅高義の物語である。それは貞觀時分に出來た『竹取物語』を第一の先祖作とし、少し下つて出來た『伊勢物語』を二の矢の魁として、大小數十篇綺羅星と輝きつゞいて、天下の視聽を集めた中心文學である。その中の大部分は、或は物が失はれて名のみが殘り、或は名をも殘さずして永久に忘れられたのであらうが、今日に傳はつたものについて、著しい數者を擧げると、是等の二篇が出でて後百餘年にして、『宇津保物語』、『落窪物語』の二大作が、前後して現はれ、その後から『源氏物語』が堂々と現はれ出でて、出づるやがて一世の仰望となつた。『源氏』に次いで『狹衣』、『夜半の寢覺』、『濱松中納言』、『堤中納言』等が現はれたが、最

後の舞臺を『榮花』『大鏡』等の歷史文學に讓つて、淋しい別かれを告げたものである。

そも〳〵是等の物語は、此の時代の文學の精華で、山ならば中心脊梁の山脈をなしてゐたものである。その連嶺中の高峰の一座二座に學者の一生を費しても必ずしも惜しからぬものである。從つて彼等の間に於ける起源、相承、起伏の關係を約說するのは相應の難事であるが、試みに云はゞ、『竹取物語』は敍事文學の諸相を綜合して含蓄した、極めて立派な原始小說であつた。それはお伽噺でもあり同時に神話でもあり、敎訓小說でもあり同時に諷刺小說でもあり、歌物語でもあり戀物語でもあり、滑稽小說でもあり深刻小說でもあり、世話物でもあり、時代物でもあり、ロマンスでもあり、ノヴェルでもあり、喜劇でもあり、悲劇でもある。それらのいづれに於いても、開き切つた十分の姿を見せてはゐないが、同時にいづれに於いても、暗示に富んだ蕾の姿を見せて居り、而してそれらの諸相の綜合統一されたところに、うぶな愛すべき巧みさを見せてゐる。殊に珍とすべきは、筋に於ける變化統一の巧みさと、超人間美の氣高さと、好笑の面白さとであるが、此の最初の小說に於ける、是等の兼具は、我が小說史に取つて永久の誇りであらう。

『伊勢物語』は在原業平を以て擬せらるゝ一人の優男が一生の戀愛逸話を、和歌を核心として斷片的に記述したもので、『竹取物語』に對して對蹠的の諸相を備へた作である。『竹

取』がきりツとした趣向の組織を持つてゐるのに對して、『伊勢』は百二十五段悉く無組織のころ〳〵並べである。かれが主要人物九人の變化ある記事を持つてゐるのに對して、これは「昔ありけり」と云はれる男一人が明けても暮れてもの相愛沙汰の連記である。彼れが人生の諸相に關する、外に開いた陽性の敍事であるのに對して、これは耽溺者の心境を內に潜めた陰性の抒情である。概していふと、『伊勢物語』は『竹取物語』に對し、仕組に於いて、幅に於いて、賑やかさに於いて見る影もない、狹い、小さい、ばら〳〵の存在であるけれども、愛情の曲折の取扱方に於いて、情生活の若々しい華やかさ、やさしさの描寫に於いて、言語に絕した美しい風致を見せてゐる。而して此の王朝情史の萠芽期に於ける純眞味を、子供の片言のやうな愛嬌を見せつゝ、繫がれぬ珠玉のやうに寫したところ、これが國民の愛着となり、尊敬となり、遂には信仰とすらもなつて、趣向文章の巧みを盡くした雄篇大作も及ばぬ名聲を博した所以であらう。

『竹取物語』と『伊勢物語』とは、かやうに相反した特色を持つて、相並んで我が物語小說の祖となつた。而して各々がそれ〴〵の相續者を持ち、また双方の特色を調和せしめて限りなき種類の敍事文學を生んだ。『伊勢物語』の特性を專ら承け繼いだものは、『大和物語』『今昔物語』等であるが、他はおほむね此の二篇を父とし母として、双方の美しさを分前し

たものである。『宇津保物語』も『落窪物語』も、同じく彼等の脈を引いた大いなる見孫であるが、『宇津保』は超人間的の怪奇性と、幅の廣さと、量の豐さとを『竹取』に學んで、部分部分の人的交渉に『伊勢』の色彩を加へたのであらう。而してその結果は舞臺、人物、事件の廣さ、多さ、不思議さに於いては、遙かに祖先物語の二篇を凌駕しながら、內在の藝術性に於いては、遠く二者に及ばぬものとなつた。『落窪物語』は興味本位の取材と結構の均整調和とに於いて『竹取』を學び、愛情交渉の描寫に於いて『伊勢』に學び、而して之れに加ふるに當時の社會に對する一種の諷刺を以てしたのであらう。而して其の結果は、結構の均整に於いては餘りにわざとらしくして過ぎて及ばざる觀があり、人物も事件も作り物らしき趣があつて、自然の風致と奧床しさとを缺く事となつた。これらの二篇に於いて殊に見劣りのするのは文章で、前の『竹取』『伊勢』と後の『源氏』とに挾まれて、全く顏色のないものとなつた。

『源氏物語』は是等すべての影響を受けた。影響を受けたといふよりは、寧ろ自家の藥籠に收めたといふべきであらう。『源氏』が明らかに現存の先行文學から得た材料や暗示が非常に多く、而してそれらが殆んど悉く立派に作り直され、洗煉され、理想化されて、原作以上の光を放つてゐるのを見ると、『源氏』の作者は、失はれ、忘れられたる先行文學からも同樣

に夥しい材料と暗示とを得て、之れに原材以上の精彩と生命とを賦與したのであらう。『源氏』は既往現存のあらゆる文學から役に立つ限りの材料を大膽に採收した、而して彼等をして悅んで我が用を足させ、我が大を成さしめた。『源氏』は同時に漢土の文學、印度の佛典からも、同樣に多くを得て、その作風に同化せしめ、同時代の活社會から得た見聞をも同じやうに役立てた。無論人力には限りがある。瑕疵を拾ふ心構で見れば、『源氏』にも缺點は無數にあらうけれども、少なくとも當代に關する限りに於いて、一諸道諸藝皆此の一篇に縮まる一と宣はせた順德院の御詞は、決して溢美ではない。

かくして『源氏』は五十四帖にわたる宏大な結構を立て丶、當代を寫實し、且つ理想化した。當代の思潮の中に游泳浮沈した男女の生活を、實よりも實に描寫しつ丶、同時に、時代に超越した者の思想をも人知れず代辯した。人と事と景との三方面にわたつて最高級の描寫を試みつ丶、その間に時代の人の夢想だもしなかつた高邁なる文藝觀をほのめかした。特に拔群の秀麗を見せたのは其の文章で、在來の諸作に見えた長所を兼ねたる上に、優雅婉曲の妙致を悉くして、王朝式假名文の絕妙境を實現した。

平安朝の物語は『源氏』に於いて發達の絕頂を見出だした。源氏につゞいて現はれた『狹衣』その他の物語は、一々に就いて見れば、それ〴〵の長所と特色とを持つて居るが、概

しては、『源氏』を模倣して及ばぬものであつた。彼等は自家獨自の新境地を根本的に創造することが出來ず、唯だ大源氏に對する存在理由を設定する手段として、多くは末技を弄し、或は『源氏』の有つ一面を、爭つて强調し擴大したやうに見える。趣向の變化を眩やかにするのが其の一つであつたであらう。事を奇にし人物を風變はりに仕立てるのが他の一つであつたであらう。而して是等の點に於いて、彼等はそれ〳〵に一種の成功を見たが、しかしながら模倣は遂に模倣である。彼等の中でも『堤中納言物語』の如きは最も特色のある一つで、人生の異常面に皮肉の觀察を試みて、異彩ある短篇を作り上げたのは、當代物語史の末期に於ける重要なる收穫であつたが、同時に作者の眼高手低は、彼れの新しき意匠に十分の表現を與へることを許さなかつた。『堤中納言』が此の通りである。ひたもの源氏に追隨した他の諸作は推して知るべきであらう。かくして當時の作家に於ける空想の枯渴と表現の低下とが、いつしか狹義高義の物語の出現を不能ならしめたが、同時に頭を擡げたのが、事實をそのまゝに記載する文學であつた。初めに現はれた『今昔物語』がその一種である。次いで現はれた『榮華物語』『大鏡』が他の一種である。『今昔物語』は、文學系統に於いて遙かに『伊勢物語』『大和物語』に呼應するもので、『伊勢』が一人の行事として多くの情話を結束し、『大和』が情話群の成立を標準として多くの人の多くの逸事を

蒐集したのに對し、これは逸話の爲めの逸話集、傳說の爲めの傳說集と進展して、天竺、震旦、本朝、三國にわたる、あらゆる方面の廣汎なる集大成書を出來したものである。同時に時代及び作者の史實傳說に對する興味と文學素質の低下とが、數を貪り表現を輕んずる彼種の大書籍を成さしめたものである。而して「物語」の名は、多分史實傳說の蒐集家なる知識者の作者が、餘技なる文筆のいさゝか巧みなるに高あがりして、暫らく文學の名を冒したといふ感じがあるやうに思はれる。『榮華物語』『大鏡』は內容の系統に於いて、遙かに『古事記』や六國史の後を繼承するものであるが、作者が中間に現はれた花やかな物語群の光彩に心を奪はれた爲めに、史實に對して我れ知らず餘りに文學的な添加を試みたのであらう而して「物語」の名は、作者が歷史家たるよりは文學者たることに、より多くの名譽を感じた心理の現はれであらうと思はれる。『榮華』と『大鏡』とは、二つの作同士の間には著しき相違があるけれども、時代の傾向を分前した點に於いては、ほゞ同一の位地に立つて居るものである。

八

平安朝の散文文學の中、物語と相並んで重要なる地位を占めるものは日記である。假名の日記は承平五年に書かれた紀貫之の「土佐日記」を以て嚆矢とする。これは婦人の假名のもとに、漢文日記に對する創始的試案として發表された純國文の日記で、同時に最初の旅行記ともいふべきものであつた。旅行日記は「伊勢物語」の東下りなどに俤を萌かれ、貫之の「土佐日記」に立派な花と開いて、幾程もなく增基法師が「熊野紀行」といふ小さい作を見たが、その後の日記は、すツかり方面を換へて、上流婦人獨占の心境文學となつた。男子の手より婦女子の手に、客觀より主觀に、旅行記より心境告白記に　これが天暦朝を境とする日記文學轉向の主要相で、その記すところには、男に虐げらるゝ悲しみ、戀に醉ふ心、世相の靜觀、思ひあがつた皮肉、夢幻の憧憬、忠愛心の發露と、いろ〳〵の差別はあるが、彼等は要するに、特殊の性格を持つた婦人が、特殊の境遇に打たれた心境の告白であつた　彼等は或は、此の文學表現により、思ふ事を言うて腹のふくるゝのを防いだであらう　或は我が悲境を客觀化して、異樣なる影の再現にほゝゑんだであらう。或は恥を言うて理の聞こえるのに會心し、或は眞情の表現に懺悔の宗教味を感じて、妄執の雲の晴れわたるのを悅んだであらう。或は欝懷を筆に託する表現の刻下に、我が才華文藻の輝きを感じて、文運隆昌の大御代に才媛と生まれたことを、上もなく感謝したでもあらう。凡そ當代の才媛女流の日記と

稱せらるゝ者、圓融天皇の天延頃に出來たと想像される、右大將道綱が母の『蜻蛉日記』を始めとして、淸少納言が『枕の草子』和泉式部が『和泉式部日記』紫式部が『紫式部日記』、菅原孝標が女の『更級日記』を經て、鳥羽院の御宇に成つた讃岐典侍が『讃岐典侍日記』に至るまで、百數十年間に現はれた以上六篇、長短巧拙、精粗の差こそあれ、悉く此の中の一種もしくは數種の心理の所產で、しかも作者名々が、泣く女、狂ふ女、皮肉の女、醒めたる女、夢みる女、懸命奉仕の女と、それ〳〵に甚だしく相異した性格を持ちながら、悉く平安朝所產の著しき烙印を帶びつゝ、異つた方面、違つた角度から、美しく時代を說明してゐるのは、何とも云はれぬ面白さである。淸少納言の『枕の草子』を、こゝには假りに日記の中に取入れたが、その本領は無論隨筆で、眇たる一巾幗の身を以て、此の特殊文學に於ける最初最大の作を成したのは驚嘆すべきことである。隨筆の成立つべき種子的要素は、世間の實際にも、前行の文學にも、多少は存在してゐたであらう。しかしながら、種別に値する文學としては、まだ隨筆と見るべき何物も無かつた時代に於いて、外國文學の影響をも蒙ることなくして、あの聯絡なく、統一なくして、而も聯絡統一のあるものに優るとも劣らない、あの子供らしさと、我儘と、負けじ魂と、變はつた趣味と、特殊の表現力と、それらが一つに渾融して出來た散り〴〵バラバラの大散珠文學を創造した淸少納言は偉大であつた。

九

吾等は以上で、平安朝に於ける國文學變遷の大體を、遠見の大摑みに略敍した。大比叡の四明ヶ嶽の突端に立つた氣持で、延暦十三年、平安奠都の紀念の年の分水嶺から遠く四百年を見渡して、豆人寸馬の大略圖を描いて見た。その大略圖を更に略して、引ッくるめて云ふと、此の朝の初期には、先づ國文學興隆の芽が動いてゐたが、世間の騷々しさと漢學隆盛の大勢とに壓されて、數十年細々と陰の存在をつゞけてゐる中に、機運いつしか熟して、先づ和歌の勃興を見、つゞいて散文、假名文學の勃興を見ることとなつた。新しい和歌は調子に於いて七五を本位とし、種類に於いて短歌を本位とするものであつた。從つて種類と變化とに於いて前朝に讓る嫌ひはあるが、大體の隆運は遠く前朝を凌いだであらう。散文の文學は、假名の流布、學藝の進歩、思想の複雜、世態の進化等、いろ〳〵の因縁によつて、驚くべき發達を遂げた。それは概ね奈良朝に見えなかつた新しい種類のもので、物語、日記、隨筆、歴史物語等が、そのおもなるものであつた。而して彼等は量に富み質に優れ、殊にその中には、質に於いて空前絶後とも稱せらるべき偉大なる幾篇かを持つてゐた。

平安朝文學進展の跡につき、大局から見て、特に注意すべき事が三ヶ條ある。その第一は漢文と國文とが、常に手を携へて進みつゝ、その間常に混融和合の歩みを進めて、漢文は遂に一種の國文となり、國文はまた漢文の知識をも手振をも取り入れつゝ、遂に豐富な大調和を現出したことである。前者については『凌雲集』、『文華秀麗集』、『經國集』等の調子の高い純漢文から、漢和混淆式なる『靈異記』、『將門記』、『明衡往來』等を經、公卿日記の群から鎌倉の『吾妻鏡』までを見渡す人の容易にうなづく所であらう。後者については『竹取』から『宇津保』、『落窪』を經て『源氏物語』に至り、更に鎌倉の『平家物語』までを見通す人の少しも疑はぬところであらう。

第二は、平安朝文學變遷の大流れが、角張つた硬い趣味の漢字漢文本位の時代から、轉じて、すつかり反對の丸い柔かい味なる總假名の物語日記時代となり、最後には前の二つを調和して、支那趣味と日本趣味、角ばつた趣味と圓い趣味、硬い趣味と柔かい趣味とを折衷兼具した末期歷史物の時代となつたことである。此の時代の初めには漢詩文が流行して國史や詩文や、悉く四角な漢字を異國式に操つたものであつたが、『竹取』や『伊勢』が出で、『古今集』が現はれて後は、中心文學の物語や日記や隨筆やが、皆美しい女性式の文章を、丸い柔かい假名で書き現はすこととなつた。それが再轉して末期に近づき、傳說、歷史が時代の興

味を集めるやうになると、文章は國漢兩語の混合となり、同時に文字の配合が和漢併用の謂はゆる假名交り文となつた。ヘーゲルの謂はゆる立、對立、調和の三段の順序が、自然に此の時代の文字文章變遷の上にも現はれたのである。

注意すべき第三は、此の時代の文學が、事實の記載に出發し、空想の驅使に央して、事實空想の綯交に最後したことである。漢文時代は史實の記錄乃至自然人事の諷詠に滿足してゐたが、『竹取』『伊勢』を經て『源氏』以後しばらくに至るまでは、ほしいまゝに空想を馳せて美しい幻の世界を創造することを作家の能事と心得るやうになつた。それが一轉して『今昔』『榮華』『大鏡』の時代になると、注意の焦點を事實に向けながら、猶は半ば小說氣分で、詞藻を弄び、事實の興味化を悅ぶやうになつたのは、同じくヘーゲルの三段法が此の方面にも行はれたのであらう。とにかく事後の成蹟について見れば、歷史の發達はおのづから誂へたやうに出來てゐて、何とも云はれず面白いものである。

最後に三たび縮約していふ。平安朝の文學は、先づ漢文の隆盛を見、而してそれが專ら事實の記載に用ゐらるゝを見た。次ぎには、國文が漢文の重壓を脫し、ほしいまゝに想像の翼を搏つて優雅な純國語から成る多くの國寶文學を産み出だすのを見た。最後に再び漢文の要素を取入れ史實傳說の興味を加へて、不純ながら一種の新しい變化の美を成し、同時に

次ぎなる鎌倉文學の準備を成して平家一門の沒落と共に、美しい最後の幕を閉づるのを見た

獨斷に過ぎるであらうが、吾等は暫らく之れを遠見の略圖として、各論の詳說に入ることにする。

第二　惜忘期の和歌

一

平安朝の國文學は桓武天皇御製の大御歌に於いて、曉の光を見出だした。「類聚國史」歲時曲宴の部に、

(延曆)十四年四月戊申、曲宴。天皇誦古歌曰、

古の野中ふるみち改めば
　あらたまらむやのなか古道

勅尙侍從三位百濟王明信令和之。不得成焉。天皇自代和曰、

君こそは忘れたるらめにぎ玉の
　たわやめわれは常の白玉

侍臣稱萬歲。

とある。平安奠都は延曆十三年で、七月に東西の市を移し、十月になつて車駕この葛野の大

桓武天皇宸影　（帝室博物館藏）

宮地に移らせられたとある　さすれば其の後六ヶ月目の内宴に詠ませられた此の大御歌は、おそらく平安朝新文學の第一聲であらう。吾等は之れを拜誦して、古歌については、古きを紹いで新しきを興し給ふ大御心を仰ぎ、尙侍明信に代はらせられた御製については、畏き事ながら、持統天皇の志斐嫗との御戲れの御製や、大伴家持と若き尼との詠繼歌などを想ひ起こすのを禁ずることが出來ぬ　古歌による御趣意の暗示、眼前の興に絡む妙轉用、異性に代はる卽座の御機轉、天皇の歌謠世界に游ばせられた悠々自適の御態度は、實に仰歎すべきものであつた。

「私釋」この聖唱二首の意味は、背景環象の詳記がなく、古歌と御製との間に、文字通りに正解すべき聯絡がなく、殊に前詠をあらぬ方に引きはづして味み繼がせられたやうな趣もあつて、はつきりしないが、聖意を忖度し奉つて、試みに解釋すると、……御宴酣にして座を許された群卿が、大御前ながら、いつしかくつろぎを覺えつゝ、新都經營の困難なる事、殊に新理想によつて新都を輝かすことの困難なる事などを語り出でたのであらう。それを聞召して、「何、それは心掛次第だらうよ。古歌にも、いかに通ひ馴れた野中の古道でも、易へようと思へば易へられる、とあるではないか」と氣高く仰しやつて、側らなる御寵愛の尙侍明信を顧みさせられ、「なう、さうではないか。卿一つ和吟をしてたもれよ」と仰せられた。明信は

勅命の畏さに、暫らく考へてゐたが、どうしても纏まらない。天皇は笑みをなはして、極めて御氣輕に、「では、朕が代作をして見ようぞ」と、尚侍の身になり代はらせられて、

「君は叡聖文武の帝様、活動進取の男性であらせられますから、舊い昔をたやすくお忘れにもなるでございませうが、かよわい、やさしい、和光の珠のやうな女の身の私は變はることなく、永久に眞珠白玉でゐたうございまする」

と、かうもあらうか、卿の心は！　いや、それも可い、それもまたよい。」

と仰せられた。新しき理想の實現に鋭意し給ひながら、古きを愛する者の心をも汲ませられ、同時に不變を誇る女心をも愛でさせられて、聖意とは反對の意を詠ませられたその御寛量、御深察に對して、輝かしい國の前途、御思ひやりの忝さ、當意卽妙なる御風流の御有さに感激しつゝ、侍臣一同、異口同音に「萬歳々々」を稱へ奉つた、といふのであらう。「改まらむや」は「改まらうよ」の意であらう。

二

同じ『類聚國史』に、

延暦二十二年三月庚辰、遣唐大使葛野麿、副使石川道益、賜餞宴。設之事一依漢法。酒酣

上喚ニ葛野麿於御床下、賜レ酒。天皇歌曰。

この酒はおほにはあらず平らかに
かへり來ませと祝ひたるさけ

葛野麿流レ涕如レ雨。侍レ宴群臣無レ不レ流レ涕。

とある。吾等は天皇が專ら支那式に依らせられた賜餞の御儀に於いて御痛はりの御詠懷を、特に國風の三十一文字に遊ばされた事を、此の上もなく尊く思ふ。

日本國入唐使

葛野麿自署

御製の意は、恐らく、「今取らする酒は、世に有りふれた、たゞの酒ではない。其方達が今度の旅は、御國の爲めに、萬里の波濤を凌ぎ、海越え野越え山越えて異國に使する懸命の使の旅だ。その大使命を、いかで全うして無事に歸朝せよかしと祈り禱つた神々の御魂のふゆ、佛達のお蔭のこもつた特別の酒であるぞよ」といふ思召なのであらう。此の遣唐使の一行の中には最澄、空海の二大師が入つてゐた。而して副史の石川道益は彼國の明州で病歿して歸朝復命を果たすことが出來なかつた。新都經營の初めにあたり、先進國の文化を攝取するために、海陸の危險を

冒して、選まれたる人材を遠く派遣せさせらるゝ切なる大御心遣は、これによつても拜察される　而して「平らかに歸り來ませと祝ひたる酒」は、畏くも此の大御心の現はれである。この御製を誦じ給ふ大御聲を承つて、葛野麿たるもの、どうして雨霰と泣かずに居られようや。侍臣全員の涙は之れを聞き傳ふる國民全體を代表しての感激の涙である。吾等は之れを拜誦して、そゞろに、『萬葉集』なる、聖武天皇が節度使に賜はつた御製の「還り來む日、相飮まむ酒ぞ、その豐御酒は」の長短の御製や、孝謙天皇の遣唐使に賜はつた「かへりごと、奏さむ日に、相飮まむ酒ぞ、この豐御酒は」の御製を聯想して、かやうな場合に於ける尊き大君情の御發露に額づくのであるが、同時に天皇がその尊き御情を、最適の場合に、最適語に現はされる秀でた詩人的の御資質を仰ぎ、またその御歌風が『萬葉』を承けて新しき調子を開かうとする過渡の姿を美しく備へて、而も諷唱の雅調を帶びたる事を珍らしく尊く思ふ。天皇がかやうな特別の機會々々に、卽妙の御發唱を遊ばされたところを見ると、斯道に於ける日常の御嗜好御修練も拜察するに餘りがあり、從つて御一生にわたる御製は夥しい數に上つたであらうが、其の中のわづか數首のみが幸うじて記錄されたのは遺憾の至りである。殊に一たび、『日本後記』に記錄されて散佚したのが、ゆくりなくも『類聚國史』現存の卷卷の處々に其の幾分を留めることが出來、しかもそれが悉く鹿持雅澄の『南京遺響』に取

纒められてゐるのにかゝはらず、すツかり見逅されて今日に至つたのは、まことに惜しく畏き極みである。

三

桓武天皇の御製として、『類聚國史』『南京遺響』の傳ふるところは、九年間にわたる、唯だの六首に過ぎぬ。以上はその中の最初及び最後の二首であるが他の四首を年代順に列記すると、左の通りである。

第二は延暦十五年の夏四月の御製で前書には「宴庭。酒酣上乃歌曰」とある。

今朝のあさけ奈呼といひつる時鳥

今も鳴かぬか人の聞くべく

「奈呼」は「鳴こ」「鳴く」「汝を」等の說があつて不明であるが、大體は「今朝の明々に、あれ鳴くは啼くはと、人々が言ひはやした時鳥よ。朝も鳴いたら、今も鳴いて、宴する人々の興を添へよかし。何故鳴かぬのか、時鳥よ」といふ御意であらう。當意卽妙の平明穩雅な、調子のよい御製である。

第三は延暦十六年冬十月の御製で、前書に、「曲宴。酒酣皇帝歌曰」とある

この頃の時雨のあめに菊の花

散りぞしぬべきあたらその香を

第四は延暦十七年八月の御製で、前書に「遊獵北野。便御伊豫親王山庄、飲酒宴會。于時日暮。天皇歌曰」とあり、後書には「登時鹿鳴。上欣然令群臣和之。冒夜乃歸。」とある

今朝のあさけ鳴くちふ鹿のその聲を

聞かずは往かじ夜はふけぬとも

第五は延暦二十年春正月の御製で、前書に「曲宴。是日雨雪。上歌曰」とあつて、

梅の花戀ひつゝをれば降る雪を

花かもちるとおもひつるかも

桓武天皇柏原御陵

とある。梅花と雪とを聯想した歌は萬葉以来可なりの數に上るであらうが、この御製はその中の優れたものの一つであらう。

最後の第六は二十二年に遣唐大使葛野麿に賜はつたので、前に掲げた大御歌である

以上が桓武天皇の御製として今日に傳へられたる全部である。外に「古今集讀人不知考」の著者が天皇の御製と推考した、

わが宿は雪ふりしきて道もなし
　ふみわけてとふ人しなければ

の一首があるけれども、信じ難い。

以上、吾等は桓武天皇の御製全部を擧げて、さし出でたる註解批評までを試みた、新王朝に於ける最初の國文學現象を重んじたるが爲めである　新都を覺めさせられた帝王が御魁けの御製を尊んだ爲めである　内外多事の間に於いて、機會を逸せず雅懷を抒べて、詠歌の正路を示させられたことを悦ぶ爲めである。何よりも大きな理由は、これらの六首が、惜しむらくは忘れられた多數の御製を暗示する大切な代表歌なるが爲めである　この幾れる六首は、悉く天皇が遊宴の場合に於ける即妙の御當座で、萬葉時代の詠歌振を見せ、のみならず記紀時代に於ける觸事即發の味をも偲ばせるものであり、また「古今集」の漢文の序に「古之天子毎良辰美景詔侍臣預宴筵者獻倭歌。君臣之情由斯見」と云つてある如く、和歌が君臣の和樂に貢獻した實況を實示するものであるが、御歌の姿が「萬葉」の遺風を見せつつ、同時に輕い明るい調子の中に理智を含蓄して居るところ、いかにも平安朝眞盛りの

歌風を暗示してゐるやうで、歌そのものの價値に於いてのみならず、史的價値に於いても亦重要な地位を占めるものであると思はれる。

四

惜しいかな忘れられたのは、ひとり桓武天皇の御製だけではない。これは寛都以來六歌仙時代に至る、あらゆる帝王、皇親、宮臣、男女の歌人等、凡てに通ずる遺憾であつた。日本はさすがに和歌の國である。歴代の帝王殆んど悉く歌道の御嗜みがあつたので、平安朝初めの漢文極盛時代に於いても、帝王にして御製の傳はらないのは唯だ淳和天皇御一人であつた。暫らく『類聚國史』に散り〴〵に收錄された、其の時代の御製及び臣下の作を、『南京遺響』に連記したのによつて掲げて見ると、平城天皇には、

折る人の心のまにま藤袴
　　うべ色ふかくにほひたりけり

の御製があり、嵯峨天皇には、

みな人のその香にめづる藤袴

若のおほもの手折りたる今日

ほとゝぎす鳴く聲きけば歌主と
　ともに千代にとわれも聞きたり

の二首の御製がある。

臣下の作としては、平城天皇の大同三年九月に、帝が神泉園に行幸遊ばされた時、從五位下平群賀是麻呂に勅して和歌を作らしめられた。賀是麻呂が

　いかに吹く風にあればか大島の
　　尾花のすゑを吹きむすびたる

と詠んで奉ると、帝が歡悅ましまして、直ちに從五位上を授け給うたとある。

次ぎには、弘仁四年四月、嵯峨天皇が皇太弟の南池に幸して文人に詩を作らしめられた。その折に、右大臣藤原園人が、

　けふの日の池のほとりにほとゝぎす
　　平安城は千代と鳴くは聞きつや

と詠じて奉つた。天皇が悅はせられて和し給うたのが、前に擧げた「時鳥鳴く聲きけば歌主とともに千代にとわれも聞きたり」の御製である。弘仁四年は平城上皇奈良遷都御希

望の噂が立ち、藥子仲成の亂が平らぎ、つゞいで國家の重望を負うた英雄將軍坂上田村麿が薨去した二三年の後である。延暦賀都の當時には、子來の民草が異口同音に唱へた辭によつて、「平安の京」と名づけられたといふことであるが、それを思ひ出でたのでもあらう「弘仁の初年以來幾たびかの動搖がすつかり鎭靜して、今日の御遊宴には、もう池邊の時鳥までが、また、平安の京は千代に〳〵と鳴くやうに聞こえまする。畏れながら、さやうお聞きにはなりませぬか」と奏して、御意を伺ふと、畏くも「おゝよく祝うてくれた。あの鳥の聲に耳欹てると、朕にも、卿と同じく千代に〳〵と聞こゆるぞよ」と和吟遊ばされた。そして右大臣は面目を施して起つて舞踏し、それにつれて雅樂の役人が悅びの樂を奏したと書き添へてある。かういふ歡天喜地の場合には、漢文全盛の時代の、しかも詩作の座に於いても日本國民の感情が、大和詞の和歌に現はされなくては承知しなかつたのであらう。而して漢詩文界の一人者を以て自ら任せさせられた天皇御自身も、ついつり込まれて、その眞情を和歌に現はさせられたのであらう。吾等は此の一事に徵しても、弘仁前後の漢文全盛期に和歌の道が絕えたのではなくして、肝腎な要所々々では、やはり旺盛至純なる日本眞情が、春に花咲く如く、秋に紅葉する如く、初秋に野分する如く、火山の爆發する如く、自然に和歌となつて現はれたことを知ることが出來ると思ひ、同時に事に當たつて、君臣共にかやうな當意

即妙の應酬をすることの出來たのは、畢竟平素に於ける修養の結果で、從つて夥しい惜忘の歌群が、詠み捨てられて永久に知られなくなつたであらうことを信ずるのである。この惜しむべき歌群が詠み捨てられ忘れられたのは、一つは漢文隆盛の影響であるが、一つは漢字で現はす萬葉假名式の記錄が億劫になつた爲め、もう一つは新らしい假名がまだ實用に堪へる程度に發達しなかつた爲めであらう。

もう一つ、仁明天皇の承和十二年正月八日、大極殿に於いて最勝會を修められたが、その日、一百十三歳の老翁尾張連濱主が、朝堂院の前なる龍尾道の上に於いて、和風長壽樂を舞つた。彼れは自作の此の舞を舞ふ事を願ひ出でた上表に、左の歌を添へた。

七繼ぎの御代につかへる百歳餘り

十のおきなの舞たてまつる

また舞ひをはつて後には、

おきなとてわびやは居らむ草も木も

さかゆる時に出でて舞ひてむ

といふ和歌を奏上したと記してある。萬葉の格調を備へた鷹揚な歌であるが、當時に於いては、かやうな前朝の遺風も少なからず詠み出でられ、そして忘れられたことであらう。

正史の所傳を離れて見ても、辛うじて傳唱され記錄された當時の和歌は相應の數に上つてゐる。傳教大師が比叡の根本中堂を建立した時に詠んだといふ

阿耨多羅三藐三菩提のほとけたち
わがたつ杣に冥加あらせたまへ

の一首は有名であるが、その外にも法華二十八品の歌があり、また「一乘義和歌」の一卷三紙があつたと云はれる。弘法大師には、土佐の室戸で詠んだといふ

法性の室戸といへどわがすめば
有爲の浪風よせぬ日ぞなき

の外に、若干の詠歌があつたと云はれる。嵯峨天皇の御痛はりを蒙つた隱遁僧玄賓僧都は、常に歌に好いた。『江談抄』によると、彼れは律師に任せられた時に、拜辭して

三輪川の清き流れにあらひてし
衣の袖はさらにけがさじ

と咏んだ。次いで大僧都を辭しては、

とつ國は山水きよし事おほき
　君がみやこは住まぬまされり

と詠み、都を離るゝ時に、來合はせた女人等が衣を供養するのを厭うては、

三輪川のなぎさの淸き唐衣
　くると思ふな得つとおもはじ

と詠じたと云はれる。また『古今集』の俳諧歌には、

足曳の山田のそほづおのれさへ
　我れをほしといふうれはしきこと

といふ讀人不知の一首があつて、これが玄賓の作と推定されてゐる。いかにも玄賓らしい飄逸な作で、彼れが詠懷の中で、特にこれが優れてゐるところから、撰に入つたのでもあらう。律師を辭し、大僧都を辭し、衣にすがる老若や女人等を振りきつて、山邊に行くと、田に立つ案山子までが、風に搖られては手招きする。「これ、邊鄙の山田の案山子よ、お前までが、おれを相手にほしいといふのか。あゝいやな事〳〵」といふのであらう。いかさま玄賓の如き高德の隱逸ならでは詠み得ぬ歌である。

『古今集』に名を明記した作者の中では、弘仁頃に榮えた菅野高世に、

枝よりもあだに散りにし花なれば
落ちても水のあわとこそなれ

の作がありとされ、仁明朝に詩道書道に名を馳せた藤原關雄には、

おく山のいはがき紅葉ちりぬべし
照る日の光見るときなくて

の作があつたとされてゐる。『古今集讀人不知考』の著者は、讀人不知の中から、八首を平城天皇に擬し、三首を嵯峨天皇に、三首を仁明天皇に擬し奉つてゐるが、その當否は暫らく措き同じ集の讀人不知四百三十一首の中には、延暦以降、六歌仙以前の逸名氏の詠にかゝるものの少からずあつたことは、疑ふ餘地のないことであらうと考へられる。

殊にこの惜忘期の和歌の價値を高め、同時に忘れられたる歌群に對する高き評價を可能ならしめるものは、小野篁の作である。彼れは武道の偏好より文學に轉じて、詩を善くし、書を善くし、歌を善くした熱情的天才兒で、詩に於いても惜しむべき多くの名作を逸したが、幸にして『古今集』に留め得た數首は皆斯の道に於ける彼れの技倆の非凡なることを示してゐる　殊に秀でたのは隱岐島流謫に關する

隱岐の國に流されける時に、船に乘りて出でたつとて、京なる人のもとに遣はしける

わだの原八十島かけてこぎ出でぬと
　人にはつげよ蜑のつり舟

隱岐の國に流されて侍りける時によめる

思ひきやひなの別れにおとろへて
　蜑の繩たぎいさりせむとは

の二首であらうが、他の哀傷の歌なる

泣く涙雨とふらなむわたり川
　水まさりなば歸り來るがに
水のおもにしづく花の色さやかにも
　君がみかげのおもほゆるかな

小野篁の像　大和弘仁寺藏

しかりとて背かれなくに事しあれば
　まづなげかれぬあな憂世のなか

の如き、皆六歌仙や古今時代の名作に比べても遜色のないもので、延暦、弘仁の空氣を呼吸し

小野篁筆　柿本人丸像の碑

ながら、夙く萬葉の臭味を脱し、同時に、古今の前後に見る智巧弄語の粉飾を附けずして、類ひなき曲折と落着と雅調とを備へたるところ、恐らく此の惜忘期に出でたる和歌の第一位に推さるべきものであらう　而していづれも數首の淋しさではあるが、桓武天皇の御製を曙光とし、篁朝臣の遺詠を夕映とし、忘れられたる無數を裏に覗きつゝ、殘留散在の作品を綴り合はせ、それら幸存惜忘の歌群がそれ自身獨立した價値をもちつゝ、同時に萬葉より六歌仙に移る橋掛りを形づくつた時代として、此の朝最初の數十年を紀念するのは、正當公平にして均衡を得たる取扱ではなからうか。　この期に於ける和歌の衰運は、―「季世陵遲、斯道已隆」―と云つた―「續日本後紀」―の言によつても著しく、―「和歌棄不被採、雖風流如野宰相、輕情如在納言、而皆以他才聞、不以斯道顯」―と言つ

だ『古今集』の漢文の序によつても明らかではあるが、それは漢文隆盛の表面觀に眩惑して裏面を忘れた、誤つた時代意識の表白で、實在の量と質とを考慮した上の觀察ではないまた後世の平凡に近い一首若しくは數首によつて歌仙の名を得た者のあることに考へ及べば、此の輝かしい時代の劈頭を飾つた歌群に對して、これ程の敬意をさゝげるのは當然のことであらう。

第三　七五調の歌壇風靡

一

前章「惜忘期の和歌」のつゞきではあるが、取扱ふ歌體と論脈とが可なりかけ離れてゐるので、新たなる一章を設けたのである。

山城國印

平安朝の第五代仁明天皇の御宇(一四九三―一五〇九)に及んで、京都はやうやく奈良の舊都を凌いで、山城第一となつたと云はれる。此の朝の嘉祥二年(一五〇九)に天皇寶算四十歳にならせられたので、國民奉祝の誠意がいろ〳〵の方面に現はれたが、こゝに國文學上最も意味の深かつたのは、奈良の興福寺の大法師等が、佛像四十體、壽命經四十卷、及びめでたき傳說の畫卷影像の數々に添へて、空前絶後の長歌を奉獻したことである　その長歌は興福寺中の歌僧等

が知識を傾けたものらしく、三百十句より成り、『萬葉集』の中の最も長き柿本人麿の長歌百四十九句なるに比べて、その倍數を超ゆること十二句に及ぶものであつた。此の長歌は載せて『續日本後紀』の第十九卷にあり、『後紀』の編者は、歌の次ぎに、「夫倭歌之體、比興爲先、感動人情、最在茲矣　季世陵遲、斯道已墜、今至僧中頗存古語、可謂禮失則求之於野、故採而載之」と記してある。之れによると、當時の史官は、比喩と興味とを和歌第一の特色として、和歌の人を動かすのは、主として此處にありと思ひ、而して此の點に於いて、和歌に及ぶものがないと思つたのであらう。同時に末世の悲しさ、此の和歌今や段々落ちに墮落して大宮人に之れを能くする者がなく、却つて僧侶の中に古體の和歌を見出だすことになつたと思ひ、而してそれは外樣方外の作ではあるが、專門者流の及ばぬ名作なので、此の正史に載せるのだと考へたのであらう。とにかく『萬葉集』などを參考して彼等の最善を盡くした作と見えるが、左にその全貌を顯はして、添ふるに摘要式の現代語譯を以てする。

日の本の　野馬臺の國を、
賀美侶伎の　宿那毘古那が、
葦菅を　殖ゑ生しつゝ、

試譯

わが日の本の　やまとの國を、
少名彦那の　大神が、
木植ゑ草うゑ　國造らしゝ、

國かため　造りけむより、
神つ波　起つ年毎に、
春はあれど　今年の春は、
物ごとに　滋み榮えて、
天地の　神も悅び、
海山も　色聲變はし、
梅やなぎ　常より殊に、
敷き榮え　咲まひ開けて、
鶯も　聲あらためて、
八千種に　奇しき事は、
茜刺し　天照る國の
日の宮の　聖の御子ぞ、
ひさかたの　天の梯建て、
踐み步み　天降り坐しゝ、

神代草創の　大むかしから、
來る年々に　春はあれど、
今年の春は　めづらしく、
見る物聞くもの　光に滿ちて、
天神地祇も　悅び笑まし、
波は靜かに　山青々と、
梅も柳も　いつもの年と、
見ちがふばかり　美しく、
鶯までが　音を啼き變へて、
かさなる不思議は　何ゆゑぞ、
茜いろ射す　高天の原の、
尊き御子の　瓊々杵尊、
重き依託に　輝きまして、
天地つなぐ　長梯を、
御足ふみしめ　天降らしゝ、

大八洲　天つ日嗣の、
高御座　萬世鎮ふ、
五八の　春にありけり。
我が國の　聖の皇は、
尊くも　御坐すか
日の宮の　聖の御子の、
天の下に　御坐して、
御世々々に　相承け襲ぎて、
皇ごとに　現人神と、
成りたまひ　御坐せば、
四方の國　隣の皇は、
百嗣ぎに　繼ぐといふとも、
いかでか　等しくあらむ、
そこ故に　神も順なひ、

その大八洲　萬世一系、
今大御代を　知ろしめす、
わが大君の　五八の御賀、
祝ふ春べの　奇瑞ぞや。

あはれ日の本　我が國の、
君は尊く　いますかな、
それも道理　日かゞやく、
高天の原より　天降りして、
天の下知る　皇孫の、
たふとき御系　襲ぎ嗣ぎて、
繼ぎの悉　畏くも、
生神樣と　おはします。
これに比べて　他し國、
隣の國は　その君の、
親、子、孫、ひこ　繼ぎはつぐとも、

佛さへ　敬ひたまふ、
益々に　今我が帝は、
むかしにも　御坐さじ、
將來にも　いかに申さむ、
釋迦の法　弘め給ひて、
出家の人　法の族を、
罪あれど　赦したまひつ、
咎あれど　宥めたまひつ、
譬へなき　大御惠みの、
異に廣く　御坐せば、
家出人　法の族は、
大御代を　常に惜しむと、
年月を　堰かへ留めて、
過ぐさずて　鎭はむとこそ、

いかでか我れに　賴ふべき、
さればこそ　皇孫代々の　尊さを、
神も合點と　ほゝゑまし、
佛も合掌　ましますなれ。
殊に今上　わが大君、
御治世萬歲　前古無比、
後代とても　かへり見て、
いかばかり　御德たゝへむ。
まづ佛法を　流布せしめ、
出家あはれみ　僧侶には、
ことさら罪をも　ゆるし給ふ。
その量りなき　御惠みの、
廣く厚きに　合掌はせて、
浮屠のとも　心一つに、
大御代を　惜しむの餘り、
常とはに　御代をあらせむ、

誓願ひ　禱り申せ、
然れども　世の理と、
歡びの　春にありけり、
いかにして　帝の大御代、
萬世に　重ね飾りて、
榮えしめ　奉らむと、
柘の枝の　由もとむれば、
佛こそ　願ひ成したべ、
聖のみ　驗はいませ、
そこ故に　帝を鎭ふに、
驗ます　陀羅尼の御法、
四十卷を　寫しとゝのへ、
護りなす　聖の御像、
四十軀　造りまつりて、

年月の　往くをとゞめて
常若に　君のいますを、
仰がむと　祈りし甲斐の、
無きはすべなし　しかはあれど、
めぐり來る　月日と共に、
寶算の　添ひませはこそ、
歡びの　今日には逢ひたれ。
いざやこの　皇の大御代、
莊嚴し　ほぎて祝ひて、
壽の　八千代を祈り、
末代の　誇りにしてむ。
吉野人　幸運の熊稽、
山桑の枝に　不老を得しも、
御佛　聖者の御蔭。
しかあれば　ほとけこそ、

四十の師の　悟り開けて
行ふ人を　調へて
誠をいたし　四萬に
八千卷添へて　誓願ひ、
讀み奉り　飾り祈み、
　鎮ひ申せり。
行へる　これのしわざを、
いかにして　陳べ聞えむと
茜刺す　日ねもすがらに、
烏玉の　狹夜通すまで、
時日經て　思へる時に、
落湍の　堰かへもかねて、
世の中の　いすかしわざを
添へ飾り　申しぞ上ぐる、

願ひは聞こせ　驗はませと、
靈驗の　陀羅尼四十首、
聖體守る　佛像四十軀、
寫し刻り　尙ほその上に、
悟道の聖師　四十人、
丹誠こめて　讀みに誦む
御經は　四萬八千卷。
かく祈る　心々を
いかさまに　現はしなさは、
大御心　息ませんと、
日々夜な／＼　思ひつくして、
人の世の　をこの仕業を
飾りては　献げまつりつ、
その一つ　大海の、

その中に　大海の、
白浪開きて　常世島、
國成し建てゝ　到り住み、
聞き見る人は、萬世の、
　壽を延べつ、
故事に　言ひつぎ來たる、
澄江の　沖に釣せし、
皇の民　浦島の子が、
天つ女に　釣られ來りて、
紫の　雲たな引けて、
時の間に　將て飛び往きて、
これぞこの　常世の國と、
語らひて　七日經しから、

浪路しのぎて　蓬萊の、
常世の島を　見出でては、
同志あつめて　國成して、
萬代生きし　目出たき繪卷。
次ぎの一つは　昔語りに、
名も高き　浦島の子が、
澄江の　沖に釣して、
龜に化りし　姫に釣られて、
紫の　雲かきわけて、
時の間に　作はれしは、
音に聞く　常世の御國。
睦ましき　妹脊語りの、
暫らくの　たゞの七日は、
人の世の　幾百千歳、
限りなき　月日なりける、
浦島の　龍宮ゐまき、

限りなく　命ありしは、
此島にこそ(?)　ありけらし。
三吉野に　ありし熊稱、
天つ女に　來たり通ひて、
その後は　譴かゞぶりて、
ひれ衣　着て飛びにきといふ、
これもまた　これの島根の
人にこそ　ありきといふなれ。
五種の　寶の雲は、
大悲者の　千種の御手の、
人の世を　萬世延ぶる、
一種を　別に莊りて、
萬世に　皇を鎭へり。

その三つは　吉野熊稱、
天つ女を　妻とし馴れて、
常若の　命を得しが、
乙女は爲めに　天つ罪、
譴かうむりて　ひら〳〵衣、
うなげ着て　大空翔り
飛び去りきてふ　これもまた、
蓬萊の　乙女なりけむ、
おもしろの　仙女の畫卷。

さては千手の　觀音の、
第二十八の　奇御手は
一擧げに　五色の雲を、
起こしては　うつそみの、
人の世の　齡延ぶてふ、

磯の上の　緑の松は、
百種の　葛に別に、
藤の花　開き榮えて、
萬世に　君を鎭へり。
鶯は　枝に遊びて、
飛び舞ひて　囀り歌ひ、
萬世に　皇を鎭へり。
澤の鶴　命を長み、
濱に出でて　歡び舞ひて、
滿潮の　斷ゆる時なく、
萬代に　皇を鎭へり。
薫修法の　力を廣み、
大悲者の　護りを厚み、

その樣を　殊に飾りて、
萬代を　君に祝へり。

さては荒磯の　緑の松、
數の蔓物　その第一の
藤を纏かせて　むらさきの、
花の藤浪　連ねつゝ
萬代を　祝へる姿。
或は鶯　梅が枝に、
輕らかに　飛びて舞ひては、
ほぎの音を　歌ひ囀り、
萬世を　祝へる姿。
澤なる田鶴の　我が命長し、
このいのち　君にさゝぐと、
長濱の　長き渚に、
滿ち寄する　潮の音に、

萬代に　大御世成せば、
八十里なす、
城に芥子拾ふ　天人は
手抱きて　拾はずなりぬ。
八百里なす　磐根を、
ひれ衣　裾垂れ飛ばし、
拂ふ人　拂はずなりて、
大君の　護りの法の、
藥を
擎げ持ち　來りさもらふ。
かくのごと　鎮へることは、
事ごとに　劣けれども、
物ごとに　數にあらねど、

音を合はせ　よろこび舞ひて、
萬代を　祝へる姿、

薫修の　法力廣く、
觀音の　守り甚く、
大御代に　限りなければ、
八十里　城一ぱいに、
充ち滿てる　芥子を拾ひて、
劫を待つ　天つ乙女も、
八百里　廣き岩根を、
輕き袖に　撫でさすりては、
長き劫の　盡くる待つてふ、
氣長き　天つ乙女も、
大君の　御代の長さに、
拾ふわざ　撫でわざやめて、
不老不死の　くしき御藥

旅人に　宿春日なる、
山階の　佛聖の、
奉り　給ふなり。
大御世を　萬代祈り、
佛にも　神(?)にも申上ぐる、
事の詞は　この國の、
本つ詞に　逐ひ倚りて、
唐の　詞を假らず、
書き記す　博士やどはず、
此の國の　言ひ傳ふらく、
日の本の　倭の國は、
言靈の　さきはふ國とぞ、
古語に　流れ來たれる、

捧げては　侍ふ姿。
ほぎまつる　この數々は、
某等　身數ならず、
爲すわざは　拙けれども、
旅人に　宿春日てふ
その山の　山階御寺、
興福の　本尊佛の、
献げます　ほぎの御心、
代はりては　現はしまつる。

さて限りなき　大御代を、
神に佛に　ねぎまつる、
その言の葉は　悉く、
やまと御國の　言葉にて、
唐土詞　つゆまぜず、

神語に　傳へ來たれる、
傳へ來し　事のまに〳〵、
本の世の　事尋ぬれば、
歌語に　詠みかへして
神事に　用ゐ來れり、
皇事に　用ゐ來れり
本の世に　依り遵ひて、
佛にも　神にも、
擧げ陳べて　禱りし誠は、
丁寧と　聞こしめしてむ、
嬰兒の　孩語に、
折箸の　本末知らに、
亂れ絲の　亂れてあれど、

漢學の　博士の　智慧からす
そは此の國に　昔より、
日の本の　倭の國は、
言靈の　さきはふ國と、
古言の　神言として、
久しくも　傳へ來れり。
また上世の　傳へには、
神の、君の　御事々は
調べいみじく　みやびたる
歌詞には　せしといふ。
このあがる世の　習はしを、
模範と學びて　ひたすらに、
佛に神に　禱るなゑ、
誠を聖慮　知ろしめせ。
もとより幼兒の　をさな語、

九重の　御垣のもとに、
常世雁　率ゐ連ねて、
狹牡鹿の　膝折りかへし、
さもらひ　聞こえぞ申す、
　　　いかに聞こえむ、
汗流し　兢ぢかしこまる、
　　　いかに聞こえむ。

事の本末　詞の筋、
亂れ麻の　亂れてあれど、
眞心を　君の嘉すと、
うら安く　賴みをかけて、
九重の　御垣のもとに、
法師ばら　雁となるならび、
鹿のごと　膝折りふして、
汗ながし　かしこみ申す
畏し聖慮　いかに聞かさむ。

この大長歌、句の音數が一定せず、句並びが亂れてゐるので、句數を精確に定むることは出來ぬが、恐らく三百十句と勘へるのを穩當とすべきであらう。とにかく萬葉式の長歌としては、神代の大昔から、昭和の今日に至る間の最長とすべきもので、開闢肇國のそも〳〵から說き起こし、神佛雅俗自然人事古今內外に亘つて、慶祝に相應はしい事柄を網羅し、分量に於いて遙かに萬葉を凌ぐ大作を出來した點に於いては驚嘆すべきものであるか、藝術的作品としては、量を貪つて質を忘れ、備ふるに急にして省くことを怠り、列擧に專らにして洗煉を疎

かにしたもので、到底記紀萬葉の長歌と雄を競ひ得べきものではない。けれども此の長き長歌は文學的に見て非常に重要なる、少なくとも三つの意義を持つてゐるであらう。その二つは作者の努力と氣位との産むところである。その一つは作者の無思慮不注意が知らずく\に暴露した歌壇の大勢の暗示である。

二

興福寺の大法師等の作にかゝる此の奉賀の長歌が持つ重要なる意義の第一は、前代末開の大長歌を作り成さうとする作者の意氣や努力が現はれて、自然に此の作に一種の生命と威力とを與へたことである。吾等は此の長歌が一人の作であるか、或は何人かの協同作であるかを知らぬ。『續日本後紀』が「興福寺大法師等」と記してあるところを見ると、或は斯道に抱負ある幾人かの法師等が合作したので、その寄合細工に成つた事が、かやうに事多くして、締りの足らぬ結果を現じたのでもあらう。けれども此の作には一種の樸實なる命と力とがある。一方に於いて、及ばぬながらも萬葉を希求しつゝ、何等かの點に於いて萬葉を凌がうとした意氣込が、その不揃ひな詞遣ひや句作りの間に現はれて居るのが、それであ

る。他の一方に於いて、其の萬葉に近い調子と素樸な不揃振とが、整へられ均平されて、織麗本位の統制の行屆き過ぎた『古今』以後の長歌の遙かに及ばぬ威力を見せて居るのが、それである。要するに此の長歌は『萬葉』『古今』の間に立つて、いづれにも及ばぬ弱點を有しながら、同時に二者が分前し得ぬ特長によつて、此の二つの大きな時代の二つの代表的大歌集を繋いで居るので、そこに此の長歌の特異なる存在價値があるといふべきであらう。

この長歌が持つ重要なる意義の第二は、純なる日本語の誇を持して、和歌復興の徵候を暗示して居ることである。察するに當時漢學の隆盛がその極に達して、そろ〳〵反動の機運が萠して來たのであらう、而して其の心持が先づ和歌を嗜む僧侶等の一部に宿り、彼等をして、健氣にも漢臭を帶びざる純國語仕立の、しかも古今無類なる長歌を創作せしめたのであらう。此の長歌の末部に見出ださるゝ作者の左の高唱が明らかにこれを證據立てゝ居る

事の詞は　この國の、本つ詞に　逐ひ倚りて、唐の　詞を假らず、書き記す　博士やとはず。此の國の　言ひ傳ふらく、日の本の　倭の國は、言靈の　さきはふ國とぞ、古語に　流れ來たれる、神語に　傳へ來たれる、傳へ來し　事のまに〳〵、本の世の　事たづぬれば、歌語に　詠み反して、神事に　用ゐ來たれり、皇事に　用ゐ來たれり。

前に已に歌謡譯を試みては居るが、意趣の歸重を顯はす爲めに、再び散文譯を試みると、

我等の歌は、遂一わが日本本來の詞に依つたもので、毛頭漢土の詞を借らず、また之れを書き表はすに當たつて、一切漢文の博士の厄介にならないのである。我が國の言傳に「我が日の本は、言葉に靈力があつて、その靈力が常に強く活動して國民を幸する國である」と言つてあり、これが大昔から神聖なる尊い詞として傳へられてゐるのであるまた皇國本來の仕來を尋ねると、凡て神樣に關し、大昔に關する事は、日本語に言ひ表すべきもの、のみならず、日本語の中の風雅な、調子の高い歌詞に言ひ直して表現すべきものと成つてゐるものである。

といふのである。これは漢文に反抗し、純國語の歌の世界を開かうといふ意識なくして言ひ得べき事ではない。而して作者が、歌としては妙ならぬながらに、とにかく萬葉の跡を追ひ、「釋迦」「陀羅尼」「薰修法」「大悲者」「博士」等の外には、全く外國語を用ゐずに、三百十句、約二千字の長歌を作つて、立派に奉賀の至誠を現はしたのは偉いと云はねばならぬ。思ふに此の長歌の作者は、平安朝に於ける國語第一義說、至純なる國語愛說を、始めて唱へた者で、紀貫之は、恐らく此の主義の第二陣を張つたのであらう。

三

興福寺の法師等の作つた長歌が持つ重要なる意義の第三は、奈良朝に於ける長歌の五七調が平安朝の七五調に變はらうとする轉移の瞬間ともいふべき無類の機會を見せて居ることである。五七調と七五調とが無意識に相剋する際どい爭鬪の光景を見せてゐることである。五七調の間に、七五調が闖入して來ると、五七が驚いてやがてその陣營を立て直す、その中に七五が隙を見てまた押し寄せると、五七が奮ひ立つて又すぐにもとの姿に復する。此の長歌には、かやうに、七五に斬り込まれては、五七の立て直し立て直しする爭鬪が五六度繰返されて居るが、その七五に侵さるゝ割合は三百十句の中の、わづか二十六七句に過ぎないのに、その間に於いて、歌謠の世界は、もう七五調のものだといふ事を、豫言してゐるやうな趣の、あざやかに讀まれることである。此の長歌に於ける、この五七、七五無意識の相剋時代、五七の陣營の一部に七五が喰ひ込まうとする時代を經て後に、五七、七五が互角に對峙する時代が來たり、やがて七五の全盛期が到來したのであるが、この二つの調子の間に於ける無意識の相剋が、恐らく、此の長歌が持つ多くの重要なる意義の中の、最も重要なるものであらう。

抑も『萬葉集』の長歌は、先づ殆んど完全なる五七調であつた。『古今集』以後の長歌は先づ殆んど完全なる七五調である。この殆んど完全なる五七調と殆んど完全なる七五調との間に在つて、過渡の混淆期を示すのは何であるかについて、或は大伴家持の長歌に七五調の萌芽の見える事を指示する學者達がある。いかにも家持の長歌の中に、いさゝかの七五調が見出だされるであらう。けれども、それ程の分量の七五調は、はやく憶良にも、人麿にも、のみならず記紀の古歌謠の中にも見出だされるので、特に家持の長歌に於いて七五の萌芽を見出だし、五七が七五に移る轉機を見出だすといふのは、謂はれのない論であり、少なくとも說いて詳かならざるものである。吾等の見る所によると、長歌の五七調が七五調に成り切る迄の過程に於いて、注意せらるべき三つの段取がある。第一は種子としての七五調の默々たる存在期で、委しくいへば、五七調の長歌の間に、ほんのたま〳〵七五調の句並びが、何等の勢力にもならずに紛れ込んでゐた期間である。而して是れは、家持に於いて、旅人に於いて、憶良、人麿に於いてのみならず記紀に於いても見出ださるべき、云はゞ共通の事情であつた。第二は七五調が知らず〳〵の間に一種の勢力となつて、五七調の連綿とつゞく間に、隙を見ては入り込まう入り込まうとする積極的侵入期で、此の進一歩の大勢を見せてゐるのが、此の興福寺の法師等の長歌である。第三は五七調、七五調の各々が一首の長歌の半

分を領して、對等並立の存在を見せてゐる時期で、吾等はやがて舉ぐる小野小町の長歌に於いて、其の實例を見ることが出來るであらう。此の三段の順序を經て、『古今集』時代に於ける純七五調の長歌が成就したので、かやうに見ることによつて、始めて此の興福寺の長歌の文學史上に於ける非常に重要なる意義が理解されるであらう。

この長歌の中に、五七調の七五に轉じたところが數個所ある。而してその數個所が、悉く五七が一たび七五に轉じ、やがて逆轉して五七の舊態に復歸して居るのであるが、その初めの轉じ方が、いかにも知らず〳〵、流行の調子に捲き込まれたやうに見え、而してまた復歸の仕方が、「おや變だぞ、かういふ筈ではなかつたが！」と氣が附いて、俄に引返したやうに見える所が、何とも云はれぬ味である。殊に面白いのは、其の取りはづして滑り込んだ僅かの七五調句を、そのまゝに殘しておくことである。若し五七調を本格と信ずる作者の意識が、はつきりして居るならば、たまさか飛び込んで來た少數の七五位は、容易に添削して五七に改めることが出來るであらう。それを幾個處もそのまゝに殘しておくのは、要するに作者が五七を正格とは知りつゝ、七五の盛運に向ふ大勢に乘り移られて、その密かに忍び寄つた足音に氣づかなかつたのであらうと想像される。實例が之れを證據立てる。

先づ最初の百二十句、「四十の師の、悟り開けて」までは、除外例なしに五七で押通して來

てゐるが、百二十句目の七音句が、次ぎの七音句に重なるのを境目として、左の如く七五調の七八句が忍びやかに割り込んで來た。

四十の師の　悟り開けて、　(五七)
行ふ人を　とゝのへて、　(七五)
誠をいたし　四萬に、　(七五)
八千卷添へて　こひねがひ、　(七五)
讀み奉り　飾り祈み　(七五)
いはひ申せり、　(七)
行へる　これのしわざを　(五七)
いかにして　陳べ聞えむと　(五七)

而して、七五の三聯を過ぎて、「讀み奉り、飾り祈み」あたりに來ると、「いや調子が違つて來たぞ、をかしいな」と、氣づいたかの如く、卽ち獨立した七音句の「いはひ申せり」を挿入し、これを轉機に廻れ右をして、また「行へる、これのしわざを」と、五七調に復歸してゐるのである　面白いではないか。

それから次ぎの八聯、十六句は、また無事に五七調をつゞけてゐるが、九聯目の第百四十六

句目になると、今度は五、五の變態接續句(その中に、大海の)をきツかけとして、また左の如く、三聯六句の七五調を展列してゐる

添へ飾り、　　申しぞあぐる、　(五七)
そのうちに　　大海の、　(五五)
白浪さきて　　常世島、　(七五)
國成し建てゝ　　到り住み、　(七五)
聞き見る人は　　萬世の、　(七五)
　　壽を延べつ。　(七)
故事に　　言ひつぎ來たる、　(五七)

而して三聯目のあたりになつて、俄に調子の狂つたのに氣づいたかの如く、また前と同じ手段により、「よはひを延べつ」の七音獨立句を軸に、廻れ右をして再び「ふる事に、言ひつぎ來たる」と、五七の常格を取戾してゐるのである。

その他、二百二十五句目より三句にわたる

八十里なす　(六)
城に芥子拾ふ　　天人は、　(七五)

手抱きて　拾はずなりぬ。（七五）

も、二百五十七句目より二聯四句にわたる

事の詞は　この國の、（七五）

本つ詞に　逐ひ倚りて、（七五）

唐の　詞をからず、（五七）

も、皆同樣に、氣づかぬかの如く、わづかの七五調句を挿み、それをそのまゝに殘しおきつゝ、俄に五七の常形に復歸してゐるので、しかも橫逸、復歸の形式は、皆申合はせたやうに、五五、或は七七の同數句を重ねて七五調を成立たせ、五音或は七音の獨立句に間を塞がせて、再び五七に還つてゐるのである。思ふに、若し作者に韻律上のしつかりした心得があるならば、五七本位の長歌の間々に、チグハグな少數の七五調句の闖入介在することが、全體の調和を破ることに氣づかぬ筈がないであらう。またもしそれに氣づくならば、苟も禁裡にさゝぐる奉祝の嚴肅な歌であり、同時に奈良隨一の大寺の大法師等が衆智を盡くしての事業である。之れを添削補正して五七一相の長歌とするに於いて、幾ばくの面倒をも感じなかつたであらうが、それをそのまゝにして奉献したのは、思ふに、作者の法師等が、一方に於いて、萬葉以來の傳統によつて、長歌は五七に調ふべきものであると知りつゝ、一方に於いては七五興隆の新氣

運に魅入られて、夢遊病者の如く、ふら〳〵と七五の少數句を挿み〳〵したのであらう。要するに此の興福寺僧奉献の長歌は、その長さに於いて空前絶後なるのみならず、歌謠に於ける古風新樣の代謝する徵候を暗示する點に於いて、實に稀有の例といふべきものである。

四

嘉祥二年は在原業平二十五歲、僧正遍正三十四歲、菅原道眞五歲、而して紀貫之の誕生を二十數年後に望んでゐた年である。吾等は是等の環象により、またその內容の暗示する所によつて、此の興福寺の大長歌を、平安朝に於ける和歌の惜忘期と興隆期との境を劃するものと考へるので、從つて惜忘期記述の筆を此の長歌に收めるのを穩當と思ふものであるが、思想連絡の特別なる關係から、更に長驅して、暫らく重要なる歌調の推移發展の跡を辿りたいと思ふ。

長歌に於ける七五調は、興福寺の長歌に於いて、始めて積極的存在となつた、而してその紛れ込んだ極めて少數の文句が無意識の裡に一種の跳梁を逞うした事は、已に前節に於いて說明したところである　この五七調の連綿とつゞく間に於ける少數七五の潜入に對し、一

篇を二分して、七五がその半ばを領するやうになつたのは、興隆期に於ける小野小町の亡き友を偲ぶ長歌であつた。左にその全部を掲げる

あしたづの雲井のなかにまじりなばなどいひて亡せたる人のあはれなるところ

ひさかたの　空にたな引く、（五七）
うき雲の　うける我が身は（五七）
つゆ草の　露のいのちも（五七）
また消えて　思ふことのみ、（五七）
まろこすけ　しげさぞまさる、（五七）
あら玉の　行く年月は、（五七）
春の日の　花のにほひも（五七）
夏の日の　木の下かげも（五七）
秋の夜の　月のひかりも、（五七）
冬の夜の　しぐれの音も、（五七）
世の中に　戀もわかれも、（五七）
うき事も　つらきも知れる、（五七）

我が身こそ　心にしみて、　(五七)
袖の浦の……ひる時もなく　あはれなる、　(七五)
かくのみ常に　おもひつゝ、　(七五)
いきの松原　生きたるに、　(七五)
ながらの橋の　ながらへて、　(七五)
せにゐる田鶴の　島わたり　(七五)
浦こぐ舟の　ぬれわたり、　(七五)
いつかうき世の　くにさみの、　(七五)
我が身かけつゝ　かけ離れ、　(七五)
いつか戀しき　雲の上の、　(七六)
人に逢ひ見て　この世には、　(七五)
思ふことなき　身とはなるべき　(七七)

全體四十九句の中で、初めの半分强をば五七調の十四聯二十八句が占領し、後の半分弱をば七五調の九聯十八句が占領し、異體隣接して互に讓らず睨み合ふかの如く控へて居るのは、長歌として誠に不思議な形態であるが、これは恐らく、衰へながらまだ領分の半ばを持ちこ

たへる情力のある五七調と、隆運を辿りながらもまだ主權を獲得するまでには至り得ぬ七五調とが、對峙の形勢を持しつゝ、天下を二分してゐるのであらう。此の降り坂、登り坂の二つの調子について、作者は、恐らくまだはツきりした意識を持つてゐたのではあるまい。けれども作者が意識するとせざるとにかゝはらず、歌界の大勢は、もう此の實例に明らかである。登る者の進一歩は、やがて七五調の全盛期をもたらすであらう。

此の長歌は「小大君集」の最後の部分にも殆んどそのまゝに載せられて居る。若しこれを小大君の作とすると、年代の上に約百年の開きが出來ることになるが、これは恐らく小大君の作ではあるまい。此の作が「小町集」から拔き取つて、「小大君集」の最後に移植されたものらしい事は、已に本居宣長の考察して居るところであるが、吾等は、此の五七、七五、同量對峙といふ事が到底「古今集」以後にあり得ぬ現象であるといふ觀點から、小町の作たることを疑はぬものである。

五

一歩はやがて進められた。而して長歌に於ける七五全勝の結果は『古今集』及び『古

今集』を距ること遠からぬ前後いづれかに成立した『古今和歌六帖』に於いて明瞭に現はれた。

抑も六歌仙時代と古今集時代とは、同じ城の外廓と内廓とである。遍昭、業平等と貫之、躬恒等とは、唯だ時の流れの壁一重を隔てただけで、或者はその生涯の最後最初の兩端を重ね合はせた位であつたが、其の作の保存される運命には莫大の相違があつた。古今時代の作家の和歌は古今以下の勅撰集に數多く採錄された。而して彼等の主なる者は別に豐富なる家集を持つてゐた。之れに對して、六歌仙時代の歌人は、幸にして記憶された作が、勅撰集、或は物語などに採錄されただけで、その數は多きも數十首に過ぎず、中には歌仙と稱せられながら唯だの一首以外に傳へられぬ喜撰法師の如きもあつた位である。思ふに此の幸不幸は長歌の領分に於いても短歌同樣に現はれたので、六歌仙時代に詠み出でられた長歌は、恐らく片端から忘れ去られたのであらう。而して小町の長歌は幸うじて記憶された其等の中の唯だ一つであつたのであらう。吾等は不幸にして其等の長歌の殆んど一首をも知ることが出來ぬが、察するに小町が作の前後には、五七、七五、二つの調子が、いろ／＼な割合の相違を以て、混入し、相剋し、對峙し、勝敗したのであらう。而して大體の推移は、五七が次第に數に於いて少なく、力に於いて弱くなつて、遂に其の存在を失ひ、七五は次第に數に於いて多

く、力に於いて強くなつて、遂に長歌の世界を獨占するに至つたのであらう。我等は『古今集』及び『古今六帖』に採錄された五首の長歌が、極めて少ないながらに、よく此の消息を語つてゐるやうに思ふ。

『古今集』に載せられた長歌はたゞの五首である。『六帖』に載せられた長歌は九首であるが、最初に置かれた萬葉の四首を除けば、殘れる五首は、作者も作も配列も殆んど全く『古今』と同じき五首である（二書の間に存する小異の中で、『六帖』が壬生忠岑の長歌及び萬葉の赤人などの長歌から反歌を取り去つてゐることが、歌境の大勢を見、二書の前後を定むる上に於いて有力な資料であらう）此の五首は、恐らく古今撰集の當時まで記憶されてゐた王朝初期の作の中の選まれたる作であり、同時に撰者自身の私かに得意とした作であらうと思はれるが、此の少なき五首がいかにも五七、七五存在の割合を各〻別々に現はして、五七本位の長歌が次第に七五に近づき、遂に純七五の一首に趨歸する大勢を現はしてゐるやうに見えるのが面白い。その中で、最も古式に近いのは『古今』には「題しらず」『六帖』には「古き長歌」と詞書して最初に載せられた讀人不知の一首である。これは全體五十三句の大部分が五七調になつて居り、七五と讀みつゞけられるのが、ほんの二、三聯だけであるが、それでゐて、

逢ふことの　まれなる色に　思ひそめ

と歌ひ出してゐる初三句の續き具合を始めとして、全體の空氣が何となく七五式になつてゐるのは、七五に向ふ大勢の爭はれぬ暗示であらう。その次ぎに五七式なのは、紀貫之が「ふる歌奉りし時の目錄のその長歌」と題した六十三句の長歌である。これも大體五七式に整へられてゐるが、折々七五になりかける所があつて例へば、

伊勢の海の　浦のしほがひ　拾ひあつめ

わが宿の　忍ぶ草おふる　板間あらみ

の如く、五七、七五の二跨をかけた五七五の三句連絡があり、或は

たまの緒の―短きこゝろ　思ひあへず　なほあら玉の―としをへて　大宮にのみ―

ひさかたの　晝よるわかず―つかふとて

の如く、興福寺僧の長歌のやうに、五七の常規を蹈みはづしては建て直し〳〵する、旗幟不鮮明の混亂狀態を見せてゐる　第三は凡河内躬恒が二十五句の作であり、第四は伊勢の御が二十七句の作である。此の二首は共に純七五調ともいふべき際まで進んでゐるが、同時に前者に於ける冒頭の

ちはやふる　神無月とや、　けさよりは―曇りもあへず　うちしぐれ

の如く、後者に於ける末部の

君なき庭に　群れ立ちて　空を招かば　初雁の
　鳴きわたりつゝ

の如く、五七に逸れる不純なる彷徨態度を見せたところがある。

是等を見來つて最後に、壬生忠岑が九十一句の長歌を見ると、これは些の逸れをも狂ひをも見せぬ純無雜の七五調で、これこそ記紀萬葉の中に、萌芽の種子として存在してゐた七五調、興福寺僧の賀詞以來、右往左往し、一進一退しつゝ、久しく暗中摸索をつゞけてゐた新しい調子の完成である。　その全貌は左の通りである。

壬生忠岑

くれ竹の　世々のふること　なかりせば、
伊香保の沼の　いかにして、
思ふこゝろを　のばへまし、
あはれむかしべ　ありきてふ、
人麿こそは　うれしけれ、
身は下ながら　言の葉を、
あまつ空まで　聞こえあげ、

末の世までの　あととなし、
塵につげとや　ちりの身に、
これを思へば　いにしへも、
雲にほえけむ　心地して、
一つこゝろぞ　誇らしき、
近きまもりの　身なりしを、
あざむき出でて　御垣より、
をさ〳〵しくも　おもほえず、
あらしの風も　聞かざりき、
春はかすみに　たなびかれ、
秋は時雨に　袖をかし、
かゝるわびしき　身ながらに、
いつゝの六つに　なりにけり、
老の數さへ　やよければ、
ことの苦しさ　かくしつゝ、

今もおほせの　くだれるは、
つもれることを　問はるらむ、
欒けがせる　けだものの、
ちゞの情も　おもほえず、
かくはあれども　照る光、
誰れかは秋の　來るかたに、
とのへもる身の　御垣守り、
九重ねの　うちにては、
今は野山し　近ければ、
夏は空蟬　なきくらし、
冬は霜にぞ　せめらるゝ、
積もれる年を　しるせれば、
これにそはれる　わたくしの、
身はいやしくて　年高き、
長柄の橋の　ながらへて

なにはの浦に　立つなみの、　浪の綾にや　おぼほれむ、
さすがに命、をしければ、　越の國なる　しら山の
かしらは白く　なりぬとも　音羽の瀧の　おとに聞く
老いず死なずの　藥もが　君が八千代を　わかえつゝ見む。

最初の五七連絡と最後の七七連絡、これは此の形式を取る限り、長歌の長へに脱れ得ぬ約束であるが、その他に於いては徹頭徹尾の七五で、歌謠としての藝術的價値は暫らくおき、調子、形式としてはまさしく七五調の長歌の完成である　言ひ換へると、これが七五調を本位とする長歌の約束の理想境で、平安朝の初期以來、年毎に五七の一城一壘を陥れつゝあつた七五の長歌が、忠岑の此の作に於いて、始めて全勝の凱歌を揚げることが出來たのである　『古今集』に於いて凱歌を揚げた七五の長歌は、これより江戸の古學復興期に至るまで、長く長歌の世界を支配したが、七五の勢力は啻に長歌の世界を支配したるのみならず、同時に歌謠世界の殆んどあらゆる方面を支配したのであつた。

六

『古今集』以來の歌謠界を七五調の獨占と見るのは、嚴密に云へば獨斷に過ぎるであらう。けれども大體に於いては、それが事實であつた

讀者は我が古代の歌謠に、二句連絡の上から見て、短短、短長、長短、長長の四つの調子があつたことを記憶せらるゝであらう。短短格の代表は五五であつた。短長格の代表は五七であつた　長短格の代表は七五であつた。而して長長格の代表は七七であつた。その中、短短格の五五調は、長歌その他の中に、まれ〳〵其の姿を見せたけれども、遂に獨立した格調とはならずして明治に及んだ。短長格の五七調は片歌、旋頭歌、短歌、長歌の凡てに通じて行はれた。而して萬葉以前に於いては、これが敷島の道に通じた唯一無二の公認格式であつたが、奈良朝に入ると、短歌が先づ其の支配を離れて七五に轉向した。而して七五に轉向することによつて從來五七の二聯を繰返して、七の一句を加へた五七、五七、七が五七五、七七と、上の句、下の句に分けて讀む、全く新しい調子のものとなつた。その後七五調は年を逐うて隆運に向つたが、しかしながら奈良朝一ぱいは、短歌の領分以外に殆んど一歩をも踏み出すことが出來なかつた　かやうに短歌の形をそのまゝにして、調子の上の大革命を完了した七五調が、既往數百年の潛勢力を持しつゝ、人知れず長歌の堅城に忍び寄つたのが平安朝の初めで、その後百餘年にして、短歌に施したと全く同じ手段により、長歌の形をば少しも變へず

に、其の調子と精神とを全く變更して了つたのである。

說明がつい前後したが、長短格の七五調は神代の歌謠に於いて已にその萌芽を見さたが、それが一種の形式として一廉の物になつたのは、五七調の短歌が七五調に通ひ變へられた時で、又それのみで一首の歌謠をなしたのは和讃であつた。その後、此の調子は徐々に長歌に喰ひ入つて、延喜時分には遂にその全面を支配し、延いて他の歌謠をも支配したが、鎌倉期に入つては更に散文に喰ひ入つて、爾來平家、謠曲、淨瑠璃、讀本と、次第にその勢力を國文學の全面に及ぼすこととなつた。

長長格の七七調が歌謠の世界に、はツきりと形を現はしたのは、やはり五七調の短歌が七五調に變じて、五七五、七七と讀まれた時であらう。此の調子の定められた領分は、一首の歌謠の最後の二句で、片歌、旋頭歌、短歌、長歌、みな其の最後を七七で括つてゐるが、その後は、謠曲、淨瑠璃、その他の語り物、謠ひ物、讀み物の處々に挿入され、獨々邊には前半の一聯に定めて用ゐられ、長篇の俗歌にもしば〳〵用ゐられることとなつた。

かう見て來ると、平安朝に於いて七五調が長歌の全面を支配するやうになつてからも、やはり七五以外の調子が歌謠界に行はれてゐたことを許さねばならぬであらう。第一に長歌そのものに於いても最初の二句は極つて五七であり、而して最後の二句はまた極つて七七

七である。しかしながら、これは長歌本來の型を保つ上に於ける據ろなき遺產形式ともいふべきものであり、また本文なる七五連續の單調を救ふ爲めの變化のあしらひともいふべきものであらう。また最初の五七は獨立した五七といふよりも、寧ろ次ぎに來る七五の前副ともいふべきもので、五七の一聯と見るよりは、むしろ五七五の三句一つゞきの一部と見るべきものであらう。忠岑の長歌に例を取れば、

くれたけの　代々のふること

といふ二句一聯と見るよりも、むしろ

代々のふること　なかりせば

の前衞を承つて、七五調の替への型ともいふべき三句つゞきの五七五調

くれたけの　代々のふること　なかりせば

の一部を成すと見るのを妥當とすべきであらう。最後の七七も同じやうに、昔の型をそのまゝに存置する穩便の計らひであり、最後を重くして、變化を添へる爲めの二音の增加で、要するに七五の效果を顯著にする爲めのあしらひと見るべきものであらうと考へる。

長歌以外の歌謠を見ても、短歌にも旋頭歌にも、五七があり、七七がある。しかしながら、是れも概していへば唯だ舊形を保存したのみで、當代に重きを成したと考ふべきほどのもの

ではない　その他の歌謠、神樂、催馬樂、風俗、和讃の類は、純七五、或は準七五本位のものであり大體七五調に身を整へてその全盛を謳歌したものであつた

七

七五調は平安朝の歌謠界を風靡した　けれども其の勢力は更に此の時代の散文界に及ばなかつた　我等は七五調があれほどの勢力を持つてゐた此の時代に於いて、散文が全く其の影響を蒙らなかつたことを不思議に思ふ　けれども事實は全くその通りであつた七五調が散文界に割り込むべくその觸手を伸ばし始めたのは、鎌倉時代に入つてからである　その影響の見え始めは、恐らく軍記であらう　而して其の頻繁と用ゐられてしかも律語脈と散文脈との間に些の不調和をも見出ださぬまでに馴熟したのは『平家物語』であらう

『保元物語』『平治物語』にも折々七五調が交へ用ゐられた　けれどもそれは極めてたまさかであり、その使用ぶりは極めて危なつかしいものであつた。『平家』は極めて大膽に、傍若無人に、頻用し繁用しつゝ、而もそこには極めてよく折合つて讀者を神往せしむる趣があ

つた。例へば冒頭の

祇園精舎の　鐘の聲、諸行無常の　響きあり、沙羅双樹の　花の色、盛者必衰の

ことわりを顯はす、奢れる者久しからず　唯だ春の夜の夢の如し。

からがさうで、是れは、恐らく、和讃、今様を活剝したつもりで、最初の六句三聯を並べ、七、八句に至り、わざと調子を散文式に變へ、歌謠に主位を奪はれぬやうにして、平家式の文章の主位を確保したのであらう。『平家』の作者は、普通の散文の處々にも、素知らぬ振りして屢々七五の二三句をあしらつた　例へば「心も詞も　及ばれね」「泣くより外の　事ぞなき」かくやと覺えて　哀れなり」「罪科の沙汰は　なかりけり」「よその袂も　しをれけり」あるに甲斐なき　わが身かな」「海へつッとぞ　入りたまふ」の如きがそれで、此の物語の中に無數に散見する是等の文句は、多くの讀者からは七五としての一瞥をも與へられぬであらうが、しかしながら彼等が冥々の間に及ぼす影響は侮られぬもので、かういふ調子が積もりつもつて、『平家』の文章の美趣の上に驚くべき寄與をなしてゐるのである。

『平家物語』が、多少連續的に七五、或は五七五調を用ゐ、しかも光をつゝんで、目立たぬやうに散文の間に伍せしめつゝ、美しい調子を現はしてゐる例は、左の「有王島下り」の一節に見ることが出來るであらう。

姫御前斜ならず悦び、やがて召いてぞ賜うでける（七五）暇を乞ふともよも許さじとて、父にも母にも知らせず、もろこし船のとも綱は、卯月五月に解くなれば（七五）夏ごろも　たつを遲くや　思ひけむ（五七五）三月の末に都を立つて、薩摩潟へぞ下りける。（七五）

これはほんの一端で、かやうな散文と七五との綯ひ交ぜが此の物語の中に無數にある。思ふに『平家』に於ける七五の綯交は、七五調の方から見れば、此の調子の勢力の一種の擴張ともいふべきもので、同時にその散文との親和は、一種の立派な完成の域に達したものであつた　而して『太平記』、謠曲、舞の本、淨瑠璃、近松、京傳、馬琴、いづれも其の流れを汲み跡を追うたものである。

吾等は調子の變遷は歌謠に取つて重大なる中心の問題であると思ひ、同時に歌の調子と散文との交渉も、これに劣らぬ文學上の大きな問題であると思ふ。而してかやうな點から見て、七五調の起原、興隆、擴大が、國文學に於ける調子の問題の中心であると信じてゐるので、與へられた領分の外まで乘り出でて、その開展の跡を辿つて見たのである。

弘法大師像　傳眞如法親王御

（和歌山町親王院藏）

第四　三面六臂の法師文豪

一

空海上人、弘法大師の謂ひである。彼れは入寂四年前の天長八年五月、疾に嬰り辭職を乞ふ奏狀を淳和天皇に奉つたが、その最後に

伏して請ふ、陛下、終りに臨みての一言を顧ることを賜ひ、三密の法教を弃て玉はざれ。生生に陛下の法城と爲らん、世々に陛下の法將と作らん。心神悦忽として思慮え陳べず

と書いてゐる。彼れの本領は無論佛門の僧侶たるにあつた。而して彼れは此の本領に於いて、八宗を兼學し、智識道行、感化、折伏、一切に秀でて、三面六臂の超人たるの觀があつた。彼れは唐土天竺の音韻に通じ、書を善くし、畫を善くし、彫刻を善くし、これら諸種の藝能に於いて亦三面六臂の觀があつた。更に狹く文學の分野について見ると、彼れは我が國に於ける最初最大の修辭學を建立し、堂々たる詩文を遺し、最初の小說の一つを作り貧民普通教育最初の學院を建て、一種の漢字辭典を編纂し、また平假名、片假名をも製したと云はれる。この

文學關係の一分野に於いても、彼れの事業は、その廣さ、深さ、高さに於いて無比の偉大を稱へらるべきであらう。

平安朝の國文學は桓武天皇の大御歌に明けた　けれども當時に於ける學問の中心はやはり漢學にあつて、前朝に於ける吉備眞備、石上宅嗣、淡海三船等の輝かしい功業が、賀陽豐年僧空海、菅野眞道、菅原清公、小野岑守等の更に輝かしい功業によつて承け繼がれた。而して此の新時代に於ける漢文學の粹は先づ弘仁五年(一四七四)に出來た『凌雲集』に集められたが、空海が一種の小説『聾瞽指歸』はそれより十七年前の延暦十六年(一四五七)に成り、修辭學の名著『文鏡秘府論』は四、五年前の弘仁元年頃(一四七〇)に出來てゐるので、吾等は先づ彼れの文勳の記述によつて、簡單な王朝漢文學誌の冒頭を飾らうと思ふ、同時に彼れによつて大成された學問上の名著、『文鏡秘府論』によつて、彼れの文勳の最初を飾らうと思ふ

二

空海は光仁天皇の寶龜五年(一四三四)に生れて、仁明天皇の承和二年(一四九五)に入寂した彼れは二十一歳にして平安奠都の大變革に逢つた。彼れが『文鏡秘府論』六卷を成した

のは三十七歳の弘仁元年頃であつたらしく、その後約十年を經、弘仁十一年になつて、『祕府論』を半ば以下に縮約した『文筆眼心抄』を出してゐる『祕府論』が當時の知識階級から非常に調法されたので、後進初學の便宜を謀つたのであつた。『祕府論』は彼れ自ら言へる如く、禪觀の餘暇に、諸家の諸格式を勘へて撰したものであつたが、其の見識抱負は實に偉大なるものであつた。彼れ自ら序文の中に於いて、

諸家の格式等を閲し、彼れの同異を勘ふるに、卷軸多しと雖も、要樞は則ち少なし、名異なれども義同じく、繁縟尤も甚だし、余が癖療し難く、卽ち刀筆を事とし、其の重複を削り、其の單號を存す

と言ひ、而して之れを六卷に分けたことについては、

配卷軸於六合、懸不朽於兩曜、名曰文鏡祕府論。

と云つてある。屈平の詩賦に競つて、懸日月の意氣を示したのであらう。「既存を窮め盡くして更に獨創を加ふ」これが蓋し此の法師文豪のあらゆる方面に於いて常に心に掛けた謂はゆる「余癖」の抱負であつた。

空海はまた『祕府論』の序文の中に於いて、

沈候劉善之後、王皎崔元之前、盛談四聲、爭吐病犯、黃卷溢篋、緗帙滿車。

と言つて居る。沈侯は沈約、劉善は劉善經のことで、共に六朝末期の文人、而して王皎崔元は王昌齡、僧皎然、崔融、元兢のことで、共に唐代の文人である。彼等にはそれ〴〵に詩の修辭に關する著述があつた。例へば劉善經の『四聲指歸』、僧皎然の『詩式』、崔融の『新定詩格』、元兢の『詩髓腦』の類で、いづれも當代高名の著述であつたが、彼等は悉く散逸して支那にも日本にも傳はらず、辛うじて其の面影の一部を、此の『文鏡祕府論』の中に留むることを得たのであつた。而して『祕府論』は彼等の要を撮記して、加ふるに大師の獨創を以てしたものである。

三

『文鏡祕府論』の内容を、目次のまゝに並べ記すと、「調四聲譜」「四聲論」「論大勢」「十四例」「六義」「八階」「六志」「九意」「論對」「筆札七句言句例」「論文意」「論體」「定位」「集論」「論病」「文筆十病得失」「論對屬」「帝德錄」等の約二十項に分かれてゐる。而して大體隨感隨錄風の氣味があつて、順序や重複を意に介せぬ傾きがあり、また原則と實習とをごツちやにした嫌ひのあるものである。思ふに大師が此の書を編する時の心境は、沈劉王皎崔元等が說

く所に基づき、集大成的に要を摘みつゝ、その合間々々に我が獨創を加へて行かう、學的組織の齊整、緻密、均衡、緊約や順序立等については、さまで心を勞せずして、専ら作文の實際に役立つやうにしよう、處世上特に大切なる詞遣などについては、全體上の調和を破つても、懇切に實習的教示を試みてやらう、といふにあつたのであらう。彼れは先づ「調四聲譜」と題し換頭、護腰、相承等の項目を擧げて音韻の調節を論じ、「論體勢」と題しては、「直把入成勢」「都商量入作勢」「直樹一句」「直樹兩句」「理入景勢」「景入理勢」等、十七種の組立法を論じ「十體」と見出しては、十種の文體を論じて居るが、そこで暫らく立ち止まつて、飛入式に「六義」と題して、詩の六種、風、賦、比、興、雅、頌を說き、「九意」と題して、春、夏、秋、冬、山、水、雪、雨、風、九種の自然美を描く時の心得を說き、今度は再び學問的說明に緒を戻して、對句の形式に二十九種あると云つて、その特に興味を感じた詞姿の一部を細かに說明してゐる。つぎに「文意」を論じ、前說と重複するらしい文體や布置、結構を論じ、つゞいて病犯論に入つて、平頭、上尾、蜂腰、鶴膝等二十八種の病を擧げ、而して最後に「帝德錄」と題して、今日の美辭麗句集に見るやうな、君主帝王に關する頌德敬寫の心得を、實習的羅列的に教へて居る。彼れの說く所は、時としては精細を極めて、例へば對句の二十九種を說き、その病犯論の如きは六朝唐代の學者の八病論に對して新に二十種を加へ說いたと云はれるけれども、その細說の中には、

しば〳〵わざとらしい好事めいたものがある、例へば對句の中に、「側對」（元兢の用語、崔融は字側對と名づけたと名づくる一種の對偶法があると云つて、それは、

馮翊（地名）　龍首（山名）

の類である　馮翊、龍首は本來對をなすものではないが、「馮」の字の右半分に馬の字があつて、それが龍と對し、「翊」の字の右に「羽」があつて、それが首と對するが故に一種の對句となるのであると云つてゐる如きは、漢字の形を弄ぶ一種のこじつけ遊戯で、眞面目な學術論とは云ひ難いものであらう　また其の中に不備なる點の多くある事は、對句のみの二十九種を擧げて、他の詞姿を幾らも説かぬことを見ても知られるであらう。

けれども是れは時代を忘れて備はるを求むるの論である　大師の修辭論は、之れを支那に置けば、六朝唐代の諸學説を凌駕するものであり、本朝に於いては、暗夜に日輪の輝き出でたやうな、文字通り破天荒のものであつた。　其の所説は半隨筆式に雜然と並べられた傾きがあるけれども、約していふと「音聲美論」「結構論」「詞姿論」「思想論」「文體論」「病犯論」「實際作文用語指南」の數項に纒めらるべきで、而して是れが發達した修辭學の核心を摑んで、とにかく修辭學の備ふべき諸方面を備へてゐることを思ひ、また我が文學の上では明治の中期以前には、此の書の足許にも寄りつくべきものが無かつたことを思ふと、大師の此

の方面に於ける動功は實に偉大なりと云はねばならぬ。殊に一部に偏してはゐても、とにかく精細無比の觀察があり、また其の文章に對する見識が高邁で、論述が堂々としてゐるのを見ると、此の人、生得の貫祿が其の論に光を添へてゐることを感ぜざるを得ぬ。卷四「論文意」の中に左の文章がある。

夫置意作詩、即須凝心目擊其物。便以心擊之、深穿其境、如登高山絕頂下臨萬象、如在掌中。

夫れ文章の興作るや、先づ氣を動かす。氣心に生じて、心言に發し、耳に聞き目に見て紙に錄す。意須らく萬人の境を出でて、古人を格下に望み、天海を方寸に攢むべし。詩人の用心、當さに此に於いてすべき也

凡そ詩人、夜間床頭に、明かにして一盞の燈を置け。若し睡來たらば睡るに任せよ。睡り覺めて即ち起く。興發して意生る。精神清爽にして了々明白なり。皆須らく身を意中に任くべし。若し詩の中に身無くんば、即ち詩何によりてか有らん。若し身心を書かずんば、何を以てか詩を爲らん。

彼れの修辭論が、大所高所に目を着けつゝ、同時に末端微細の點にも注意を怠らなかつたことは、之れによつても知られるであらう。

要するに空海の『文鏡秘府論』は、當時に於ける支那の修辭論を大成して、彼れ自身の獨創を加へた點に於いて、修辭學の髓腦を具備して、爾後千年の學界に無比の地歩を占めた點に於いて、當代及び後代の漢文學に對してのみならず、國文學殊に歌學に對して莫大なる影響を及ぼした點に於いて、特別なる史的價値をさゝぐべきものである。

四

『文鏡秘府論』が空海の文章學說の粹を集めたのに對して、彼れが創作詩文の華を集めたものが『性靈集』である。『性靈集』委しくは『遍照發揮性靈集』といふ。彼れの高弟、高雄の眞濟の纂輯し且つ命名したものである。十卷より成り、詩、碑文、序、表、啓、書、勅、願文、達嚫、表白等、百十數篇を集めたものであるが、表、啓、勅、書、願文等を、大君に、臣下に、佛に、同輩に寄せたる一種の書翰と見れば、概括して詩、碑文、序、書翰の四種に約することが出來るであらう。

空海の文章は、整調、曲折、柔艶の美に於いて、必ずしも弘仁以後、藤原氏全盛期に於ける諸名流の作に及ばぬけれども、その堂々たる威力と、忠誠の現はれと、神靈の輝きとに於いては、恐らく平安王朝無比の詞藻であらう。左にその二三を揭げて、此の龍象の偉大なる餘技の一

端を窺ふことにする。

山毫點溟墨、乾坤經籍箱、
萬象含一點、六塵閲緗細

高山を筆とし蒼海を硯の水として、造化の縱横に書き列べた文章が森羅萬象であるとは、實に豪快なる詩想で、『懷風藻』なる大津皇子の「天紙風筆畫雲鶴、山機霜杼織葉錦」と相並んで、空想の雄大を誇るべき大文字である

彼れが嵯峨天皇の勅を奉じて老いたる名隱遯僧玄賓に對する御痛はりの思召を書いたのに、左の短章がある。

贈玄賓法師勅書

賓公形靜山水、神王烟霞。春華織錦、對之陶情、秋葉散帷、見之忘歸。求於緇素卓爾不群。比來

謹譯

たよりを寄せる。僧都の山住は貴くふさはしい。そちが容貌は靜かなること山水そのまゝで、神は雲烟を支配して、悠々として自適する。春の花が錦を織れば、陶然と眺め入つて我れを忘れ、秋の紅葉が彩布をまき散らせば、見とれ見ほれて家路を忘れる。

僧俗二界のいづれを見ても、僧都の姿はまことに絶

時逼玄冬序凝縞雪。想彼禪居實勞悽懷。今故存問兼附送饋、綿五十屯、布三十端。至宜領之。

倫ともぬけてゐる。さて時節はもう眞冬に近く、白い物が淋しく空を隈どり始めた。僧都が世離れした山居を思ふと、この胸が痛んで來るぞ。でわざわざ使して安否を尋ねる。兼ねて見舞心に贈る品々は、綿五十屯に布三十反。着いたら、しかと受取つてくれよ。

簡潔にして除情綿々、氣品の高さ、表現の美しさ、文字の周圍から後光の射す心地がして、いかにも至尊の恩翰たるの貫祿を備へてゐる。大師が名作一方面の代表とすべきものであらう。

大師の詩は大部分佛教臭味を帶びたもので、詩人としての大師の本領はそれらの中に求むべきであらうが、除外例なる世間的の作としては、左に掲ぐる陸奥守小野岑守に贈つた雜言體の長詩の如きが、その尤なるものであらう。岑守は篁の父で、その陸奥守に任せられたのは弘仁六年正月であつた。

贈野陸州歌幷序

試譯

序

戎狄難馴、邊笳易感、自古有、今何無。公抱大厦之材、出鎮豺狼之境。堂中久闕定省之養、魏闕遠阻龍顔之謁。雖云天理合歡然、人情豈無感歎。貧道與君遠相知、山河雲水何能阻。白雲之人、天邊之吏、何日無念。聊抽拙歌、以充邊霧之解頤。

日本麗城三百州、　就中陸奥最難柔。
天皇赫怒幾按劍、　相將幄中爭馳謀。

えびすは手懐けがたく、邊境の蘆笛には、益荒男もつい哀みをそゝられる。昔から然り、今もさうであらう。君は棟梁の偉材を抱きながら、今度遠く出でゝ、山犬狼さながらなる蝦夷を抑への大役につかるゝこととなつた。こゝ暫らく、家にては親々御の安否を問ひ、御所にては上御一人に拜謁さるゝ機會があるまい。大君の大命、もとより勇んで任に赴かるべきではあるが、自然の人情、つい淋しい思ひをされることもあらうと思ふ。貧道も君とは久しき御親しみ、山川萬里を隔てるのは、やはり堪らなくつらい。我れは山寺の雲に臥す沙門の身、君は天涯遠征の國守將軍、これからお互に、長く淋しい遠慕の日々を送ることであらう。左に記す拙い詩一首、これが霧深き奥州の任地に於ける御微笑の料ともなれば本懐である。

かしこくも我が國三百州、一の難治は陸奥で、
大君様も怒りして、御劍執らせ給ふこと幾たび、
賢宰勇將爭ひて、すゝめし智謀數知れず、
嗚呼しこの夷御代々々の、大御惱みの種なりき。

往帝代、今上憂、時々牧守不能劉、
自古將軍悉啾々、毛人羽人接境界、
猛虎豺狼處々鳴、老鶚目、猪鹿裘、
髮中插着骨毒箭、手上每執刀與矛、
不田不衣逐麋鹿、靡晦靡明山谷遊、
羅刹流、非人儔、時々來往人村里、
殺食千萬人與牛、走馬弄刀如電擊、
彎弓飛箭誰敢囚、苦哉邊人每被毒、
歲々年々常喫愁、我皇爲世出能緊、
亦咨焉丹局、千人萬人擧不應、
唯君一箇帝心抽、山河氣、五百賢、

國守將軍かしこみて、代はる〲にいたづけど、
えぞ平げず歎くのみ。これも道理ぞアイヌ、
出羽の民に隣して、猛き虎しゝ山の犬、
狼の如く群をなす、目は老鷲のさとく、
鹿猪のしゝの衣きて、かぶとに挿すは骨の毒箭、
刀と矛は手を去らず、さて田つくらず衣つけず、
明けぬ暮れぬと山に谷に、大鹿小鹿追ひまはす。
悪鬼ぞや、人ならず、時々里を襲ひては、
害なくらふ人と牛、數は千といひ萬といふ。
かくて馬驅り刀揮り、弓をひきては箭を飛ばす、
疾きこと電撃の如く、捕ふすべもあらばこそ。
哀れ境にちかき民、年々受くる害毒を、
え訴へず愁へ泣く、畏しや我が大君、
見そなはし下り立ちまして、軍部の伴に課らす。
千人萬人おぢかしこみて、應ぜぬ中に君たゞ一人、
大御目がねに叶はして、大任受くる雄々しさよ。
君は山河の生むところ、五百年にたゞ一人、
まれに出づてふ賢人、文武の才を天に得て、

允文允武得自天、　九流三略肚裏吐。
鵬翼一搏睨此境、　毛人面縛側城邊。
凶兵蘊庫待治鑄、　智劍滿胸幾許千。
不戰不征自無敵、　或男或女保天年。
昔聞嬀帝干儛術、　今見野公略無疋。
京邑梅華先春開、　京城楊柳茂春日。
邊城遲暖無春蘂、　邊壘早春無茂實。
高天雖高聽必卑、　況乎鶴響九皐出。
莫愁久往風塵裏、　聖主必封萬戶秩。

智謀軍略胸にあり。　君大鵬の一搏、
一たび睨まば毛多人、　蝦夷は恐れて戰はず、
利手縛りて面ふせ、　君が城邊に並み立たん。
かくて凶器は御庫に收め、　戰はねども敵寄せず、
蝦夷に怖ぢたる男女、　皆太平を悅ばん。
むかし舜帝干の舞、　奏でて夷從ひき、
今の野公のたぐひなき、　智謀はそれに劣らめや。
あはれ都の梅が香は、　春まだしきにはや匂ひ、
春を迎へて楊柳の、　やなぎは絲をほこれども、
君すむ奥は春おそく、　日をたのします花咲かじ、
冬招かぬに早く來て、　木の實はうれじさりながら、
空高けれど耳近し、　澤邊のおくの鶴の聲、
天に聞こゆといはずやも、　胡沙吹く風の塵のうちに、
久しく住むを、なわびそ、　聖の帝わが大君、
萬戶を報いたまはてや。

整齊華美の修飾に於いて未だしき嫌ひはあらうが、その用語、句並びの力強く出入したところに、不動の腕の如く、天そゝる岩山の如き雄健豪快なる趣があり、同時に其の間に一種の柔かい魅力をも含んでゐて、白樂天、元稹の流れを汲んだ弘仁以後の諸才子の作とは趣を異

にしつゝ、時流と異なつた一種の特色を成してゐる。

五

空海が漢文の創作に、二十四歳執筆の『聾瞽指歸』といふのがある、儒老佛三教の位附について取扱つた一種の小說とも見るべきもので、彼れが文章の中最も文學らしい文學であり、從つて國文學的に見て最も重き地位を占めるものであるが、これは後章『竹取物語』の前附として說明することにする。さてその外に彼れの創始にかゝる文化的事業の第一は綜藝種智院の創設である。綜藝種智院は貧民をも

弘法大師筆風信帖

含む一般士民に儒老佛三教の普通教育を施す學校である。當時京都には官府の大學が唯だ一つあり、外に私學には和氣氏の弘文院、藤原氏の勸學院があつたが、いづれも貴族上流の教育機關たるに止まつて、一般民衆がそのお蔭を蒙ることが出來なかつた　空海が之れを慨き、唐には町々に閭塾があり、地方々々に鄕學があるのに倣ひ、あらゆる有志の子弟に儒、老、佛の三教を傳へようとして、新に興したのが、此の綜藝種智院であつた。彼れは此の院の趣意書に於いて自ら「貧賤子弟無所問津」といひ、「今建此一院普救童蒙不亦善哉」と云ひ、また院に師たる者の心得について、

絳帳先生、心住慈悲、思存忠孝、不論貴賤、不看貧富、隨宜提撕、誨人不倦。三界吾子　大覺獅吼、四海兄弟　將聖美談、不可不仰。

と云つてゐる　大覺は釋迦、將聖は孔子である。吾等は之れによつて此の新しい教育施設の意義の深きを思ふと共に、空海が慈悲の博さ、心根の氣高さを偲ぶべきであらう。「綜藝種

（教王護國寺藏）

智院』は勸學院の創設に後るゝこと七年、天長五年の十二月十五日に開院の式を擧げたが、空海寂後十數年にして廢滅した。

空海の文化的事業で長く傳ふべきものが、此の外に尙ほ三つある。その一つは高山寺に藏する『篆隷萬像名義』三十卷で、我が國最古の辭典である。もう一つは平假名及び片假名の創造若しくは結成である。二つの假名については多くの有力な異論はあるが、『凌雲集』の中なる仲雄王の「謁海上人」と題した詩の中の「字母弘三乘、眞言演四句」を始めとして、有力なる味方がないではない。もし之れを大師の作とすれば、彼れの文勳は實に空前絕後であらう。

第五　文選、文集に隨喜した漢文學

一

子供はよく大人の眞似をする。けれども不斷は自分の天性に從ひつゝ、段々に成長して立派な大人になる。漢文を迎へた吾等の祖先は、文道に於いてよく〳〵の幼孩であつた。而してこの幼孩が彼國の技巧を凝らし盡くした六朝駢麗の文＝人ならば大氣取の大人ともいふべき＝を見ると、一も二もなく隨喜して之れを模倣した。器用な子供の模倣は巧みであつた。けれども、彼等の模倣には覺醒の期がなくして、少年期、青年期、壯年期を過ぎて遂に老年期に及んだ。彼等は這ふ子のやうやく立つ時分に冠つた父の大きな帽子を冠り、大きな靴を穿き、しかも極度に洒落れた、氣取つた、ひねくれた物を身につけて、そのまゝ白頭の老翁とはなつたのである。

抑も漢學の始めて我が國に入つたのは應神天皇の十六年(九四六)であつた。梁の昭明太子が『文選』を纂輯したのは、それより二百四十年の後である。それより七十餘年を經た

推古天皇の十二年(一二六四)に、聖徳太子が憲法十七條を制定されたが、その憲法の中に、『文選』に據られたとの確かなる句があると云はれる。その後嵯峨天皇の弘仁時代に『白氏文集』が始めて渡來したが、それから詩の方面に白樂天の手振が盛んに行はれて、我が漢文の世界は殆んど『文選』『文集』の占領する所となつた。『枕の草子』に「文は文集、文選」と云つたのは、此の時潮に對する謳歌である　その後三百年、作詩、作文の手腕は段々劣りに劣つて行きながら、此の二大文集に對する謳歌と模倣とは、ひた續きにつゞいて止まる所を知らなかつた

無論當時の漢文も『文選』『文集』のみではない。應神朝に始めて貢されたのは『論語』『千字文』であつた　その後三史五經が長く學者必讀のものとされてゐた。また佛經の經典が殆んど悉く漢文である　けれども彼等は悉く讀む爲めの文章である。道を學び歷史を知るための書物である。我等の祖先は彼等を讀誦し理解する方面の能力の獲得に長い歳月を費やしたが、やうやく我が思想表現の必要を感じ始めた時に、先づ燦爛として彼等の眼を射たものは『文選』で、殊に『文選』の中なる六朝期の四六駢麗の文であつた。本來彼等の思想感情は、簡單素樸なる文句に現はすに適してゐたであらう。漢文に學ぶにしても、先秦乃至兩漢の文章によるのを適當としたであらう。しかしながら、文章眼の幼稚な

彼等には、自分に適當なる模範文を選擇する能力がなかつた。かくして彼等はあどけない驚異の念の誘ふまゝに、子供が父兄の巨帽大靴を悦ぶ心持を以て、相率ゐてあくどい技巧を凝らした、極彩色、大爛熟の文章に赴き、而してその厚化粧した深情に魅せられつゝ、幻の一生を送つたのである。彼等が如何に『文選』六朝の四六駢麗に魅せられたかは、古傳を純日本式に寫さうとした『古事記』に、

山川悉動、國土皆震。

爾高天原皆暗、葦原中國悉闇。

といふが如き、四六と並ぶ文句のあしらひがあり、古拙な文章を覺束なく辿つてゐる『常陸風土記』が、乾燥無味なる記事の間に、突如として、

夫此地者、芳菲佳辰、搖落涼候、命駕而向、乘舟以游。春則浦花千彩、秋是岸葉百色。聞歌鶯於野頭、覽儛鶴於渚干。（霞浦）

の如き四六と連繫つた絢爛の名句を飛ばしたのを見ても察せらるであらう。

二

十三年を境として、延暦が奈良、平安の二朝に引きつゞいてゐるやうに、隆盛を誇つた漢學も、奈良朝からそのまゝ引き繼がれて平安朝に傳はつた。而して平安朝四百年はおしなべて漢文尊重の時代であつたが、創作の方面から見て、その全盛期は、恐らく嵯峨天皇の弘仁期（一四七〇—八三）を中心として、延暦（一四五四）より延喜（一五六一—八二）、延長（一五八三—九）に至る百數十年間であつたであらう。

此の期に出來た詩集で、取り分け重要視されたのは嵯峨、淳和の兩朝にかけて次ぎ〱に現はれた勅撰詩集、『凌雲新集』『文華秀麗集』『經國集』の三篇であつた。『凌雲新集』は略して『凌雲集』とも云ふ。小野岑守が主役となり、菅原清公、勇山文繼を補助として、屢々病臥中の老先輩賀陽豐年に質すところがあり、疑はしきは聖斷をも仰いだといふ、重々しい由來を持つたものである。此の集の選定に關して岑守が如何に心を惱ましたかは、その序文の中に、

臣之此撰、非臣獨斷、與從五位上行式部少輔菅原朝臣清公、大學助外勇山連文繼等再三議、猶有不盡、必經天覽、從四位下行播磨守臣賀陽朝臣豐年、當代大才也、道縁病不朝、臣就問簡呈、更無異論、從此定焉、

と書いてあるのを見ても知られる。選の範圍は延暦元年より弘仁五年に至る三十三年間

文華秀麗集　古寫本　（靜嘉堂文庫藏）

にわたり、作者二十四人、詩の數九十一首、一卷に纒められた　弘仁五年(一四七四)に成立つたものである。最も主なるもので、おのづから集の中心になつて居るのは、嵯峨天皇の二十二首、豐年、岑守の各〻十三首等である　賀陽豐年は奈良朝末期の碩學石上宅嗣に引立てられ、その書庫芸亭に出入を許されて、全庫の外典を讀み盡くしたと云はれる學者詩人で、平安奠都の年に四十四歳、弘仁六年六十五歳にして逝いた。『凌雲集』選定の折は、病歿の前年で、老病を養つてゐたのであらう

『凌雲集』は我が國に於ける最初の勅撰詩集であるが、それから四年目の弘仁九年(一四七八)になつて、第二の勅撰集が現はれた　「文華秀麗集」である　勅を奉じたのは藤原冬嗣で、仲雄王が專ら局にあたり、菅原清公、勇山文繼、滋野貞主、桑原腹赤

等と相議して選定したのであつた。『凌雲集』に漏れたのを集めたので、三卷、作者二十八人詩百四十八首、その中の百四十三首が現存して居る　最も多いのは嵯峨天皇の二十九首で、之れに次ぐのが巨勢識人の十九首である。

『文華秀麗集』の『凌雲集』に異なるところは、第一には、『凌雲集』の順序が作者の身分本位なのに對して、此の集のが内容の性質本位なることである　第二には、『凌雲集』が作者の本名に位階職掌を委しく添へたのに對して、此の集のは、少しの例外を除き、一切の肩書を省いて支那人まがひの三字名にしたことである　此の集に渤海人王孝廉の作五首を載せて泰平を頌へさせて居るのも異色とすべきであらう　内容の類別は遊覽、宴集、餞別、贈答、詠史、述懷、艶情、樂府、梵門、哀傷、雜詠の十一門で、之れに屬する個々の題目の下に、「巨識人」「野岑守」「菅清公」「毛穎人」「桑腹赤」「良安世」等の三字に約めた作者名が並んでゐるのは一種の奇觀である。『文選』に倣つて支那式を悦んだのであらう。

第三の勅撰詩集『經國集』は、『文華秀麗集』より後るゝこと九年にして、淳和天皇の天長四年に現はれた。滋野貞主が勅を奉じ、南淵弘貞、菅原清公、安野文繼、安部吉人等が補助して出來あがつたもので、作者百七十八人、全二十卷の浩瀚なるものであつた。奈良朝の詩人十五人の作も取入れられて『懷風藻』『凌雲集』『文華秀麗集』以外の詞藻を網羅した全集

ともいふべきものであつたが、惜しいかな、中十四卷を失つて、今僅かに一、十、十一、十三、十四、二十の六卷を存するのみとなつた。作全部の數は賦十七首、詩九百十七首、序五十一首、對策三十八首であつたといふことで、『文華秀麗集』が性質分なるに對して、此の集は文體類別式を取り、作者の名記については、目錄をば『凌雲集』の肩書本名詳記に從つて、本文では『文華秀麗集』の支那式なる肩書拔き三字名式に從つてゐる。二つの前例を兼備して更に多く『文選』に肖らうとしたのであらう。尚ほ『經國集』には「序」「對策」等の散文をも取入れてあるが、これは我が國最初の試みで、やはり『文選』に學んだのであらう。

五言良納秋山閑飮一首　太上天皇
遁世雲山裏秋深掩蓽廬溪廚作酌澗野院
且焚枯詠興道逢亭琴聲詠箜餞欣將軒冕
客俱醉晩林虛
五言途中九日一首　良安世
客裏三秋暮途中九日來相留閑行旅如何
菊花開

經國集　古寫本（靜嘉堂文庫藏）

個人の家集では、先きに擧げた空海の『性靈集』の外に、都良香の『都氏文集』（元慶三年、一五三九成、本六卷、現存三、四、五、三卷）、嶋田忠臣の『田氏文集』（三卷、寛平二年、一五五〇頃成）、菅

原道眞の『菅家文草』十二卷(昌泰三年、一五六〇獻)及び、道眞が延喜三年配所に薨じた年に集めて都の紀長谷雄に贈り、薄廷を泣かしめたといふ『菅家後集』一卷がある。首の中現存の『都氏文集』は賦、論、銘、讃、表、詔書、對策等の散文を有するのみであるがその他の詩文集、殊に三勅撰集を取つて、之れを奈良朝の『懷風藻』に比べると、彼等の特色は、種類が豐かに數が多くなつた外に、形式の上では、絶句、律、長篇に通じて、七言が多くなつたことであり、內容の上では、大體前朝と同じく頌德、奉和、遊宴、述懷、詠史等の作が大部分を占める中にも、語句の花やかに洗錬されたものが多くなつたことであつた。『文選』は奈良朝の遙か以前から平安朝全體にわたつて、常に崇拜登攀の目標であつたが、奈良朝までは、殊に純一無雜の崇拜を受けてゐた『文選』の含むところの詩總數四百四十三首の中、五言が三百九十六首あつて、七言は唯だの八首であつた。『懷風藻』か全部で百二十首と稱せらるゝ中に、五言の百十餘首に對して、七言は唯だの六七首に過ぎぬが、此の並行は、恐らく、『文選』に對する崇拜模倣の結果であらう。平安朝に入つては、文人等は『文選』を崇拜しながらも、傍ら七言全盛なる隣國の活詩壇の大勢を感じて來た。而してその結果が、自然に『凌雲集』の五言三十九首對七言七十六首、『文華秀麗集』の五言五十二首對七言七十九首等の對峙を喚び起したのであらう。それから『懷風藻』に比して、詩としての感じの何となく變はつて來たの

は、『懷風藻』の詩が固くなり、おど〳〵して、臨摹式の感じが纏つてゐたのに對して、平安朝のが、凝りがほごれて詠み口が自由になつたことである　同時に文句が華やかになり、曲折が豐かになつて來たことである。殊に『白氏文集』の輸入を見てからは、內容形式の兩方面に於いて著しく輕柔、艶麗の趣を加へるやうになつたが、その間に於ける一つの流行は、纏まつた全詩よりも對偶式の斷片句、謂はゆる句詩を悅んで弄ぶ傾向であつた。菅公は配流の途中、明石の驛長に、

驛長無驚時變改。一榮一落是春秋。

といふ句詩を取らせて、彼等の淚を誘つたと云はれるが、『千載佳句』や『倭漢朗詠集』の纂輯は一つはこの流行の結果であらう。本來大和民族には、簡妙を尊んで、物事手ッ取り早く片つける事を悅ぶ根本性がある。王朝に長歌が廢れて短歌が獨り榮えたのも、その後短歌を折半して、更に發句の獨立盛行を見たのも、此の根本性の現はれの一つであらうが、漢詩文の方面に於いても、やはり類似の傾向が現はれて、或は當事卽妙の二句に感嘆の禮讃を送り、或は偶〻成れる一二句が白氏に類似したことを激稱した。或は既製の作についても、全を忘れ、他の部分を忘れて、選み出だされた一二句を抽象的に持囃した。或は一つの名句を誦して次ぎの對句に跨へてゐると、忽ち鬼神の聲が應じて、まんまと絕妙好辭の一聯が出來

たといひ、或は長い一篇の中の特別なる二句を美しく訓讀しかねて、神前に祈誓をこめると、滿願の當夜に立派な夢想の風流訓を授かつたといふ類の逸話群が成立つた。かやうに二句を引離して鑑賞耽味する場合に、一番花やかで人の眼を惹くのは、對偶の曲折を持つた文句であらうが、此の方面に於いては、已に先進の二大集『文選』と『白氏文集』とが、豐かに絶妙の例を示して居り、弘法大師の『文鏡祕府論』が對句二十九種の說を揭げて理論的に之れを鼓吹して居るといふやうな事情があり、諸種の因緣が和合して、漢文漢詩の社會に、いつしか好事的、弄句的の常習を馴致したのであつた。此の常習の弊を最もよく見るべきものは謂はゆる「對策」で、讀者は『經國集』の中の殘れる第二十卷の二十六首に於いて、四六駢麗の無意味な美しい空言も、これほどまでに並べられるものか、學者の最高位を定むべき試業の一つに於いて、問ふ博士も對へる秀才も、長い間眞面目に此の種のよまひ言を繰返してゐたのかと驚かれることであらう。

とにかく『文選』の四六駢麗は美しい面白い技巧であつたが、同時にその誘惑荼毒の影響は恐ろしかつた。而して此の誘惑荼毒に思ひ切り身を任せたのが平安朝であるが、此の駢麗を十二分に手に入れながら、また謂はゆる「白俗」の、華美艶麗、軟柔で、少なくとも卑俗になり易い傾きのある白樂天を學びながら、その荼毒を免れて、稀なる人格美と文章美との

調和を見せたのが菅公であつた　但し、その前集『文草』の方には時代を分前した弊が多分に見えてゐるが、『後集』には、その人物と、學問と、地位と、而して殊に無實の左遷に畏まり泣いた、謂はゆる兢々の情とが、如實に、しかも美しく力強く現はれて、人の魂を搖り動かすものがある。

盛期中の全盛期で、漢文學全盛の初期の百數十年について、更に細かに位附をすれば、弘仁、天長が全盛期中の全盛期で、貞觀、元慶、寛平、延喜と段々に衰へた趣はあるが、しかしながら是れは時代全體に對する一般觀察で、唯だ此の菅家一人あつて、最後の延喜が最も振つたといふことが出來るであらう。　而してそれは主として菅公といふ人の特別なる性格と閲歷との爲め、また公が全盛期の先輩ほどは『文選』『文集』に支配されなかつた爲め、類ひ稀なる逆境によつて表現の特殊味を惠み與へられた爲めであつた。　小野篁には隱岐に流された折の作七十首があつたといふことである。　また『野相公集』五卷があつたと傳へられてゐるが、もしそれらが現存してあつたならば、野相公、菅家、二人の作が、逆境本位の特別なる趣味に此の全盛期の首尾を飾つて、我が漢詩史界に雄視したことであらうと思はれる。

左に此の期の、さすがに數多き漢詩に對するほんの暗示として、嵯峨天皇の御製及び本朝女中無双之秀才と稱された皇女有智子内親王（承和十四年一五〇七、四十一歳薨）の御作、その他を擧げ、次ぎに逸話に纏はれた著名の聯句少々を擧げて、最後に菅公の數首を引きたいと

思ふ。

嵯峨天皇宸筆
傳教大師を哭し

三

嵯峨天皇の御製は『凌雲集』に二十二首、『文華秀麗集』に二十九首を拜する。『經國集』の失はれた十四卷が現存したならば、更に夥しい御製群を拜することが出來たのであらう。天皇は書に於いては空海に競はせられ、詩に於いては小野篁に競はせられて、風流洒落な逸話の數々を殘させられたが、その御製は技巧に富んで同時に君主の品位を見せた、實に堂々たるものであつた、左は『文華秀麗集』の最初、「遊覽」の部の冒頭を飾つたものである。

江頭春曉　一首

給うた御製

江頭亭子人事睽、欹枕唯聞古戍鷄。
雲氣濕衣知近岫、泉聲驚寢覺鄰溪。
天邊孤月乘流疾、山裏飢猿到曉啼。
物候雖言陽和未、汀洲春草欲萋々。

その場所、その季節に相應した事物が、適切な言葉に現はされて、一々其の所を得、而して古い驛路の鷄の聲、雲煙のたゝずまひ、流れの音、山をひかへた大空に一輪の明月が懸かつて、溪流の瀨々に影の美しく碎くる景色、聞き馴れぬ山猿の夜明けまで啼くのを聞いて、飢ゑを訴へるかと憫む想像など、それらが、一つに纒められて、趣深く氣品高く、臨江山村の春の曉の氣持を見せてゐるところ、實に立派な御作だと拜誦する　雲氣泉聲、天邊山裏の前後兩聯も、境地を示す趣といひ、句のあしらひといひ、實に立派である。

哭賓和尙。

大士古來無住着。名山晦跡老風塵。隨緣化體脈應久　歸正眞機忽滅亡。
松掩舊○猶鬱茂、草晴新塔漸荒涼。生前羅席空留月、沒後金爐誰添香。
禪林時見摧枝幹、梵宇長懷失棟梁。緇素共愁面禮罷、遙々仰拜向西方。

前に弘法大師に御見舞の御代作を仰せつけられた玄賓僧都に對する御直作の誄詩である が、徹底的に世を捨てた高僧の本領や平生から、亡き後の淋しさを經て、佛教界が巨人を喪つ た歎き、僧俗二界に通じての追慕に至るまで、情を盡くした段々の御想像と、氣高い奥深い御 表現とは、まことに尊いものである。凡てがさうではあるが、殊に後半の六句「生前お前に 坐つて貫つた奥山の蔦や葛の坐席は、主を失うて、もう月影が見舞ふばかりになつてゐるこ とであらう。お前の寂き後は、手馴れた黄金の香爐にも、誰れあつて香を燻べ足してはくれ まい。大切な今の佛教界に、木ならば大幹、家ならば棟とも梁とも思ふ人を失つたのは、何と も云はれず淋しい。僧にも俗にも、世にお前との永い訣れを悲まぬ者はないが、もう直に逢 つて禮をすることが出來ないので、佛のいますは西とばかり、みんな其の方角を向いて遙か に〳〵お前を仰いでは拜んで居るのだ」などは、難有いとも、妙とも、まことに言語道斷では ないか。

嵯峨天皇には五十人の皇子皇女がおはして、皇子の中には、源姓を賜はつた弘、常明の如く、 十六歳乃至十三歳にして已に文名を歌はれた人々もあつたが、殊に抜群の伎倆を顯はされ たのは有智子內親王であつた。內親王の御作は、『經國集』の中に「公主」の名によつて 七首を載せてある。中でも最初の「奉和巫山高」と題した五言律の

嵯峨天皇宸影　（帝室御物）

巫山高且峻。　瞻望幾岩々。　積翠臨蒼海。　飛泉落紫霄。
陰雲朝晻曖　宿雨夕飄颻。　別有曉猿叫。　寒聲古木條。

は最も名高いものであるが、殊に名譽の逸話によつて遍く人口に膾炙したのは、「春日山庄」の御題に對する即詠の左の七言律詩であつた。

寂寂幽庄水樹裏。
仙輿一降一池塘。
棲林孤鳥識春澤。
隱澗寒花見日光。
泉聲近報初雷響。
山色高晴暮雨行。
從此更知恩顧渥。
生涯何以答穹蒼。

意譯

ひつそりとした山莊の、水に潤ほされ木に圍まれてゐる片ほとりに、大御車の下り立たせられた畏さよ。林の中に淋しく棲む友なし小鳥も、今日は春あたゝかき御惠に生きかへり嬉々とした小さい花も、麗らかな日の御光に浴することが出來た。手近き泉の聲につれて、珍しくも遙かに鳴りわたるは初雷。仰げば山の色が高く青く晴れて、その面を、夕暮の白雨が隈どり行く面白さ。これからは更に厚く大御惠に浴することであらう。大青空にひとしい高い御恩は、小さい一生涯では、とても／＼御報いすることが出來ぬ。

弘仁十四年の二月二十八日、嵯峨天皇は内親王の奉仕される賀茂の齋院に行幸あらせられ、

文人等に「春日山庄」の題を賜はつて、韻を探らしめられた。内親王はまだ十七歳のうらわかき御年であつたが、塘、光、行、蒼の韻を得て、やがて筆を灑して献せられたのが此の詩であつた。帝は嘆賞の餘り、直ちに三品を授けさせられ、同時に

忝以文章著邦家、　莫將榮樂負煙霞、　即今永抱幽貞意、　無事終須遣歲華、

の七絕を賜はつたと傳へてある。風趣、氣品、愛嬌に加ふるに當意即妙の技の御冴え、平安朝女詩人としての氣を吐くのみならず、まことに文章を將て邦家を著はすものといふべきであらう。

次ぎに皇朝に於いて始めて國花櫻を詠じたる文學として、斯界の耆老碩學賀陽豐年の一首を擧げる。

五言　詠櫻　陽豐年

早花春梢杪、　櫻樹乃舒榮。　獨抱後時歎、　還開仲節英。
風前香自遠、　日下色逾明。　試賦臨年夢、　仙齡幾箇迎。

この老碩學の詩は、一體に理に勝ち識に光る傾きがあつて、情趣の魅力に乏しい憾みがある此の作にもその嫌ひはあるが、しかしながら、葉の無き梢の尖頭に雲の如く榮光の花群を着け、春の魁の梅には後れるが、仲春艶陽の中央部を占領し、風に誘はれては花吹雪に空を曇ら

して遠く幽香を傳へ、日の下には赫耀として眩しいばかりの輝きを見せる、といふ類ひの觀察は、ほゞ櫻花の誇るべき特色を數へ得て面白いと思ふ。平城天皇にも櫻花の御製があり、而も『凌雲集』の卷頭を飾つてゐるので、世間多くは此の御製を以て櫻花を詠吟した最初の試みとしてゐるが、しかしながら、豐年は奈良朝にその生涯の三分二を送つて『凌雲集』成立の前年に歿した老大家であり、齢に於いて二十四歳先んじ奉つてゐるところを見ると、先づ櫻花詩先頭の名譽を此の老詩人に與ふべきであらう。平城天皇の御製は次ぎの通りである。

賦櫻花

昔任幽岩下。光華照四方。忽逢攀折客。含笑亙三陽。
送氣時多少。乘陰復短長。如何此一物。擅美九春場。

四

王朝詩壇の逸話は概ね白樂天を中心として彼等が憧憬歡喜の心の影を見せたものである。或る者は白氏の句を取り入れた。或る者は白氏の調子を眞似た。或る者は白氏の句

藤原行成書　白樂天の詩

との暗合を悦んだ。若し趣致の近似を狙つて、部分的に多少の優越を認めらるゝことがあれば、作者はもとより、詞壇の全部が、共喜びして、天にも登る心地をした。たとひ特別に崇拜して苦心の模倣を試みぬまでも、當時の詞人にして、白氏に對し、仰望的關心をもたぬものは一人もなかつたであらう。無論白氏につれて元稹も悦ばれ、他の詩人の作も顧みられないではなかつたが、それは白氏のシテ役に對するほんのツレ、トモたるに過ぎなかつたことは、『倭漢朗詠集』が和漢の詞人約八十人の雅句約五百八十九句を有する中に、白氏一人の句が百三十七鎖の多きに上つてゐることを見ても知られるであらう。

此の種の逸話はいろ〳〵の書物に於いていろ〳〵に傳へられてゐるが、粹を拔いて、簡潔に集合的に書き傳へたのは、恐らく大江匡房の談話を記し留めた『江談抄』であらう。左に試みに『抄』の語る二三を記して見る。

嵯峨天皇が或る時河陽館に幸して作らせられた御製の一首の中に、

閉閣唯聞朝暮鼓、登樓遙望往來船。

の二句があつた。帝は御心あつて、小野篁を召して、之れを示させられると、篁は拜吟して、やがて畏つて、「御製まことに結構で御座りまするが、恐れながら「遙」の一字を「空」と改めさせらるれば、更に上もなく立派になるで御座りませう」と奏上げた。帝はびツくり遊ばされて、「えらいな。此の句は、實は白氏の句で、それを以て、一つ其方を試して見たのだが、「遙」の字はもと「空」とあつたのだ。其方の詩情はまるで樂天そのまゝであるぞ」と仰せられた。抑も此の逸話の次第は、當時渡來した『白氏文集』は、唯だ御所に祕藏されてゐる一部だけであつたが、帝は之れを叡覽あつて後に行幸があり、此の一聯を人知れず御製の中に取入れて、篁の才を試みさせられたのであつた。

當時篁の才名は唐土まで聞こえてゐた。そして樂天は篁が來唐の日を待ちこがれて、題望の詩までを作つてゐたと云はれる。また時代の潮流が同じ詩想を、海を隔てた此の二才

人の心に吹き込んだのでもあらう。篁が知らずに作つた名句が三つまで樂天の作と符節を合はせたことが、文集渡來後に發見されたといふので、彼れは更に一代の珍重するところとなつた。それは、篁の

紫塵嫩蕨人拳手。碧玉寒蘆錐脫囊。

といふのが、樂天の

野蕨人拳手。江蘆錐脫囊。

に酷似してゐるといふ類ひであつたが、これを見ても、當時の詩境がいかに白氏を仰いで師とし、理想とし、時としては競爭の目標としたかが察せられるであらう

都良香（一五〇四―一五三九）も白氏の流れを汲んだ名匠で、その名句はしば〳〵鬼神の嘆賞を博したと傳へられた。

氣霽風梳新柳髮。氷消浪洗舊苔鬚。

の一聯は、彼れの最も得意とした句であるが、彼れがある夜馬上に月光を浴びつゝ、羅城門を過ぎて、此の句を朗誦すると、樓上に鬼神の聲がして、

阿波禮々々々

と歎稱したといはれる。彼れはまた晩夏の一日、竹生嶋に詣でて

三千世界眼前盡、

の前聯を得たが、後聯を浮かべかねて、うつゝの氣分になつてゐると、虛空に聲あつて、島の主の辨財天が、

十二因緣心裏空。

と教へ示されたと傳へられた。

菅公の像（法隆寺藏）

我等は最後に菅公の數首を擧げねばならぬ。公は特に深く樂天を愛して屢々換骨奪胎の妙技を試み、渤海の國使裴頲をしては、白樂天の如しと舌を卷かしめ、延喜の帝からは「白樣に優る」と稱へられ、而して『大鏡』の作者をしては、『後集』の中なる「不出門」の前聯

都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲。

について、「白居易の遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峰雪撥簾看といふ詩にもまさざまに作ら

しめ給へりとぞ、昔の博士どもは申しけれ」と嘆ぜしめた、

「菅家後集」は、公が薨ずる前に、一卷に纏めて、紀長谷雄に送つたもので、一名を「西府新詩」と云つた。恐らく菅公自身の命名であらう。その冒頭に「自詠」と題して左の五絶が載せてある。

離家三四月。落涙百千行。萬事皆如夢。時々仰彼蒼。

昌泰四年正月二十五日に流されたとあるから、是れは多分同じ年の四五月頃配所に着いて、やうやく落着かれた時分の作であらう。簡素無類、有る事を有る通りに書いただけであるが、悲涼の味は甚深無量で、此の二十字、實に全卷三十八首の序であり、總論であり、同時に總攝的素描であるかの觀がある。

第二に載せてあるのは「詠樂天北窓三友詩」と題した七言の古體である。「結宇雖疎戸牖宜、自然屋有北窓在」、わが配所の家にも、白氏のと同じく北の窓がある。白氏が謂はゆる北窓三友の琴と酒と詩とは、樂天に取つては一生の樂みであつたが、今の我が身には一生の悲みであるといふ事を歌つたものであるが、その後半部が配流行の寫實で、景情共にそのまゝに描かれてゐる。

……自從勅使駈將去。父子一時五處離。口不能言眼中血。俯仰天神與地祇。

東行西行雲眇々。二月三月日遲々。重關警固知聞斷。單寢辛酸夢見稀。
山河邈矣隨行隔。風景黯然在路移。平到謫所誰與食。生及秋風定無衣。
古之三友一生樂。今之三友一生悲。古不同今今異古。一悲一樂志所之。

何といふ切なる悲みの、何といふ美しき表現であらう。傷るに近き哀みが、忠惻の情に包まれて、幽暗の裡に寂光を見せたる此の貴さを何に譬へよう。一時を得たる右大臣一家の團欒が、勅使の慌しき往來に引立てられ、引き分けられて、子女二十三人の大家族が、瞬く中に、遠い五個所に離れ／＼になる。俄かの驚きに物も言はれず、眼は血走つて、仰ぎつ俯しつ、天地の神々に訴ふるばかり。それから筑紫までの三百里、野路山路を、東に西に引き廻されては、行く手の雲路の渺々と、遠いこと／＼。時は二月彌生、この春の盛りの長閑な行樂の一日々々を、固め嚴しき關所々々を護送されて、家の音信は更に聞かれず、さびしい獨寢の眠りを成さぬに、そも何の夢をか結ばう。遙かに望む、行く手の山川は、進むにつれて、片端から後ろに遠ざかり、美しい景色も喪服をつけたやうに暗い色を帶びて、長い道中、後ろへ／＼と過ぎては移つて行く。かやうな身の上を、たとひ無事に配所に着いたとて、誰れを相手に心よく箸か取られようぞ。命つれなくもし秋までも存へたら、顧みる人なき身のもう着る衣もなくなるに相違ない」。涙なしに譯することも出來ぬ哀切の情であるが、同時にそれがつゝましい、

柔かい、氣品の高い言葉に包まれて、何とも云はれぬ奥床しい味を見せてゐるではないか。

この中、

　東行西行雲眇々。二月三月日遲々。

この白氏ぶりの一聯は、後年公の家人が北野に詣でて、訓み方の神教を乞ふと、

トザマニ行キ、カウザマニ行キ、雲ハル〴〵、キサラギ、ヤヨヒ、日ウラ〳〵

配所の菅公

と讀むべしといふ天神の御夢想があつたといふ、名高い傳説に纏はれて、廣く世に知られた句であるが、多くの人は孤立的に此の句を見て、春風駘蕩の長き日を、花に眺め遊繇に導かれて浮かれ遊ぶ三春の行樂の叙述のやうにも思ふであらうが、まことは天上の業華から奈落に直下した流され人の檻車に搖られて左遷の道を辿り行く心境を婉曲に美化した描寫なのである。

菅公の作、殊に後集には、概してこの奥床しい趣致が見えるが、公の作の至味の一面は、恐らくこゝにあるのであらう。公の作の白氏に似た事は改めていふ迄もないが、同時に元稹の體に似たとも云はれ、また公自身温庭筠の詩體の優長を賞でたとも云はれた。まことに詩人としての公の目標はこれら中唐の諸名家にあつたので、白氏元氏はその最も主要なる憧憬であつた

北野緣起繪詞

氏元氏の輕軟味、温柔味、曲折味、及び俗情美化の洒落味を得たるが上に、その日本人的人格と修養と境遇とによつて、一種獨特の高雅悲痛なる持味を加へられた。この故に、公の詩に於いては、謂はゆる白俗元輕は手段として蹈まへられ、面白く止揚されて、その輕柔曲妙なる字句あしらひの間に、敦厚忠悃の氣風を帶びた哀い悲劇を味はへることが出來るのである。『江談抄』は公の詩について、「白氏よりは猶勝りて作らる」「菅

家の御作は心の及ぶ所に非ず二菅家の御草は龜甲を削りて其の上に縲鏤を加ふるが如し、心力の及ぶ所に非ず」などいふいろ〳〵の批評を擧げてゐるが、その中に、「文集白氏は眼及ぶ、菅家の御作は眼及ばず」といひ、而してその理由について、「其の時代により、其の文章により、人に依る、殊に幽玄の道あるか」と言つてゐるのは、一種の道理ある意見である。

おもふに元稹、白樂天を卑しんで「元輕白俗」といふのは、一面の道理ではあるが、公平正當なる批評ではない。蓋し盛唐の李太白、杜子美は皇朝上代の人麿、憶良である。中唐の白樂天、元稹は我が王朝中世の業平、遍昭である。而して「元輕白俗」の評は、たとへば貫之が『古今』の序に、「今の世の中色につき、人の心花になりにけるより、あだなる歌、はかなきことのみ出づ」と云つた類ひであらう。とにかく平安朝には、和歌の道に於いても、萬葉式の丈夫風が行はれずして、六歌仙式のたをやめ風が行はれたやうに、詩道の方面に於いても李杜の雄渾な風格が悅ばれずして、白氏元氏の色につき、花になつた輕軟溫柔の味が悅ばれた。而して済々たる多數が相率ゐて、彼等を模倣し、彼等に攀緣して及ばざるを歎いてゐる間に、此の公が彼等に學びつゝ、遂によく雁行し、一面に於いて凌駕するに至つたのは、我が漢詩界の誇りとすべきである。

もう一つ、こゝに挿んで言ひたいのは、菅公の詩に於ける國風の訓み方の味である。公の

詩を公自身が、どう讀んだかは、今から確かには斷言り難いことであるが、前の「東行西行路眇々」の傳說や、「不出門」の前聯が『朗詠集』に於いて「都府樓はわづかに瓦の色を看る、觀音寺は只だ鐘の聲を聽く」と讀まれたことや、「春娃無氣力」の序の一部なる「羅綺之爲重衣、妬無情於機婦、管絃之在長曲、怒不闋於伶人」を、同じく朗詠で、

羅綺の重衣たるは、情なきことを機婦に妬む、管絃の長曲にある闋へざることを伶人に怒る。

と讀ませ、而して、此の朗詠をする人をば、毎日三たび天翔つて來て守らうと、北野天神が誓はれたといふ傳說のあることを考へ、或は「代月答」の結句の「唯是西行不左遷」を『源氏物語』に「たゞ是れ西に行くなり」と讀ませてあることなどを考へ合はせると、菅公は恐らく詩の倭讀について淺からぬ關心を持たれたのであらう。殊に自作の詩に對しては、その國ぶりの訓讀に甚深の工夫を試みられたので、その注意工夫は、當時の音博士が唐音さながらに讀み操らうとした苦心以上であつたであらうと思はれる。無論かういふ事は悠久なる歷史の進みの間に、人知れず胚胎し、發生し、進步し、完成の域に達するのではあるが、始めて遣唐使の廢止を奏請した菅公、始めて和魂漢才を說いたと云はれる菅公、而してその思想閱歷に多分の日本精神の要素を具し、和歌をも善くしつゝ、漢詩文に於いても、豐かな和樣の

色彩を見せた菅公に於いて、此の漢詩和訓の大成者を見出だすのは道理のあることで、而して若し此の運動を、純粹國文學の發達に對する輕からざる刺戟、もしくは助勢要素といふべくは、菅公の文動の一面を此の點に見出だすのも、決して不當ではないと考へる。

五

次ぎに舉げたいと思ふのは九月十五日作と日附して「秋夜」と題した七律である。

黄萎顏色白霜頭。況復千餘里外投。昔被榮花簪組縛。今爲敗謫草萊囚。月光似鏡無明罪。風氣如刀不破愁。隨見隨聞皆慘慄。此秋獨作我身秋。

同じく繫縛にかゝつてゐるのではあるが、昔は榮花の境遇、髮挿組紐の禮裝に縛られ、今は敗殘の流され人となつて、崔蓬の草叢に押籠められてゐるのだ。鏡に似たる明月も我がために無實を明らかにしてはくれず、刀の如き寒風も、胸の中の愁を切り去つてはくれぬ。見るもの聞くもの、みな痛ましく肌にしむものばかり、今年の秋は、嗚呼々々我れ一人のための秋となつたのか—などは、言々句々の悲痛、魂の底を搖り動かされずには讀まれぬ作であるが、それでゐて取り亂さぬ忍耐と溫情と品位とが、根柢から覗いてゐて、奥床しい落着を與へて

北野神社菅公神影

ゐる所がある。

『後集』の他の詩の中には「讀家書」と題して、淋しく待ちこがるゝこと三月餘りにして、やうやく風の便りに吹き寄せられた一封の家信、その中には、

西門樹被人移去。　北地園教客寄居。……不言妻子飢寒苦。……

―西の門外の樹木は、もう買ひ取られて移植された、北側の庭園をば、もう餘所の居候が占領して住んでゐる、等々と並べ記して報じてはあるが、心に懸かる妻子の身の上については、唯だの一言も知らしてゐない」と歌つてゐるのがある。『白微霰』と題しては、眞白な米の如く、龍の頷の珠の如く、念佛僧は佛舍利とも思ふであらう、醫者や道士は銀光りする丸藥とも間違ふであらう。　ハテ！　と袖の上に拾ひ取つて、つくづく見ると、まさしく水で、すぐに干て了ふのだが、さて我が目から降る涙は、乾く期がない。

袖中收拾慇懃見。　應是爲水涙未乾。

といふ、幼い疑ひに限りなき悲みを見せたのがある。　或は「雨夜」と題して、心寒雨亦寒、不眠夜不短……此の雨、農夫は豐かに降るのを喜んでゐるが、流人の我れには大不平、その不平憤懣に胸腹の結ぼほれる苦しさに、

起飲茶一椀。　飲了未消磨。　燒石溫胃管。　此治遂無驗。　强傾酒半盞。

といふ如き、哀切の情の人を打つものがある。前にも擧げた「代月答」は「源氏物語」が須磨の卷で、之れに寄せて光源氏の心境を語らしめてゐるものであるが、

蓂發桂芳半且圓、三千世界一周天。
天迴玄鑒雲將霽、唯是西行不左遷。

太宰府都府樓の址

これは「問秋月」と題して、公が月に向つて「お前が浮雲に蔽はれつゝ、西に向つて流れ行くのは、どうしたことか」と尋ねたのに對し、月が答へて「わたしの雲はすぐに霽れよう。わたしは唯だ定められた軌道に從つて西へ〳〵と運行するばかり、左遷ではありませんよ」と云つたといふのである。隨見隨聞皆慘慄！　何といふ美しい諦めの皮肉であらう。

菅公の詩の相と質とは、特に左遷後の新詩について見ると、まづかういふ風のものであつた。公の詩は、詩としての技巧のみから見れば、或は當代の最高位を占めるものではないかも知れぬ。けれども、その表現に技巧があると共に誠實があり、氣品があり神彩があつて、其の上に人物と、境遇と、日本

的の意氣と、及び外面からの添加ではあるが、天下後世に仰がれ拜まるゝ神格とが相應調和したる點に於いて、此の人に斷界の中心第一座をさゝぐるのは、あながち不當の事ではあるまい。

因みにもう一つ言ひたい事がある。それは當時の日本人の手に成つた漢詩の藝術位についてである。吾等は、當時の大多數の詩人の作が、概ね先進國崇拜の餘りに成つた外國文藝の模倣であり、また實際國情とは遊離した同臭消閑の藝術であつて、大體に於いて民衆の生活を具象したものでもなく、また國民の根本精神の發露したものでもないことを知つてゐる。けれども日本人には、本來、我が固有性は固有性として立派に保有しつゝ、同時に何等の躊躇も、芥蔕も、遠慮も、僻みもなく、外國の善きものに傾倒する特性があつた。而して二重人格者が、兼具の第二人格を自由に働かせる如く、彼等はその兼具性の副作用を、自在に、眞面目に、勇猛に働かしつゝ、外國文化を巧みに模倣して遂に之れと雁行し、時としては本國の手本を凌駕して、非常に高級なる外國趣味の藝術品を創作した。是れは吾等が已に法隆寺その他の古寺院建築や、古佛像群に於いて見たところである。彼等は概して朝鮮支那に於ける同時代の藝術の寫しで、國民の心に深く根生し、廣く流行した實際國情とは不相關のものであつたであらう。而して出來の結果は大體彼等の原作と似寄りの物で、特に換骨奪胎乃

至日本化ともいふべき變化を認め難いものであつたであらう。けれども、たとひ一部上流の外國傾倒家が非國民的なる優越技能を發揮した結果の作品であるにせよ、また彼等の原作に比べて特に加ふる所が見出だされぬにせよ、とにかく一心直往の誠實により、一刀三禮の敬虔なる態度を以て、一つの生命ある作品を産出する以上は、之れを恥かしからぬ藝術と見るに於いて何等差支のある筈がなく、若しまた彼土の藝術とほゞ同じ性質のものを、原作以上に創作する者があつたならば、之れを世界の大藝術として國民の誇りとするに於いて何の躊躇をも要せぬことであらう。飛鳥奈良の建築や佛像には概して此の傾向があつたが、平安朝の漢詩文の彼土の詩文に對する關係も、恐らく之れと同一であらう。我が王朝の詩人等は『文選』『文集』に對して、常に一心頂禮の眞情をさゝげてゐた。而して不斷の精進の間に於いて先づ手本に近きものを生み、やがて匹敵するものを産み、往々にして彼等を凌駕するものを産み、稀には國風の添加による特色異彩の作品をも産出した。彼等の漢詩文に對する態度には、一面に於いては特殊階級に於ける消暇翫弄の氣味があつたが、同時に一面に於いては最大價値を詩に認め、人生の最大事として、全精神を之れに打込まうとする一心不亂の態度があつた。大江匡衡は『江吏部集』に於いて、

夫本朝詩國也。文章呂則主壽。……不欲登山、只案轡策于文峯之雲、不要臨水、只任舟

檝於詞江之浪。

と云つて居る。日の本を「一詩の國」とはをかしいが、匡衡は眞面目に此の通りに考へてゐたのであらう、而して他の王朝の詩人達も多くは無條件に之れに贊成したであらう。平安朝の漢詩漢文は、當代詩人の此の專一直往の心地から生れ出でたのであつた。そして其處から彼等の詩の生命が賦與せられたのであつた。『萬葉』の歌人は大切な和歌の序辭を漢文にして怪まなかつた。純粹國語主義の潔癖家紀貫之は、『古今集』の假名の序を作り、漢語を殆んど交へぬ『土佐日記』を誇りかに作りながら、同時に勅命による『新撰和歌』に純漢文の序を冠らせて怪しまなかつた。根本の我を失はずして、同時に他の善美に對しては傍目も振らずに打ち込んで、眞似て、手に入れて、屢々其の上を越す。慾深くして而も本末を誤らざる二元主義者よ、汝の名は日本人である。

平安朝の漢詩漢文は、日本人の有つ此の特殊性の所産であつたのである。

第六　漢文は何處へ行く

一

漢文は何處へ行く？　これは我が國の文學に取つて、王仁以來、「文選」以來の大きな問題であつた。而して平安朝の文學は之れに對して、多方面にして同時に、綜合的なる、見識ある、有効なる、而して轉んでも唯だは起きざる至妙の答案を與へた。

漢文の行方に關して、平安朝文學が、身を以て答へた答案が三つある

第一の答案は、正面から應じた眞面目なもので、示された手本を學んで何處まで行けるかを見せたものである　漢家の詞人を師とし、先輩とし、競爭者として、外國人たる後輩日本人が、同じ標準のともに記錄を爭つた結果の成績である　而して此の試驗に於いて吾等の祖先が、幾多の不利なる條件に拘束されて居るに拘らず、外國人として珍らしい程度の成績を舉げたことは、吾等が已に前章に於いて實證したところであるが、之れについて吾等が悦ぶべき事の第一は、國民の有する文學的兼具性の卓越を知つたことであつた。　第二は先進唐

士の最も高き姿の文學を我が國に移植した結果が、自然にその周圍に光被して、其隣接した同時代の國文學の調子を高め、奥行を深くし、變化を豐かならしめたことであつた。この第二の効果は『古今集』の序文を見、『源氏物語』を讀む者の直ちに頷く所であらう。王朝詩人の漢文學は、單なる支那風の模倣に終はつたとしても、決して無用の努力ではなかつた。それは國文學の上にも意味の深い好影響を及ぼしたと見らるべきだからである。

二

漢文は何處へ行く？　平安朝の漢文がこれに對して書いた第二の答案は、槪して力の足らなさに、横道に逸れた拙いものであつた。その作者の中には、或は、衆愚を勸化する爲めに、意識しながら、わざと調子を下げて讀者の數を貪つたのもあらう。或は、壯烈悲痛なる出來事に直面して、昂奮の餘り、穩正雅馴なる文字擇みをする餘裕がなかつたのもあらう。或は、當座の見聞を備忘し、昵近に對する敎訓を書くにあたつて、格式を正すよりは、むしろ禮容を徹して俗に碎けるのを便宜有効としたのもあらう。或は、爾汝の間に取りかはさるゝ目前應酬の尺牘などには、俚俗の味を加へた破格ぶりが、却つて親しさを見せ興味を添へると思

つたいもあらう。とにかく、いろ〳〵の事情と理由とにより、或は不能の悲しさから或は故意の好みから、低級とも、卑俗とも、反漢文式とも、和様混淆式ともいふべき調子の漢文が、いつの間にか本格正式の漢文と相並んで行はれるやうになつて來た。此の萌芽は已に本格漢文全盛の弘仁期から行はれてゐたやうに見える。無論嚴密にいへば俗様和様の漢文は已に奈良朝から行はれ、或は更に早く近江朝、飛鳥朝から行はれたとも見られるであらうが、一類一團の群列を成したものとしては、まづ弘仁頃から行はれ始めて、漸次に數量を加へ、程度を進めたと見るべきであらう。而して此の不純な、調子の低い、投げやりな、或は狂怪みた漢文が久しく行はれる中に、いつの間にか、本式の漢文の及ばぬ一種の趣致を具へ、他の眞似られぬ特別の體様を成しつゝ、或はそのまゝに磨きをかけられ、或は組織ある大作の一部に取り入れられて、立派な鎌倉期の軍記や、日記や、書翰文を成すやうになつたのは、文學史的に見て非常に興味のあることであつた。

三

我等は先づ弘仁十三年(一四八二)に成つたと云はれる、藥師寺の沙門景戒の作にかゝる

『日本靈異記』＝委しくは『日本國現報善惡靈異記』＝の一節を引くであらう。

无慈心而馬負重駄以現得惡報緣　第廿一

昔河內國有瓜販之人。名曰石別。過馬之力而負重荷。馬不往時、嗔恚推駈。馬負荷勞之、兩目出涙。賣瓜竟者、卽煞其馬。如是煞爲多遍。後石別自臨覗釜、兩目拔入於釜所煮。現報甚近。應信因果。雖見之畜生、而我過去父母、六道四生我所生處、故不可无慈悲也。

一讀、無學のものが嘗て推量に背いた漢文のやうにも見えるが、同じ作者が序文に於いて一乘智燭以照昏岐、通慈舟而濟溺類。難行苦行、名流遠國……匪呈善惡之狀、何以直於曲執而定是非。匪示因果之報、何由改於惡心而修善道乎―といふが如き本格の駢麗を立派に使ひこなして居るところを見ると、これは恐らく、讀者の易解の爲めにわざと格を下げた善巧方便の俗漢文であらう。或は平生使ひ馴れて居る說法口調などが、求めずして筆端に現はれたのでもあらう。また假名の流布した後ならば、無論假名に和らげるのであつたであらうが、假名なき世界の悲しさ、俗衆の救濟のために、出來るだけ俗流に步み寄つた漢文がこれであつたのであらうとも思はれる。しかしてこのわざと調子を落した低級の漢文が『今昔物語』の文章などの源流となり、延いては鎌倉文學の遠き先祖となつたことを思ふ

と、事物の推移變遷の因緣は實に不思議なるものである。

吾等は第二に「將門記」の一節を引きたいと思ふ『將門記』は平將門が叛亂の顚末を書いたもので、此の亂が平らぎて後四ヶ月目の天慶三年(一六〇〇)六月に出來たと云はれる。同じく和樣を帶びて調子の低下した破格の漢文ではあるが『靈異記』とはいたく趣を異にしてゐるのは一つは題材の相違のため一つは百餘年の歲月の隔たりいためであらう

將門諸將士を任官する圖

『將門記』には、

爰將門欲罷不能、擬進無由、然而勵身

秀郷草紙

勸據、爰及合戰矣　將門幸得順風、射矢如流、所中如案　扶等雖勵、終以負也　仍亡者數多存者已少、　以其四日始自野本、石田、大串、取木等之宅迄至與力之人々之小宅、皆悉燒巡〇〇〇〇〇〇遁火出者驚矢而還、入火中叫喚、　〇〇〇〇〇中、千年之貯伴於一時之炎

の如く、「勸據」（進み據りの意であらう）など漢文としては思ひ切つて卑俗なところがあるが、同時に讀み下し式に「如案」「始自」など漢文としては思ひ切つて卑俗なところがあるが、

書き改むれば、和文の一種となり、進一歩すれば鎌倉の軍記になりさうな部分がある　此の「記」の中、文句は不純ながら、最も壯烈で、言句の間から火を發するの概があり、讀む者をして身の毛の彌立つを覺えしむるのは將門が王城を建て百官を設けた旨の報を聞いて、京都の震駭する有樣を叙した一節であらう。

偃聞此言諸國上官如魚驚、如鳥飛、早上京洛……仍京官大驚、宮中騷動　于時本天皇請

十日之命於佛天、厥内屈名僧於七大寺、祭禮奠於八大明神詔曰、忝膺天位、幸纂鴻基、而將門濫惡爲力、欲奪國位者、昨聞此奏、今必欲來、早饗名神、停此邪悪、速仰佛力、拂彼賊難、乃本皇下位、攝二掌於額上、百官潔齋、千祈於仁祠、況復山々阿闍梨、修邪滅悪滅之法、社々神祇官、祭頓死頓滅之式、一七日之間、所燒之芥子七斛有餘、所供之祭料、五色幾也、悪鬼名號燒於火壇之中、賊人形像着於棘楓之下、五大力尊遣侍者於東土、八大尊官放神鏑於賊方、而間天神嚬蹙而謗賊類非分之望、地類呵嘖而憎悪王不便之念、

「本天皇」及び「本皇」は將門の「新皇」に對する「もとの」の意か、或は「本當の」の意であらう。「厥内」は「十日以内に」の意であらう　その他「偏に」といひ、「仍つて」といひ「者」といひ、「而間」といひ、繼目々々の接續語がまづ和樣俗樣で、此の和俗の空氣が延いて全文に漂つてゐるが、それでゐて、司馬遷、班固の筆致に倣つたのでは、とても此の活躍振は見せられまいと思はれるやうな旺盛なる氣力の漲り溢れて人に迫るのは、恐らく此の京洛を震撼した驚天動地の大騷擾を目のあたりに見、耳近く聞いた者が、その生々しい印象を、漢文式に精練する餘裕がなく、そのまゝ日本式、現代式に表現したからであらう。　これらの文句は一見いかにも迷信的誇張を蒲椒してゐるやうに見えるが、事實はこの奇怪なる早打に驚いた京都住民の實感であつたらしく『扶桑略記』などによると、或は將門の軍勢

天位之状、奏於太政官。自相摸国帰於下総。仍京官大
驚、宮中騒動。于時本天皇、請十日之命於佛天。厥内屈
名僧於七大寺、祭礼奠於八大明神。詔曰、忝膺天位、幸纂
鴻基。而将門濫悪為力、欲奪国位者。昨聞此奏、今必欲
来。早饗名神、停此邪悪。速仰佛力、拂彼賊難。乃本皇
下位、摂二掌於額上、百官潔齋、千祈於仁祠。况復山々
阿闍梨、修邪滅悪滅之法、社々神祇官、祭頓死頓滅之式。
一七日之間、所焼之芥子七斛有餘、所供之祭料五色幾。
悪鬼名号、焼於大壇之中、賊人形像、着於棘楓之下。
五大力尊、遣侍者於東土、八大尊官、放神鏑於賊方。

七日間に燒ける芥子七斛餘　（眞福寺本將門記）

が、もうすぐに京都に入ると騷ぎ、或は延暦寺調伏の壇上から鏑矢が東を指して飛び去つたといひ、或は將門が誅せらるゝ日には、護摩の煙がむせツぽく國内に充ち滿ちてゐたといふやうな、不思議の數々を擧げてゐる　とにかく九斛の護摩が寺々に焚かれて、咽せるやうな煙が京洛の空を蔽つてゐる間に、萬乘の大君は、御座を下り、掌を額にかざしつゝ、早々神佛に祈つて賊難を拂へと宣ひ、百官は精進潔齋して靈佛靈社の太前にぬかづき、阿闍梨、神祇官は逆賊退治の祈り祓ひに聲を涸らし身を揉んで丹誠を抽んで、祈られた神佛は競つて、てんでの使はしめを東方に飛ばしつゝ、喧々囂々と賊類の罪を數へる、といふ、此の君も臣も、僧も俗も、神も佛も、天も地も、競ひ立つて國難に殉じようとする、たとへば火山地震の暴威に直面したやうな空前絶後の光景は、恐らく此の漢文を、國語と俗語と佛語とで引掻き廻はしたやうな、雜糅式、亂闘式、混沌式で、而もその中に何とも云はれぬ威力を見せた文章でなければ現はされなかつたのであらう　而して惜しいかな名を逸した、恐らく佛門の筆達者であつたであらうと推測される作者は、野心に燃えた賊類の猛勢、鎭壓に奮ひ起つた將卒の勇戰、神人天地合力の奮闘等、言はゞ惡魔の蜂起に目を覺まして奮ひ起つた日本固有の善美なる諸精神の壯烈な活動振に興味を感じて、腦裏から迸り筆先から飛び出す火山彈式の粗野樸訥な言葉に其の表現を託したのであらう　彼れは此の作の最後に、亡魂の消息として、將門が在

世中に普顯した金光明經一部の功德により、一月に一時地獄の呵責を免るゝことを述べて信仰勸誘の趣意を明らかにしてゐるが、しかしながら彼れが此の書を作つた興味の大部分、殊に筆執つての興味は、武人の活動を中心とした大事件をめぐる日本の動きにあつたので此の題材と作者特有の嗜好と文章力とが相伴つて、此の不純にして壯烈なる漢文を成さしめたのであらうと思はれる。而して此の不純なる漢文が、後に「今昔物語」に新たな生命を吹き込まれて、幼稚ながら一種新樣の國文となり、更に鎌倉の軍記に磨かれて堂々たる名品となつたのは、前章に述べた純なる本格漢文の行方と相並んで、文學史上の愉快なる不思議の一つであると思ふのである。

四

吾等は第三に藤原師輔の筆に成つた「九條殿遺誡」の一節を引くであらう。師輔は藤原忠平の二郎、村上天皇の皇后安子の父で、藤原氏の嫡流である。時代は少し下るが、内容連絡の便宜によつて、こゝに記したいと思ふ。

夙興、照鏡先窺形體變、次見曆書可知日之吉凶、年中行事、略注付件曆、每日視之。

次先知其事、兼以用意。又昨日公事若私不得心事等、爲備忽忘、又聊可注付件曆。但其中要樞公事、及君父所在事等、別以記之可備後鑒。凡爲君必盡忠貞之心、爲親必竭孝敬之誠、恭兄如父、愛弟如子。公私大小之事、必以一心同志、纖芥勿隔。……凡不可大怒。勘人之事、心中雖怒、思勿出口。常以恭謹可爲例事。喜怒之心敢無過餘、以一日之行事、爲萬年之鑑誡。凡在宅之間、若道若俗、所來之客、縱在梳頭飲食之間、必早可相遇也。捉髮吐哺之誡、大賢之所重也。

これは兒孫に對する親愛の情を、何となくくつろいだ詞に現はさうとしたので、立派な漢文を書かうと努めた結果ではあるまい。同時に和文が立派に成立つてゐる時代に於いて、四角な文字のみを揃へたところを見ると、やはり漢文のつもりで書いたのであらうと思はれる。要するに漢文を書くつもりと裝はざる感情を手早く現はしたい希望とが協調して墮落とも見え、和樣化とも思はれる、此の樣な漢文が出來たので、これがまた新しい國文を成す一つの準備とも階梯ともなつたのであつた。此の文體は一種の獨立した體式となり、殆んどそのまゝ、長く公卿達の日記などに用ゐられて明治維新の當時に及んだが、同時に他の純國文の上にも知らず〳〵の間に輕からぬ影響を與へて、殊に鎌倉文學大成の重要なる素地となつたのであつた。「兼ねて以て用意せよ」「心中に怒り思ふと雖も口に出だすこと勿れ」、

例の事と爲すべし」必ず早く相遇ふべき也」といふが如きは、生化粧式なる駢麗の古典語に對すると、まるで素描の只言ともいふべきもので、日本人のみに解るお茶漬さら／＼い味があり、それが容態ぶつた漢文熟語の間に挾まりつゝ、彼等の凝りを揉みほごして、邦人に親しみを感じさせたのは、一種の進歩とも見るべく、邦人が機轉の舵に操られた漢文の行方は、實に面白いものであつた。

吾等は最後に本朝往來物の最初と云はるゝ『雲州消息』の一章を引くであらう。『雲州消息』は出雲守藤原明衡の作で『明衡往來』とも稱せらるゝものである。時代は更に下つて後冷泉天皇の康平元年(一七一八)頃に出來たものと云はれるが、類緣の便宜によつてここに引くのである

右久不申案内之間、欝念尤深之處、幸被通鴈書、開蒙霧仰青天耳。抑花春運心於吉野山、月秋懸思於遍昭寺者、常事也。而時屬仲秋之夕、處當明地之砌、遊興何可默止乎。彼左金吾、藤少將等、歌仙也、伶人也。就中貴下才能過人、好色有聞、可謂席上之珍歟。無能只下官一人也。而所募者勸盃役也。旨酒一樽、景物少々、相具可企推參侍。乞莫成厭却。謹言。

「候文」の原始的形式を見るべきものであるが、性質傾向は大體前の『九條殿遺誡』と同じく、駢麗式の立派な漢文の間に、時代の流行語などを交へつゝ、入魂のくつろぎを見せたものである　從つて本格の漢文から見れば、一種の墮落であり横逸れでもあるが、その和樣化、俗化の間に漢文の企て及ばぬ一種の柔らかな親愛味があつて、見樣によつては一種の進歩であり、同時に鎌倉文學に對して大成の一要素を提供したものであつた　此の往來の他のところには「依無指事久不出仕」「彼是之間進退不定也」「明日可參内侍(一字を取替へて「可參内候」といへば、もう鎌倉で、「候文」はすぐ眼前の一歩である。)同「令參會給」「近曾有如怪異事、卜筮所告、不快」などいふのがある。　漢字だけを用ゐて、本格の漢文味をこれまでに離れ、國語の味をこれだけ添加することが出來たのは、漢字漢語を使ひこなす手腕のみから見ても、大和民族の有つ文章力の誇りであるが、これが更に鎌倉文學の大成に一味の要素を貢いだことを考へると、かやうな用達本意、洒落まじりの横逸漢文にも、重要な二重の意義を認めねばならぬであらう

五

平安朝に於ける漢文の行方の第三は、日本趣味への歸化であつた。文字の排列はそのまゝながら訓方に於いて、支那的に死んで日本的に生れかはることであつた。言ひ換へると、時樣の語調に醇化されて國文の中に沒入することであつた。王朝文人の有つ强烈なる消化液に逢つて、角をたふされ、鋒を取られることであつた。更に適切にいふと、漢文の尤者をそのまゝ訓讀的に日本化して國文學を肥すことであつた。小泉八雲はその名篇「じゆうじゆつ」に於いて、「柔術は敵の力を用ゐて敵をたふすものである。日本人はこの柔術の手を以て外國の文化を取り入れた。而して彼等は外國の文化を、巧みに我が物にしてしまふが、自分の爲めにならぬものを、決して取り入れることがない」と云つてゐるが、我が王朝の文人はまさしく此の柔術の手を以て、漢文を懷柔し、馴致したのである。而してその手際のうまさの爲めに、四角ばつた漢文が、そのまゝ日本式、平安朝式に撓め直されて、一種の王朝式和樣をなし、之れによつて時文の姿態を豐富にし、面白くし、興深くしたのである。

漢文の懷柔馴致は一種の飜譯である。しかしながら平安朝に於ける漢文飜譯は普通の意味に謂はゆる飜譯ではなかつた。彼國の文章に追隨する國語の置換でもなく、彼我對等に應對したる同義の移植でもなくして、自在に彼れを擒縱し、ほしいまゝに換質し換位して往々はその氣分精神をすらも寫しかへる極端な自主外交式の飜譯であつた。その結果は

自然に彼れの多様を我が一様に單純化する弊もあつて剛柔の變化のある漢文が優雅一方の國文に育てかへられる傾きもあつたが、とにかく漢文に對する王朝詞人の自主的消化力の强さは驚くべきもので、漢文を崇拜しながら、一方に於いてその崇拜する漢文を叩きのめし、矯め直して、すつかり國風化せしめたのは、一種の痛快な手柄で、之れによつて當時の國文學の趣致を豐かにし深くしたのは、更に重大なる功績とすべきものであつた。

讀者は、『日本紀』に於いて「運屬鴻荒時鍾草昧一」が、

よ、あらきにあひ、時くらきにあたれり。

と讀まれ、「郊祀天神申大孝一」が、

天つ神をまつりて、親にしたがふことをのべ給ふ

と讀まれたことを知られるであらう。『論語』の

子曰、不憤不啓、不悱不發、擧一隅不以三隅反、則不復也。

が

子ノタマハク、憤セザレバケイセズ、悱セザレバ發セズ、一隅ヲ擧ゲテ、三隅ヲ以テ反セザレバ、則チ復セザルナリ

と讀まれたことを知られるであらう。また『日本外史』の

正成感激對曰、天誅乘時、何賊不斃。東夷有勇無智、但覆勞宸慮。乃拜辭還、

が、此の通りに音讀され訓讀されたことを知られるであらう　而して是等に對して菅公い

「東行西行雲眇々、二月三月日遲々」が、前にも述べた如く、當時の詞人が熱慮祈願の結果、

　とざまに行き、かうざまに行き、雲はるばる、きさらぎ、やよひ、日うらうら

と讀まれたことを考へると、當時の文人が、詩を尊びながら、同時にその詩の國語訓を、日本的にし、王朝的にし、同時に藝術的にすることに對して、如何に深き關心を持つてゐたか、而してその深き關心の結果が、謂はゆる飜譯以上に出でて、藝術的創作の領分に斬り込んでゐたかを看取されるであらう、　同時に『日本紀』や『論語』や『日本外史』の訓は、漢文に取り縋つた及び腰の譯か、文字そのまゝの宛てがひ讀みか、乃至出ず入らずに彼れの意義を現はす對等關係の直譯かであるのに對して、「東行西行」の「とざまかうざま」は、彼れを支配して、すつかり美しい日本文に換骨奪胎したものであることを感ぜられるであらう　かやうな懷柔馴致は恐らく平安奠都の初めに近い時分から試みられたのであらうが、その著しく現はれたのは、不思議にも漢文全盛期なる弘仁時代であつた。　傳說によると、學士藤原伊時が、『遊仙窟』の訓讀に熱心の餘り、木島の明神に參籠したが、その夢想に授かつた神傳が、今に傳へられてゐる此の最初に渡つた支那小說の讀み方であると云はれる　それは此の

小說の全篇にわたつて、極度の日本化、時代化、優美化を試みたもので例へば「雨邊」を「こなたかなた」と讀み、「料理」を「しつらふ」と讀み、「何爲」を「いかにすればか」「狂風」を「そぼれたる」と讀む類ひであるが、續いた文句では、

故々將織手時々弄小紋

を「ねたましがほに、細やかなる手をもて、よりより(〱)に、ほそき紋をかき鳴らす」と讀み

可憎病鵲、夜半驚人、薄媚狂鷄、三更唱曉

を、「あな憎のやもめがらすの、夜なかに人を驚かし、なさけなき浮かれどりの、まだあけざるにあかつきをとなふ」と讀む類ひで、極度の國風化が、ほとんど原文の見當もつかぬばかりに加へられたものであつた　この傍若無人な自己本位の飜譯が引きつゞき行はれて平安朝一ぱいに及んだのであるが、先づその精粹を集めたのが、藤原公任(一六二六―一七〇一)の『倭漢朗詠集』であらう。『朗詠集』の訓として今日に傳はるところが、當時一般に行はれた讀み方で、公任の勝手な案出でない事は、『源氏物語』『枕の草子』などに時々顏を出す朗詠の句が、ほゞ同樣に誦せられてゐるのを見ても推察されるが、それは『遊仙窟』の訓と、ほぼ同じ調子のもので、それの更に優雅に洗煉されたものであつた。例へば、

鶯聲誘引來花下、草色拘留坐水邊(白樂天)

十月江南天氣好。可憐冬景似春花。（白樂天）
劉白若知今日好、應言此處不言何。（源順）
金谷醉花之地、花毎春匂而主不歸。南樓翫月之人、月與秋期而身何去。（菅原文時）

の類ひで、此の訓方がいかに漢文の角をたふし、癖を拔いて、國風國俗に馴致せしめたか、またかく形態に於いて日本化されたる異國趣味を加ふることによつて、國文が、いかに豐富なる變化と深邃味とを加へたかは、特に説明を要せぬことであらう。

當時の散文文學も、漢文に對して、やはり同樣の態度を取つた、そして異國式の角をたふして、純國語に調子を合はせしめつゝ、一種の變化と奥行とを加へた。源氏物語の如きはその方面の代表的妙技を見せたものである　例へば「帚木」の品定めに、白樂天が「聽我歌兩途」」を譯して

わがふたつのみちうたふを聞けとなむ聞こえごち侍りしかど……

といへるが如きは、漢文の飜譯めいた跡形を、すつかり拂拭し去つた名國譯で、大抵の讀者には引用文とも思はれぬばかりに日本化し、同時に王朝化したものである　もし「兩途を」と譯し、或は「ふたつのみちをうたふ」と云つたならば、此の「を」の一字が、直ちに漢文臭を發散して、調子の純一を害ふべきことを思ふと、吾等は當時の文人達が漢文國譯の微妙な

意識に感ぜざるを得ぬのである。「須磨」の卷で、同じ白氏の「醉悲灑淚春盃裏」を

御土器まゐりて、醉ひの悲み淚そゝぐ春の盃のうちと、諸聲に誦じ給ふ。

と譯したのなども、やまと詞の巧みな使ひぶりは暫らく措いて、「淚をそゝぐ」と云はぬだけでも、時代振として見上げた譯筆と云はねばならぬ。その他前にも擧げた菅公の「唯是西行不左遷」を、同じく「須磨」の卷で、

たゞこれ西に行くなりと、ひとりごち給ひて……

と譯して居る如き、東屋で、源順が作の「楚王臺上夜琴聲」を

楚王の臺の上の夜の琴のこゑ

と、「の」を連發して、思ひ切つて、暢びやかに譯してゐる如き、或は「手習」で、白氏の「松門到曉月徘徊」を、意味は取違へてゐるかも知れぬが、大膽に「松門に曉いたりて月徘徊す」と譯してゐる如き、いづれも敵の骨を拔いて我れに同化せしめ、而して歸化したる異國文をして國文に奉仕せしむる此の時代の特異なる流風を說明してゐるものである。殊に「須磨」に於ける源氏の侘住居を寫すに、樂天が香爐峰山居の句「石階松桂竹編墻」を、そのまま風流に柔らげ、同時に用語の前後を換位して、

竹あめる墻しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものから、珍らかにをかし

と言ひなしたるが如きは、換骨的飜譯及びその利用の妙を極めたものといふべきであらう

かう列擧し、説明して、さて振り返つて考へると、唐土の文學は、いかにも皇朝の文學に奉仕せんが爲めに、遙々と渡來したかのやうに見える。彼れは先づ我が國民の卓越したる民性と模倣性と創造力とに迎へられて、本土の名作に劣らざる多くの名作をこの東海の島國に産み出だした。而してそれは多く漢文として優れた存在であるのみならず、同時に假名を加へて讀み下すことによつて、雄健なる一種の國文學となるべきものであつた。彼れは第二に、漢文支配力の不足したる作家、或は活き〳〵したる思想を、事實本位、自己本位に表現するに急にして、字句の精練を意とせざる作家、或は遊戯洒落の性に富み、漢文を蔑んで自ら快しとする作家等の筆に宿つては、著しく和臭を帶びた漢文―本格の漢文に比べて一種の墮落とも見られるが、同時に横ぞれの和臭に本格漢文の及ばぬ特異の趣と魂とを具へた漢文を産み出だした。而してそれは、それ自身一種の特色ある文學を成すと共に、やがて起こるべき新しい大國文の準備的要素として非常に力あるものであつた。

彼れが第三に出會はしたのは、自己を主として他を從とする手剛い國粹の魂であつた。その魂は單に手剛いのみならず、自家の大成に役立つものは敵の力をも利用しようとする

柔術的の性質を具へてゐた。而して、一方に於いては我が國語國文を尊重して、その方面の一流でありながら、鎖國式の己惚には陥らず、他の一方に於いては外國の文學を尊重しながら、我れに同化した上でなければ、その仲間入りを許さぬといふ堅固なる意志を持つてゐた。興福寺の歌僧等が、漢學佛教に通じてゐながら、一、此の國の本つ詞に逐ひ倚りて唐の詞を假らず、書き記す博士雇はず一と高唱し、かゝ、高唱しつゝ人知れず漢文の知識を豐富に取り入れてゐることは、吾等の已に知るところである。紀貫之が「土佐日記」の中に、都に歸る送別の宴の席上で、和歌漢詩を朗吟したものがあつたと云つて、その中の和歌をば記しながら「詩こゝにはえあげず一＝この純粹なるやまと詞仕立の文學の中に、外國の詩を載せることは相成らん＝と云つて、漢詩の掲載を拒絕してゐること、而して賈島が名高い詩を

むかしの男は棹は穿つ波の上の月を、船は襲ふ海の中の天を、とはいひけむ

などと空とぼけては引きつゝ、漢文の要素を人知れず豐かに取り入れてゐることは、人の知る所であらう。當時の和歌國文の作家の中には、此の興福寺の法師や、貫之朝臣の流れを汲んで、漢文を尊びつゝ又自ら善くしつゝ、同時に和歌國文に關しては傲岸なる建前を把持して、和化せざる漢文要素の國文の關を跨ぐことを許さぬ者が少なからずあつたであらう
漢文漢詩に加へた優雅な換骨譯は、要するに此の魂の現はれの一面であつたのである　抑

も優雅艷麗は平安朝國文の肝心骨髓である。王朝の文人等が此の骨髓の一義に據つて唐土の文學を矯め直したのは、國文學から見て非常に痛快な事であるが、唐土の文學に取つても、一方に於いて、崇拜心醉の程度に歡び迎へられたことを思へば、一方に於いて、手剛い敵手の鉗鎚に逢つて、魄を入れ替へ、文籍を變へて隣邦文學の花となるのもまた一期の思出であつたであらう。

平安朝四百年に於ける漢文の「何處へ行く」それは國文學に取つて、決して不面目なものではなかつた、同時に漢文其物に取つても、決して行き榮えのないものではなかつた。

第七　竹取物語の先驅漢文小説

一

『源氏物語』の「繪合」の卷に記すところによつて、『竹取』を物語の出で來はじめの祖とすることは、今日に於いて殆んど國文學史上の常識となつてゐる。假名で書いた小説だけについては、恐らく此の常識の變はる時がないであらう。けれども漢文をも視野の中におけば、日本人の書いた小説は、已に『竹取』の遙か以前にもあつたやうに思はれる。

弘法大師が二十四歳の筆に成り、延暦十六年(一四五七)十二月一日の日附を持つ『聾瞽指歸』の序文に、左の一節がある。

復有唐國張文成、著散勞書。詞貫瓊玉、筆翔鸞鳳。但恨濫縱淫事、曾無雅詞。面卷舒紙、柳下興歎、臨文味句、桑門營動。本朝日雄人、述睡覺記。勝辯巧發、詭言雲敷。遙聞彼名、戸居之士拍掌大笑、僅對其字、噤啞之人張口擧聲。並雖先人之遺美、未足後誡之準的。

大體の意味は、

支那には張文成といふ才人があつて、「遊仙窟」といふ憂さ晴らしの書物を書いた。それは、詞のつゞきは珠を連ぬるが如く筆端には鳳凰が舞ひ翔る趣があるといふ稀有の名文であるが、但し惜しい事には、むやみに男女の卑猥を書き散らして、氣高い雅びた趣といふものが更に無く、本に向つて紙を繰ると、側にあぐら肌ぬぎの人がゐても氣にかけぬといふ柳下惠も、「どうも、これでは」と歎聲を洩らし、又文章に讀み入つて句を味はつて行くと、脫俗悟道の阿闍梨も、胸さわぎがして現心になるといふものである。之れに對して、本朝

弘法大師書

の日雄人は『睡覺記』といふものを述べて居るが、その優れた辯舌を巧みに揮つて、際どい洒落を連發する面白さは、作者の名を聞いただけで、苦蟲を噛みつぶした神樣代理の形代男も、「あゝ、あの人の作か！」と笑ひこけ、一寸紙を繰り始めると、物いはぬ唖も、大口を開いて叫びを揚げるといふものである。此の二作はいづれも古人先輩の遺した名篇文學ではあるが、しかしながら一つは淫猥、一つは滑稽で、とても後人を敎誡する文學の模範標準とするに足るものではない

集晉帖詩

日雄人及び、『睡覺記』に關し、此の序文以外の所傳を全く失つた今日に於いて、此の作の文學性を確定することは甚だ困難なることであるが、大師が之れを『遊仙窟』と並べて批評し、二つに對して同樣に甚深の興味を見出だしてゐるところを見ると、此の書の文學性は、王朝の謂はゆる物語、卽ち今日の小說に最も近きものであつたのであらう　更に此の書の

作者及び作について大膽なる推測を許さるゝならば、「日雄人」の名は、日下雄人といふ類ひの本名を、當時行はれた唐人紛ひの三字名に約したのであらう。或は唐の張文成等の向うを張つて、日本の雄者といふ見識を寓したのでもあらう。『睡覺記』は、恐らく睡氣ざましの滑稽物語といふ意であらう　また大師が、『遊仙窟』に「著」と云つたのに對して、『睡覺記』には「述」と云つて居るのを見ると――一つは同義をあらはす修辭の變化であらうけれども――此の作は、漢文ながら我が王朝の口語に近い味を持つてゐたものであらう。踏み込んで云へば、『古事記』や風土記、氏文などの如く、漢字を借りた國文であつたと推測されぬこともない。「勝辯」「詭言」は、後に「掌を拍つて大きに笑ひ」「口を張つて聲を擧ぐ」と云つて居るのを見ると、無論滑稽を面白く辯じ立て、際どい洒落や、鷺を烏と言ひ黑める類の機智的笑話を意味するのに相違なく、同時に苦蟲に笑はせ、唖人を噴き出させるといふ形容が、通俗人に親しみのある和臭の濃厚なる存在を暗示してゐるやうに思はれる。張文成と相並べて「先人」と云ひ、「遺美」と云つて居るのを見ると、作者は已に歿して居る文人で、奈良朝末期の人か、乃至平安奠都早々に歿した大師の先輩詞人であつたのであらう。「遺美」とあるからには立派な美しい文學であつたのであらう。『遊仙窟』と並べて記し、『聾瞽指歸』に對する先行の競争者としてゐるのを見ると、凡そ此の前後の二作に比すべき程

度の長篇であつたのであらう　かう綜合して來て、滑稽を連發する、和臭を帶びた、而して、『遊仙窟』にも對比すべき作といふ事を考へると、吾等は直ちに『竹取物語』に於ける五人の貴族達の滑稽な失敗物語を聯想し、貴族達對かぐや姫相互の詭辯的交渉などを聯想して、この『睡覺記』が、『竹取』の此の方面の粉本となつたものではないかと思ひ、少なくとも國文學に於ける此の種の滑稽文學の魁といふべきものであつたと考へるのである。

二

日雄人の『睡覺記』が一種の小說であることは、張文成の『遊仙窟』と並記されてゐることによつて推察されると共に、大師の作の『聾瞽指歸』との關係によつても想像される。『聾瞽指歸』は、後年改題して『三教指歸』と稱せられた。而して爾後專らこの新らしい名によつて世に知らるゝこととなつたが、『三教指歸』に於いては、本文は概ねもとのまゝながら、序文は殆んど全く改作され、殊に此の張文成、日雄人に關する部分は綺麗に削除されて居る。この題名の變改と序文の改作とに關する大師の意中は確かに知るべくもないが、新舊二つの序文の異同などによつて推察すると、大師は恐らく、前者の題號や序文に、靑年客

氣のほの見えるのを厭ひ、また文學本位の情熱の現はれ過ぎたのを嫌つて、此の變改を企てたのであらう。「聾瞽指歸」といふ語には、世間の目しひ、つんぼ等に人生の歸趨を教へてやるといふ驕慢めいた味がある　この驕慢味が、年を經て老成し圭角の除れて來た大師には、一種の厭味を感ぜしめたので、之れに對して、「三教指歸」には、儒老佛の三教に對する所見を述べて、人生の歸趨に關する我が信念を語るといふ意味を穩かに表現する老實な品位があると考へ、唐土の敎友の忠言などに從つて、此の素直な標題に改めたのであらう　張文成、日雄人の記事も同じことで、情慾描寫の艶詞を讀むと、脫俗の僧侶もそゞろ心地になるなどいふ文句は、本文中の人物の詞としてならばともかく、自家の序文としては、風敎に介意せぬ駈け出し文士の氣焰のやうで、いかにも青々しいと思はれて來たので、「三敎指歸」の方では、すつかり調子を變へて、「文の起こる必ず由あり、人の憤りを寫す、何ぞ志を言はざらん」余年志學にして叔父に學び、大聖の言を信じて、或は阿波の大瀧嶽に登り、或は土佐の室戸崎に籠つて難行した、而してその得る所の結果を、五人の人物に寓せて、人生の歸趨を寫し出だした。「名づけて三敎指歸と曰ふ、　唯だ憤懣の逸氣を寫せるのみ、誰れか他家の披覽を望まん」などと、立派に禮裝した文句を並べたのであらう　「聾瞽」に於いて華麗、誇張の若々しさを好んだ大師が、『三敎』に於いて穩正の老實味を見せて來たことは、「聾瞽」に

于時平朝御宇聖帝瑞號延暦十六年窮月始日。

とある、此の序文の最終の句が、『三教』には、

于時延暦十六年臘月之一日也

となつてゐるのを見ても察知される。

けれども大師に改善と思はれた是等の變改は、此の作の内容から見れば、いづれも木に竹を接いだものであつた。本來『聾瞽指歸』は宗教的意識を以てよりは、寧ろ文學的意識を以て書かれたものである。小説家の氣分で書かれたといふ方が、寧ろ一層適當であらう。それ故にこそ、多くの唐土本朝の文學の中から、比較の對象として特に艷情、滑稽を本領とした張文成、日雄人の作を擧げ、而して自分は彼等が淫猥滑稽を寫したのに對し、遙かに其の上に出でて、後誡の準的となるものを創作したといふ意氣を見せたのであらう。また『聾瞽』の方では、その序の最後に近き部分に於いて

仰冀、若有握卷解綺之人、先砥斤斧、破弃瓦礫、而紙瞻文之士、宿韞蘭蓀、必代華秀。

とは云つたのであらう。「解綺之人」「瞻文之士」は、文章のあやが解り、文學の妙味を鑑賞する人の意で、要するにさういふ人は、何よりも先づ、我が文章から瓦礫雜草のやうな拙い部分を削除して趣味の高い名文句と置き代へて下さいといふのである。文學本位に考へて筆

を執らぬ者が、何を好んで此の種の書を爲さう　また其の人物の名を虚構の鳥有氏に見せて「鼈毛」「兎角」「蛭牙」などと云つたのも、一つは先例に倣つた試みではあらうが、これも小說家の氣分で書いた一つの證據ともいふことが出來るであらう　而して斯う見て來ると、此の作の名は須らく文學的創作らしく『聾瞽指歸』とあるべきで、「三教」などいふ宗教的論文くさい機械的の名稱をもつべきではなかつた　而してまた大師がかやうな小說家の氣分をもち、競爭の對象として向うに廻したとすれば、『睡覺記』か小說であつたらしい事は、更に確實の度を加へるであらうと考へる。

三

『睡覺記』は國文と言ひ切ることが出來ぬと同樣に、漢文とも云ひ切ることの出來ぬものであるが、とにかく漢字で書かれた我が小說の元祖であつたであらう。之れに引き連ねて考へたいのは、『聾瞽指歸』も亦一種の小說であるといふことである

『聾瞽指歸』一卷、(三教指歸は三卷に分けてある)卷頭の目次には「鼈毛先生論」「虚亡隱士論」「假名乞兒論」「觀無常賦」「生死海賦」と、五篇より成立つらしく五行に並べてある

が、まことは(一)序　(二)龜毛先生の儒道論、(三)虛亡隱士の虛無論、(四)假名乞兒の佛教至上論の四段に分かれて、最後の佛教論の中に「觀無常賦」「生死海賦」及び全篇を約說した五言十韻の詩一首を含ましめたものである　概ね賦の體にして多分の佛典味、小說味を加へたものであるが、人物は兎角公、蛭牙公子、龜毛先生(三教指歸では龜毛先生、虛亡隱士及び假名乞兒の都合五人。　その中、假名乞兒が大師を擬裝せしめた第一のシテ役で、ツレの龜毛先生は儒教の代表者、虛亡隱士は道教の代表者、此の三人が主役で、兎角公、蛭牙公子はその相手のワキ役である。　五人の人物の名は兎の角、蛭の牙、龜の毛、虛にして亡し、假の名、すべて非實在の小說たることを暗示したものである　その大荒筋は左の通りで、最初に、

有龜毛先生、天資辯捷、面容魁悟。九經三史括囊心藏、三墳八索諳憶意府。三寸纔發殆樹榮華、一言僅陳、曝骸反宍。蘇秦晏平對此卷舌、張儀郭象遙瞻飲聲。偶就休暇之日、投兎角公之館、爰則肆筵設席、薦饌飛盞....

といふやうな文句がある。　抄譯すると

龜毛先生といふ人ありけり。　人品骨柄他にすぐれ、智慧明らかに、辯舌爽かにして、古今の名著大作、一つとして涉獵せざるなく、三寸の舌わづかに動けば枯木も花さき、曝骨も肉づき、蘇秦張儀も舌を卷き聲を飲むとぞ稱へられける。　ある日先生暇に乘じて兎角公を訪ねけり

兎角公悦び迎へて酒を勸めけるが、盃三たびめぐりて、座のくつろぐを待ちて言ひけるは、某が外姪に蛭牙公子といふ者あり。才能手聰天晴れ世に優れながら、梟心虎性、人の教に從はず、酒色に耽り、無賴と交はり、博奕遊獵を事として、親戚世間の持餘され者となりて侍り。あはれ高德先生の教訓によりて、彼れの頑心を矯め直さばや……

と云ふ調子で、懇ろに依賴すると、鼈毛先生は快諾し、一世の能辯を振つて孔孟仁義の道を說き示した。而して、蛭牙公子よ、若若し惡を翫ぶの心を移して專ら孝德を行ひ、忠義に移らば、立派な賢人君子となるであらう、書を好まば王羲之も筆を擲つであらう、射を翫ばゝ養由も弓を捨てるであらう、戰陣に臨まば張良孫子も施すに術なきを慨くであらう、廉潔ならば伯夷許由の仲間となるであらう、醫者とならば扁鵲華陀と名を等しうするであらう……」などと云つて教訓すると、蛭牙公子はすつかり感服し、跪いて「唯々敬承命也、自今以後、專心奉習」といふ。兎角公は席を下つて再拜し「猗歟善哉」と云つて感謝する

そこへ莞爾と笑つて口を挾んだのが、先程から座の側らに在り智を隱し、愚を佯り光を和らげ、狂を裝うてゐた蓬頭襤衣の虛亡隱士であつた。さて隱士が、鼈毛、兎角、蛭牙の三人を前にして、仁義の儒道の淺薄なることを說破し、虛無玄々の道教の奥深く難有いことを聞かせると、三人は跪いて、一金と石と隔てあり薰と蕕と比ぶること無し、今より以後心を專らにし

て神を練り、永く斯の文を味はん」と云つて歎稱する

そこへ現はれたのが假名乞兒であつた。頭は銅の盆の如く、身體は憔悴と瘠せこけ、長き脚は骨立して池の邊の鷺の如く、左の手には木の鉢を持ち、右の手には百八の數珠を爪ぐりつゝ入つて來る。それから鼈毛先生、虚亡隱士を相手として、幾度かの問答がある。その中には隱士が「吾熟視公、已異士人、視頭無一毛、觀體持多物。公是何州郡郷、誰子誰資」と問ふと、假名が大いに笑つて「三界無家、六趣不定。或天堂爲國、或地獄爲家」…我れは玉藻寄る讃岐の多度津に生れ、已に三八の春秋を經たりと答へるなどの遊情もあつて諄々と佛教の限りなき尊さを說くと、四人がひとしく懽喜踊躍して、

吾等幸遇優曇之大闍梨、厚沐出世之最訓、誰昔未聞、後葉豈有。吾若不幸不遇和上、永沈三現欲、定沒三途、……敬銘大和上之慈誨、戴充生々之航路。

と言ふ。假名乞兒は善い哉〳〵、いで三教を十韻の詩に約めて卿等の慶誦に便するであらうと云つて、

……方現種覺尊、圓寂一切通、誓深梁溺海、慈厚灑焚籠、悲普四生類、恤均一子衆……

等の二十句百字の五言詩＝譬へば賦に於ける亂、經に於ける偈、長歌に於ける反歌にも比すべき＝を與へて、此の意義深き遭逢の大團圓とした。

四

從來『聾瞽指歸』は、佛者からは、唯だ寓言の形を取つた立派な宗教論と視られてゐた漢學者からは一種の賦の類として取扱はれて來たやうに見える。岡田正之博士が、その『日本漢文學史』に於いて、「文章の結構は全く司馬相如の子虛、上林賦に倣ひたるもの」と云つたのは、恐らく其の方面の學者の代表的意見であらう、いかにも此の書は、その結構に於いて相如の作に學んだかのやうにも見える。殊に段々勝ちの三段構へや、人物の名が、「子虛上林」の三人(子虛、烏有、亡是)に似て、非實在を暗示して居る趣などは、殆んど符節を合するやうにも見えるが、しかしながら『聾瞽指歸』が暗示を得たのは、子虛、上林ばかりではなく、また子虛、上林の與へた暗示を、必ずしも最大と見做すべきではあるまい。おもふに大師は『聾瞽指歸』を創作するに當たつて、『莊子』『列子』をも想ひ浮かべたであらう　また佛經の多くの經典をも思ひ浮かべたであらう　また班固や屈原や、その他多くの賦類をも思ひ浮かべたであらうが、同時に有力なる模範兼競爭者として『遊仙窟』や『睡覺記』をも思ひ浮かべたであらう。而していろ〳〵の先行文學を、彼れが教化慾と文藝慾との燃

え懺る頭腦の熔鑛爐に投げ入れて、趣向を擬らす間に、最も著るしく彼れの頭を支配したのは、司馬子長、班固、屈原まがひの賦を作るといふことではなくして、寧ろ賦の形と趣味とを從位として取り入れつゝ、敎義の具體化、人物の取合せ、及び人と情と想と景とを纏綿させた對話開展の模樣などに主位の力點を置いた敎訓本位の寓意物語、卽ち一種の敎訓小說を作らうといふことであつたであらうと思はれる。漢文全盛の世ではあり、唐代の小說が駢麗の累積を事としてゐた時代ではあり、また內容の題材が三敎の比較、釋敎無上思想の勸說にある關係上、是等の時代、言語、題材の制約に餘儀なくされて、自由創新の工夫を見せることが出來なかつたであらうけれども、大師が興味の中心は一種の小說を創作するにあつたので、後代ならば馬琴が『夢想兵衞胡蝶物語』ともなるべきものが、粉本としては『文選』と、佛教經典と、唐代小說と、『睡覺記』とのみを持つ王朝初期に出でた靑年佛徒の漢文に表現された結果、斯樣な形式の文學とは成つたのである。思ふに此の作に屢〻見える同語の反覆累積は賦に學ぶと共に、それ以上佛典に學んだのであらう。たま〳〵見える感覺描寫は、おそらく『遊仙窟』の影響であらう。同じくたま〳〵見える遊情の滑稽は、おそらく『睡覺記』が彼れの阿闍梨心に宿つた影の現はれであらう。

五

『聾瞽指歸』に就いて、序にもう一つ述べたいのは、その文體が和調を帶びて後世の佛者の法語などを誘致したやうに見えることである。試みに『聾瞽』の一節、

熟ら惟みれば、峨々たる妙高は崛屶として漢を干せども、劫火に燒かれて以て灰滅し、浩浩たる溟澥は流瀁として天に滔れども、數日に曝されて而して消渇す。巍巍たる方輿も滂蕩して摧け裂け、穹隆たる圓蓋も灼爍して砕け折れぬ。然れば則ち寂寥たる非想八萬の長壽も、已に電の激するよりも短く、放曠たる神仙の數千の遐き命も、忽ちにして雷の撃つに同じ。況んや吾等體を稟けたること金剛に非ず、形を招けること瓦礫に等し。五蘊虛妄にして水兎の僞借に均しく、四大逗まり難くして野馬の倏忽たるに過ぎたり。二六の縁は意猨を誘策し、兩四の苦みは常に心源を惱ます

を取つて、一遍上人の法語なる

春過ぎ夏來たれども進み難きは出離の道、花を惜しみ月を詠めても起こり易きは輪廻の妄念なり。罪障の山にはいつとなく煩惱の雲あつくして佛日の光眼に進らず、生死

の海には長へに無常の風烈しくして眞如の月宿ることなし。生を受くるに從つて苦に苦を重ね、死に歸るに隨つて暗きより暗きに趣く　六道の街には迷はぬ所なく、四生のとぼそには宿らぬ住家もなし。生死の轉變をば夢とやいはむ現とやいはむ。これを有りと言はむとすれば、雲となり煙と消えて、空しき空に影を留むる人なし。無しといはむとすれば、又恩愛離別の嘆き心の内にとゞまりて腸を斷ち魂を迷はさずといふ事なし。彼の芝蘭の袂に、屍をば愁歎の焰に焦がせども、紅蓮大紅蓮の氷は解くる事あるべからず、鴛鴦の衾の下に、眼をば慈悲の涙にうるほせども、焦熱大焦熱の焰はしめる事なかるべし。

に比較すれば、『聾瞽指歸』などが先驅となり模範となつて、王朝末期以來鎌倉時代にかけて夥しく發生した法語の特色ある體式を成就したことが察せられるであらう　おもふに漢文のあらゆる樣式の中で、四六駢麗が日本民族の好尙に最も適合したものの一つであつた　而して大師はこの駢麗を基本として、之れに加ふるに佛典の文致を以てし、更に大師一流の日本趣味を最後の統一要素として、その文章に特別なる色彩あらしめたのであらう　而して其の漢字のみから成る形式によつて漢文と見られたのが、假名を加へられ、讀み下しにされ、支那風に硬ばつた筋骨が段々揉みほごされて、遂に特色ある新らしい國文と見られ

るやうになつたのであらう　吾等は是等の點に於いても、大師の國文に於ける功勞の輕からぬことを認めるのである

とにかく『聾瞽指歸』は重要なる史的意義を含蓄した作であつた　此の書は、これなくしては永久に忘却せらるべき我が國最初の小説家及び小説を指示して、その文學的特性をも暗示した、最初の小説を競爭者として向うに廻しつゝ、それ自身一種の小説としての存在を登錄した、而してまた文體としては、漢文の形式を取りながらに、將來新樣和文として成立つべき一種の美しい雛型を提供した、作者大師は此の青年期の作に於いて、若氣の過ちともいふべき一種の羞恥をも感じたであらうがその青年客氣の作が、たま〳〵國文學史上に重要なる足迹を殘したのは、歷史の愉快なる皮肉ともいふべきであらう

第八　最初の國文小說『竹取物語』

一

最初の漢字小說『睡覺記』が出でてより約百年、機運やうやく馴熟して、吾等はいよ〳〵最初の國文小說を見ることとなつた。『竹取物語』である。清和天皇の貞觀頃に出來たらしいが、惜しいかな作者の名を逸した『竹取物語』である。

『竹取物語』の荒筋はかうである

むかし讃岐造麿といふ、野山に竹を取つて世を渡る老翁があつた。或日竹の中に三寸ばかりの可愛らしい女の子を見出だしたが、連れて歸つて育てゝゐると、ずん〳〵と大きくなつて、三月ばかりの中に、立派な美しい乙女となつた。乙女の身からは光を放つて、夜中も家の內を明るくしたので、なよ竹の赫奕姬と名づけられた。竹から生れた姿よしの光りかゞやく姬君といふのである　姬の美しさは遠近世界の男の心を惹きつけて、翁の家の周圍は垣間見、よばひの男達で雜沓した。けれども姬が極度の無關心に失望して、いづれも空しく

歸る中に、此の姫を得ては最後まで踏み止まつて、夜晝通ひつめた色好が五人あつた　それは石作皇子、車持皇子、右大臣阿倍御主人、大納言大伴御行、及び中納言石上麻呂の五人で、二人は皇子、三人は上達部の公卿であつた　姫は此の人達をも更に顧みなかつたが、翁が彼等の熱心にほだされて姫を說き勸めたので、姫は餘儀なく折合つて、一では望む物を下さつた御方に見えませう」と云つた　そしてその望みの品といふのは、石作皇子には「天竺にある佛の御石の鉢」車持皇子には東海の蓬萊島に生ふるといふ銀の根、金の葉に眞珠の實をつけた木

竹取物語古寫本

の一枝、阿部御主人には唐土にあるといふ鼠の皮衣、大伴大納言には龍の頸にある五色の玉石上中納言には燕のもつ子安貝のそれぞ〳〵であつた　五人は意外の難題に驚いて、がツかりしたが、姫を見ずには生ける甲斐もなしと思ひ直して、各々需められた秘寶を手に入るべ

く決心した。

それから此の難題に應ずる五人五條の冒險物語が面白く書いてある。まづ一人はそれらしい僞物を近き古寺から搜し出して來て欺かうとした。一人は巧みを凝らした人造品を以て姫の目をくらまさうとした一人は唐土通ひの貿易商にだまされまやかし物を正しきそれと信じて持ち込ませた。そして三人いづれもかぐや姫に看破され、說破され、而して揶揄された。殘れる二人の、一人は船に乘つて大波の荒れ狂ふ海上に出で、一人は畚に乘

手にうち入れて家に（宮內省圖書寮藏）

り、目も眩むばかり高き屋の棟の上に登つて、命がけの冒險を試みたが、二人とも一物をも得ず、おまつさへ身を害つて廣き世の笑はれ者となつた。かくて五人が五人、まんまと失敗して、最後に帝からの切なる御望みがある。かぐや姫は死を以て御辭退し、或は隱身の術により姿を消しなどして仰せに從はなかつたが、帝もさまでは强ひさせられず、姫も花紅葉につけ音信だけは奉りつゞけて三年を過ぐした。

三年目の春頃から、かぐや姫は月を見て物思ひに耽るやうになつた。そして怪まれ尋ね問はれて、來るべき八月の十五夜には、いよ〳〵罪を許されて天上に歸るよしを答へると、翁媼は大きに悲み、泣きつ罵りつして、事の次第を奏聞した。帝の御驚きも大方ではなく、その夜は六衞府の兵士二千人を遣はして、大空から來る迎への使者を防がせられたが、天使に對しては弓矢も太刀も役立たず、人は力を失ひ、戸は自ら開き、姫はやがて屋上空中の飛車に迎へ取られた。姫は天上するに臨んで、形見として、翁媼には文と衣とを遺し、帝には文と不死の藥とを奉つた。かぐや姫に別かれて、翁媼はやがて病み臥した。帝は姫に別かれては不死の藥も用なしとて、御使に藥の壺と文とを持たせ、一番と天に近い富士山の巓で燒かせられた。その烟が今でも姫の昇つた大空をさして立ち昇つてゐる。

これが『竹取物語』の梗概である。知れ渡つた此の名作に對して、梗概の繰返しも幼稚

の沙汰であるが、此の繰返しには理由がある。

二

讀者は、此の梗概を通ほして、『竹取物語』が幾多の說話の聯合から成立つてゐることを見出だされるであらう。聯合といふよりは寧ろ交錯兼熔接ともいふべく、幾多の說話が込み入りながら極めて自然に組織されてゐることを見出だされるであらう。それは簡單にいへば、說話が單式でなくして複式に出來てゐるといふのであるが、吾等は此の「複式」といふ事が小說の發生し、成立する第一の要義であつたと思ふのである。序ながら、吾等はまた、複式に二種類あつて、第一種は交錯的、撚絡的、組織的、葛藤的とも云ふべきものであり、第二種は散列的、聯合的、櫛の齒的ともいふべきものであると思ひ、而して『竹取物語』をば、國文に於ける複式第一種の魁であると思ふのである。

吾等は世界各國の文學史上に於ける小說胎生の消息について知るところがない。けれども我が文學史上の事實について見ると、形式的には、單式の說話が複式になつたところに、新なる文學、小說が發生したやうに見える。個々粒々の神話、傳說、物語は、記紀にも、風土記に

も、氏文にも『靈異記』にもあつた。『類聚國史』の如きは、その主なる部分々々を、個別的に一種の說話と見ることも出來るであらう。けれども彼等は說話であり、神話であり、傳說であり、史實ではあるが、小說ではない。小說は彼等が二つ以上結び合はさる丶所に成立つのである。無論、單式複式の區別は頗る微妙で、一つにして長く複雜なるものもあり、二つ以上にして短く單純なるものもあらう。また一つか二つかの區別を附け難いものもあるであらう。從つて二種の間の境目の容易に附け難いものもあるであらうが、大體について いふと、一つの說話では小說とは見做されず、小說と見做されるには、數條の說話の聯合若しくは交錯、混融を必要とするやうに思はれる。例へば大蛇(をろち)退治、山幸海幸、柘枝仙女、夢野の鹿、浦島の子、眞間の手兒奈、萬葉及び今昔の竹取、その他靈異記に見えた數の因緣物語等、いづれも面白い說話ではあるが、その一つ〳〵を取つて、之れを小說と見る人は恐らくあるまい。而して『竹取物語』が『源氏』の作者によつて小說の始祖と視られたのは、恐らく、『竹取』が少なくとも數條の說話の結合から成立つてゐるからであらう。『竹取物語』には、竹採る翁が竹の節の中から小さい女の子を得て養つた話、五人の貴族達それ〴〵の冒險を寫した五條の物語、帝の御戀の物語、天女が贖罪昇天の物語等、少なくとも長短七八條の說話が折込められ、熔接されてゐる。そしてそれらが一體に融會して、趣旨に於いても、一種の中心を持つ

た物語に纏められてゐる　その形式の複雜化兼統一化が時代の人の目を驚かして、「新文學生まれ出でたり」と感ぜしめ、大成者の紫式部をして、此の種の文學の出で來はじめの祖と稱へしめたのであらう。

『竹取物語』は大體時の順序に從つた逐年式の記述であり、また說話群を段々並べにしたものであるが、同時に始終に亙る少なくとも三人の人物を有し、全篇を貫く中心の趣向を有つてゐる作で、譬へば數條の絲の撚り合はされたるが如く、蔦葛の絡み合ひたるが如く、とにかく一種の組織を持つた作である　從つて譬へば王朝の寢殿作りが二三の對の屋、泉殿、釣殿、細殿、渡廊を統べてゐるが如く、或は文章組織の上から見た一種の入組文(complex sentence)の如きものであるが、こゝにもう一つ、說話の複式制によつて別種の小說を成してゐるのは、多くの說話を繫がず、括らず、絡ませず、纏めずして、ころ／＼、ばら／＼のまゝに數を並べるものである。　先きに複式の第二種と云つたのは是れで、その最もよき代表は、『竹取』を距ること遠からずして、已に在原業平の在世中に現はれたらしい『伊勢物語』である。『伊勢物語』は百二十五條の說話を、無連絡にころ／＼と並べたものである。　それは譬へば離れ／＼の櫛の歯が唯だ片端を櫛の峰に統べられてゐるやうに、離れ／＼の說話が、想像された或一人の行迹として排列されたものである　戸々別々の家族を有する棟割長屋が、唯だ一本の長

い棟によつて取纒められたやうなものである。或は文章組織の上から見た一種の並列文(compound sentence)のやうなものである。『伊勢物語』の一章々々は、短歌に長き詞書を添へたやうなものである。而して特に長き詞書の添うた『古今集』の羇旅の部の一章、

武藏の國と下總の國との中にある角田川の邊りにいたりて、都のいと戀しく覺えければ、しばし川のほとりにおりゐて、思ひやれば限りなく遠くも來にけるかなと思ひわびて眺めをるに、渡守はや舟に乘れ、日も暮れぬといひければ、舟に乘りて渡らむとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なくしもあらず、さる折に、白き鳥の嘴と足と赤き川の邊りに遊びけり。京には見えぬ鳥なりければ、皆人見知らず渡守に、これは何鳥ぞと問ひければ、これなむ都鳥といひけるを聞きてよめる

名にしおはゞいざ言問はむ都鳥
　わが思ふ人はありやなしやと

は、『伊勢』の東下りの一節を殆んどそのまゝ載せたやうなものであるが、何人も此の一節を取つて小說と見做すものはあるまい。而して是れと同じやうな、或はこれよりも短く、味はひの淺い、歌入りの說話を百餘章集めると、人が怪しまずに、之れを一種の小說と見るのである。西鶴などと相並べて、葛藤式、撚絡式の組織ある『竹取物語』等に必ずしも劣らざる

一種の小説と見るのである。何故であるか。思ふにその最も主なる理由の一つは同類相並んで群を成すからであらう。一羽の燕は世の中を春にはしないが、燕が群をなして飛びかはせば、世は疑ひもなき春である。數の力はえらい、群の勢は大きい。吾等はこれらの理由によつて、說話の複式となり、群を成すところに、小說の芽が生えると思ひ、而して此の意味から見て、『竹取物語』を、國文小說の祖、殊に複式第一種の葛藤式なる小說の元祖と思ひ、『伊勢物語』をば複式第二種の、櫛の齒式なる小說の元祖と思ふのである。同時に日雄人の『睡覺記』をば、『遊仙窟』及び『蘡薁指歸』の聯想から、複式製なる事を想像して、漢字の小說の元祖とし、また『蘡薁指歸』をも一種の小說と見たのであつた。

三

數を、群を、聯合、交錯を力と見て、之れに小說發生の機緣を見出ださうとするのは、淺い觀察のやうであるが、それは形式上の一面で、內容精神の上には、更に肝腎なる一要義がある。それは藝術的なる空想世界建立の意識である。我が感情の高まるまゝに、これを發露するといふだけではなく、史實を確實に寫さうといふのではなく、傳へられた興味の物語をいくら

か面白く書き綴へるといふのではなく、また不思議な因縁話を身に泌みるやうに寫して、信心の便りにしようといふのではなく、主として娯樂の爲めに、面白き人情世界を空想的に創作しようといふ態度である。記紀の歌や『萬葉集』には、主觀の美しい發露はあつたけれども、この空想世界建立の心構がなかつた。祝詞、宣命には、神々や國民の愉悦好感を得んが爲めに語句を裝飾する努力が見えてゐるけれども、讀者を樂ます爲めに新しい人情世界を創造するといふ意識はなかつた。記紀、風土記、氏文等には、古傳を尊重して成るべく美化しようとする願望が現はれてゐるけれども、空想所産の創作を第一義とする意圖はなかつた。『萬葉』が「水江浦島子の歌」に於いて、浦島が蓬萊へ行つて、歸つて、玉手箱を開いた瞬間に老い屈まつて、やがて息絶えたといふ傳説の一生を叙した後に、反歌として、

常世邊に住むべきものを劍太刀

己が心から鈍やこの君。

―常世の國にそのまゝ居れば不老不死でいつまでも住めたものを、好んで死ぬる愚者よ―と嘲つてゐるのを見ても、傳説を歌ふ萬葉の歌人等が、傳ふるまゝを歌つて批評するだけで、その傳説を書きかへて、新たな世界を創造するといふ考の全く無かつたことがわかる。『靈異記』の作者が「昔漢地造冥報記、大唐國作般若驗記、何唯愼乎他國傳錄、弗信恐乎自

土奇事、粤起目矚之、不得忍寢、居心思之、不能默然。故聊注側聞。……祈覽奇記者、却邪入正、諸惡莫作、諸善奉行。」と書いてゐるのを見ても、あの迷信らしい不思議づくめな記事の蒐集すらが、事實を採錄して風教に裨益しようとする心根から企てられたので、作者に奇譚創作の意識の全く無かつたことが知られる。 記紀以來傳へられたる武勇、神仙、戀愛、人情に關する多くの傳説記事も、添加された空想要素を多少は負うて居るものの、大體は所傳をそのまゝに寫さうといふ意識の下に書かれたのに相違ない。

かう考へて來ると、『竹取物語』の作者の空想は偉いものであつた 載籍口碑、兩方面に於ける數々の傳説を面白く取り合はせ、彼等を取舍し、選擇し、削除し、添補し、情化し、浪曼化し轉變化し、統一化し、要するに彼等をばすつかり我が物として支配しつくした上に、天才的空想の坩堝をくゞらして、全く新らしい人情の世界を創造したのは、實にえらいものであつた『竹取』に影響した先行文學としては、從來『廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經』『捺女祇域因緣經』『月上女經』、或は『漢武内傳』『華陽國志』『後漢書』の西南夷傳、或は我が風土記、『靈異記』等を引く者があり、人物事件についても、くだ／＼しく類似を辿る者がある けれどもその類似はほんの一部分で、取つたといへば取つたやうにも見えるといふ程度であるのを見ると、採取といひ、模倣といひ、依據といひ、影響といふのは、要するにあちこちから種子を

拾つたといふだけ部分々々の資料を摘み集めたといふだけでその種子の培養については作者獨自の新樣を試みて、別風の美しい葉を茂らせ、花を咲かせ實を結ばせたのであらう。殊にその組み合はせ方、魂の吹き込み方については、全く獨特なる日本式、平安朝式、作者自身式の大膽なる創意を見せたやうに見える。試みに最も多く暗示を得たらしく思はれる上記三佛典の大荒筋を見ると、先づ『寶樓閣陀羅尼經』は、大昔、この瞻部洲に寶山王といふ大山があつて山の中に寶髻、金髻、金剛髻といふ三人の仙人が住んでゐた。此の三仙人は此の陀羅尼の不思議な功德によつて無上正覺を得、大喜びに踊りはしやいでゐたが、やがて住むところの地の中へ、出來たての牛酪のやうに、する〱と融け込んで消え亡せた。その沒せた所に三本の竹が生えた。その竹は根が七寶、幹と莖と葉が黄金で枝尖には美しい眞珠の實が生つてゐた。それから十月たつと、その眞珠の實が自然に裂けて、各々の內部から顏貌端正なる一人の童子が生れた。三人の童子は、各々の生れた竹の下で坐禪を組んでゐたが七日目に各々無上正覺の悟りを開いた。そして三本の竹は變じて三宇の立派な樓閣となつたといふのである。要點は、竹の枝先の眞珠の實が破裂けて、その中から童子が生れたといふので、『竹取』に似たといへば似たところが無いでもない。また『竹取』の作者の頭の隅に、此の譬話が潜んでゐたのかも知れぬ。しかしながら、之れについて『竹取』の依據

影響、粉本を云々するのは過分であらう。

『榛女祇域因縁經』が記すところの大意は、佛在世の時、維耶梨國王の果樹園に、一本の榛の木(原名アンラ、奄羅、天竺梨、實の形は梨、或はクワリンなどの如く、花は無數に咲くが實の容易にとまらぬものと云はれる)が自生した。生長して大きな實が生つたが、美しくッて旨いこと、天下無類である。さて此の國に梵志といふ財富無數聰明博達の居士があり、王に寵用されて大臣となつてゐたが、此の梵志が、王に請うて、此の榛の木の根もとに生えた一本の蘖を貰ひ、大事に育てゝゐると、三年目に立派な實が生つた。大きさ美しさは、王家の榛そツくりであつたが、刀を加へて見ると、澁くツて、とても食べられない。梵志は、これは肥料が悪い爲めであらうと考へ、それから百牛の乳を一牛に飲ませ、その一牛の乳を煎じつめて醍醐を作つて、一年間根もとに灌いでやると、大きさや光澤はもとより、甘い味までが王家のそツくりといふ榛の實を得た。さて其の榛の木に拳ほどの瘤が出來たが、ずん〳〵大きくなつて、その中から一本の枝が生えて來た。怪しんでゐると、それが眞直に伸びること七丈ばかり、そこから四方へ澤山の枝がさし、密生して、大きな綠の棧敷のやうなものが出來た。梵士が怪しんで、櫓を組んで登つて見ると、綠叢の中に池があつて、池の上に美しい花が群がり咲いてゐる。いよ〳〵怪しんで花の攢叢を披いて見ると、美しい一人の女兒が池の水の中にゐた。

梵志は抱き取つて家に歸り、榇女と名づけて愛育した。此の女十五歳になると、顔色の端正なること類ひなく、やがてその噂が遠國まで聞こえて、七人の國王が遙々とたづねて來て、同時に婚を求めた。梵志は困じ果てゝ、誰れを婿と定めることも出來ず、止むを得ず園の中に一宇の高樓を造つて、その上に榇女を住ませた。そして國王等に言つた「此の女は榇の木の上に自然に生れたもので、私の生んだ子ではありません。それに今、七王が求められるのに、一王にお許し申さば、他の六王が御腹立ちになりませう。敢て惜しむのではありませぬが、とても私の分別には叶ひませぬ。女はあの高樓の上に住ませてあります。王樣達然るべく御相談の上、宿運の御方が、よろしくお作ひ下さるやうに」と云つた。それから七王はかしましく爭つてゐたが、その中に夜になると、瓶沙王といふ一人の國王が、隱し溝の中からこッそりと樓に登つて榇女と一夜を契つた。そして別かれる折に、「若し子供が生れて男ならば余に還すがよい、女ならば汝に與へるであらう」と約束して、下りて來ると、やがて瓶沙王の陣中に萬歳の聲が起こる。そして他の六王は指をくはへて空しく引き上げた。といふのである。木の上の誕生、七人の國王の妻どひなど、『竹取』に似たと云へば云へさうで、『竹取』の作者の目に留まつた一つの資料であつたかも知れぬ。しかしながら之れを源流のやうに見て事々しく影響を論ずるのは穩かであるまい。

もう一つの『月上女經』これはあらゆる關係資料の中で、最も多くの類似が見出だされ同時に最も多く影響したと信ぜらるゝものであるがその大要は左の通りである

昔天竺の毗耶離城に離車(維摩のこと)といふ長者があつた。妻の名を無垢と云つたが、懷姙して、月滿ちて一女を生んだ。此の女が生るゝ時、家内が光り輝き、大地が震動して、天からは花が降り、城内の大鼓小鼓が自然に鳴り響いた。女は生れた時に少しも啼かず、すぐに掌を合はせて偈を說いた。此の女の身體からは妙なる光が輝き、それが月の光にも優つたので、親達が名づけて「月上」と呼んだ。月上女生れて幾時をも經たぬ中に、忽ち八歲位の脊丈になつた。彼女は、居る所に光りが滿ち、毛穴からは芳香を放つたが、殊にその顏貌の美しさは譬ふるに物もなかつた。さる程に城内のあらゆる貴族、大臣、居士、長者等が聞き傳へて婚を求める。そして離車の家を訪ねては、或者は數の寶物を贈つた。或者は女を得させずば汝のあらゆる財物を奪ふであらうぞ、毆るぞ、縛るぞと云つて威しつけた。離車は惑れて煩悶苦惱し、遂には聲を揚げて泣き出した。月上女が怪しんで仔細を尋ねると、離車は事情を話して、我等はやがて御身を奪はれるであらう、身命を害はれ、財寶を掠められて了ふであらうと云ふと、月上女は從容として、一少しも御心配には及びませぬ。世に慈悲心に敵ふものはありません。そして私は今、心中にその慈悲を起こして居るのです。尊者父上母上よ

願はくは此の毘耶梨城の東西南北の道路に出でて、鈴を振りつゝ、あらゆる人民に向つて、高らかに、言ひ振らして下さい「今日から七日目に、我が女月上が必ず家から出かけて、自ら夫擇みをするでせう。君等、未婚の男子達は悉く、各々出來るだけ立派に裝束して、町々を綺麗に掃除し、美しい旗を立てゝお迎へなさい」と、かう振れて下さい、と云つた。父母が彼女の言ふがまゝにすると、城内の人民が悉く歡喜に胸を躍らして、各々の家を飾り、町を清め身邊を裝飾して待つてゐる。殊に貴族富豪等は眷屬從者等に、「油斷すな。月上が若し近くに來たらば、力任せに我が家に引張り込め」と嚴命した。

六日目は滿月の十五夜であつた。月上は皎々たる月の光を浴びつゝ、樓上を往來してゐると、忽然神力を感じて、その右の掌から一本の蓮花が生ひ出でた。その蓮は黄金を莖とし白銀を葉とし、瑠璃を蘂とし、瑪瑙を臺としたものであつた。不思議に思つてゐると、その上の不思議には、花の内に一人の如來が端坐して金色の光を放つて居られる。月上は如來を禮して、「尊者は誰れぞ、何のために何處から此處へは來ましたるぞ」と問ふ。如來は「佛世尊の御使としてお前の處へ來たのだ、佛の御姿は言語道斷に尊いものであるぞ」と云つて、詳かに佛の尊容を說き聞かせる。月上「では其の佛に逢はせて下さい。佛は何處におはしますか。佛を見るまで、私は決して飮食を取りませぬ、睡眠も致しませぬ。」如來「佛は今大林の邊りに、菩薩、聲聞等の大衆と共にして、微妙の大法を說いて居られる。ではすぐに

そのお膝許へ行くがよい。」

それから月上は、その手掌から生ひ出でた蓮華と化佛とを、大切に捧げつゝ、樓を下つて、父母を誘ひ、一同美しい衣服を着け、數の寶を携へ、妙なる音樂を奏しつゝ、大林の内なる佛世尊の邊りへと急いだ

時は六日を過ぎて、もう七日目になつてゐた。彼女を待ちかねた無數の男子等は、悉く憧れの目を見張つて、「あれ、我が妻が見えた。」「もう來たわ、近く、近く。」と叫びつゝ、ひた走りに走つて、押し合ひ〳〵月上を指して來る この疾走の群が、大きな一つの塊を成して、あはや月上女にぶつからうとした刹那に、彼女はヒラリと身をかはして虚空に飛び上つた。高さは一多羅樹位で、彼女はその同じ高さの空中を、掌の上の蓮花と如來像とを捧げつゝ、靜々と進んで行く。そして行きながら大衆に向つて、「我が此の妙へなる身は婬欲によつて得たものではない 婬欲を棄て去らねば尊い身にはなれませぬぞ。おぬし等は前世に於いて私の父であつたかも知れぬ、私は又おぬし達の母であつたでもあらう。また私は前世に於いておぬし達を殺し、おぬし達がまた私を殺した仲であつたかも知れぬ。さういふ因縁を持つてゐる者同士が、かりにも婬欲の心などを起こされますか、貪瞋癡與一切の惡事は悉く過去世に於ける欲心の結果で、一切の善事は皆欲想を棄て去るによるのです。もし速かに諸欲を解脱しようとならば、これから直ぐさま私に從つて如來のお膝許へお詣でなさい。」

月上女がかう說き終はると、大地が震動し、天華が降り、天樂が聞こえて、諸種の瑞相を現じたが、大衆は之れを聞くと同時に、諸欲煩惱を悉く離脫して、各々互ひに父母兄弟姉妹の心持を感じた。そして彼等が月上を禮して、携へ來たつた香花、華鬘、衣服、瓔珞等を投げ上げると、それが一つに集まり、月上が右の手にさゝげた如來の頭上に止まつて、一つの繖蓋となつた。やがて彼女がしづ〳〵と空から下つて來て、地上四指ばかりの低空を進み行くと、欽慕を全く離脫した八萬四千の大衆が、之れに從つて行列正しく釋迦如來說法の座を指した。

四

以上が『月上女經』の中、『竹取物語』を想ひ起こさせる部分の撮要である。これには、女の身體の俄に長大する事、身體から光明を發する事、數多の男の狂ふが如く言ひ寄る事、掌上の蓮が金の莖、銀の葉、瑠璃の蘂、瑪瑙の蕚を持つてゐること、男等に對する宣言と實行とに見る二重の意外、地上の低空を進み行く事など、いろ〳〵の類似があつて、前の二經典に比べると、遙かに多く『竹取』の作者に明指、暗示を與へたかのやうにも見えるが、同時に類似した事の中にもいろ〳〵の相異點が見出だされるのを見ると、結局は唯だ一部分の材料とし

て取入れられたといふだけ、作者の記憶の中に蓄へられ、磨りつぶされ、攪拌され、混淆されて、どこにか類似の面影をとゞめるといふ程度の形になつて再現されたといふだけに止まるのであらう。殊にこれらの佛典と著しく異つて『竹取』の特色を成してゐるのは、小説家としての創作的態度の現はれである。佛典の説話取扱はどれもこれも宗教家的態度であつた。そして信心を起こさしめる爲めといふよりは、寧ろ印度式の誇張的なる想像累積癖を滿足させる爲めに書いたやうに見える説話屑を、『竹取』は日本流の洒落なお茶漬式にさら〳〵と取扱つて、自由に分割し、接合し、削減し、添加し、のみならず、讀者大衆の娯樂の爲めに藝術的なる空想世界を創造するといふ建前のもとに、説話の魂をすつかり入れ替へて、喜怒哀樂愛憎の情の交々する、自由な面白い連續場面を見せたのは、破天荒な飛躍的の功業である。また殊に文字通り難有いのは、此の物語に關係のあるらしい佛教その他の原典が、殆んど悉く生眞面目な平叙書きか教訓書きかで、いづれも鹿爪らしく袴を着けて居るのに對して、『竹取』一つが、洒落、ユウモア、遊情の新らしい世界を開拓し、しかもその輕妙な遊情の間に幽遠なる人生の深き味を窺かしめたことである。これらは主として上に引いた三佛典に對して云つたのであるが、更に狹い淺い類似を有つた説話例へば唯だ天女の天下り、竹から子供の出生、女子の昇天等については、一層手輕に右の結論を應用することが出來るで

あらう

おもふに『竹取物語』の作者が關係原典を取り上げ使ひこなした程度や呼吸は、眼前の事實や耳に聞く口碑を取り上げて想化したのと同じかつたのであらう　富士山は貞觀六年（一五二四）に噴火して、延喜五年（一五六五）に成つた『古今集』の序には、「今は富士の山も煙たゝずなり」と書いてある　作者は恐らく、此の期間に於いて、眼前に立ちのぼる富士の煙を望みつゝ、之れを採つて赫奕姬の文と不死の藥とを燒く事に應用し想化したのであらう『文德天皇實錄』の仁壽三年（一五一三）六月の部に記すところによると、承和六年（一四九九）の夏、留學醫官菅原梶成が、唐土から歸朝の際に南海に漂落したといふことで、その遭難の悲慘な樣子を、左の如く書いてゐる

風浪緊急、鼓舶艫、俄而雷電霹靂、梔子摧破、天晝黒暗、失路東西、須臾寄着、不知何一嶋、嶋有賊類、傷害數人、梶成殊祈願佛神、僅得全濟、與判官良岑長松等合力、採集破舶材木、造一船、其載、爾時便風引舶、得着此岸、

惜しいことに、漢文流の壓搾作用を加へ過ぎてゐるが、おもふに當時、類似の難破船物語が他にも幾つかあつて、それらの驚異が當時の活きた詞で委曲に噂されてゐたのであらう　而して『竹取』の作者は、恐らく是等の見聞により、車持皇子が虛構の海上冒險談や、大伴大納

言が龍珠探險の難航記事を書いたので、物語の中の

或時は風につけて知らぬ國に吹き寄せられて、鬼のやうなるもの出で來て殺さんとしき

はやき風吹きて、世界くらがりて、船を吹きもてありく……浪は船にうちかけつゝ捲き入れ、神は落ちかゝるやうに閃きかゝる

の如き文句は、恐らく梶成傳類似の口碑から得て、綜合し想化したのであらう。その他大作御行が舟人を威す有樣、大炊寮なる飯炊ぐ屋の棟のあたりの光景、御狩の行幸、勅使の民どもに對する態度などいづれも作者の見聞を想化したので、彼れは天竺、震旦、本朝の各方面の書物から、及び社交の間に得たる夥しい道聽途說から、遍く資料を搜し求め、川といふよりは寧ろ、博覽聽聽の間に得た人情資料の貯蓄が醱酵し混融して、全く面目の變はつた一種の文學要素と化成してゐる、それらの中から適切無比の材料を選擇し、面白く組み合はせて、此の物語を成したのであらう　而してかく選擇し、組織し、描寫するにあたつては、立派な日本的、平安朝的、作者自身的といふ統一相のあるものに作り上げ、讀者が面白さに惹きつけられつゝ成るべくは之れを事實視する位にして、同時に深き諷刺敎訓を與へるものたらしめようと思つたのであらう　專ら貴族の戀愛生活を寫したのは、讀者の興味を强く引きつけつゝ、諷

刺を利かせる爲めであつたであらう。五人の人物の中の少なくとも三人を奈良前朝の實任名流にしたのは、現在の人の事に書いては憚らしく、また遠き昔や外國の事としては、寓話や歷史のやうで氣が拔ける嫌ひがあるので、丁度百年位前の記憶に新たなる實在人物に託して、幼稚なる讀者に事實と思はせようとしたのでもあらう。『今昔物語』に「竹取翁於竹中見付女兒養立語」といふ一章があつて、それには、かぐや姬の難題を「空に鳴る雷を捕へて將來れ」「打たぬに鳴る鼓を得させよ」など書き並べてある。これが藤岡博士の言ふが如く、此の物語の成立以前の形であつたかどうかは疑はしく、『今昔』が『伊勢物語』の東下りなどを、描い文章で殆んどそのまゝ繰返してゐるのを見ると、或は『竹取』を簡單に通俗化し、童幼化したものではないかとも思はれるが、これが假りに『竹取物語』の五つの難題の原形もしくは種子であつたとすれば、物語の作者は、これらをばすツかり高級化し、妥當化し、風情化し、可能性不可能性を程よくつきまぜて、面白い物語を作り成したので、この「空に鳴る神」「打たずに鳴る鼓」等を作りかへて、「佛の御石の鉢」「蓬萊の金銀木」「火鼠の裘」「龍の頷の珠」「燕の子安貝」とした趣向、而してその各々に由來、情味、曲折、冒險の尾鰭をつけて、それ〴〵面白き一つの物語とした手法、これが『竹取』の作者のあらゆる原材、粉本に對して取つた態度であつたであらうと思はれる。吾等は竹取物語は『寶樓閣經』や『月

上女經』や『漢武内傳』やよりは、寧ろ遙かに多く日雄人の『睡覺記』に負うてゐるのであの新しい奇拔な面白い滑稽な詭辯の詰め開きは、恐らく『睡覺記』に緣を引くものであらうと想像してゐるが、しかしながら、それすら『今昔物語』の所傳に加へたと同じ程度の變改想化を加へたものであらうと考へる。

複式性と空想世界創造の意識――小說を成す要素は此の外にも多くあるべき筈で、原則的に見れば、寧ろ是等以上に重要なる資格があるであらう。例へば「人」と「事」と「景」とを立派に寫すこと、委しくいへば人物には立派な性格を持たせ、事件には、生起、開展、終結の間に自然の風致あらしめ、景色には人事と對應して、それ〳〵の美趣を具へしめること等は恐らく右に擧げた二つの要素以上に大切で、其の一つをも缺くべからざるものであらうがしかしながら單純なる主觀的の詩歌、史實傳說そのまゝの記述、乃至祈誓教訓の文章などのみが存在してゐた我が古文學の世界に於いて、小說の生れ出でた轉機的特色としては、先づ此の複式性と空想世界創作の意識との二つを擧ぐべきであらうと思ふのである　而して『竹取物語』がこの二大特殊性を見事に備へてゐるので、之れを我が國文小說の大祖として、特に委しき研究を獻げようとするのである

五

『竹取物語』について考ふべき事は形式内容の兩方面に通じていろ〳〵あるが、右に述べた複式形に因んで、先づ思ひ浮かべられるのはその構想の整齊して莊麗雄大なることである　天降つて竹の節に宿つた小さい天女が、竹取の翁に養はれて成人する　その輝く美貌と男に見ゆべからざる天命と人界に立ち交はる餘儀なさと、揶揄を好む皮肉性との交錯から、五人の男性との間に悲喜劇的交渉が始まつて五條の冒險失敗の物語が展開される。　その後萬乘の大君から懇ろな御沙汰があつたが、お斷り申し通ほして、遂に天の使に迎へられて昇天する　これが『竹取』の梗概で、形式を辿ると、賤しい老人と小天女との間に事を發した一條の細い線が五人の大身貴族との關係に開展して五條の太い線を引き、最後に人界無上位の帝王と天人との賑やかな交渉に爛熳たる花を咲かせて、大空を輝かすとでもいふべく更に縮約すれば、一幹、五枝、その梢頭に一團を成した花群の輝きを見るともいふべきもので、後代の『源氏物語』や『里見八犬傳』に比べては、無論單純を極めてゐるが同時に個個の說話のみを有した前代の文學に較べると、複雜を極め同時に統一及び漸層の妙を極め

てゐるといふことが出來るであらう。思ふに作者の意向は曖昧模稜で、これといふ文學的の自覺も無かつたのであらうが、見樣によつては、浦の濱木綿の如く重疊した管念を持つてゐたとも推察される　それは此の物語が神仙譚であると同時にお伽話であり、歌物語であると同時に戀物語であり、時代物であると同時に世話物であり、ロマンスであると同時にノヹルであり、悲劇であると同時に喜劇であり、滑稽物語であると同時に諷刺物語でもあり、眞面目な思想を持つた深刻な物語でもあるのを見ても察することが出來る　從つてその趣向組立の部分々々にいろ〳〵な寓意含蓄を有つてゐるやうにも見えるが、殊に面白いのは、天上と地下と、神と人と、理想と現實との遂に合一すべからざる事を暗示した趣である　天と神と理想とは常に美しく輝いて吾等を招く　吾等は之れを思慕し憧憬しつゝ身命を賭してもがき進む　けれども二者の間には、常に一膜の隔てがあつて、永久に合一することがない　これが人間の負はせられた非常に高くして、同時に非常に痛ましい運命であるが、この運命の味ひが、『竹取物語』に於いて原始的の單純さながら、非常に面白く、可笑しく、意味深く現はされてゐる『竹取』以前の神仙譚や、傳說や、風土記や、また後世に現はれた同種の物語が、多くは二者の情交成立に特別の興味を待たせてゐる間にあつて、此の物語一つがこの運命の隔ての墻を、一歩も踰えさせなかつたのは、作者に何か特別の考があつたのであらう、

兩性親愛の一義に興味を集めて、多數の男女に淺ましき狂態を演ぜしめながら、內から外から、恩義、勞苦、位階、あらゆる方面から、此の一義の成立に對して到れり盡くせる壓迫を加へ、餘儀なさを強めながら、遂に天下りの天女に一指をも觸れさせなかつたのは、作者の心中に、ぼんやりながら強い深い一種の理想があつたのであらう。吾等は作者が傍若無人の滑稽諧謔を弄びつゝ、時代の恥を思ひ切り客觀化して笑ひ嘲りつゝ、危險の崖端を摩れ〳〵に驅けさせつゝ、その間に於いて、天女の清高なる超越美を、いよ〳〵高く發揮せしめた構想を偉大なりとするものである。

六

『竹取物語』の文章は、漢文に反抗して出來たもののやうでもあり、同時に漢文の中から生れ出でたもののやうでもある。恐らく『竹取』の作家は、當時流行の日本語に對して特別の興味を持つてゐたのであらう　またやうやく實用期に入つたばかりの假名に、特別の新味と威力とを見出だして、踴躍して最初の活用を試みたのであらう。文體については、遠くは『古事記』を、近くは『靈異記』などの調子を取つて、之れをいさゝか柔らげつゝ、處々に

嬌態(しな)を添へるテニヲハを用ゐて、文章に曲折を加へたのであらう　漢文由緒の古典的駢麗語などに對しては、成るべく之れを度外視して、止むを得ざる場合には、ずつかり之れを支配し、或は超越して原形を留めぬやうにしたのであらう。

興福寺の大法師等が仁明天皇に聖壽奉賀の長歌を獻げた嘉祥二年(一五〇八)は平安奠都の後五十六年、小野篁四十八歳、僧正遍照三十五歳、在原業平二十五歳の時であつた。『續日本後紀』の編者が「季世陵遲、斯道已墜」とは言つて居るが、六歌仙等の年齢によつて察すると、和歌復興の氣運は、當時已に下萌えに萌え盛つてゐたのであらう。　而して興福寺の長歌は漢文の國史中に挿入せらるゝ關係上、萬葉假名と、宣命書きとの中を取つたやうな形式に書かれてゐるけれども、少壯歌人等の間では、そろ〳〵短歌が變體本位の平假名で書き始められてゐたことであらうと想像される。　貞觀はこれより十年乃至二十八年の間で、『竹取』の最後を飾つた富士の煙が暗示を與へられたらしい貞觀六年の富士噴火は、これより十六年の後である　その間には假名といふ此の新興の思想表現機關が、恐らく長足の進歩をなして、ぽつ〳〵短い散文などにも用ゐられ始めたであらう　而して書く者も讀む者も、さまでには苦しまずのみならず表意文字から生れた標音文字の思ひ設けぬ便利に直面して、新時代に生れた幸福をしみ〴〵と感じたものもあつたであらう　『竹取物語』はかういふ時

代に出たのであつた。此の物語は無論天暦の源順の作ではない

七

『本朝文粋』に「奉右大臣」と題して、小野篁が藤原三守の第十二女を娶した、一種の間接的戀文ともいふべきものが載せてある

學生小野篁誠惶誠恐謹言。

竊以、仁山受塵、滔漢之勢寔峙、智水容露、浴日之潤良流。是以尼父結好於縲紲之生、呂公附嬪於驛亭之士。剛柔之位、不可得失、配偶之道、其來尚矣。傳承賢第十二娘、四德無雙、六行不闕。所謂君子之好仇、良人之高媛者也。篁才非馬卿、彈琴未能、身非鳳史、吹簫猶拙。獨對寒窗、恨日月之易過、孤臥冷席、歎長夜之不曙。幸願蒙府君之恩許、共同穴偕老之義。不堪宵蛾拂燭之迷、敢切朝藿向曦之務。篁誠惶誠恐謹言。

『竹取物語』に於ける五人の大身達のかぐや姫に對する心情を思はせるやうな手紙である。而して一々の文句を故事出典の由緒で埋めた物々しい極彩色振は、これが一青年のはかなき戀文かと驚かれるが、手紙に限らず、あらゆる文章に通じて、かういふ風に書くのが漢

文を尊重する王朝士太夫の常であつた。

吾等は轉じて『竹取物語』に於ける二篇の手紙を見るであらう。第一は唐土の貿易商王卿が火鼠の皮衣について、右大臣阿倍御主人に送つたものである。

火鼠の皮衣、辛うじて人を出だして、求めて奉る。今の世にも、昔の世にも、この皮衣はたやすくなきものなりけり。昔かしこき天竺のひじり、この國に持て渡りて侍りける西の山寺にありと聞き及びて、公に申して、辛うじて買ひ取りて奉る。價の金少なしと、國司使に申ししかば、王卿が物加へて買ひたり。今金五十兩賜はるべし。船の歸らむにつけてたび送れ。金賜はぬものならば、皮衣の質かへしたべ。

第二はかぐや姫が、昇天に際して、竹取の翁に書いて與へたものである。

この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬほどまで侍るべきを、侍らで過ぎわかれぬること、返す〲本意なくこそ覺え侍れ。脱ぎおく衣をかたみと見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見すて奉りてまかる、空よりも落ちぬべき心地す。

一つは唐人が稀有の寶物について隣國の大官に書き送つた書翰、一つは天人が一生の永き訣れに臨んで恩愛の老人に書き殘した書狀で、共に重々しく書けば書くべきものであるが、それが二つながら、故事を含め駢麗を輝かすが如き詞藻の翫びが一つもなくして、唯だ言ふ

べき事を、時代語でさら〳〵と書いてゐるだけである　何故であらうか　思ふにこれは、『竹取』の作者が典據を離れた駢麗の華文が書けぬ爲めではなくして、今を時めく駢麗の漢文に對する反抗心から、わざと書かなかつたのであらう。下らぬ事に勿體をつけて外國式に書くことを悦ぶ時流に反抗して、興味に富んだ重要事をも現用の平易な國言葉で面白く書けることを示したのであらう　紀貫之は自ら、「男のすなる日記といふものを、女もして試みむ」とて、女性を裝ふ筆名のもとに『土佐日記』を書いたと云つてゐるが、『竹取』の作者も、無名氏の覆面のもとに、同じ心を見せたのであらう。此の二つの手紙に見るところ、やがて此の物語全體の文章の特色であるが、此の簡易率直な、さら〳〵した文章が、貫部以來數十年榮えに榮えた駢麗繁縟の漢文に隣接したことを思ふと、吾等は作者の大膽と、世間の驚嘆とを想像せざるを得ぬ　同時に假名散文の出で來はじめの消息を想像して、驚異の感に打たれざるを得ぬ。『竹取物語』の作者は革命の氣を負うて假名文學の陣頭に立つたものである　久しき漢文の流行に對して出でた『竹取』の作者は、六朝の駢麗に對する韓退之であつた。ドライデン、ポープに對するワーズワースであつた。江戸以來の學者的文章に對する福澤諭吉であつた。福澤翁は『文字の教』の中に、今の學者は難語を用ゐるを名文と心得て例へば、仕官の周旋を知人に依賴する手紙ならば、一可然官途へ御推擧被下度、實は奏

任以上を企望致候へども、差向きの處窮鳥枝を選ぶに遑あらざれば、抱關擊柝固より辭する所に非ず」などと書くのを常とするが、まことに愚の骨頂で、かういふのはきッぱりと一よき役人の口へ御取持下され度、實は給金の多き方を望み候へども、差向の處金の多少を申すべき場合に無之、門番にても小使にても苦しからず候間」と書くべきであると云つてゐるが、從來の漢文に對する『竹取物語』の關係は、丁度福澤翁の假說した此の二篇の尺牘の對照そのまゝであつた。

とにかく數十年來盛行の漢文に對する『竹取物語』の關係は、太牢の滋味に對するさらさらのお茶漬であつた。極彩色に對する墨繪であつた。新製標音の假名によつて現はされた眼前通用の國語によつて、讀み誤る氣遣なく、久しうして疲れず、しかも面白い說話の連續を樂々と讀み進むことの出來た時人の歡喜は、いかばかりであつたであらう。『竹取物語』の出現に直面した時代の光景は、まづかうであつたのである。

八

『竹取物語』は當時の國語を假名に現はした最初の散文文學であつた。けれども世に全

くの創業はあり得ない。『竹取』の作者は、いかなる先行文學に暗示を得て彼れの新らしき文章を出來したのであらうか。これも亦想像によらねばならぬ、むづかしい問題であるが思ふに彼れは國文では『古事記』に則を求めたであらう、漢文では駢麗の煩縟をもたぬ漢文、殊に和臭を帶びた『靈異記』などに暗示を得たであらう。則を求め、暗示を得るといふのは、或は當たらぬかも知れぬ。作者の心事を有りのまゝにいへば、『古事記』や『靈異記』を面白く讀んで居る中に、頭の中に影を留めた、その名殘の調子が、我れ知らず迸り出でて筆に上つたのであらう。

例へば『竹取』の最初にある、

今は昔竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、竹をとりつゝ、よろづの事に使ひけり。名をば讃岐造麿となむいひける。その竹の中に、本光る竹ひとすぢありけり。

を讀んで『古事記』なる

昔新羅の國主の子、名は天之日矛といふあり。この人參渡りけり。參渡りけるゆゑは新羅の國に一つの沼あり。名を阿具沼といふ。この沼のほとりに、ある賤の女晝寢したりき。

に讀み合はせると、短く切り〳〵進むところ、餘計な修飾の全く無いところなどに於いて、非

常に調子の似たところがあることを發見するであらう。多少の味の違ひを拾へば、『古事記』が多く「あり」「なり」「き」で切れるところを、『竹取』が末尾に「けり」を添へて文に嬌態をつける所などにあるであらうが、二者の間にはとにかく著しき調子の類似を感ぜしめるものがある。一寸した短い句でも、「面なき事をばはちを捨つとはいひける」(竹取)、「一日に必ず千五百人なも生るゝ」(古事記)など讀みくらべて見ると、この二つの名著は、漢字と假名と、外觀に於いて相違してゐるのみで、同じ形にして讀み下せば同じ血統の兄弟文章なることが推察されるやうに思はれる。

『靈異記』との類似は最も多く對話を寫す場合に見出だされる。例へば、かぐや姫昇天の夜に於ける翁と衞兵との對話の一節なる、

翁のいはく、「かばかり守る所に、天の人にもまけんや」といひて、屋の上に居る人々にいはく、「つゆも物空にかけらば、ふと射殺し給へ」守る人々のいはく、「かばかりして守る所に、蝙蝠一つだにあらば、まづ射殺して、外にさらさんと思ひ侍る。」といふ。翁これを聞きてたのもしがり居り。

の前後を取つて、『靈異記』なる大安寺の僧惠勝と天竺の大王が罪によつて日本に生れ變はつたといふ獼猴との問答の一節、

僧問ひて言ふ「汝誰ぞや」と。獼猴答へて言ふ、「我は東天竺國の大王なり。……從者を妨ぐるに因りて罪報となり、猶ほ後生に此の獼猴の身を受け、此の社の神となる。故に斯の身を脱せんが爲めに、此の堂に居住して、我が爲めに法華經を讀め」と。言ふ「然らば何物をか供養する」と。時に獼猴答へて曰ふ、「物の供養すべきなし」と。僧の言ふ「此の村に籾多くあり、これを我が供養の料に宛てゝ經を讀ましめよ」と。獼猴答へて言ふ、「朝廷我れに賜ふと雖も、典主ありて、己が物と念ひて、我れに免さず、我れ恣まに用ゐず」と。僧言ふ、「供養なくは何爲てか經を讀み奉らむ」と

に比べると、「誰れ曰はく何」「誰れ曰はく何と」と、切りつゝ進む段々叙述が非常に近似してゐることが見出だされるであらう。思ふに是れは久しい仕來となつた漢文讀みの名殘で、『靈異記』はその面影を漢文の形式の間に留め、『竹取』は讀み下しの國文の中に殘したのであらう。かやうな事情から見ても、『竹取』が假名の流布といふ新しい環境の生んだ産物であつて、此の新機關と時代語との大膽なる使用が、作者をして新文學創始の偉業を成さしめた消息が解るやうに思はれる。

九

『竹取物語』の文章は『古事記』や『靈異記』や、『萬葉集』なる傳説長歌の序詞や『日本紀』『續日本紀』その他の漢文などに於けるいろ〳〵の文體が、作者の頭の中で久しく醗酵作用をつゞけた後に、始めて現はれた上澄であつた その文體が、一短く切れること二強く力あること三直なること一に特色を見出したのは、國文、漢文、いづれの傳統から見ても極めて自然の數であつたであらう そも〳〵一短二强三直一の三性質は王朝初期の祖先的なる假名散文に共通した主要なる特色であつた 而して此の特色を最も著しく見せてゐるのは『竹取』『伊勢』及び『土佐日記』である さるほどに短きものが段々に長くなつた 直きものが段々に曲折を加へて來た 而して强きものが段々に柔かみを帶びて來た 吾等は中位の長く、柔かく、曲折あるものを『宇津保物語』『落窪物語』等に於いて見ることが出來る。最上位の長く柔かく曲折あるものを『源氏物語』に於いて見出だすことが出來る。天道至れば則ち反る 吾等は此の極端に進んだ長、曲、柔が漸次に還元しつゝある姿を『大鏡』や『今昔物語』に於いて見ることが出來る、而して十分に還元した姿を錄

倉の軍記に於いて見出だすことが出來る。けれども還元した第二次の短、强、直はもとの短、强、直ではなくして、一旦經過したる長味、曲味、柔味を含蓄した短、强、直であつた、而してそれは公卿殿上人振の短、强、直ではなくして武人振の短、强、直であつた。『竹取』『伊勢』『土佐』に於ける短、强、直は鳥ならば鳩にも似たる姿であつた。『宇津保』『落窪』に於ける中位の長、柔、曲は、雉子、山鳥にも似たる姿であつた。『源氏物語』に於ける最上位の長、柔、曲は孔雀、鳳凰にも似たる姿であつた。而して『今昔』から軍記にかけての短、强、直は鳶乃至鷹、隼にも似たる姿であつた。王朝の初期より鎌倉の初期に至る散文文學文體の變遷の一面は、此の譬喩によつて、大凡そを想像することが出來るであらう。

斯の朝に於ける祖先散文なる三部古典『竹取』『伊勢』『土佐』の中で、短、强、直の三つの姿を最も純なる姿に於いて具へてゐるのは『竹取物語』である。『竹取』は冒頭から引きつづき、隨所にこの三つの姿を見せて居るが、左の短い一節の如きは、その代表的の一つであらう。

その返言はなくて、屋の上に飛車をよせて、「いざかぐや姬、穢きところにいかでか久しくおはせん」といふ。立て籠めたる所の戶、卽ちたゞあきにあきぬ。格子どもも、人はなくして開きぬ。嫗いだきて居たるかぐや姬外に出でぬ。えとゞむまじければたゞ

さし仰ぎて泣き居り。

吾等は此の一節に於いて『古事記』にも似、古典の漢文にも似たる風致を含みながら、一種の新らしくして同時に雅馴なる風格を具へてゐることを見出だすことが出來る。

吾等が『竹取』に於いて見る他の深き興味の文致は、同じ調子を疊んで、その間に變化をつける趣である。例へば車持皇子が玉の枝を得る爲めの航海の辛苦を述べる所に、

皇子答へてのたまはく、一昨々年の二月の十日頃に、難波より船に乘りて、海中に出でて、行かん方も知らず覺えしかど、思ふ事成らでは、世の中に生きて何かせんと思ひしかば、たゞ空しき風に任せてありく。命死なばいかゞはせん、生きてあらん限りは、かくありきて、蓬萊といふらん山に逢ふやと、浪にたゞよひ漕ぎありきて、我が國の內を離れてありき廻りしに、或時は浪荒れつゝ海の底にも入りぬべく、或時は風につけて、知らぬ國に吹き寄せられて、鬼のやうなるもの出で來て殺さんとしき。或時は來し方行く末も知らず、海にまぎれんとしき。或時には糧つきて、草の根を食物としき。或時は言はん方なくむくつけげなるもの來て、食ひかゝらんとしき。或時には海の貝を取りて命をつぐ。旅の空に助くべき人もなきところに、いろ／＼の病をして、行方すらも覺えず、船の行くに任せて、海に漂ひて、五百日といふ辰の時ばかりに、海の中に、遙かに山見ゆ。舟の

うちをなむせめて見る。海の上に漂へる山いと大きにてあり。その山の樣高くうるはし。

とある。短、強、直、三味の現はれは云ふまでもないが、殊に面白いのは「或時は」「或時には」を連發した趣である。これは恐らく、佛經によく見る重疊列擧の風體を學んだのであらうが、よく雄辯家の用ゐる「疊掛け」の味を見せて、何とも云はれぬ面白さである。吾等は曾て大隈重信侯が幼時を回想した演說を聞いた時に、侯が「我輩が生れた時は」と序出しして、「其の時は」「其の時は」と云つては、「ペルリが浦賀に」「尊皇攘夷の圖を擧げての爭ひが」と、凡そ六七回繰返されたのを聞いて、その面白さに打たれたことがあつた。西洋の雄辯家の演說に「その時〳〵」("When" "When")の反覆を聞くのは屢々のことである。「竹取」に於ける此の車持皇子の辯舌にも其の趣があつて實に面白い。また之れに加へて面白いのは、「或時」「或時」を小刻みに六たび刻んだ後に、

旅の空に助くべき人もなきところに、いろ〳〵の病をして、行方すらも覺えず、その行くに任せて、海に漂ひて、五百日といふ辰の時ばかりに、海の中に遙かに山見ゆ。

と、長く續いた暢びりした句を据ゑて、變化をつけたことで、この趣は譬へば、左右の絕壁にぶつかり〳〵白泡を立てゝ流れて來た溪流が、平野に入つて、靜かに淀んだ銀蛇の長い姿を見

せるのにも比すべきであらう。また一句々々の言葉選みや表現も、自然で落ちついて面白く例へば、

船の中をなんせめて見る。

などは、乗り組みの悉くが、寄つてたかッて、押し合ひへしあひ、先を爭ふ樣子が、手に取るやうで、『伊勢物語』の東下りの「船こぞりて泣きにけり」と同巧異曲の名文である　その外「ありく」「つぐ」「見ゆ」「あり」と現在法を連發しつゝ、その間に「殺さんとしき」「まぎれんとしき」と、過去法を挿んでは變化をつけた趣など、かう並べて見ると、此のわづかな數行にも拾ひきれぬ珠玉の名文句が蒔き散らされて居るやうに見える

最後に吾等が『竹取』の文致について最も面白く思ふのは、巧みに用ゐられたユウモアの味である。坪内逍遙博士は、その『舞踊論』に於いて、「竹取は我が古代文學中、類の無い名作で…立派にコメディになつてゐて、人物の數も十分である…作者は古今の文學者中有數のユウモリストと稱してもよからう」と云つて居られるが、いかにもその通りで、其の眼で見れば、此の物語には、語にも、句にも、一篇の作意にも、ユウモアの味があり、また作全體にユウモアの精神が行きわたつてゐるといふことも出來るであらう　先づ開卷そもく

の

こ(子、籠)になり給ふべき人なんめり

からが洒落で、剽輕な翁が――籠を作る竹の中においでなさる、成程――こ(子、籠)になつて下さる筈ぢや」――などと、地口に慰みつゝ、へうげた手つき足どりで、家路を辿る樣子が目に見えるやうではないか。やがて姫に結婚を勸めるところに

この世の人は男は女にあふことをす、女は男にあふことをす　その後なん門も廣くなり侍る。いかでかさる事なくてはおはしまさん。

とあるなども、詞が古代になつたので、今の我々には裃を着たやうにも聞こえるが、當時の人は聞くと同時にどッと笑ひ、少なくとも莞爾とし、或は羞恥を感じたところであらう。それから五人の大身貴族との談判の詰め開きや、「はちを捨つ」「たまさかる」「あへなし」の秀句のユウモア、但しこれは表面に現はれた洒落であるが、中には素知らぬ振をして、えらいユウモアの味を含んだのもあつて例へば、右大臣阿部御主人が唐土の王卿から送つて來た手紙に、――火鼠の裘を手に入れたのでお送りする不足金五十兩は立て替へたから、使に渡して下さい。お渡しなき場合には、物を返して下さい――とあるのを見て、狂喜したところを、

何仰す。今金少しの事にこそあんなれ。必ず送るべきものにこそあんなれ。嬉しくしておこせたるかなとて、唐土の方に向ひて伏し拜み給ふ。

と書いてあるが、これらも調子が古いので、今の耳には眞面目らしく聞こえるが、能狂言ぶりに試譯すると、

「何と仰せられる？　極少々の金のことぢや。屹度送り申すで御座らう。うれしくも手に入れすまいて、送りこしたことではある。イヤ歸命頂禮、王卿樣々！」と云つて、唐の方を向いて伏し拜まれた。

といふやうな味で、王卿や裘を幻に見て狂態をつくす風情を寫したのであらう。動作、應對、思考の洒落も、翁、嫗、五人の大身貴族、その他大抵の人の場合にあるが、最も意味の深いのは、恐らく翁、嫗、世界の浮かれ男、五人の大身貴族、六衞府の二千人と、日本中の男が擧つて、恍惚となり、狂態を見せ、命を投げ出し、智慧を盡くした揚句が、目的の人に飄飆と棚引き去られて、或は病みふし、或は形見を燒いて茫然自失した事であらう　小泉八雲は日本人の曾て考へたことのない、浦島の玉手筥から出た白い煙の行方を想像してゐるが、富士の煙の行方こそ、げに此の元祖小説の見せたユウモアの極致であらう。

一〇

以上『竹取物語』が小說出生期の主要相を具備したる仔細、構想の莊麗なること、文章の成立事情及び特殊相等について、あらましの記述を試みたが、その外に詮議すべき事は、人物の性格や、その取り合はせ、作者、及び成立の年代などであらう

『竹取物語』の人物は相應に多いが、おもなる者は翁と嫗、五人の大身貴族、帝及び姫の九人である。かういふ原始的の祖先作に對して近代的の性格論を持ち出すのも穩かでないが吾等には此の九人の人物がそれ〴〵自然に、無理なく、そして面白く出來て居り、殊にそれらの組合せが非常に面白く工夫されてゐるやうに思はれる。試みに、五人の大身を取つて見ると、最初の二人については、石作皇子をば「心したくみある人」車持皇子をば「心たばかりある人」と、先づ抽象的、總括的の性格觀を前置にして、やがて彼等が實行の委しき記述によつて、それを具體化して居る。そして前の抽象提示と後の實際描寫とが符節を合するやうにぴつたりと書けてゐる。次ぎなる三人の公卿については、安倍御主人を「財豐かに家廣き人」と云つた丈で、他の二人については、性格に關する何等の豫示をも見せてゐないが、これは恐らく、初めに心理的、次ぎに境遇的、次ぎに描寫具現的と、變化を付ける爲めであつたのであらう。五人の性格は、要するに、石作皇子は策略自慢、車持皇子は、他をごまかさうとする瞞着性、安倍御主人は金持のお人好し、大伴御行は勇みのぼんくら、石上麻呂は神經質な一

本氣の融通利かすといふのであるが、同じごまかし質にも、唯だ現存の品を捜し出すのと、經營慘憺して手の込んだ美術品を作り出すのとの變化をつけ、同じ好人物にも、金に飽かして求めるのと、勇氣を振つて死地に入るのと、小鳥を相手に人笑はれを演ずるのとの變化をつけたのは見上げた手腕である。 また之れと相應じて、煤にさびた石造りの骨董品、燦爛たる七寶細工、不思議な着物、靈なる動物に保護される寶玉小鳥の排泄する貝殼と、それ〴〵主人公にお誂ひ向きの品々を配合したのは、更に一段の手腕である。 またそれらの順序立が、手輕に拾つて來た古寺の廢り物から、無財の利巧者が奇計と詐欺とで大山を張つた美術品に移り、次ぎには有德の大臣が金に飽かして外國から取寄せた贋物、命がけの冒險で取らねばならぬ靈寶と、或は類似或は反對と、聯想の原理を巧みに應用しつゝ段々調子を高めて行つて、最後にはどか落ちに落ちて、小鳥の糞をつかんで目を廻す滑稽を見せたのは、漸層頓降の心理を巧みに掴んだもので、更に一段の冴えを見るべきものであらう。 皇子達を權謀家とし、大臣を愚直に寫したことには、何か作者の考があるらしいが、或は藤氏專權以前に於ける世態の實際を寫したものでもあらうか

以上は五人の貴族達だけについての論であるが、その他を見ても、翁は翁で、田舍育ちの好人物らしく、頻りに成金振を發揮しながら、それでゐて人に優しく、情に厚く、姫を可愛がり男

達にも同情し、爵位を尊み、國法を重んずるといふ諸性情が渾然と融和して一個の生きた人物になつて居り、姫は姫で、竹の中に生れ、忽ちに長大し、あらゆる男性に對して超越的の應酬をなしつゝ、遂に昇天するといふ、婚嫁の一義を除いては、立派に情を盡くし、その上に日本式の尊王心までを見せつゝ、かやうに複雜な諸性質を統一して、これも立派に生きた存在を見せてゐる。殊に翁と姫とがしきりにユウモアを飛ばしながら、そのユウモアに、一人は俗人の好々爺らしく、一人は人界を超越した天女らしい差別のあるのも面白い、また帝が姫の美にあくがれながら、立派に正義中庸を守られて、姫の我儘をゆるしつゝ、久しき書信の往復に折衷式愛情を享樂されるのも、一種の性格で、恐らく日本人ならでは寫し得ぬ特別性格であらう

人物の性格や組合せなどについても、戀をいへば限りがない。或は戀する男の中に、智德圓滿の人物や、押の強き亂暴者や、自由に風を喚び身を變へる幻術者などを加へたならば、などいふことも考へられるであらう。或は五人の人物を孤立させず、各々の間に葛藤をもたせつゝ、三角四角の複雜な關係を辿らせて見たならば、などいふことも考へられるであらうしかしながらそれは時所位を顧みずして難きを責むるの論である。吾等は個々の傳說記事のみがあつた時代に於いて、始めて、複式に結構された空想の新文學を創作し、印度支那に

材を求めながら、彼等とはすつかり面目を異にした日本式の新様文學を成した無名の作家の創造力を歎美すべきである

『竹取物語』の成立年代については、加納諸平が『竹取物語考』の文武朝、藤原宮説を最も古しとするが、＝これは作中の主要人物が其の頃に榮えた事例へば阿倍御主人の右大臣期が大寶元年（一三六一）からの三年間であつたといふやうな事によるのであるが、小説を事實視するのは、昔も今も低級の文學好きに共通の事で、かういふ人があればこそ、『竹取』の作者が、わざと百數十年前に於ける實在者の名を假りたのであらう＝この餘りにも珍しい奈良朝以前説は暫らく論外として、その外で最も古き年代附を試みたのは藤卷櫻村の弘仁三年（一四七二）以後説で、最も新しいのは本居宣長の延喜（最終が一五八二）以後説であらう。此の百餘年間に、貞觀以前、延喜以前などの諸説が試みられてゐるが、承和六年（一四九九）に於ける遣唐留學の醫官菅原梶成の南海に於ける難船漂流の記事を上限とし、『大和物語』に源嘉種が宇多天皇の皇女桂宮孚子内親王に親み、宮が八月十五夜に、たまさかの逢瀨を振切つて、父帝の召しに參せられるのを怨んで、「竹取のよゝに泣きつゝとゞめけむ君は君にと今宵しも行く」と詠んだのが、たしかに此の物語の存在を證してゐるやうに見える、此の歌の詠まれたらしい延喜（元年は一五六一）の初め時分を下限とし、その他に假名の實用や、富士山

が貞觀六年(一五二四)に噴火して『古今集』の撰まれた延喜五年には、もう煙が立たなかつたことや、藤原氏專權の影の少しも見えぬ事や、業平、小町等の世にめでられた好色時代を暗示してゐることや、文體に於いて漢文に隣接した影の著しく見えることや、挿入の和歌が古今以前、六歌仙時代の姿を見せてゐることや、都良香が『富士山記』の中に、貞觀十七年十一月の五日に、富士の巓を離るゝこと一尺ばかりの所で、白衣の天女が二人相舞を奏するのを、土人の見たことを書いてあることや、いろ〳〵の條件によつて、上限下限を押し狹めて見ると、結局淸和朝の末葉、貞觀の末頃に書かれたもののやうに思はれる。この物語の成立期に關しては、岡一男氏の周到なる考證が最も正中を得てゐるであらう。

『竹取物語』の作者については、漠然たる言傳の「源順說」以外に一つもなかつた。漠然たる言傳、もとより輕んずべきではないが、史實視された彼れの文勳の中に此の物語の作家たることを暗示すべき片影もなくその名を負うた確實な作との間に類似の跡をいさゝかも辿ることが出來ず、のみならず餘りに作風の相違した『將門記』『宇津保物語』『落窪物語』などが、掃寄式に此の朝臣の作と視られるといふ、兼ぬるに過ぎて却つて信を弱むるの嫌ひもある上に、前に想定した貞觀末年の說とも甚だしく相違して居るところを見ると、此の言傳おそらく好事者の架空から生れたものであらう　之れを外にしての推定には、唯だ一つ

最近發表された岡一男氏の僧正遍昭說がある　吾等は此の物語に見える歌と遍昭の歌との間に、趣味や修辭癖の一致を見出だしかねるので、俄に左袒することは出來ぬが彼れは五節の入るを惜しんでは「天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ」と歌つた人である　初瀨に籠つてゐた時に、小野小町から「岩の上に旅寢をすればいと寒し苔の衣をわれにかさなむ」と詠みかけられて、世を捨てた身に貸すべき衣の蓄へはないが「かさねばうとしいざ二人ねむ」と返しした人である。女郞花を手折るとては、花に向つて、墮落したとは囃してはくれるな「名にめでて折れるばかりぞ」と詠めた人である　而して前半生に思ふまゝ任俗生活を享樂して後に、時に感じて世に背いた人である　此の僧正ならば、その閱歷、性格、殊にユウモアに富んだ趣味性から見て、この物語を書かぬとも限るまい。それらしい作者の更に見渡されぬ當時に於いて、推定に値する第一人者は、やはり桓武天皇の御孫なる、この僧正遍昭であらう

二

小說は我國の文學の中、最も主要なる種別の一つである。

『竹取』は最も偉大なる小說『源氏物語』の作者によつて、小說の出で來はじめの最初の作と銘を打たれた作である。

『竹取』は小說發生の機緣をなす二大資格を立派に具へて多くの說話を巧みに組み合はせ、同時に空想の娛樂世界を藝術的に創造したものである

『竹取』はその構成上、開展、漸層、齊整、統一等の諸相に於いて、技群の手際を見せてゐる

『竹取』は新發表機關の假名を最初に散文文學に活用して、決前生後の鮮かな技巧を見せてゐる

『竹取』は人を寫し、事を叙し、自然を描く上に於いて、それ〴〵に優れた技巧を見せてゐる

『竹取』は滑稽、ユウモアを寫す上に於いて、言葉、趣意、構想の凡てに通じて、非凡の技倆を見せてゐる

『竹取』は材を內外古今に求めながらそれらをば、すツかり日本的、平安朝的、此の作者的の特色あるものに仕上げ、同時に、時代をも、國をも人間をも超越した高き一面を見せてゐる

『竹取』は人を樂ませ、笑はせると同時に人を諷じ、教へ、向上せしめる一面をも持つてゐる

吾等は各種の文學につき、自ら古を作した祖先作に對しては特に微細深切なる研究をさゝげて、その秘幽を闡くべきものと思ふ

量に於いて極めて微々たる『竹取物語』に對して、過分とも放漫とも見らるべき委曲の說明批評を試みた所以である

第九　愛情の珠玉を聯ねた「伊勢物語」

一

「竹取物語」は我朝に於ける最初の小說として、啻に新らしい文學の先鞭を着けたのみならず、趣向、文章の上に於いても驚くべき成績を見せた、けれども「竹取」の文學相には、概して事を叙するに專らにして、人を寫すに疎かなる傾きがあつた。人を寫すにも、趣向の進行や、人物相互の交渉を面白くすることに專らにして、感情の微妙な曲折や陰影を

在原業平朝臣　大和不退寺藏

寫すに疎かなる傾きがあつた。此の缺陷を補つて、趣向の構成や、事件の開展、推移、變化、統一などには殆んど目をくれず、一意專心、愛情躍動の機を捉へて、その美しい影を寫さうとした

のが『伊勢物語』である。

無論『伊勢』の作者は『竹取』の特色と缺陷とに心づき、自ら之れを補はうとして新らしい試みをしたのではない。彼れは恐らく『竹取』をば、自分の書く物語に關係のある文學とは思はなかつたであらう。而して外縁には殆んど目をくれずに、自ら我が道を行いて、あの不思議な新樣式の文學を成したのであらう。

『竹取』が一人の作者によつて一度に纏められたものであるのに對して『伊勢』は、幾人かの手にかゝつて成立つたもののやうに見える。その成立の段取を想像するとたとへば、こゝに戀愛道の卓越者で同時に歌を善くする美貌の大宮人があつた。彼れは實境に觸れては詠み捨て詠み捨てする歌に對して、唯だ歌その物を記すだけでは、自分の眞意を傳へるに足らぬことを感じた。世間普通の詞書は無論彼れを滿足させることが出來なかつたであらう。かくして彼れは歌に現はした我が心境を、幾らかでも明らかにしたい希望から、歌に散文の添加を施して、足らぬ詞を補ひ、餘る心を暗示し、或は朧ろなる始め終はりを確かならしめようとした。かやうな添加を試みる中に、此の詞書やうの言ひ添へが、近世の謂はゆる散文詩ともいふべき美趣を帶びてゐるのに、我れながら見惚れつゝ、屢ゝ長文句の帶叙をも試みては、その短長參差の變化ある文句の排列にほゝゑんだ。その中にふと氣づいたのは

此の心境詠出の我が歌を他人の事にして書いたら、どうかといふ事であつた。追ツかけて、他人の事にする以上は、昔今の他人の作を取り交せ、或は作りかへるのも面白からうといふ事も考へたであらう。その歌群を、情を知る抑もから命終の最後まで、齡の順序に展列して、或一人の情愛生活史の形にするのが面白いといふ事も考へたであらう。また他人の事にする以上は、今日前の事にしては氣が利かぬ、これは寧ろ數十年繰り上げて平安奠都の間際の事にするのが面白い、などと、「竹取」の作者が考へたやうな事をも考へたであらう。かやうな考へが、一人の心に起こつて、その一人が全部を纏めたのか、或は二人、三人、乃至五人がつぎ〳〵に考へついて、次ぎ〳〵に足して行つたのか、「昔男ありけり」の新らしい共通形式を試みたのは、最初の作家か、二代目か、三代目か。これらの事は今から定かに知るよしもないが、もし大膽なる想像を許されるならば、少なくとも歌の前後に詞書を長めたやうな散文詩を纏はせることと、「けり」の面白き重疊用とは、在五中將業平が創めたのであらう。或は一歩進んで、「昔男ありけり」の統一形式も、業平の試みであつたのかも知れぬ。とにかく歌と情生活との兩方に於いて一代の羨望を集めた在五業平が、同時に風變はりな歌物語式小說の基礎をもおいたので、それより天曆時分に至る百年前後の間に、此の朝臣の流風を慕ふ才人達により、添加、齊整、統一の作用が加へられて、今日吾等の見るが如き「伊勢物語」

が出來たのであらう。

『伊勢物語』は百二十五段の歌物語から成つて居る。そして歌を中心として、美しい人情說話を藝術的に創作したものである。複式構成と空想による藝術的創作と、此の小說發生の二大資格を、『竹取』の葛藤式統一式とは反對なる散列式、櫛齒式に備へたものである。これが『伊勢物語』の『竹取』と相並んで異風な祖先的小說と云はれる所以で、已に前章に說いたところであるが、尙ほ之れに添へて豫め述ぶべき事は、此の物語が思想及び文章の兩面に於いて、至れる美しさと、愛らしさと、面白さと、をかしさとを有つてゐることである。此の物語が長く國民の愛敬を得て、歌道及び人情の教訓書とまで見られたのは、內容形式の兩方面に於ける此の至純、至美の性質によるのであらう。

二

『伊勢物語』の內容美は、愛情の種々相を現はしたところにある。平安朝に於ける戀愛道の神髓を現はしたところにある。平安朝に於ける戀愛生活の登り坂の姿を現はしたところにある。ひそかに思ふに、此物語に於ける男女愛の現はれに三樣の相があつた。第一は

思ふまゝを素直に言ふことである　第二は美しく求め美しく受けることである　第三は男は強ひず、女は辱かしめざることである。これらの戀愛諸相が、美しき歌を中心として美しく想像され、美しく言ひ表はされたこと、これが＝伊勢物語＝の藝術價値の中心であらう

吾等は第一に＝伊勢物語＝の美の一つの特色として、稚々しき文章の美を擧げたい　物語の第二段の初めに、かうある。

昔男ありけり　奈良の京は離れ、この京は人の家まだ定まらざりける時に、西の京に女ありけり　その女世の人にはまされりけり、かたちよりは心なむまされりける、ひとりのみにもあらざりけらし……

平安京遷都早々の頃、西の京に容貌も美しいが、容貌よりは心ばせの更に美しい一人の女があつた、といふのであるが、それを束ね書きにせずして、＝西の京に女があつた＝その女は世間の人よりはすぐれてゐた＝縹緻よりも心持の方がすぐれてゐた＝と、思ひ出すまゝに繼ぎ足し繼ぎ足しして行く調子は、まるで三歳五歳の頑是ない子供の詞そッくりではないか。子供は言ふであらう

今日公園で小母さんに逢つてよ、それあ好い小母さんよ　ほんとに親切な小母さんよ。あたしにキヤラメル下さつたわ。

と。『伊勢』の文章は全く此の子供の詞そのまゝである。後世の文章は、多く之れを概括して、「今日公園に好い親切な小母さんがゐて、私にお菓子を下さつた」と書くのであるが、かういふ大人風の文章に對して、此の文章の可憐さは實に言語道斷である。類例は殆んど無限で、

昔男、武藏の國までまどひ歩きけり。さてその國の女をよばひけり。父はこと人にあはせむといひけるを、母なむあてなる人に心づけたりける。父はなほ人にて、母なむ藤原なりける。さてなむあてなる人にと思ひける。(九段)

むかし女はらから二人ありけり。一人は賤しき男の貧しき、一人はあてなる男の德ある、もちたりけり。賤しき男もたる、十二月の晦月に、袍を洗ひて手づから張りけり。志はいたしけれど、さる賤しき業も習はざりければ、袍の肩を張り破りてけり。せむ方もなくて、たゞ泣きに泣きけり。(四十段)

昔、惟喬の親王と申す親王おはしましけり。山崎のあなたに水無瀨といふところに宮ありけり。年ごとの櫻の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしましけり。(八十一段)

など皆この可憐無類の風致を見せてゐるが、この幼孩の片言にも似たる、おどけない、可愛ら

しい文章の妙味に於いて、『伊勢物語』は、恐らく古今無類であらう。而して『伊勢』の文章全體が概していふと、この調子のあどけなさを含んでゐるので、吾等は此の物語の主要なる特色の一つを此の點に見出だすのも、決して無理でないと考へる。

『伊勢物語』に見出ださるゝ第二の表現美は、書き始めの「昔男ありけり」によつて調子を附けられたる美觀ともいふべきであらう。「昔壯士あり」「昔娘子あり」といふ風の往事を記す叙述法は、已に、『古事記』にも、『萬葉集』にも、『風土記』にも、『日本靈異記』にもあつた。けれども「昔何々ありけり」といふ叙述法は稀れであつた。無論隣接した時代に於いては、『竹取』の如く此の助動詞を折々用ゐたのもある。和歌の詞書などにも、多少はあつたであらう。けれども、此の助動詞を、櫛の齒を引くが如く、百二十五段の全部に連用し、また各段の中にも繰返して、之れを一種の格式としたるが如きは、前代未聞の事であつた。『伊勢』の作者が此の前代未聞なる一助動詞の頻繁なる連續使用を、一種の修辭特色と意識して敢てしたかどうかは測り知られぬことであるが、たとひ胸の彿の誘ひによつて無意識に導かれたにせよ、百二十五段に亘つて、殆んど行毎に之れを繰返すといふのは大膽なる冒險で、而して此の冒險の成功は、言語使用の藝術に於ける一種の離れ業とも、發明ともいふべ

塗籠本伊勢物語　（大島雅太郎氏藏）

きものである。ソヴェート・ロシヤのレニングラードで日本文學を講じて居るコルパクチ女史は、「伊勢物語に於けるけりの研究」に於いて、此の助動詞の豐富なる表現相を說き、それが此の物語の作者により効果的に使ひこなされて、微妙な感情の陰影を髣髴させて居ることを說いてゐるが、まことに異人心あり王朝天才の心奥を忖度すといふべきである。いかにも「けり」には「あり」、「なり」「き」「たり」「つ」「ぬ」等の同類語のかけても及ばぬ廣き用途があり、こまやかなる影があ

り、轉變の作用があり、應用して厭かれざる德がある　過去を示すと共に現在を示し、斷定すると共に咏嘆を見せ、耳障りのよき音を具して、それ自身だけでもよく落ちつき、他の語に附着してもよく馴染むといふ、圓轉滑脱にして同時に牢乎たる定着性を持つてゐる。　此の物語劈頭の數行が之れを證據立てるであらう

　昔男ありけり。　奈良の京、春日の里に知るよしして、狩にいきけり。　この里にいとなまめいたる女兄弟住みけり。　この男かいま見てけり。　おもほえず古里に、いともはしたなくてありければ、心地まどひにけり。　男着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。　その男信夫摺の狩衣をなむ着たりける。

この短い間に「けり」が五回、「ける」二「けれ」一を加へて七回まで、つゞけざまに用ゐられて居るが、それで少しもうるさくないのみならず、一種の趣味愛嬌をさへ感ずるといふのは、言葉の不思議で、同時に天才の筆が見せた妙技ともいふべきものであらう。「昔男ありけり」の同じ序出で、文の連立を見せたのは、譬へば並樹の美、行雁の美である。　二行とおかず「けり」を繰返して不厭の美を感ぜしめたのは、瓔珞の數取に常愛の名珠をつゞけ用ゐたやうなものである。「伊勢」の文章の特色美が「昔男ありけり」や「けり」の頻繁たる反覆使用にあることは、時々離れ〴〵の使用では特色を成さぬのを見ても知られる　例へば「土

佐日記』の

昔阿倍の仲麿といひける人は、唐土に渡りて、歸り來ける時に、船に乘るべきところにて
かの國人、馬の餞し、別かれ惜しみて、かしこの詩作りなどしける。あかずやありけむ、二
十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。

などは、多分『伊勢』から得た文致であらうが、たま〳〵の使用では、誰れも之れを特色とは
見ぬであらう。無論「昔男ありけり」や「けり」の連續使用が必ずしもむづかしいとい
ふのではないまた必ずしもよいといふのではない。『伊勢』の作者が始めて見出だし、始め
て試み、而して巧みに用ゐ、立派に成功してその特色を發揮したのを偉いといふのである

三

吾等が『伊勢物語』に心惹かるゝ第三は、此の物語の男女に於ける優しい情の現はれで
ある。身をつみて人の痛さを知る深い同情である。人生の必至に泣きつゝ情の自然作用
を認めて人を許す寛容の心である。眞情に隨喜して身をさゝげる態度である。常に人の
爲めよかれと願ふ親切心である。而して同時に是等の心持に相應した美しい文章の表現

である　此の例は「西の京の女」から、「東下り」「紀有常」「あかぬ別れ」、その他無數にあるが、こゝには二十三段「あら玉の年の三年」の全文を擧げる

昔男女片田舍にすみけり、男宮仕しにとて別かれを惜みて行きけるまゝに、三年來ざりければ、待ちわびたりけるに、またいと懇ろに言ひける人に、今宵は逢はむと契りたりけるに、かの男來たりけり　この戸あけ給へと叩きけれどあけで、歌をなむ詠みて出だしたりける

あら玉の年の三年を待ちわびて

試譯

昔夫婦の者が片田舍に住んでゐた。男は生活のために奉公するとて、睦ましい仲の別かれを惜み〳〵出て行つたが、そのまゝ音沙汰がなく、三年待つたが、歸つて來ないので、困り切つて、どうしようかと思つて居ると、茲にまた懇ろに心を寄せる人があつて、その人に、

仕方がない、何日の夜逢ひませう」と約束して、その晩にその男を迎へて居ると、丁度そこへ、前の夫が歸つて來たのであつた。戸を叩いて、昔の懷かしい聲で、「開けて下さい、開けて下さい」といふが、明けずに歌を詠んで、

長い〳〵三年を待ちに待つたが、つい待ちかねて、しかも今夜といふ今夜＝あゝ

たゞこよひこそ新枕すれ

といひ出だしたりければ、

梓弓まゆみつき弓年をへて

わがせしがごとうるはしみせよ

といひて、往なむとしければ、女

梓弓ひけどひかねど昔より

こゝろは君によりにしものを

といひけれど、男歸りにけり　女いと悲し

悔しい！＝新しい人を迎へて、枕をかはすところです

と呼びかけると、男は

丈夫はいろ〳〵の弓を手にして大事にするもの、その如く私は長年、いろ〳〵の境遇に出くはしつゝも、變はることなく、お前を愛して來た、その如くお前も今度の新しい人を愛してお上げなさい。

と云つて、立ち去らうとする。女は

梓弓と仰しやれば、弓は引くもの、君が共住みして私の手を引いて下さると、離れてゐて引いて下さらないとにかゝはらず、私は始終變はらず、君に心を寄せて居りましたのに……

と云つたけれど、男は歸つてしまつた。女はたまらなく悲しくなつて、すぐに立ち出でて、

くて、後に立ちて追ひ行けど、え追ひつかで、清水のところにふしにけり　そこなる石に、およびの血して書きつけける

あひ思はで離れぬる人をとゞめかね
　わが身は今ぞ消えはてぬめる

と書きて、いたづらになりにけり

後を追つかけたが、どうして男の足に追ひつけよう　その中に清水のある所まで來ると、到頭疲れ切つて倒れてしまつた。傍らに大きな石がある。それに指から出る血で書きつけた歌は、

私はこれほど思つてゐるのに、思ひかへさず立ち去つてしまつた人を、つひにとどめかねたのだ。不幸な我が身はこのまゝこゝで死んでしまふのであらう。

と書いたが、到頭その歌の如く、そのまゝ空しくなつてしまつたのであつた

男は生活苦を救ふ爲め、妻の身を安樂にする爲めに、相愛の仲を別かれたのである。女は、夫が郷里を離れて、子あるは五年、子なきは三年に及べば、改めて嫁ぐことを許した當時の法律の許容期限を十分に待ちつくし待ちわびて、懇ろに愛を求める新しき男に許したのである　しかも始めて新しき男を迎へたその夜にもとの夫が、財を嚢に充たし、愛情を胸に滿たして、

歸つて來て戸を叩いたのである。彼れにも是れにも責むべきところがない。いづれをも責むるは、難きを求むるものであらう。けれども、男尊の習慣と俗情の昂奮とは、恐らく此の場合に前夫の怒鳴り込むか、乃至は女を取戻す謀をめぐらすのを自然とするであらう。けれども、男は道理の前に沈默して、悲しく綺麗にあきらめた。單にきれいに諦めたのみならず、新しく出來た一對の幸福を祈つて別かれた。何といふ美しい獻身の諦めであらう。女は前夫がやさしい歌を詠み殘して立ち去る影に、堪らなくなつて、飛び出してその後を慕つた。及ばずして倒れると、傍らなる石の面に指の血もて、愛と、悔と、悲みと、存へ得ぬ豫想とを書いて、やがて死んだ。踐むべき道は踐み、盡くすべき義理はつくしながら、運命にさいなまれ、板挾みの境遇に立つた女として、是れ以上の分別と覺悟はあるまい。吾等は此の說話が事實のまゝか、理想化か、或は全くの空想的創作かを知らぬがとにかく斯樣な男女の境遇と分別覺悟とを、此のやうに表現した作者の心を床しむの情に堪へず、同時に之れを平安朝に於ける男女の誇りとも、日本國民性の誇りとも思ふのである。

讀者は英國近代の文豪テニスンの名作『エノック・アーデン』(Enoch Arden)を知られるであらう。而して英國人が此の長詩に於ける男女、殊にエノックが十何年にわたる遠國の旅から歸つて來て、その妻が我が親友の妻となつてゐるのを覗きつゝ、その幸福を祈つて靜か

に立ち去るといふ獻身的行爲を、イギリス國民性の立派な現はれとして、彼等の孰れとも誇りともして居ることを知られるであらう「エノック・アーデン」の荒筋はかうである　而して此の物語詩は、事實をほんの少し潤飾したものだといはれる

イギリスの或海岸に、船乘の子のエノック・アーデンと、粉屋の子のフィリップといふ二人の可愛らしい子供がゐた。また同じ里にアニイといふ可愛いゝ女兒がゐて、此の三人が始終仲よく遊んでゐたが、年頃になると、いつしかアニイが、二人の男の兒が愛の競爭の的となつた。善良な男の兒等は少しも不正な競爭をしなかつたが、アニイの心が自然にエノックの方に傾いたのであらう、或日アニイがエノックと森陰でさゝやいてゐる親しい素振を、ちらと見て、フィリップは、アニイをば悲しく男らしくあきらめた。

エノックとアニイとは、やがて夫婦となつて子供をまうけた。暫らく幸福に暮らしてゐる中に、エノックは大怪我をして職を失つた。それから困窮の幾年かをつゞけたが、エノックは妻を安樂にし、子供を教育する爲めに、意を決して、アニイの切に諫めるのをも聽かず、船乘となつて遠く東洋に出かけて行つた。

彼れは所期の財を十二分に蓄へて、めでたく歸航の途についたが、暴風に逢ひ難破して、絶海の孤島にびわしい月日を過ごすこと十餘年、幸に救はれて故郷に歸つて見ると、家庭の大變化は、彼れの心を顚倒させた。

エノックに別かれて後、アニィは、夫の殘して行つた資本で、小さい商賣を始めたが、馴れぬ業の悲しさは、やがて元をも子をも失つて、貧苦のどん底に陷つた。そこへ助ける神として現はれたのが、幼馴染のフィリップである。彼れは優しい心を以てアニィを慰め、子供等にも立派に教育を受けさせた。そして長い間の親切は、いつしか子供等をして彼れを父と呼ばしめるやうになつた。その中に數年を過ぎて、エノックの乘つた船の難破が傳へられ、彼れの死までが幾たびか噂された。その頃である、フィリップが長き〳〵戀を訴へて、アニィに同棲を求めたのは。アニィは感謝と驚きと悲みの念に打たれつゝ、エノックとの別後十年まで待つことを哀願した。十年はやがて來た。彼女はまた一月の延期を賴んだ。延期が幾度か繰返されて、彼女は遂にフィリップと同棲した、そしてやがてフィリツプの子をも生んだ。そしてやがてフィリップとアニィと、胤ちがひの子供達とが團欒して幸福に暮らしてゐるところへ、敗殘のエノックが、よろける足を踏みしめつゝ、希望に輝いて歸つて來たのである。

エノックは先づ小さな旅館に泊つた。そして旅館の主婦からアニィの再婚を聞いた。そして或夜足を偸んでアニィの家の窓先に佇みつゝ、室内の和氣藹々をのぞくと同時に、昂奮の餘り殆んど氣絕しようとしたが、やうやく取り直して、

神よ、アニィの平和をかき亂さゞる力を與へ給へ。

と祈念しつゝ、宿に歸り、一切を主婦に打明け、我が死するまで誰れにも漏らしてくれるなと口禁めした。そして生ける屍を望みなき勞役に使ひつゝ、久しからずして淋しく死んだ。

相違を拾へば、『伊勢』の三年に對する『エノク・アーデン』の十年、前者の夫が知らずに音づれたのに對して後者の夫は知りつゝ來て、音づれずに歸り、前者では女が夫の後を慕ひ出でて死んだのに對して、後者では男が默つて身を引いて忍んで死ぬる事の二三である けれども、精神的交渉に於いては、全く符節を合はせるやうな說話である。要するに、善人同士が互に義理人情を盡くしつゝ、運命に弄ばれて不測の切羽に直面し、死にもまさる忍苦と捨身の温情とによつて他の幸を成さうとした物語であるが彼れと是れとを比較して、境遇にも心情にも恐らく勝劣がないであらう。藝術的表現に於いても、彼れは長く是れは短く彼れは叙事詩、これは歌物語、彼れは近代的技巧をつくし、是れは子供の片言か、土から掘り出した璞玉かといふやうな差はあるが、風味はそれ〴〵で、長きもの必ずしも優れりとは云はれず、短きものに、却つて古聖の語錄にも比すべき簡樸の味があり、無駄なしの骨髓に血肉の含蓄された趣があつて、一段の尊さがあるとも云へるであらう　吾等は小品合成式の書作の中に、獨立して鑑賞せらるべき名篇の挿入されたのを見ることが屢々ある。それは例へば『枕の草子』の中に立派な短篇小說を見出だし、『徒然草』の中に優れた一篇の論文を見

出だすの類であるが、この「あら玉の年の三年」の物語の如きも、これ一章を引き離しても、時代の光となり、國民の誇りとなるべき珠玉の名篇であらう。而して愛情に生き、愛情に死し、他の過を寛容してその幸を成した美しい說話が、その他にも少なからずあるのを見るとこの點に『伊勢物語』の美を見出だすのも、不道理ではないと考へる。

四

吾等が『伊勢物語』に見る特殊味の第四は、一種の時代暗示である。廣くいふと、物語の中の男女が戀愛に生死し、歌に好く有樣は、悉く時代相の反映であるが、吾等がこゝにいふのは、此の時代の社會の全面を壓し盡くした外戚政策、藤氏專權の影が、此の物語に於いて、朧化的、暗示的、象徵的の形を取り、角を丸めて、遠慮深く、美しく、寫し出されて居ることである。『伊勢』の作者は、此の時勢に對して滿腔の不平憤懣を持つてゐたであらう。けれども彼れはその不平憤懣を抑へて、極めて控へ目に言ひ現はした。時としてはすつかり換質して穩かに美しく言ひ現はした。中には、自己の悲境を客觀化して、遠い世の幻を見るやうに書いたところもある。さう書く結果が、知らず〳〵我が悲境を笑ふといふユウモアの最高境を見

せるやうになつたところもある。おもふに業平の當時に於いて、此の外戚政策の犠牲となつて最大悲痛の憂目を見られたのは、帝位に卽くべくして卽かれなかつた惟喬親王と、親王に近侍した紀有常、在原業平の二人であらう。業平の放縱生活は此の失望の結果の逸れ業であつたとも云はれる位であるが、『伊勢物語』の作者はその結果の一つなる「東下り」を寫して、

昔男ありけり。その男、身をやうなきものに思ひなして、京には居らじ、東の方にすむべき所もとめむとて往きけり。

と書いてある。彼れの思ふ通りを無遠慮に書けば、仕へ奉る親王は失脚される、思ふ女は隔離される、藤氏一門が極端に跋扈する、こんな世の中に有りがひのない無用の身體だ、どうでもなれと棄鉢になつて、こんな都に誰れが居てやるものかと、唾を吐きかけて、足蹴にして東國へ往つた、といふところであらうが、それを遠い昔の事にして、どこやらの男が、身をもてあまして放浪の旅に出かけたやうに書いてあるのは、一種の朧寫で、同時に客觀化、文學化ではないか。やがて武藏國隅田川に着いて渡舟に乘るところをば、

この川の邊りに群れゐて、思ひやれば限りなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや船に乘れ、日も暮れなむといふに、乘りて渡らむとするに、皆人ものわびしくて、京

に思ふ人なきにしもあらず。

と書いてある。大野を流れる大河を渡るについて、後ろが振返られ、淋しい人目や、心なき船頭の罵りに、そゞろ旅愁を覺えて、前に都を立つ時は「京には居らじ」などと大氣饒を揚げて來たが、かうなると物悲しく、京の愛人の事などが身に沁みて偲ばれた、といふのであらう。大題を小倣し、大憤怒を美しく換質してきれいに書いた趣、自ら嘲り自分を笑つてゐる淋しいユウモアの味が、讀む者を誘つて深い哀愁の歡びを感ぜしめるではないか

やがて紀有常の段になると

昔紀の有常といふ人ありけり三代の帝に仕うまつりて、時に逢ひけれど、後は世かはり時うつりにければ、世の常の人のごともあらず。人がらは心うつくしう、貴なる事を好みて、他人にも似ず、世のわたらひ心もなく貧しくても、なほ昔よ

嵯峨本伊勢物語　（安田文庫藏）

かりし時の心ながらに、世の常の事も知らず　年頃あひ馴れたる妻、やう〳〵床離れて、遂に尼になりて、姉のさきだちて尼になりにけるが許へ行く　男まことに睦ましきことこそなかりけれ、今はとて行くを、いとあはれとは思ひけれど、貧しければするわざもなかりけり　思ひわびて、懇ろに相語らひける女だちの許に、「かう〳〵、今はとてまかるを、何事も、いさゝかなる事もえせでつかはすこと」と書きて、奥に

手を折りてへにける年をかぞふれば
十といひつゝ四つはへにけり

この友だちこれを見て、いと哀れと思ひて、夜の物まで贈りてよめる、

年だにも十とて四つはへにけるを
いくたび君をたのみ來ぬらむ

かく言ひやりたりければ、よろこびにそへて、

これやこの天の羽衣うべしこそ
君がみけしにたてまつりけれ

悦びに堪へかねて、また、

秋や來る露やまがふとおもふまで

あるは涙のふるにぞありける

例の優しい人情の現はれで、夫は別かれる妻の悪口をいはず、友達は友の妻が別かるゝ迄の必至の運命に泣いて、温く同情して志を致すといふ風の、正しき道を踏み、人の幸を成さうとする心持の現はれは、實に美しいが、皮一重めくれば、作者の眞意は恐らく、藤原氏に虐げられた仲間の悲境を象徴的に暗示しつゝ、同時に自ら憫み自ら笑ふユウモアの味を見せたのであらう。「伊勢物語」については、或は業平が異様な形式の文學に憤懣の氣を遣つたものであると云ふ人もある。或は讀者を笑ひ興ぜしめる爲めに、わざと滑稽の筆を弄んだのだといふ人もある　いづれにも一面の道理はあらう　けれども、より深き事實は、作者の持つ優れた文學的素質が、彼れに我が悲境をも客觀化して、之れを藝術の資料と觀る餘裕を與へ、その結果、極度の悲境までが換質換位された一種の趣味世界の存在となつて、時代の鏡を懸けつゝ、人情を教へ、人生を味はゝせるものとなつたのであらう　此の紀有常の小話にしても有常がまさか一揃の夜具に事缺く境涯になつたのではあるまい。業平が自らを「かたゐ翁」と嘲つたと同じ心持で、自分の一味に對しても皮肉のユウモア化を試みたのであらう

五

藤原氏專權の影の國文學に見えたのは『伊勢物語』を以て最初とするが、『伊勢』以後の作には、殆んど一つとして此の時代相を現はして居らぬはない。その現はれ方の最も多くは、ひたぶるなる禮讃式のもので、たま〳〵見るのは反語式、或は人言を裝ふ託他式ともいふべきものであるが、とにかく此の外戚政策による藤氏專權の影は、『伊勢物語』以後のあらゆる文學を蔽ひつくしたるかの觀があるので、此の物語につゞく王朝文學全體の背景的序説として、左に此の驚異的にして兼ねて脅威的なる思想の縮描を試みようと思ふ。

第一は、外戚政策の計畫者として藤原氏を見たものである『伊勢』に近い關係のある惟喬親王御失脚の事情はわざと遠慮して、少し後なる花山天皇御出家御退位の件を取ることにする。

寬和二年(一六四六)六月二十三日の夜、御年十九歲の花山天皇は密かに宮中を遁れ出でて御出家あらせられた。同時に皇太子懷仁親王が帝位に卽かせられた。一條天皇におはします。右大臣藤原兼家が我が娘詮子の出なる懷仁親王の御代を急いで、その子の道兼や僧

嚴久等と心を合はせた計畫の結果である。計畫は水も漏らさぬ周到なものであつた。右大臣兼家は直ちに新帝の攝政となり、やがて太政大臣となつた。

寛和元年七月、花山天皇は最愛の弘徽殿忯子女御を喪はせられた。女御の死は懷姙八ヶ月目で、激しい惡阻つゞきの衰弱の爲めであつた。帝の御心はすつかり暗くなつた。たゞに最愛の逝去によつて無常を感ぜられたばかりでなく、孕つたまゝ死ぬる女人には、特に重い後世の呵責があると聞かせられて、その冥福を祈るために、深く佛道に心を寄せられた。この御信仰の萠しに乘じて、わが外孫皇太子の御代を急いだのが兼家である。彼れはその次男藏人左少辨道兼と心を合はせ、御法問の師に召された花山寺の嚴久阿闍梨や御近侍の左中辨藤原惟成等を味方にして、若き帝に出家をお勸めしようとした。道兼は「一人出家すれば九族天に生まるゝとも申しまする。若し御入道遊ばすならば、私も必ず剃髮して御修行のお供を致しまする」などと、口癖に申上げた。或日彼れは御所を退出する折に、わざと扇を置き忘れた。惟成が御前でそれを開くと、「妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者」と書いてある。帝がお側の嚴久に、その意味を御尋ね遊ばすと、阿闍梨は、

これは大集經と申す御經の中にある、佛の尊い御言葉で御座りまする。俗世間の人達が、いとしい、可愛ゆい、貴いと思うて居りまする妻も、子も、金銀珠玉も、其れ多いことなが

ら萬乘九五と申して人間界無上と崇めて居りまする帝王の御位も、三寸息の絶ゆるのを境として、もうあの世へ持つて行かれるものでは御座りませぬ　それ故、人間に何よりも尊いのは、世を捨て家を出づる出家で御座りまして、立派な王家の太子と生まれさせられました悉多太子、卽ち釋迦如來も……

などと、詳しく御說明申し上げた。帝は引き込まれるやうに聞召して、段々御心を動かさせられる　と或時またお庭先の梢で、何か不思議な物の聲がする。耳を欹てさせられると、一羽の鸚鵡が、

サイシーチンパウキュウソウヰ！　リンメイシフジーフーズヰシャア！

と啼くのであつた。これは兼家が、帝と故女御とが小鳥を好ませられることを聞き知つてゐたので、鸚鵡を飼ひ馴らして、かねて此の大集經の文句を教へ込んでおいたか、時機を見て宮中のお庭に放つたのであつた。

帝が怪しませられて、

あれは何だ？

と御尋ね遊ばさるゝと、嚴久が、感に入つた風をして、

驚き入りまして御座りまする　心なき小禽までが佛の御詞を操つて居りまするとは

目を開くと森羅萬象一つとして佛の御教を示顯して居ないものは御座りませぬ

などと申上げる。かくして帝はいつしか御出家を、のみならず御退位までを御決意遊ばさるゝやうになつた

さる程に、翌寛和二年六月二十三日の夜のことである。道兼はいよ／＼帝を清涼殿から御連れ出し申しまゐらせた　お供は道兼と嚴久の唯だ二人であつたらしい　藤壺の上御局の小戸から、こツそりと御出かけなさると、丁度有明の月が皎々と輝いて御姿を照らすので、

これは目立つて具合がわるい　どうしたものであらう

と仰しやつたが、道兼が、

だと申して、もうお見合はせ遊ばしやうが御座りませぬ　神璽も寶劍ももう東宮御所に御移御になりました上は……

と、御心を御騷がせしたのは、帝がまだ御出かけにならぬ中に手づから神器を取り奉つて、東宮の方へ御渡し申したのであつた

一では仕方ない一と仰しやつて、明るい月の光をまぶしく思召しながら玉歩を辿らせらるゝ中に、月の面に雲がかゝつて、少し暗くなつたので

これで迷はず行ける　やはり朕の出家は遂げられぬのであつたわ、
と仰しやつて、とぼ〳〵と歩ませらるゝ中に、又ふと故女御の御文がらの中裂き捨てかねて始終御覽になつてゐたのがある　それを御思ひ出し遊ばされて
一寸！
と云つて、取りに戻らせられたが、その時に、道兼は地だんだ踏んで
何といふお情ない御心で御座りまする　此の千歳一遇の好機を逸させられては、自然魔もさしませうに、
といひつゝ空泣きをしたといふことである
それから東を指して進ませられたが、陰陽博士の安倍晴明の家の前にかゝらせられると手のパチ〳〵と鳴る音がして、忽ち御聽き馴れの晴明の聲がする
ハテ怪しい　帝御退位の天變の兆が見ゆるわ　オヽもう御退位遊ばしたわい、とにかくすぐに參内して奏聞申すであらう　大急ぎに車の用意を！　用意を！
といふのを、わが御影に驚く如く聞かせられて、馴れぬ歩路を進ませられた
さていよ〳〵花山寺に着かせられて、嚴久の手で御髮をおろさせられる　とそれを見屆けた道兼が、

憚りながら一寸御暇をいたゞきまして、家に歸つて、父兼家にも變はらぬ姿をもう一度見せ、これからお供をして出家すると報告致しました上で、やがて必ず御膝許にまゐつて、御弟子になりまする

と申上げると、帝は

ウム朕を瞞したのであつたな。

と云つて泣かせられた

此の夜兼家は、萬一途中で此の計畫を妨げるものがあつてはと用心して、御一行のあとから、名高い源氏の武者どもを尾行させた　彼等は京都の市中は隱れ〳〵についてゐたが川の堤のあたりからは、公然と形を現はし、寺に入つてからは、妨げる者あらば唯だ一打と隣の室に一尺ばかりの小刀を拔いて、見張つてゐたといふことである

わが女の生み奉つた皇子の御代を急ぐ爲めに、花山天皇の御退位を計畫した藤原氏の嫡流右大臣兼家一味の計畫のあらましは、かうであつた、　藤原氏最初の攝政良房以來、院政の興るに至るまで藤原氏の大身等は、手段こそ變はれ程度の差こそあれ、殆んど類似の策謀に腐心したのであつた、　藤氏の專權がつゞくに從つて、同族相鬩ぎ、兄弟相鬪ふの醜態を現はしたが、その間に於いても、此の種の策謀は暫らくも止めぬのであつた

六

第二は、眷屬從類にかしづかるゝ方面から見た藤原氏專權の姿である。時代は更に下つて藤原道長に關するものである。

或年、道長が物忌に籠つて居る處へ、解脫寺の觀修僧正、陰陽師安倍晴明、醫師忠明、及び武將源義家朝臣が、御慰めの爲めと云つて參籠した。當代切つての名譽の人達の揃つた事とて、四方山の話が花と咲いて、道長もすつかりつれ〴〵を忘れてゐるところへ、南都から早瓜を獻じて來た。時は五月の一日であつた。道長は、見事な早瓜を悅んで、早速庖丁を取るやうに命じたが、人々が、計られぬは人心、且つは御物忌の中でもあり、一應晴明に占はせられてはと陳じたので、道長は厚意を悅んで、晴明に「一大儀ながら一」と命じた。

晴明は恭しく座を進め、瓜を盛つた折敷に向つて目をつぶり、神を凝らして勘へてゐたが、やがて其の中から、一番水々しい、つやゝかな一顆を取り出した。そして

「この一つが毒氣を含んで居りまする。加持いたせば現はるゝで御座りませう」

と云つて、觀修僧正を顧みた。僧正は「一では御免を蒙つて加持いたしまする」と云つて、陀

羅尼を誦しては、「アビラウンケン二「バサラダトバン」と、頻りに明を唱へてゐたが、その中に瓜が動き始め、そして次第に激しく動いて來た。之れを見て、僧正が

次ぎは忠明に讓りまする

と云つて座に復ると、忠明は畏りを申して、座を立つて、動いて居る瓜を取り上げ、取り廻し取りまはしては、じいツと靜かに抑へてゐた。たとへば瓜の脈を案ずるかのやう、その指先の經絡が瓜の經絡につゞいて居るかのやうに見える。彼れは暫らく按じて二所に針を立てた。瓜は一寸強く搖れてやがて動かなくなつた。忠明は

あとは義家に仰せつけられまするやうに。

と云つて座に復つた。義家は「恐れながら」と辭儀をして座を立つた。そして腰刀を拔いて、じいツと睨んでゐたが、やツ！　と懸聲して二つに斷ち割ると、中に小さい蛇が蟠つてゐた。取り出して見ると、蛇は首を斬られて居り、而して忠明の打つた二本の針は、蛇の左右の目の眞中に立つてゐた。

皆々感に打たれて詞も無い。暫らくして道長は

天晴れ〳〵、揃ひも揃つて天下の名人ではある。御事達があつて麿も、麿が家も、安泰に榮えて行くぢや。頼もしく思ひまするぞ。

と言ふ　四人は平伏して、

一同の面目に御座りまする。

といふ　五人の目は涙に光つてゐた。

藤原氏は、上に對し奉つては、あのやうな言語道斷の策謀を敢てした、而して下からはかくの如き忠誠のかしづきを受けた　因襲の久しき、これが當然のあるべかゝりのやうになつて、上御一人も彼等の手前を憚らせられる、而して彼等の同族も、眷族從類も、彼等の榮華を悦び、彼等の榮華を讃頌し、助成することを名々の天分と心得て、それをば鳥の空に翔り魚の水に泳ぐのと同じ事のやうに思ふやうになつた。　平安朝文學の大部分は此の因襲の夢に醉うてゐる間に生れたので、これが無ければ、あの美しい文學は生れなかつたであらう　才媛も出なかつたであらう　枕の草子も『源氏物語』も作られなかつたであらう

この外戚政策、藤氏專權に對する是非の批評は暫らく措く　吾等はとにかくこれが王朝に通じて大波を打つた最も大いなる思潮であつたことを知らばねならぬ　同時に殆んどあらゆる文學が、その根を此の思潮に托して生ひ出でたことを知らねばならぬ

七

『伊勢物語』の趣味は多方面である。男女愛の微妙な表現を第一として、性愛を離れたうつくしい交遊宴樂、他の國、他の時代、他の人ならば、不義背倫とも視らるべき行爲が、一種の美しい情愛とも、慈悲とも、濟度とも思ひ做さるゝばかりに言ひ現はされた深い廣い同情の思ひやりなど、いろ〳〵あるであらうが、その中の一つに、滑稽、ユウモアに屬する特殊味の存在することも見遁すべからざるものであらう。

『伊勢物語』の滑稽に二つの種類がある。一つはたわいもない戀物語を眞面目に語つてゐる所に見える滑稽味で、例へば「昔人はかくいちはやきみやびをなむしける」「一个の翁に死なむやは」といひ、或は三郎の切なる賴みにほだされ、九十九髪の老婆と契つた事を書いては、「世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、この人はその差別見せぬ心なむありける」などと、好色道による平等濟度を、おごそかに宣言してゐる類ひである他の一つはさりげなき愉悦の光景の中に、深き悲涼の空氣をそれとなく漂はせた筆致である それは我が滑稽、洒落、おどけ、をかしみ、諧謔、好笑などいふ語で現はすこととはとても覺束

なく、止むを得ずば、當人は眞面目に言つてそれが、餘所目にはをかしく、悲しく、哀れに感ぜられるのを本義とする「ユウモア」の深い特別義によつて形容したいものである。　若草はその最もよき例を、右馬頭業平が、故主の惟喬親王を水無瀬の宮や比叡の麓に訪ねまゐらする段々に見出だすことが出來るであらう。

在原業平は惟喬親王、紀有常と共に藤原氏が外戚政策の犧牲となつて失意のどん底に陷つた當代の最も氣の毒な一人であつた。　彼れが王孫と生れ、帝王の殊寵を蒙り輝く未來に望みをかけて、惟喬親王に奉仕した身を以て、親王の御失脚と共に、都にも安んじ得ぬ境遇となり、四十一歳にしてわづかに右馬頭となり、歿前三年の五十三歳にしてやうやく中將となつたのは哀れなことであつた。　殊に無事に生きんが爲めには、散々に苦められた良房、基經にも頌歌をさゝげねばならず、一方心ならぬ宮仕に綺羅を飾りつゝ、世に背かれた故主親王を訪うて、花に遊び酒を弄ぶのは、堪らぬ思ひであつたであらう。　その惟喬親王の水無瀬の山莊に、彼れと紀有常と、失意の三人相會して、櫻に、月に、酒に一日を遊び暮らした記事が、左に掲ぐる八十一段であるが、紛らすべき憂のありとも見えぬ花やかな賑はしい記述の中に、深い悲愁の底ごもりしてゐるのは、何とも云はれぬ味である。　この物語の中に、もし業平自身の筆に成つた部分がありとすれば、これも「東下り」などと相並んで、その最も優れた部分

の一つであらう

昔惟喬の親王と申す御子おはしましけり　山崎のあなたに水無瀨といふ所に宮ありけり。年ごとの櫻の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしましけり。時世へて久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩は懇ろにもせで、酒を飲みつゝ、やまと歌にかゝれりけり。今狩する交野の渚の院の櫻ことに面白し。その木の下におりゐて、枝を折りて、かざしにさして、上中下みな歌よみけり　馬の頭なりける人のよめる。

世の中にたえて櫻の咲かざらば

春の心はのどけからまし

となむよみたりける。また人の歌、

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ

うき世に何かひさしかるべき

とて、その木のもとは立ちて歸るに、日暮になりぬ。御供なる人、酒を持たせて野より出で來たり。この酒を飲みてむとて、よき所を求め行くに、天の川といふところに至りぬ。親王に馬の頭おほみきまゐる。親王の宣ひける。交野を狩りて天の川のほとりに至

るを題にて歌よみて盃させと宣ひければ、よみて奉りける

狩りくらしたなばたづめに宿からむ

天の川原にわれは來にけり

と聞こえければ、この歌を親王かへすがへす誦し給ひて、返しえし給はず。紀の有常御供に仕うまつれり。それが返し

一年にひとたび來ます君待てば

宿かす人もあらじとぞおもふ

歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜ふくるまで酒のみ物語して、あるじの親王醉ひて入り給ひなむとす。十一日の月も隱れなむとすれば、かの馬の頭のよめる

あかなくにまだきも月の隱るゝか

山の端にげて入れずもあらなむ

親王に代はり奉りて、紀の有常、

おしなべて峯も平になりななむ

山の端なくは月もかくれじ

極めたる失意の三人が、一日を樂み盡くした連飮三次の記事であるが、これを書いたのは、親

王が落飾して比叡の麓に住ませられた時に、雪を冒して御見舞申すと、つれ〴〵と淋しさうにして居られるので、暫らくお側にゐて昔の思出をお耳に入れ、そしてそのまゝお側に、と思つたが、都の公務の爲めに心に任せず、お暇をするとて、

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや

雪ふみわけて君を見むとは

と詠んだと云ふ業平彼れである。童の時から仕へた君とて、正月には必ず御挨拶に出る、そして「おほやけの宮仕しければ、常にはえまうでず、されどももとの心失はでまうで」たといふ業平彼れである。而してまた大雪のこぼれるやうに降る日に、大御酒を賜はつて、

思へども身をし分けねば目かれせぬ

雪のつもるぞわが心なる

と詠んで、親王から御衣を脱いで賜はつたといふ彼れである。二つの歌の意は、「親王の御卽位に望みをかけ、やがてその望みを覆された恨みの昔を、ふと忘れ〳〵しては夢ではなかつたかと思ふのだ。かけても思はうや、その親王の落飾された寒き日の山里を、雪ふみわけて御訪ね申さうとは」「まゝならば身を二分して、片身は都の公務に携はらせ、優れる片身は、親王のお側に永久に侍らすべきを……あはれ我が心を降る雪の、歸り足を留むるかの如く

積りにつもることよ」といふのであらう。これらの歌群でも現はしつくさぬ鬱悶の思ひを胸に畳みつゝ、同じ失意の友と二人、親王を擁して櫻のさかりの一日を狩り暮らした記事が、これである。業平に扮した他の作家の筆であつてもよい。業平自身の筆ならば更によい。とにかくこれが、かういふ人々の、かういふ場合に於ける遊樂の心境を寫したものだと見ると、この快適無類とも見える遊樂の裡に、返らぬ昔を忘れては夢かと思ふ悲愁の覗いてゐるユウモアの味は、言語道斷ではないか。

吾等はまた、月花を愛で、歌に遊ぶ王朝貴族の宴樂の興味を、これほど美しく寫した文學はあるまいと思ふ。第一次の宴は渚の院の櫻のもとである。花の盛りとあるがもう散りかけてゐたであらう。それを見て、一人が、「咲いたと思ふと、もう散りかけて、人の心をいらいらさせる。春になつても櫻が咲かずば、世の中が暢氣であらうに」といふと、一人が「いや〳〵、咲くのは無論結構だが、散るので更に〳〵結構なのだ。世の中に何一つ常住のものがあるか。櫻は世相の暗示だよ」といふ。花をめでると共に自他の眼前を諷するやうな事を歌ひつゝ、よい氣持になつて、名殘惜しい木の下を立ち出でると、御供の者が不意に野中から顯はれ出でて、興を添へる爲めに追加の御酒を持つて來たといふ。折角の酒だ、映えるやうにして、生かして飲まなくてはと、また飲みどころを捜して歩くと、天の川といふ珍らし

い名の所に來た。此處こそと、二次會の座を設けて、右馬頭業平が、まづ銚子を取つて盃を勸めると、宮樣が、風流の筵に唯たの盃は受けられぬ、宿に歌を詠めと仰しやる。承つて「これは不思議、いつの間にか天の川に來てゐる、ゆつくり飮んで、暮るゝを待つて棚機津女に一宿を乞はうではないか」―は、いかゞで御座りませう、と申上げると親王は「うまいなあ、うまいなあ」と幾度も云つて、節をつけて繰返して誦られたが、御返歌が一寸御出來にならなかつた。お側にゐた有常が、では私が返しをいたしませうと云つて、「一年に一度御入來の彦星樣といふ天上界の名物男を待ちかねてゐる棚機女だ、人間風情の吾々に宿はかすまいよ」では仕方ない、家に歸ろうと云つて、實は二人を伴つて水無瀬の山莊に入らせられる。やがてそこで三次會が始まる。夜ふくるまで飮んで、親王が醉はせられて、奥へ御入りにならうとすると、業平が「まだ拜み足りませぬに、月の親王樣、もうお隠れん坊で御座いますかおい、山の峯逃げたり！逃げたり！」と詠む。有常が御代吟として、「一峯の山間を無くして全部平らにしてしまふさ。山の端の出張りが無ければ、お月樣もお入りにはなるまいよ」

風流瀟洒な情と景と歌とが、仲よく連れ立つて推し移る面白さは、まるで三者の間に脈絡が通じてゐて、彼等の特別なる境遇を藝術的に演出しつゝ、同時に時代教養の最高部分を見せてゐるやうではないか。この文章の面目さ、人物自然の情景の化そかさ而して其の間に

悲愁哀情の漂うてゐるユウモアの深き味ひ　吾等は之れを讀んで、沙翁の狂へるリヤ王が侏儒のフールと嬉笑してゐるのを見るやうな心地がするのである

吾等はまた「伊勢」の作者が自然美の鑑賞描寫に於いて拔群の技倆を持つてゐたことを見のがすことが出來ぬ　東下りにも、已にその一面が見えてゐるが融左大臣が河原院の鹽竈を愛でた左の短章なども、放縱不羈な筆致の中に、その非凡な風景趣味を見せてゐる

むかし左の大臣いまそかりけり。賀茂川のほとり六條わたりに、家をいと面白く造りて住み給ひけり　十月のつごもりがた、菊の花うつろへる盛り、紅葉の千種に見ゆる折親王だちおはしまさせて、夜一夜酒飮みし遊びて、夜明けもて往くほどにこの殿のおもしろきをほむる歌よむ　そこにありけるかたゐ翁、板敷の下にはひありきて人に皆よませはてゝ詠める。

鹽がまにいつか來にけむ朝なぎに
つりする船はこゝに寄らなむ

となむ詠みける。みちの國にいきたりけるに、怪しくおもしろき所々多かりけり。わが朝六十餘國の中に、鹽竈といふ所に似たる所なかりけり　さればなむかの翁さらにこゝをめでて、鹽竈にいつか來にけむとはよめりける。(八十段)

時は十月菊紅葉のさかりに、融の左大臣が贅をつくして奥州鹽竈の景をうつした河原院に親王達を始め風流のお歷々を招待して盛宴を張つた　乞食爺さん(業平)も招かれた一人であつたが、曉近くなつて他のお客達が競つて此の庭園讃美の歌を詠んで居る間に、爺さん一人が群を離れて、緣側の下に降りて醉眼濛朧、千鳥足蹣跚として、か行き、かく行き、と見かう見て、感賞してゐたが、その中に、游心恍々惚として、身はさながら鹽竈松島の岸邊に立つてゐる心地がしたのであらう。

おや！　いつの間にか、鹽竈に來てゐるわ。それにしても滿目たゞ波と空、渺茫寥寥として何も見えないのが、餘りに淋しい。この朝凪ぎの海に、釣をする海人は居らぬか。居らば、此の邊に漕ぎ寄せて風情を添へてくれ。

と口ずさんだ。それは人々が殘らず詠み終はつた後であつたが、この爺さんが、かう詠んだには仔細がある。作者(わたし)も一度奥州へ行つたことがある。奥州は不思議によい景色の多いところでね。しかし奥州のみならず、皇朝御支配の六十餘州に、凡そ鹽竈の足もとによれる所はあるまい。だからこそあの業平爺さんも、二度目にまた來て見物してゐる氣持になつて、愛での餘りの夢心地に、「いつの間に鹽竈に來たのだらう」と、詠んだわけなんだよといふのであらう　無限の餘意を持つた擒縱自在の筆であるが忘我の境に入つて、庭園

の景色を實景と見た幻覺のもとに詠んだといふのも面白いが、作者が飛び出して人を食つた註脚も、實に面白い　かういふ餘裕のある離れわざの出來る人にして、始めて、散文詩に纒はれた伊勢式の歌物語が出來るのであらう。

八

吾等は以上『伊勢物語』が形式内容の上に有つ含蓄について所見のあらましを述べた　吾等は最後に此の物語の周圍に絡みついた附帶環象について簡單に述べねばならぬ　謂はゆる附帶環象の主なるものは、作者、成立時代、及び名稱の意義等である。

是等の附帶環象については、池田龜鑑氏が、その巨篇『伊勢物語に就きての研究』に於いて夥しい稀覯の原典に根據しつゝ、蟻の這ひ入る隙も無いばかりに周到精密なる研究を公にして居られる。　吾等は之れを繰返さぬであらう　たゞこれらのお蔭を蒙つた上に於いて、かねてから懷いて居り今も捨てかねて居る、半ば空想的の愚考をまとめて、大膽に披露すると、『伊勢物語』のおもなる部分は在原業平自身の筆に成つたもので、無論その存生中なる元慶四年(一五四〇)以前に成り、その後天暦頃(末年は一六一六)に至る數十年間に追加整理

されて、今日見るが如き形の物語が出來たのであらう。「伊勢」の稱は此の書の筆者に擬せられた或る女性の名で、業平は女の筆に託し歌に絡んで我が閲歷の興味ある部分を纏め、他の人、他の時代に起こつた類似有緣の情話を附帶せしめて、場面を賑はし變化を添へたのであらう。我が事を他人に託する第三人稱式の趣向は、業平の『伊勢物語』が我が國最初の試みで、貫之の『土佐日記』が腰許なる一女性の筆に託したのは、『伊勢物語』の先蹤に倣つたのであらう。

塗籠本伊勢物語（大島雅太郎氏藏）

吾等の此の推量は、主として業平に對する貫之の特別なる尊敬を前提としたものである。貫之の生年は詳かでないが、香川景樹に從ふと、彼れは貞觀の初期に生れた筈で、その十九歳の年に業平が歿して居るや

うに想像される。たとひ其の生年を後らしても、業平の晩年と貫之の幼時とは、少なくとも數年の並行期間を見ることになるべき筈で、この同時、同處、同境遇に生活した數年乃至十數年が、一代の視聽を集めた先輩詞人に對する後輩詞人の尊敬を贏ち得たことは自然の數であるやうに思はれる。從つて此の期間に於いて、その先輩の生活記として、爭つて讀まれた名作が、何人の作かといふ噂が、後輩秀才の耳に入らぬ筈がなく、耳に入れば、幼心に養はれた敬愛の念が、その愛讀を、模倣を、又はそのまゝの引用を誘致することは、これ亦當然の事のやうに思はれる。現に貫之が業平に對する敬意は『土佐日記』の處々に暗示されてゐるが、『古今集』に於ける業平の歌が、三十首全部、『伊勢物語』のみから採られて居り、その中のおもなる數首が、他の同列の歌群とはすつかり違つた取扱を受けて、特別な背景の添うた長い詞書を附けられて居り、しかも『伊勢物語』とほゞ同じ文章の詞書を附けられて居るのは、主任撰者貫之の業平に對する特別敬意の現はれではなからうか　これは已に先賢も言うて居るところである。但し『古今集』に於ける業平の歌の詞書が『伊勢物語』に酷似してゐる謂はれについては、『古今』が『伊勢』に據つたのか、『伊勢』が『古今』に據つたのか、或は二つの源泉となつた背景づきの異風な「業平歌集」、或は第一次の『伊勢物語』といふやうなものが先在してゐたので、『伊勢』も『古今』も二つながら、それに據つて、多

少の加筆を施したのかが、疑問にされてゐるが、初めの二つの疑問なる『伊勢』『古今』の前後については、先づ大體に於いて、『伊勢』を先とすべきであらう　それは兩書に共在する文章の風致が、物語の地の文らしくして、歌集の詞書たるには適せぬのを見ても察知されるからである。例として、『伊勢』の「東下り」と『古今』の「羇旅」とに共在する一鎖を見ると、「から衣きつゝ馴れにし」の歌に先だつ『古今』の詞書には、

あづまの方へ友とする人、一人二人いざなひて行きけり。三河國八橋といふ所にいたれりけるに、その川のほとりに、杜若いと面白く咲けりけるを見て、木の陰におりゐて、かきつばたといふ五文字を句のかしらにすゑて旅の心をよまむとてよめる。

とあり、次ぎなる「名にしおはゞいざ言問はむ」の詞書には、

武藏の國と下總の國との中にある角田川のほとりにいたりて、都のいと戀しく覺えければ、しばし川のほとりにおりゐて思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなと思ひわびて、ながめ居るに、渡守はや船に乘れ、日も暮れぬといひければ、舟に乘りて渡らむとするに、皆人物わびしくて京に思ふ人なくしもあらざる折に、白き鳥のはしと足と赤き、川のほとりに遊びけり。京には見えぬ鳥なりければ、皆人見知らず。渡守に、これは何鳥ぞと問ひければ、これなむ都鳥といひけるを聞きてよめる、

と書いてある。餘りに長くなるので並行する「伊勢」の全文を引くことは見合はせるが、二三の要點を考察すると、初めの「あづまの方へ友とする人……」は歌の詞書の書き出しとしては、いかにも不似合で、どうしても「昔男ありけり」といふ前文句のほしいところである。殊に

……一人二人いざなひて行きけり、

と切つたところなどは、物語の地の文に於ける息休めのピリオドの體で、歌の詞書とは、どうしても受け取れぬものである。

次ぎなる「武藏の國と下總の國との中にある」も、やはり「伊勢」のやうに「なほ行き行きて武藏の國と下總の國との中に……」と、前から言ひつゞけて來なければ落ちつかぬところで、これだけでも、他の既成文章からの切拔といふことが看取される。殊に落ちつかないのは「京に思ふ人なくしもあらず」の一句である。これは酒折の渡邊重豐も已に云つた通り、「伊勢物語」では、「東下り」の冒頭に、

昔男ありけり。その男身をやうなきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方にすむべき所もとめむとて往きけり。

とあるのに呼應させたので、男が昂奮の餘り、

忌々しい、こんな京都などに居るものか。これから東國へ行つてやるんだ。と云つて、都を蹴るやうにして出て來たが、さて此の武藏大野の夕暮に、大河を渡つて、また遙か奥へ行くのかと思ふと、俄に故郷が思ひ出されて、足蹴にして來た都のいゝ人達が堪らなく戀しいいゝなつたといふのであらう。即ち此の句は「京には居らじ」の前段に應じて始めて活きて來るので、これだけでは一向利きめのない文句になつてしまふわけである。これも『古今』の詞書が後出なることを證據立てる有力なる根據であらう。以上はほんの一部の略説に過ぎぬが、これでも『伊勢』が先で、『古今』の詞書が後れてゐるといふことがわかるであらう。

さて次ぎに『伊勢』と『古今』とが、二つながら、先行の業平歌集、或は第一次伊勢物語によつたのであるか、言ひ換へれば二書の前に、種本となつた物語式の歌集が存在してゐたのかといふ問題であるが、此の問題はおのづから二つに分かれるであらう。問題の第一は、現存『伊勢物語』よりも段數は少ないが、文章はほゞ今のと同樣なる『伊勢物語』が『古今集』以前に存在したかといふことである。言ひ換へると、現存『伊勢物語』の主要なる部分が、そのまゝ『古今』以前に存在したかといふことであるが、現存の『伊勢物語』に、業平歿後の事を書いた芹川行幸の段があり、また天暦期の博士橘直幹の歌が混入して居る以上

は、それらの混入せぬ第一次『伊勢物語』の『古今』以前に於ける存在は、疑ひを容れぬことであらう。問題の第二は、現存の『伊勢物語』と比べて、段數はもとより、文章の趣も大分異つた物語が、『古今』及び現存『伊勢物語』の以前にあつたかといふのであるが、吾等は之れに對して恐らく無かつたであらうと答へる。話がついや〻こしくなつて來たが、吾等の考は、かうである。在原業平は自身存生中に、その歌を中心として、之れに想化したる自己の行跡を絡ませ、折々は他の古人今人の歌や行跡までを加へつ〻一種の順序をつけて一卷の歌物語を纏めたであらう。貫之を中心とした『古今集』の撰者等は、業平に對して敬愛を感ずる餘り、彼れが歌の前後に添へた文句を除き去り、或は甚だしく改作するに忍びずして、勅撰歌集の詞書として許容し得る限りの長さと姿態とを保存したであらう。業平と數年乃至十數年間同じ時代の空氣を呼吸した貫之等に取つて、『伊勢物語』を業平の作と見る事は當時に於ける一種の社會的常識であつたであらう。此の物語が多くの詞人達に翫賞されつ〻、頻りに轉寫さる〻間に、其の段々無聯絡の形式が、筆に覺えある者の好奇心を喚び起こして、彼等をして類似の情話を書き集めては、その間々に挿入添加せしめたであらう。書き添へした才人の中には、滋春その他の在原同族もゐたであらう、伊勢御や源順も恐らくゐたであらう。その中に此の物語も、いつしか生長、增殖、流動を停止して、天曆頃には、幾種か

の異本を持ちながら、もう指をさすことの出來ぬ古典として落ちついたのであらうと。

九

吾等は前章に於いて、業平に對する貫之の尊敬に因んで『伊勢物語』を業平自身の作と思惟すると云つた。そして貫之の尊敬は先づ『古今集』に於ける業平の歌の詞書に於ける特別樣式に現はれたと云つた。吾等はまた業平及び『伊勢物語』の文章に對する貫之の愛着を、彼れの『土佐日記』に見出だすことが出來ると考へる。『土佐日記』の文章は大體に於いて、『伊勢』の血脈を引いたものであり、句讀短な趣致に於いて殊にさうであるがその中には、特別な修辭や用語にして、『伊勢』なしには、とても書かれぬであらう、『伊勢』を愛誦した結果が、一種の模倣とも換骨奪胎ともなつて現はれたのであらう、かやうな愛誦模倣は、一つは『伊勢物語』が業平自身の作なるによるのであらう、と思はれる所がある

例へば『土佐』の正月七日の部に

今破子もたせて來たる人、その名などぞや、今思ひ出でむ。この人、歌よまむと思ふ心ありてなりけり。とかくいひ〳〵て、浪の立つなることとうるへいひてよめる歌、

ゆくさきに立つ白浪の聲よりも
おくれて泣かむ我れやまさらむ

といふ一節がある。吾等は曾て之れを讀んで、貫之も物好きな、慾の深い、趣味の廣い、茶目氣に富んだ文章家であると思つたことがあつた。こゝの文章の味は、「今彼子もたせて來たる人」と云ひさし、文路を遮斷して飛入りの挿入句を設けたので、田舍歌人の惡口をいふ爲めに、わざとその名を忘れた風を裝つた、對話の際のおどけた味である。試みに譯すると、

今御馳走の御重を持つて來てくれた人、——サア其の人の名前だツて！ つい對忘れして了つた。が何すぐ思ひ出せるだらう——とにかく其の人が來てくれたのは、歌を詠んで見せて、我々を驚かさうといふ爲めであつた。

といふのである。內容は下らない事であるが、おどけた修辭の味は前古無類で、かういふ對話の間に於ける、胴忘れの間ふさぎ詞を、堂々たる文學の中に入れるといふのは、非常に大膽で、同時に纎細なる文章意識を見せた創新的の試みである。貫之は二元三元の慾深趣味者で、『古今集』の序文では、のんびりと長く引きつゞいた優雅な大和ぶりを見せ、『土佐日記』では短い句切れの間々に、船頭の鄙歌や、古文に類の無い接吻や、乃至臍かけにほの見える女人の裾際まで覗かせるといふ下手物趣味を示し、而して『新撰和歌』に於いては堂々たる

本式の騈麗漢文の手腕を見せた。かやうに間口の廣い、觸感の鋭い人ではあるが、劇や小説の對話などならばともかく、かやうな紀行敍事の文學に於いて、しかもかういふ一寸した場合に於いて、この遮斷的感投(interrupting interjection)ともいふべき洒落れた修辭を用ゐるとは、さすがにえらい。此の修辭、恐らく日本開闢以來で貫之朝臣を以てその開山とするのであらうと、久しく思つてゐたが、これが『伊勢物語』の模倣換骨であるとは、實に吾等の意外とする所であつた。

嵯峨本伊勢物語（上田文庫藏）

讀者は吾等が前にも擧げた八十一段、惟喬親王に陪して櫻狩をした一章の初めに、

年ごとの櫻の花盛りには、その宮へなむおはしましける。その時右の馬の頭なりける人を常に率ておはしましけり。時世へて久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩は懇ろにもせで酒を飲みつゝ、やまと歌にかゝれりけり。

といふ一節のあつたことを記憶せらるゝであらう。右馬頭はいふまでもなく業平自身の暗示である。他人については紀有常、源光、藤原常行、その他主君の惟喬親王、兄の行平まで、立派に本名を示しておきながら、自分については、空とぼけて、「その時の右馬頭――サア大分時が經つたので、名前を忘れてしまつたが……」は面白いではないか。修辭的に見て、この遮斷的挿入が、實に大膽で、洒落れて、珍しいではないか。この遊情の挿句、恐らく『伊勢物語』の中の第一に人を喰つたユウモアであらうが、貫之は恐らく此の乃祖が人を喰つた筆に特別の興味を感じたので、『土佐日記』に於いて、此の人喰ひ修辭の二の舞を演じたのであらう。吾等は此の二つの珍しい修辭現象を無關係と見ることが出來ぬ。而して後至の大才貫之が乃祖なる『伊勢』の修辭に肖らうとしたところに、業平の作たることを證する影があるとして、初期の『伊勢物語』を業平の作と思惟するのである。因みに、此の一段は最初の「初冠」や、「東下り」や、「新玉の年の三とせ」と共に、あらゆる異本に通じて儼存する部分である。

吾等は『伊勢物語』の水無瀨の櫻狩と『土佐日記』の正月七日の條とを引いた序に、二書の此の部分に共存する緣つゞきらしい他の一二を拾つて見る。『土佐』の

人の野の池と名のある所より、鯉はなくて、鮒よりはじめて、川のも、海のも、こともののども

長櫃に擔ひつゞけておこせたり。……この池といふは所の名なり。

御供なる人、酒をもたせて野より出で來たり。この酒を飲みてむとて、よき所をもとめ

行くに、天の川といふ所に至りぬ。

は、『伊勢』の

から聯想したのではなからうか。意外の處から意外の酒が出て來た趣や、乾いた野に池といふ名の處があり、大地の上に天の川があるといふ處など、その間に全く緣の無い文句ではなささうに思はれる。場所は違ふが、『土佐』の十二月二十二日の「上中下醉ひ過ぎて」一及び一月二十日の「今は上中下の人も、かうやうに別かれ惜み」の「上中下」なども、『伊勢』の此處なる「上中下みな歌よみけり」が貫之に愛誦されて、その口に附いてゐたのではなからうか。また『土佐』の二月九日の條なる、場所も『伊勢』のこゝと同じ渚の院を見て昔を偲ぶ所に、

故惟喬親王の御供に、故在原業平の中將の、世の中に絕えて櫻の咲かざらば春の心はのどけからましといふ歌よめる所なりけり。今興ある人、ところに似たる歌よめり。

千代へたる松にはあれど古の

聲の寒さはかはらざりけり

またある人のよめる、

君戀ひて世をふる宿の梅の花、
むかしの香にぞなほにほひける

と書いてあるのも、親王及び業平の各〻に添へた二つの「故」の字は、つい此間亡くなつた人を懷かしむやうな心持を見せて居り、「古の聲の寒さ」は業平が名歌の寒玉の餘韻を追ふが如く、「ふる宿の梅の花」は業平が風采の名殘を慕ふが如く、要するにこれら悉くが業平に對する特に深き追慕の情を示し、同時に、『伊勢』の八十一段を聯想しつゝ書いたかのやうに見えるのは僻目であらうか。

以上、吾等は第一次の『伊勢物語』が業平の作で、『古今集』の遙か以前に書かれたものであることを述べた、その第一次『伊勢物語』は、思ふに、歌集といふ體の物ではなくして物語の體を具へたものであつたであらう。「昔男ありけり」といふ冒頭の同じ句によつて段々並列の美を見せたものであつたであらう。而して他の筆に託して我が事を述ぶる第三人稱式敍述の新しき樣式に於いて、創試の誇りを見せたものであつたであらう。『古今集』に於ける業平が由緒の歌の詞書は、概ね最初の「昔男ありけり」を取り去られた、首無しい物語文なることを自白して居るではないか。時を經て人の名を忘れたなどいふ、とぼけた

修辭は、我が歌集の詞書に用ゐらるべきものでなくして、他人の事の記述に用ゐらるべきものではないか。また或一人――最も著しき一人についてのみ此の姓名伴忘の遊興を試みたのは、其の作がその一人の筆に成ることを暗示するものではなからうか。同時に其の遊興的修辭は第三人稱式記述といふ創試に伴ふ一種の誇りから生じたものではなからうか。『伊勢物語』が在原業平の作なることは、多くの學者の消極論があるにか丶はらず、久しく傳承された一種の國民的信仰である。大町桂月子は「伊勢物語は在原業平の作なり、業平ならでは書き得ざる名文章なり」と手放しに極めて褒めて居るが、桂月子の此の言は、恐らく王朝以來の殆んど全部に近き日本國民を代表しての宣言であらう。同時に代々の學者がそれらしき作者をあまねく僻路傍徑に求めた結果、最後に到達すべき結論であらう。

一〇

最後に殘された附帶環象の一つはこの物語の名稱の意義である。

此の物語は後世『在五が日記』『在五中將物語』『在中將物語』『在五物語』などいろ／＼に呼ばれてゐるが、これらは、いづれも、後世の詞人等が、名々の作の文章に馴染ませるための

一種の修辭名稱であつたのであらう。已にその作の最も主なる部分に、右馬頭なる昔の名を忘れたと、面白くとぼけてゐる作者が、題號として麗々しくわが名を示す筈はあるまい。清少納言が『枕の草子』に、頭中將齊信を弄ぶ語として「伊勢の物語なるや」と言つて居るのは、此の作の名の文書に於ける最初の現はれらしく思はれるが、これも此の時の皮肉な氣分を面白く言ひ現はすための修辭で、「の」の字は清女の添加であつたのであらう　要するに、作者自身に與へられた此の物語の固有の名は「伊勢物語」であつたので、かく命名した作者の第一意趣は、女の名に託して第三人稱式の物語を創作する點にあつたのであらうと思はれる。

從來『伊勢物語』の題意について說かれた意見は、伊勢人はひがごとすといふ諺による「ひがごと說」、伊勢御が筆に成つた故にといふ「伊勢御說」、狩使本には第一段に、昔男が伊勢の齋宮に親しみまゐらせたといふ記事があるからといふ「卷頭記錄說」已に平安朝に現はれたといふ此の三說を始めとして、男女相愛を主材とする爲めといふので、妹背物語の轉とする說、エセが轉じてイセになつたといふ「似而非物語說」、伊勢や日向の物語の義とする「隨錄紛糾說」、大神の太前で製作を誓つたからといふ「誓願說」風俗歌に「伊勢人はあやしきものをや、などて小舟に乘りてや、波の上をこぐや」とあるのに據つたといふ

「あやしき物語說」などを主なるものとするが、之れを類別すれば、形式說、內容說の二つに分けて、作者の名によるとする伊勢御說、卷頭の一段によるとする卷頭記錄說、及び神前誓願說、これらを形式說と見ることが出來るであらう。內容說では、男女相愛を寫した爲めとする妹背物語說、これは素直に內容を示したものであるが、同じ男女愛に對する自卑謙退の氣持を暗示したものには「ひがごと說」「似而非說」「あやしき物語說」「伊勢や日向說」などがあり、これらを取りすべて內容本位の名義說と云ふことが出來るであらう。かう並べて見ていづれを是とし優れりとすべきかは、簡單に論じ盡くし難いことであるが、伊勢御の作者說は年代の相違があり、殊に十三歲の女子の作などいふのは餘りに胡亂である。卷頭記錄說は幸に狩使本と稱する一種の異本があるから、成立つやうなものの、奈良の京を始めとして、信濃、武藏、陸奧、津の國、和泉と、數々の國を擧げてゐる間に、此の國一つを取つて題名とするのは、誠らしくないやうに思はれる。妹背「似而非」は音の轉じ方に不自然な無理があるであらう。「ひがごと」「あやし」「伊勢や日向」は、抑へて揚げ、陽はに嘲つて陰に稱へる味があつて面白いが、何となく人を安んぜしめぬところがある。かう見ると、つまりは各人好惡の問題で、絕對價値のおけるやうな名義說もないやうに思はれるが、若し吾等の想像する所を率直に述べるならば、作者業平は、我が歌、我が行跡を他人に託して第三人稱式に記述する詞壇最初

の讀みに誇りを感じて、先づその名義の作者を誰れにしようかと考へたであらう。次ぎに男子よりは女人の名に託するのを出意表、破天荒の趣向だと考へたであらう。而してその女人の作たる事を現はすには、例へば後に『土佐日記』で貫之がしたやうに、「女もして試みむとてするなり」―などと、文章の上で表沙汰にするよりは、人知れず題號に寄せて、知る人に知らせるのを床しいと考へたであらう。―伊勢―が業平の愛人の一人であつたか、空想された女の名であつたか、或は國名を聯想した空想の女の名であつたかは明らかでないが、とにかく此の物語の作者として想像されて來た伊勢御とは異つた女人の名で、當時業平の周圍なる知人の間には暗默の裡に合點されてゐたのであらう。さうしてかういふ事實が歪められ尾鰭を附けられて、業平が生前自作の秘稿を妻の伊勢に託して、我れ死なば世に出だせと命じた、伊勢は業平の歿後その遺言を實行したが、その後亭子の帝に召されて殊寵を蒙つたといふが如き傳說が生じたのであらう。業平はまづ此の第一義によつてこの物語の名稱を定めたであらうが、定めた後には、此の題號に因んで、いろ／＼の聯想を思ひ浮かべたであらう。例へば、狩の使のおほけなき契の事、男女相愛は大神の許し給ふ道なること、或は大廟の鎭まります伊勢の國が、全國に君臨する如く、この一義を寫した此の作は、人間界に、また歌文章の世界に高く臨むであらうことなどが、皆それで、是等の聯想が去來に任せて書き

留めもされぬまゝに、遂に永久の謎となり、そして後至の詞人等は眞義の測り難き「伊勢」よりは「在五」の名の床しさに、それを單純にし或は複雜にして書き傳へるやうになつたのであらうと思はれる。とにかく戯れにもせよ、九十餘歳の老媼の戀をも叶へて、「世の中の例として、思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬものを、この人はその差別見せぬ心なむありける」などと、佛の弘誓にも似た大きい思想をほのめかしてゐるところを見ると、此の物語の作者は異性の相愛ばなしを束ね寄せる間にも、我が生涯を中軸として戀愛の種々相を他に假託する其の物語の特色に對して、深き愛と誇りとを感じてゐたらしく、而して實在の若しくは空想された女人「伊勢」の作に假託したのも、要するに此の愛と誇りとを集めた作を、一層面白くし奥床しくする爲めであつたのであらうと考へる。

二

『伊勢物語』は『竹取物語』と相並び、或は少し後れて現はれた、散叙式擬の歯式ともいふべき殊體小説の祖である。

『伊勢物語』は戀愛の種々相を寫すことを本領とし、その趣致を廣くし、深くし、變化あらし

みんが爲めに、類似有緣の人情風流の逸話を加へたものである。『伊勢物語』は王朝戀愛道の花の咲き初めの姿を愛でて、その現はれを高下部部順逆あらゆる方面から眺めたものである

『伊勢物語』は各段の冒頭を「昔男ありけり」で裁ち揃へ、繋ぎ目、つなぎめを「けり」で絡つて、並列、單純、反復のうぶな文章美を極度に發揮したものである。

『伊勢物語』は人情美を稚々しく寫した可愛さ、思ひやりの同情や、忍苦の紛らはしを、それともなく寫した奥床しさに於いて、無類の味はひを見せてゐる。

『伊勢物語』は第三者の筆に假託して、我が事を他によそへた國文最初の試みで、此の試みによつて、特に豐かに表現の曲折を見せて居る。

凡そ人情の動きの美しさを拾ひ集め、切りつめた說明を簡單に附け加へては、斷片的に並べつゝ、讀む者の精神的消化液を惜まず注がせて、繰返し耽味させる　かういふ風味に於いて、我が文學史上に古今獨步の地位を占めるものは『伊勢物語』である。

第十　不運幸運の『大和物語』

一

直系相承の縁の近さに延喜の『古今集』、承平の『土佐日記』を飛び越えて、たゞちに天暦の『大和物語』に引きつゞける。『大和物語』が師祖の名篇『伊勢物語』に先立たれた爲めに、持前の値打だけ光り得なかつたのは、不運であつた。同時に無統一の移氣に導かれて、度々記述の體裁を變へた爲めに、知らず／＼新しき流行の先驅となつたのは、幸運であつた。

第一次『伊勢物語』が在五業平の手に成つたと推考される貞觀元慶頃から七十餘年を經た天暦の央に及んで、此の物語の流れを汲んだ『大和物語』が現はれた。現存『伊勢物語』の一部に天暦の博士橘直幹の歌が載せられてゐるのを見れば、此の二つの物語は頭尾相接して、その一部分は恐らく同時に書かれたのであらう『大和物語』の作者としては、第一に業平の次男、謂はゆる任次君の滋春が擧げられる。『伊勢』に於ける年後れの部分を書

き足したと云はれる滋春に類似した第二の物語の作者を擬するのは、極めて相應はしい思像であるが、彼れの香ばしからぬ逸話が在次君の名によつて、此の作の中に傳へられ、のみならず彼れが甲斐の旅路に病んで死ぬる折に詠んだ

假初の行きかひぢとぞ思ひしを
今はかぎりのかどでなりけり

といふ辭世までが書き添へられてゐる所を見ると、此の物語は恐らく滋春の筆ではなかつたであらう。次ぎには花山院の御作とし、或は前半を滋春の筆、後半を花山院の御筆とし、全部を或は伊勢、御の筆とし、或は滋春に縁ある者の筆とするなど、いろいろの推察が加へられてゐるが、いづれも心あての推測で、確實性の殆んど無いものである。

傳原爲氏筆　大和物語　(三條西家藏)

成立の年代は醍醐天皇を先帝と稱し奉り、藤原忠平を太政大臣、小野宮實頼を今の左大臣と

云つてゐるのによつて、少なくとも主なる部分は天暦時分に成り、段々書きつがれて一條朝の初めに及んだものと想像される。文學相は『伊勢』と同じく歌を中心とした段々孤立の散叙式で、長短合はせて百七十餘段から成つてゐる。記述は宇多天皇の御讓位直前に於ける、帝と伊勢御との唱和に始まつて、帝王では嵯峨天皇、陽成天皇、醍醐天皇、皇族では保明親王、敦固親王、元平親王、元良親王達、公卿では源清蔭、小野好古、藤原時平、同忠平、平貞文、在原業平、同滋春、良峰宗貞(遍昭)等、女では桂皇女、監命婦、檜垣嫗から遊女のしろや、大江玉淵が女等に至り、その他無名傳說の男女を加へて百數十名とりどりの情話を集めてゐる。

二

集められた材料と段々孤立の形式と、及び全體の文致とによつて察するに、『大和物語』の作者は必ず『伊勢物語』の魅力に引かれて、第二の「伊勢」を作らうと志したのであらう。而して手本の攀ぢ難き高さと、ひたぶるの模倣を屑しとせざる負けじ魂とが、彼れをして、先づ數と變化とを貪らしめ、その結果として、あの百數十人の男女に關する多趣多様の情話が集められたのであらう。『大和物語』の作者が一人か數人かは明らかでないが、段々進

行の徑路によつて察するに、彼れは先づ『伊勢』の一人主人公の單主式を複主式に改めて多くの有名人に關する和歌中心の興味ある短文を根氣よく書き連ねたが、中頃から『伊勢』の中の除外例なる巷談傳說の記事に暗示を得て、暫らく筋の曲折ある長文の傳說記を連ねたかのやうに見える　やがて其の種の傳說にも材料の缺乏を感ずる中に、座右なる『伊勢』の中の或段々に心を惹かれて、半ば臨摹、半ば改作のつもりでもとより及ばぬ複製の數章を挿んだが、今度はふと皮肉味を帶びた傳奇的の趣向が浮かんで、短篇小說ともすればなるべき、後の『堤中納言物語』などの先蹤とも見れば見らるべき、幾つかの情話奇談を試みて最後の筆を擱いたかのやうに見える。　此の物語が、若し一人の作ならば、その一人の心に斯樣な變化が起こつたのであらう。　もし何人かの書き繼ぎならば、一人また一人とかやうな變はつた趣向を聯想しては一種の變化をつけて行つたのであらう

表現の方面について見ると『大和』の作者は『伊勢』の『昔男ありけり』の美しき共通の冠文句を捨てゝ、段々別異の固有名詞を並べた　思ひ出すまゝに繼ぎ足し繼ぎ足しするあどけない文體を改めて、連綿とつゞけては括つてしまふ大人的、知識的、概括的の文致とした。『大和』の作者としては、これが『伊勢』に對して對峙存在の異を立つると同時に、一段の進歩を見せたのであらう　けれども彼れは條々一貫の『昔男』を多數の固有名稱に

換へると同時に、『伊勢』に見た折角の小說をたゞの逸話傳說集とした。笑嚮のよるやうな愛くるしい文章を、三指をついでかしこまるやうな文章とした『伊勢』の隨所に見える「その里にいとなまめいたる女はらから住みけり　この男かいま見てけり。」「西の京に女ありけり　その女世の人にはまされりけり　貌よりは心なむまさりたりける」―といふ風の文句を取つて、『大和』の

桂の皇女に、式部卿の宮すみたまひける時、その宮にさぶらひける童女なむこの男宮をいとめでたしと思ひかけ奉りけるをも、え知りたまはざりけり　螢の飛びありきけるを、かれ捕へてと、この童女にのたまはせければ、汗衫の袖に螢を捕へて、包みて、御覽せさすとて聞こえさせるける

つゝめども隱れぬものは夏むしの
身よりあまれるおもひなりけり

に比べると、此の物語が、段毎に新らしい顏の固有名を出すことによつて、唯だの逸話集となつて了つた趣、多くの句を一つのセンテンスに束ね寄せることによつて、大人の利巧な文章となつた趣が推察されるであらう

けれども、『大和物語』の內容は面白く、文章は概して美しい穩かなるものであつた　彼

れは『伊勢』に對してこそ、小說としてこの存在義を失ひ、うぶな可愛ゆい文致を失ひもした迫力と、浸透性と、翫び盡くせぬ魅力とを失つたけれども、一面に於いて、前なる漢文の『日本靈異記』を承けては情愛生活本位の國文逸話集の魁をなし、同時に後なる『今昔物語』に對しては、之れを誘ひ起こすべき種子を蒔いて居るのである　加之、その句讀長の文章は王朝最盛期の日記や小說の連綿と引きつゞく文體の序を成したものとも見られるであらう　後半に集められた曲折に富んだ長文の說話群は、後の物語に對する一種の前置とも見られるであらう。殊に最後に近き部分で試みられた二三の傳奇式の物語は、『堤中納言物語』の如き特殊味の短篇小說の早期の現はれとも見られるであらう　文學史の役目の最もおもなる一つは、或作品が前代の文學から何を受けたか、それ自身之れに對して何を加へたか而して後代の文學に對して何を與へたかを說明するにある『大和物語』は先代の『伊勢』に對しては、之れを學びながら形を受けて魂を取り逃がした觀があつた。けれども作者の高からざる見識と移氣との生んだ結果ではあるが、その新たに加ふるところは少なからず、而して後至の文學に寄與する所は、目立たぬながら、可なりに多かつた。『大和物語』は、偉大なる親を繼いで光り得なかつた不幸な文學であつたと同時に、自力に乏しくして意外の收獲を贏ち得た好運の文學であつたのである

三

『大和物語』は文章として第一座を許さるべきものではない。それは加茂眞淵の云へるが如く、『伊勢物語』と同じ材料を取扱つた部分について、格段の見劣りを感ぜられるであらう。また藤岡作太郎博士の云へるが如く、『土佐日記』と同じ事件を寫した場合に於いて、著しい力倆の相違を見せて居るであらう。それは先行の大作に比べられる爲めであり、同時に獨創の精神を缺いて居る結果であるが、しかしながら『大和物語』の文章は、引離して見れば美しい整つたもので、先づ堂々たる存在として許さるべきものである。左の下野國なる無名の男女に關する一段の如きは、巧拙を差引して、その代表的特色を見るべきものであらう。

下野國に男女すみわたりけり。年頃住みけるほどに、男妻まうけて、心かはり果てゝ、この家にありける物どもを、今の妻の許かき拂ひもて運び行く。心うしと思へど、なほ任せて見けり。塵ばかりの物も殘さず皆もていぬ。たゞ殘りたる物は、馬槽のみなむありける。それを、此の男の從者眞梶といひける童を使ひけるして、この舟をさへ取りに

おこせたり　この童に女のいひける　汝も今はこゝに見えじかしなどいひければなどこか侍らはざらむ、主おはせずとも侍ひなむなどいひたてり　女主に消息聞こえは申してむや　文はよに見たまはじ、たゞ言葉にて申せよといひければ、いとよく申してむといひければ、かく言ひける

舟もいぬ眞梶も見えじけふよりは
うき世の中をいかで渡らむ

と申せといひければ、男にいひければ、物かきふるひ往にし男なむ、しかながら運びかへしてもとの如くあからめもせで添ひにける

の如きはまづ纔かに整つて情味も可なりうつくしく現はれてゐるといふべきである「ければ〳〵」の連發は、桁はづしの省略修辭で、鎌倉の軍記にしば〳〵現はれて居るものであるが、こゝもあどけなく用ゐられて、頗る面白い　上品な方では

泉の大將(藤原定國)故左のおほい殿(藤原時平)にまうでたまへりけり　外にて酒などまゐり、醉ひて、夜いたくふけて、ゆくりもなく物したまへり　大臣驚きたまひて、いづくにものし給へるたよりにかあらむなど聞こえたまひて御格子あげ騷ぐに、壬生忠岑御供にあり、御階のもとに松ともしながらひざまづきて、御消息申す

鵲のわたせる橋の霜の上を
夜半にふみわけことさらにこそ

となむのたまふと申す　あるじの大臣いと哀れにをかしと思して、その夜一夜おほみきまゐり遊び給ひて、大將も物かづき、忠岑も祿たまはりなどしけり

の類も少なからずあるが、これらはまづ「伊勢物語」にも仲間入りすべきものであらう。

下卷の終り近くに、一今の左大臣(實頼)がまだ少將におはした時分に、度々故の式部卿ノ宮(敦慶親王)の御殿に伺はれた　その御殿に大和(大和物語の名稱の起りとも云はれる女性)といふ女房が仕へてゐた　少將を好ましい人と思ひ込んで、つひに親しい仲となつたが、その後少將が久しく見えぬのにすつかり待ちわびて、どんな心地がしたのか、人にも知らせず、車に乘つて大內へ參入した　さて左衞門の陣に車を立てゝ、その前を通る宮人等をつかまへては、少將に取次を賴む　皆好い加減にあしらつて相手にしてくれぬ中に、袍を着た一人が親切に取次いでくれた。少將は折しも御前の御遊に侍つてゐたが、之れを聞くと「ウム、彼女がやつて來たな」と、怪しくも面白くも思ひつゝ、すぐに立ち出でて、廣幡の侍從に耳打ちし、さて左衞門の陣へ行つて、宿直所から、屛風を運ぶ、疊を持つて行つて敷く、そして其處へ女をおろし、「どうしたといふのです？」と尋ねると、女は

何かは、いと淺ましう物の覺ゆれば！

これで切つてある。わざと切つたのか以下が缺けたのかは明らかでない。

最後の段は僧正遍昭がまだ良峰宗貞の少將と云つた時分の逸話である。少將が或時五條のあたりで大雨に降り込められた。傍らの荒れたる家の門邊に立つて雨を避けつゝ、内をのぞいたが人も見えぬので、歩み入つて見ると、庭に梅が咲いて、鶯が啼いてゐる。そして人が居るとも見えぬ奥の間には、簾を通ほして薄色の衣を着た麗人の影がのぞかれた。そしてその麗人が獨言に、

藤原爲家筆　大和物語（前田侯爵家藏）

蓬おひてあれたる宿を鶯の

　人來となくや誰れとか待たむ

と口ずさむのが聞かれた。少將が耳そばたてゝ

　來たれども言ひしなれねば鶯の

　君につげよとをしへてぞ啼く

と、好い聲で歌ふと、女は驚いて、誰れも居ないつもりで、ついそゞろ言を聞かれたと思つて、默つてしまつた　男は縁側に上つて

　どうして何も仰しやらないのです　雨がひどいものですからね　止むまでこのまゝに置いて下さい

といふと、女は

　漏りまして、大路よりもひどいでせう

と答へた

　正月十日頃のことであつた　その中に簾の内から敷物をさし出した　引き寄せて坐りながら、簾を見ると、縁が所々蝙蝠に食はれてゐる　座敷のしつらひを見ると、立派な飾附のあさましく荒びたのが、まざ／＼と見える　その中に日が暮れたので、男は徐かに簾の内に

すべり入つて、女をば奥にも入れなかつた　女は悔しいと思ふがさて如何ともしやうがない

雨は夜中降りあかして、翌朝になつて、やつと晴れ間を見せた　女は奥へ入らうとしたが男は「唯だこのまゝ」と云つて、入れなかつた　その中に日が高くなると、女の親が、朝の食事に心を痛め、供の童には堅鹽を肴にして酒を飲ませ、少將には庭に生ひた菜を摘んで來て羹にして、茶碗に盛つて出した　見ると端に梅の花を添へ、花びらには、女の手で

君がため衣の裾をぬらしつゝ
　春の野に出でてつめる若菜ぞ

と書いてあつた　男は感じ入つて悦んで箸を取る　女は恥かしさに始終傍らにうつむいてゐた　少將はやがて童を走らせ、迎への車を呼んで後會を契つて歸つた　男はその後たえず女を訪ねた　そして美味い物はいくらも幾度も食べたがやはり五條の羹に如くものが無いと、始終云つてゐたといふことである

年月經て少將は仕うまつる大君に後れ奉つて法師となつた　その時分にこの五條の女の許に袈裟を洗ひにやつたが、それには

霜雪のふるやが下に獨りねの

うつぶしぞめの朝のけさなり

といふ一首が添へてあつた。

これが最後の一段の抄譯であるが、右の二段を讀み味はへると、文章の部分々々については暫らく云はず、全體の風味は、もう『伊勢物語』の臨摹ではなく傳説巷談の寫實ではなくして、人生の或局面に特殊の曲味をもたせた短篇の小説である　而してその表現の風致は『伊勢』に見るが如き王朝男女愛の蕾の姿ではなくして、開き過ぎた爛熟の姿である。ただれた戀を弄ぶ時代末の姿である。『堤中納言物語』の『花櫻折る少將』や『このついで』を間近に望み見た先驅文學の姿である。

四

『大和物語』の名義については或は大和國に關係した事が書いてある故といひ、或は廣く日本の物語の意であるといひ或は伊勢物語に對して都の物語の意であるといひ或は敦慶親王の侍女で小野、宮實頼に親しんだ女房大和の作なるがための名であるといふ　諸説紛紛として一定するところがなく、勝劣の差別をも附け難い有樣であるが、吾等は、やはり親王

家に仕へ、太政大臣の愛を得て、而も此の物語の中最も風變はりな戀の味を見せた一段の女主人公の名である事を利用して、作者をその名の女人に假託したのであらうと想像する。作者は恐らく男性であつたであらう、而して、內容は我が行跡ではないが、業平、貫之の先例に倣つて、女人の名の陰に隱れることの床しさに興味を見出したのであらうと考へる。

『大和物語』は氣の毒な文學であるが、同時にもツけの幸を拾ひ得た文學である。それは他に依つて興こつた文學であつたが、同時に他を興した文學でもあつた。數ある王朝文學の中、風がはりな無類の史的興味を有つたものは『大和物語』であらう

紀貫之像　傳藤原信實筆

（佐竹侯爵家舊藏）

第十一　放たれたる文學『土佐日記』

一

紀貫之の偉大なる文學的事業が三つある。第一は『古今集』の假名の序文である　第二は『古今集』の撰である。第三は『土佐日記』である。第一、第二は彼れが心の威儀を正して奉仕し從事した懸命の事業であつた。これらに對して『土佐日記』は彼れが前土佐守となつて、大海に放たれた心廣さに、束帶を脫ぎ、禮容を撤して、ふくるゝ腹の內をさらけ出した傍若無人の心の聲である。放たれたる一私人の私情で書いた無遠慮な隨見隨聞記である。吾等は上來述べ來たつた散文文學に對する緣の近さに、年代を逆まにしてまづこの『土佐日記』を取り上げるであらう。

香川景樹によれば、貫之が『土佐日記』を書いたのは七十三四歲の頃であつた　彼れは延長八年(一五九〇)に土佐守となり、承平四年(一五九四)に期滿ちて歸洛の途についた。而して其の年の十二月二十一日に國府を發つて翌承平五年の二月十六日に京着した、その五十

五日間の遭逢を寫したものが、此の日記である。

『土佐日記』が冒頭に於いて先づ讀者の心を打つのは、

男もすといふ日記といふものを、女もして試みむとてするなり。

の一句であらう。此の一句は、千餘年にわたる久しき繰返しによつて、もう新鮮の味ひを與へぬやうになつて居るけれども、發表當時の第一印象は必ずや大いに世を驚かしたであらう。而して作者も恐らく破顏して新しい試みの成功に微笑したであらう。抑も貫之は何故に假名の日記を書いたのであらうか。また何故に之れを婦女子の名に假託したのであらうか。おもふに彼れは一種の革命兒で、常に不負魂を抱いて先驅の功名を狙つてゐた。『古今集』の序は、彼れが此の性格の、恐らく最初の現はれであつたであらう。彼れは『萬葉』以來の片々たる修辭現象を統一して、堂々たる歌論を樹立した。而してその歌論は、後の勅撰歌集の序や髓腦歌論家の說の、詞藻に囚はれ、規格に縛られたものとはすつかり類を異にして、天地を、和漢を、古今を打つて一丸としたものであつた。而して漢土より借りたるものをも押强く我が物とし、彼れの駢麗に則りながら、それをば跡形もなきばかりに馴致して、美しい連綿搖曳式の雅調をなした。而してまた自分獨りの登壇に滿足せず、同族の筆に成る漢文の序を從へて光輝ある最初の勅撰歌集冒頭の第一座に立つた。革命先驅の意氣

に燃えた彼れの心は、恐らく「漢學者も書くといふ詩歌論を、和學者もして試みむとてするなり」といふにあつたであらう　而してその隱れたる本心は、漢學者も書くといふが、とても我が新らしい試みには及ぶまいといふにあつたであらう。『土佐日記』冒頭の一句は、この同じ心を、異なる假名の日記に應用したのである　而して彼れの心は、この日記といふものを、男も漢文で書くといふが、此の假名で書いた女の新らしい試みにはよも及ぶまいといふにあつたであらう　而して漢文と假名文との對照を著しくし、面白くし、同時に俳諧味あらしめんが爲めに、假名を女文字といふに乘じて、女の作者名を裝つたのであらう　思ふに彼れが『古今』の序を謹撰しつゞいて「大堰川行幸和歌序」を奉仕するにあたつて、專ら目の敵にしたのは漢文であつた、而して漢文に劣らざる至醇、至美、至高の倭文を創製する事を當座第一の目的としたが、その後年を經るまゝに、至美至高なる上品な倭文に一種の不滿を感じて、今度は袴を脱ぎ俗に碎けた、同時に彼れの洒落性を躍如たらしめるに都合のよい下手物文學を、機會あらば試みようと思ふ心が萌したであらう　此の心に活動の機會を與へたのが、今度の任を終へた身輕の旅であつた　而して頻繁たる別離の宴、田舍の歌天狗の失敗話、天氣に弄ばれて海陸に浮びつ着きつる悲しさ嬉しさ、海賊襲來の惧れ、過ぎてはその悉くが一種の樂しい思出ともなるこれら無數の逢ふさ離るさ、これこそかねての新案を試

みるべき絶好の題材、逸すべからずと、當座々々に刻下の印象を備忘して、後に整理したのがこの『土佐日記』であつた。貫之も初めは多分筆まめな公卿達の仲間入りをして、「一日甲申天晴　未時許參內……深更罷出。……參左府、次參按察使大納言御許。……今日物忌、閉門不外行。……前越後守朝臣云、一昨左府作文、外師詩有述懷、上下涕泣。　主人感歎有牽出物」の如き、不思議な、無表情な漢字臚列の日記を試みたのであらうが、先驅者の持つ遠見の活眼は、はやくも彼れをして此の種の日記に見切をつけさせたのであらう　而して心を躍らしつゝこれから試みようとする今度の假名日記の冒頭に於いて、先づ「男も日記を男文字で書くといふことだが―と、眼下睥睨の態度を示し、我れをばわざと女性と卑下して、一段とその位を高めたのであらう。　これが此の日記の冒頭の一句の持つ一大事因縁で、「男も」の「も」の一字が、特に此の意を暗示して居るやうに思はれる。

二

『土佐日記』の作者の女性假託は、おそらく『伊勢物語』の先例に倣つたのであらうと思はれるが、とにかく是れは新らしい面白い趣向であつた。　けれども是れは作者に取つては

形式上の一つの曲であるだけで、肝腎の大事ではなかつた。 また彼れは此の案が新しいだけに、その第三人稱式描寫の態度を守りつゞけることが出來なかつたのであらう。しば〳〵折角の新案に破綻を見せて、やさしい女性の假面をぬいでは、男性貫之朝臣の面貌を、まざ〳〵と露出した。 のみならず、その男容の露出は、多く、一番の肝心を成す要所描寫の場合であつた。 讀者は普通の月並記事には、仔細らしく伏目して三指をついでゐる女性作者が、一旦變はつた事件の出現に興を催すと、眉を揚げ髭口を開いて、高笑ひし揶揄し、時としては腕まくりして啖呵を切るのを見られたであらう。 けれども、女性作家の趣向の破綻の如きは、彼れのさまで介意する所でなかつた。 のみならず彼れが自慢の趣向を忘れ、破綻の危險を冒しつゝ、假面をかなぐり捨てゝ、本尊の飛び出すところこそ、讀者に取つて見る甲斐があり讀みばえのする所であつたのである。

吾等は前に此の一章に題して「放たれたる文學」と云つた。 而してまた「土佐日記は禮容を撤して膨る、腹の内をさらけ出した傍若無人の心の聲である」と云つた。『土佐日記』は表現の形式から云へば、漢文からのみならず、品位禮容の倭文からも全く放たれたる自由の文學である。 内容から云へば、ほしいまゝに洒落地口を連發し、千鮎の口に男女の面接を偲び、女人の裾に海濱の魚介を聯想し、名を忘れた振して人の陰口し、海の荒れに昂奮し

て神祇を水夫扱ひした傍若無人のみならず傍若無神のそゞろ言を交へたものである。香川景樹は「此の書の大むね、亡兒の悲みを主とし、下に海賊の恐りをふくみ、これをかすむるに全文俳諧をもてす」と云つて、亡兒の悲み、海賊の恐れ及び滑稽諧謔を此の物語の三大事と說いて居る。また岸本由豆流は「事をうらうへにいひて、言葉のあやをなせるをもて、もはら興としては書かれぬ」と云つた。さうもあらう、けれどもそれは貫之の本意から見て、むしろ部分とも末節枝葉とも見るべきものであつた。彼れの本意はあくまで放たれたる氣分で、くつろいで言ひたい事を言ふにあつたので、洒落も、誇りも、陰口も、猥談も、子晶屓も、潔癖の吹聽も、臆病風も、泣言も、八つあたりも、悉く此の根本動機の現はれであつたのであらう。左の數例が證據だてゝる。

第一に現はれたのは、秀句、綯交、一筆双叙のいろ〳〵を含めて、言葉のしやれである。記紀以來われらの祖先を悅ばし、『竹取物語』では、已に一種の形式をなした言語の遊戲である。二日目の二十二日の條には、もう

藤原の言實、船路なれど馬のはなむけす。上中下醉ひあきて、いと怪しく、潮海のほとりにてあざれあへり。

の二つが連記されて居り、二十四日の條には、また

一文字をだに知らぬ者しが、足は十文字に踏みでぞ遊ぶ。

と立てつけに記してある。これはいづれも語逆理順の交錯に味を見せた詞の遊びで、作者の最も氣に入つたものであらう、その破顔の得意さが目に見えるやうである。淺し、理に墮ちたりと甘んじて云はれん、我れには許せ洒落の一道を。これが此の趣味に生きる貫之の心であつたであらう

二十六日の條には、

猶ほ守の館にてあるに、饗應し罵りて、郎等までに物かづけたり。詩聲あげていひけり。和歌、あるじも、まらうども、他人も、いひあへりけり。からうた、これにえ書かず。やまとうた主人の守のよめりける。

と書いてある。吾等はこの條をば、貫之が、くつろぎの中にも文學者としての見識を見せた隱微の一節であると思ふ。―え書かず―は、一見、女性の筆者が―むづかしい詩を書き記すりがない―と卑下したかのやうにも取られるが、―これに―と斷つて居るところを見ると、特別の主義を持つて書く此の日記に載せることは出來ぬといふ拒絶の言葉であらう。しかしてかやうに拒絶したのは、貫之が此の日記を書くにあたつて、體容こそ撤したれ、上品ぶりこそせざれ、用語は徹頭徹尾外國語まぜずの大和詞一相で行かうと腹を極めたからであら

う。これは無論想像ではあるが、貫之は文章の用語に於いて、極端な純粹好みの潔癖家であつた。彼れは『古今集』の序文に於いて、漢文の序を目の前に並べつゝ、「延喜」「大内記」「府生」「萬葉集」等の準固有名詞の和化されたものを除いては、全く一箇の外國語をも交へずに、あの長い文章を書き了せた。『古今集』の漢文の序に於ける肝要な名詞の中で、和名を有たぬものは、特に目をつぶつて採り入れなかつたやうに見える所もある。『土佐日記』は長篇ではないが、あの中に用ゐられた漢語は「日記」「解由」「文字」「京」「屠蘇」「白散」「講師」「天氣」「節忌」「精進物」「海賊」「蘇枋」「五色」「明神」「興」「法螺」のたつた十六に過ぎぬしかも此の十六語は十分に和化されて、一種の國語ともいふべきものである。而して外國語排斥純國語仕立に關するこれほどの潔癖が王朝の他のいづれの著作にも見えぬところを見ると、貫之は、自身漢文はよく書けながら、國文の著作においては、神經質的とも云ふべき程度の潔癖を持つてゐたのであらう。而して此の洒落本位のくつろいだ短篇ながら、一期の魂を打込んだ『土佐日記』に對して、特に此の主義を實現しようと考へたのであらう。而してその根強い潔癖が、恰も此の漢詩和歌の同時に詠吟された場合に現はれ、この純粹和語仕立の日記に唐歌を書き入れることは「罷成らぬ」と、氣を吐いて、和歌の方は、必ずしも名作ではない新土佐守の作をも載せたのであらう。吾等はこの醉歌亂舞の描寫の中に國

語愛に關する彼れが片意地の現はれた事を、よにもうれしく思ふのである。序に、唐歌、和歌に「いひけり」「いひあへりけり」とある。これは他所にもあつて、落ちつかぬやうに思はれるが、恐らく當時の慣用語例の一つであつたのであらう。『源氏物語』の「玉鬘」に於いて、少貳夫妻の歌を擧げた後に「鄙の別かれにおのがじし心をやりていひける」と書いてあり、他にも同樣の例のあるところを見ると、貫之の用語が拙いのではあるまい。彼れが文章の名譽のために言添する。

三

第三に面白いのは負けじ魂の現はれである。貫之の潔癖は詞選みの上に現はれたるが如く、交遊の上にも現はれた。王朝の國守の一つの悅びは役得の饒かな事であつた。太宰の大貳を一任期勤め上げた或人が、歸任の船路に二艘の船を命じ、一艘には正しき所得を載せ、他の一艘には不正の所得を積んで歸洛の途に就いたが、正しき所得の船が沈んで、他の船が不正を滿載して平安に難波津に着いたので、天意と運命とを疑つたといふことであるが、『土佐日記』によれば、貫之が土佐の四年は清廉の四年であつたであらう。彼れは十二月

の二十二日に八木康教が馬の餞に來たのを褒めて

　　これは物によりてほむるにしもあらず

と言つてゐる。簡單なる一語ながら彼れが清廉であつた平生の現はれであらう、

　正月四日の條には、

　　昌連酒よき物奉れり。このかうやうに物持て來る人に、猶しもはあらで、聊けわざせさすものもなし　賑はゝしきやうなれど負くる心地す

と書いてある　目下の一人が餞別の品をもたらしたについて、唯だは歸さず一寸した返禮でもやりたいのだが、そのやうな品もなし、御馳走だけは賑やかに出しても負けた心地で氣が引けるといふのであらう　一代の詞宗前土佐守が何の氣がねもなくこんな些細の私事を言つてゐる所が面白い　そしてそこに此の人の負け嫌ひといふ美しき同時に片意地な性格が現はれてゐるところが面白いではないか　殊に、最初の「昌連酒よき物奉れり」は從者の女性の筆なることを、はつきりと現はしてゐるが、それから「負くる心地す」まではすつかり船君自身の筆になつて、前國守貫之が男の姿を見せて居るところが面白いではないか

　正月十四日の條に、

船君節忌す。精進物なければ、午時より後に、楫取の昨日釣りたりし鯛に、錢なければ、米をとりかけて落ちられぬ。かゝる事なほありぬ。楫取また鯛もて來たり。米酒などくる。楫取けしきあしからず

小人が恩に狎れて、慾得づくに屢々物をおくる情景を寫したのである　船頭から釣つた鯛を貰つて返禮に米をくれると、味を占めて、度々竿一本で鯛を釣つては持つて來る　その度毎に米をやり、酒までやると、船頭ほく〳〵ものである　眼前の些事の、しかも現はれた事柄だけをあつさりと書いて居るが、その中に、書いた者の負けぬ氣の潔癖性が、あり〳〵と覗いてゐるのが見える

二月八日の條には

或人あざらかなるもの持て來たり　米して返りごとす　男どもひそかにいふなり、飯粒しても釣るとや　かうやうの事所々にあり。

とある　やはり、一寸した生魚を持つて來たので返しに米をやると、傍らで男どもが「飯粒で鯛」とは此のことだと云つて笑つた　かういふことが、旅中幾度もあつた、といふのである

日記の最後なる二月十六日の夜、いよ〳〵京着して舊棲に歸つた所に、留守を託した隣人

が散々に荒らしたのを見ながら

聲高に物もいはせず、いとはつらく見ゆれど、志をばせむとす

と書いてゐるのも、同じく此の負けぬ氣と潔癖の嗜みとを見せたもので、而して是等は悉く禮容を撤した私人私情の遠慮なき現はれである。

第四に面白く且つをかしいのは、前にも云つた肉情めいた遊戲の筆で、七十翁の老歌人よほど此の方面の洒落に悶をやり、同時に一行の鬱を慰めたものと見える。正月元日の記に

芋もあらめも齒固もなし。……唯だ押鮎の口をのみぞ吸ふ。この吸ふ人々の口を押鮎もし思ふ心あらむや。

とあるのが、その一つである。同じき十三日の條に

何の蘆かげにことづけて、ほやのつまの飯鮨すし鮑をぞ、心にもあらぬ脛にあげて見せける

とあるのが他の一つである　隨分思ひ切つたはしやぎ方で、老詞人が禮容撤廢の最極端を見せたものであらう。

四

吾等は次ぎに、老歌人のくつろぎを愛でつゝ、その文章の非凡なる妙味を鑑賞したい　第一は正月七日の條で、こゝでは物を持つて見舞に來てくれた人に對する皮肉の惡口、幼い我が子に對する手離しの褒め詞、及び飛び離れた修辭の妙味等、まづさういふ方面を味はひたいと思ふ

今日破子もたせて來たる人―その名などぞや、今思ひ出でむ　この人歌よまむと思ふ心ありてなりけり　とかく言ひ〳〵て、浪の立つなることと憂へいひて詠める歌、

譯

今、仕切辨當に御馳走を詰めさせて、供の者に持たせて來てくれた人―その人の名前？ハテ何と云つたツけな！　何、すぐ思ひ出せるであらうが、その人の來たのは、專ら歌を詠まう、歌を詠んで、都の大家をあツと云はせてやらうといふ下心があつての來訪であつた。で、先づ「海上一路御平安に」なんて、何の彼

ゆくさきに立つ白浪の聲よりも

　　おくれて泣かむわれやまさらむ

とぞよめる　いと大聲なるべし　持て來たる物よりは、歌はいかゞあらむ　この歌をこれかれ哀れがれども、一人も返しせず　しつべき人も交れゝどこれをのみいたはり、物をのみ食ひて、夜更けぬ。　この歌主は、

のと云つてゐたが、その中に、ふと海の上へ目をやつて

　まあ！　波の立ちますことと！　困りますねい」　などと、豫備工作の花言をおいてから、支度して來た歌を發表して詠んだのは

　　御船路の行手にどうッと打ち寄せる荒浪の聲は大きいが、しかし君に取殘されて、これから泣きつゞける私の聲の方が浪以上で御座いませうよ

と詠んだ。　激浪怒濤よりもえらいといふんだから、この歌主の聲よッぽど大きいと見える。しかし持つて來てくれた御馳走に比べて、歌の方はどうであらうか

　この歌をば、一座の誰れ彼れ、口先では「どうも結構で」など云つて褒めるけれども、誰

「またまからず」といひて立ちぬ　ある人の子の童なる、ひそかにいふ。「麻呂この歌の返しせむ」といふ　驚きて、「いとをかしきことかな。詠みてむやは。詠みつべくははやいへかし」といふ「罷らずとて立ちぬる人を待ちて詠まむ」とて、もとめけるを、夜ふけぬとにや、やがて往にけり

れ一人返歌をする者がない。それは返歌の立派に出來る人も、此の中に居るのだけれども、向うの歌ばかりを、口先で褒めてゐて、そしてお土産の御馳走ばかりを食べてゐる中に、いつか夜が更けて了つたのであつた　その中にお客の歌主、餘程間がわるくなつたのであらう。「また參ります」と云つて座を起つた。

すると、そこに居あはせた子供の、まだよくよく稚いのが、極りわるげに、こツそりと、「わたし、あの歌の返歌をしませうか」といふのであつた。びツくりして、「まあ、えらい事をいふね。詠めるのかい？　詠めるなら早く言つて御覽よ」といふと、「すぐ來ると云つたから、あの人が歸つて來るのを待つて詠みませう」と云つて、待つてゐたが、なかなか歸

「そも〳〵いかゞ詠んだる」と、いふかしがりて問ふ。この童さすがに恥ぢていはず しひて問へば言へる歌

ゆく人もとまるも袖のなみだ川
みぎはのみこひぬれまさりけれ

となむ詠める かくはいふものか うつくしければにやあらむ いと思はずなり。

らないので、あちこちと折角さがして見たが、餘り遲くなつたと思つたのか、そのまゝ歸つてしまつたのであつた。

それから、「どんな風に詠んだのだい？」と、不審に思つて尋ねるとこの童は居ませては居るがさすが子供で、はにかんで言はない。強ひて尋ねると、やツと言つた、その歌は、

別かれて行く人も、あとに殘る人もみんな泣きの涙で、袖を涙の川のやうにしてゐますわ。それが若し川ならば「岸の水際が水の增すにつれ、一寸二寸と濡れましして行くやうに、ます〳〵涙をこぼされるのですね。

と、まあ、かう詠んだのであつた。いや、よくもかうまで詠んだものではある。かう思ふのは我が子可愛ゆしで、子贔屓の買ひかぶりか

童言にては何かせむ、嫗翁にをしつべし

も知れぬが、とにかく意外の事である。これを子供の歌だなど云つて居られるものか。立派な年寄、婆あさん爺さんの作と云つて、更に恥かしいものではない　悪からうと、どうであらうと、此のまゝにはされぬ。便宜を見て、歌主に知らせてやらう。と云つて、主の君が書き取つておかれたらしい。

あしくもあれ、いかにもあれ、たよりあらば

やらむとて、おかれぬめり

『古今集』の撰者、土佐守としては、とても言はれまいと思はれる皮肉の悪口、厚顔の子供自慢であるが、身分もなき婦人の名に隠れての身輕な無邪氣な私情話の面白さは、また格別である。　それに文章の妙趣もまた格別で、『伊勢物語』の換骨なる―その名などぞや―の大膽な感投進斷を始めとして、簡潔な詞で歌主、童、その他を取りさばく活手法は歎賞に値する

引例の最後に、吾等は二月五日、住吉の浦で暴風に遇ふ條の一鎖を引くであらう

かくいひて眺めつゞくる間に、ゆくりなく風吹きて、漕げどもこげども、尻へ

譯

不意に大風が吹いて來て、舟子どもが懸命に、曳やく／＼と漕げどもこげども、舟は後へ退くばかり

退きにしぞきて、ほと／＼しくうちはめつべし　檝取のいはく、「この住吉の明神はれいの神ぞかし、ほしき物ぞおはすらむ」「とは今めくものか。」「さて幣を奉りたまへ」といふ　いふに隨ひて、幣たいまつる。　かく奉れども、もはら風止までいや吹きに、いや立ちに、風浪の危ければ、檝取又いはく　「幣には御心のいかねば御船もゆかぬな

ですんでの事に、波の間にはまる處とした。その時船頭が

こゝの住吉の明神様は、欲しい物がありさうだと、海を荒れさせて舟を流さうといふ、例の通有のえれい靈験の神様ですぞ。これや、此の幣の中に、何か欲しい物がおありなのでせうよ

幣をとは又神様も、當世式に貪りなさるもんだな。

さうですとも。たから御幣をお上げなさいといふのです。

といふ。いふがまゝに御幣を奉つた。奉つたけれども、一向風の止む氣色がない。止まぬばかりか一倍はげしく、風が吹き、浪が立つて來たので船頭がまた

こりや、御幣位では、神様の御心が晴れ／＼しないので、それで御船も進みかねると見えま

めり。猶うれしと思ひたぶべき物たいまつりたべ」といふ。また言ふに随ひて、いかゞはせむとて、「眼もこそ二つあれ、たゞ一つある鏡を奉る」とて、海にうちはめつれば、口惜し　さればうちつけに、海は鏡のおもてのごとなりぬれば、ある人の詠める歌、

　ちはやぶる神の心のあるゝ海に
　　鏡を入れてかつ見つるかな

いたく住の江、忘れ草、岸の姫松などい

すよ。やツはり改めて、神様のにこ〳〵なさりさうなものを、お上げなさりませ。

といふ。仕方がない、また云ふまゝに、

どうするものか！　やぶれかぶれだ！　大事な眼も二つはあるのに、これはたッた一つたけしか無い尊い貴い鏡だが、おやあ、上げッちまへ！

と云つて、海へ拋る！　波が呑む！　あゝ悔しい！と見ると、現金にも、今まで大波小浪で、大凹凸の山や谷を見せてゐた海が、いかに鏡を投げたとて鏡そツくり平らになつたではないか。それを見て或人の詠んだ歌、

　荒神様が何のために荒れすさむのか
　ハテ怪しいと思つたが、海の中に秘蔵の鏡を
　投げ込んで見て、先づ一通り、御心が讀めたと
　いふものだ。

ふ神にはあらずかし。目もうつらうつら、鏡に神の心をこそは見つれ。楫取の心は神の御心なりけり。

住吉の明神はれいの神ぞかし

この邊は優美な歌枕を持つたところで、住の江とか、忘れ草とか、イヤ岸の姫松とかいふと、ひどく優しく聞こえるが、どうして、どうして、神樣はそんな生やさしい神では入らつしやらないのだ。鏡を材料に、先刻から凝乎と、から目を見張つて神樣のお心を讀み取つたが、足許につけ込む船頭の心、それが取りも直さず神樣のお心であつた。

この一段或は敬神家の反感を買ふでもあらうが、文學的に見ると、その簡潔で輕妙な筆致、手に入つた洒落振は、實に巧妙を極めたもので、恐らく『土佐日記』中の壓卷であらう。思想や趣味の方から云つても、貫之が何も敬神の思想を持たなかつたのではないが、不意の大荒れに心が顚倒して

藤原定家筆　土佐日記（前田侯爵家藏）

ゐるところへ、神慮の通譯らしい機取の脅し文句が氣に入らず、それに祕藏の寶を捨てると同時に波風の收まつた現金の和ぎぶりに、いよ／＼癇が昂ぶり、同時に生來の洒落氣が込み上げて來て、禪家の謂はゆる佛に逢へば佛を殺し、祖に遇へば祖を殺す筆法で、つい明神樣を機取扱ひにしたのであらう。蟻通の明神は貫之の歌がほしさに、鳥居先で貫之の馬を立往生させ、その歌を得て後、悦んで神前の乘打を許されたと云はれる。いかに荒神でも、同時に風流の神樣である。老歌人が裸心の咲呵をば、必ずうれしと思召したであらう。

此の一段の妙味の中心も、前同樣に公的の袴をぬいで、淨裸々赤洒々の私的氣分を發揮したところにあるが、此の急々の場合に於ける機取との掛合が、寸分の隙間もなく寫されてゐ

る趣、中にも「ほしき物ぞおはすらむ」とは今めくものか」の渡り奉詞や「捌幣を奉り給へといふ――いふに從ひて幣奉る、――かく奉れども」などの尻取の呼吸など、讀む者に目を見張らせる面白さである　洒落、ユウモアの方面に於いても、「れい例、靈の神ぞかし」に於ける秀句の語の戯れから、「眼もこそ二つあれ、たゞ一つある鏡を奉る」に見るやうな事の洒落、さては「儀取の心は神の御心なりけり」に見る如き高級な皮肉の洒落と、淺深いろ／＼の風姿を見せて、貫之が一期の文致こゝに集まつたかの觀がある。

「土佐日記」には、他にもいろ／＼の味はひどころがある。「海賊の恐れ」も無論その一つであらう　しかし量から云つても、描寫の質の優越から云つても、これは、前條の數者に比べて物の數でもない。「亡兒の悲しみ」は主なる味ひの一つに相違ない　但しこれとても折折切なる感情の影を覗かせては居るが、壓倒的といふほどのものではない　要するに是等はすべて、引ツくるめて、作者があらゆる公的の遠慮氣がねから解放された私的氣分の横溢と見るべきものであらう。

最後に最後の一節、夜更けて十六夜の月の下に、六年前の舊棲を見る所であるが、頽りの隣人に迎へられた樣子もなくそして聲をひそめて隣人の無情を陰口し松の大木が片枝を失ひ今生ひの小松の立てるを見て、伴ひ得なかつた幼い愛兒を偲ぶ、取りあつめての悲涼蕭

條、出發地に於ける歡送の和氣陽氣とは全く雲泥の相違である。この序分に於ける花咲く如き賑はしさに對する收結部の氷るやうな淋しさ、事實そのまゝが、此の通りであつたのではあらうが、藝術品としても實に類ひなき好照應兼大團圓の妙味を見せてゐる。「と まれかくまれ疾く破りてむ」最終の一句は至愛の著作に對する愛着の反語でもあらうが、同時に荒涼たる舊棲に涙を絞つた老歌人の本心でもあつたであらう

老定家臨摹の貫之筆跡（前田侯爵家藏）

五

『土佐日記』は『伊勢物語』に他人假託の趣向を學び、短切簡淨の文致を學びまたその「東下り」のあたりに旅行記執筆の示唆を得たのであらう『伊勢物語』がほんの一部に含んでゐた要素を取り、それを培養し

敷衍して、それだけで堂々たる一篇の文學を成したもの、それが『土佐日記』であるといふやうにも、史的には考へられる。

けれども『土佐日記』には同時に、作者獨自の動機と、主義と、手振とがあつた。第一の動機は、七十年にわたる長い公的の束縛を脫して、私的の本能我を無遠慮に表現するにあつたであらう。土佐守の任を解かれて、まだ新らしい官職に就かぬ間に於いて、周圍に官衙、羈縻の影を見ずして、唯だ心安く海と山と魚と鳥と自然人と相伍する五十日間に於いて、久しく堰き止められた、自然人の私情を發露するにあつたであらう。從つて筆執つての心構は、題材の選擇に於いても、修辭の書きこなしに於いても、あくまで自由であるが、しかしながら用語に於いては純粹無雜の倭詞一相にしようといふにあつたであらう

かやうな心構のもとに、日數に於いては五十五日、場所に於いては土佐から海路、和泉を經て京都まで、事に於いては新舊國守送迎の騷ぎから、別離をめぐるもろ〳〵の進話、海路の旅に伴ふ喜び悲み、和歌中心の笑話、海賊の恐れ、亡兒の悲み、我が性癖の披露、子供の自慢と、人の事、我が事、見る物聞く物の一切を、思ひ切り自由に書いたものが、『土佐日記』である。

從つて『土佐日記』は一種革命の意氣に振つたものであるが、同時に風雅の氣を帶びず時には稚氣、野氣、遊冶の氣をすら帶びたが、全體が思無邪の一にして飄逸恬淡の氣を帶びた。

色に塗られて、實に愛すべき作となつた

假名の日記といふ文學の祖、官吏、歌人として七十年の格式正しき公的生活を送つた老人が、任を解かれ野に放たれて、私人の私情を自由に寫して、立派に新味を發揮した創試の作、これが『土佐日記』である。

六

『土佐日記』が出てから十年ばかりを經て、天慶の末年頃に、增基法師の『いほぬし』(庵主)が作られた。一名を『熊野紀行』とも云ふが、熊野紀行を主として、遠江までの東國旅行をも合はせ記したものである。『土佐日記』よりは少し短く、『伊勢』『土佐』と同じく第三人稱式で、作者を庵主の名に託し、和歌を中心にして前後を長短の散文で絡つた作であるが、單調で、人を引きつける力がなく、唯だ歌好きの信仰家が、優雅な詞で見聞を綴つたといふ趣のものである。最初に

いつばかりの事にかありけむ、世を遁れて、心のまゝにあらむと思ひて、世の中に聞きと聞く所々、をかしきを尋ねて心をやり、かつはたふとき所々拜み奉り、我が身の罪を滅ば

さなとする人ありけり。庵主とぞいひける。神無月の十日はかり熊野へまうでける
と書いてあるが、作中第一の出色は、熊野に着いた時を寫した左の記事であらう

それより三日といふ日、御山に着きぬ。こゝかしこ巡りて見れば、庵室ども二三百ばかり、おのが思ひ〳〵にしたるさまもいとをかし　親しう知りたる人の許に行きたれば蓑を腰に衣のやうにひき懸けて、ほだ杭といふものを枕にして、丸寢にねたり　やゝといへば驚きてとく入りたまへといひて入れつ。おほんあるじせむとて、暮行筒の大きなる芋の頭を取り出でて燒かす。「これぞ芋の母」といへば、「さは乳の甘さにやあらむ」といへば、「人の子にこそ食はせめ」といひて經營すれば、さて鐘打てば、御堂へまゐりぬ。頭ひきつゝみて蓑うち着つゝ、こゝかしこに數知らずまうで集まりて例し果てゝまゐり出づ

こゝは一寸事が變はり、洒落もまじつて面白いが、あとは平坦無味で、笑を知らぬ人の作のやうにも見える。『土佐日記』に引きつゞいて現はれた作であるが、その影響は全く蒙らなかつたのであらう。

平安朝前期の旅行記は、此の『庵主』を最後として、遙かに後期の『更級日記』につゞくのであるが、遠く江戸時代までを見渡して、魅力のある名作紀行は、前に貫之の『土佐日記』

あり、後に芭蕉の『奥の細道』ありといふべきであらう。

第十二　創試の國語論文、古今集假名の序

一

吾等は小説の一祖、日記の一祖を説き了はつて、今や假名の論文の祖先作に立ち向ふこととなつた。紀貫之の作と傳へらるゝ『古今和歌集』の和文の序である。序は「土佐日記」の書かれた承平五年より遡ること三十年、延喜の五年（一五六五）勅命を蒙つて、此の集を撰した時に、漢文の序と相並べて、その卷頭を飾つたものである。

「序」は支那の歷代に行はれたおもなる文體の一つである。そして煩瑣なる類別を好む支那の修辭學者等によつて、數十種乃至百餘種の文章の中の主なる一種に數へられたものであつた。けれども簡にして要を得たる分類、例へばギリシヤ以來今日まで行はれてゐる記實文、敍事文、説明文、論文の四種別に從へば、「序」は一種の論文と見做さるべきものであらう。一つの著作の要を提げ、兼ねて作者の心胸を披瀝するといふ特別の役目を帶びて、特別の場所に据ゑらるゝ一種の論文と見做さるべきものであらう『古今集』の序文もその

類の一つで、内容の要求する以外以上に亘つて長廣舌を振つた氣位の高い一種の論文であつた。

序文の概要は、まづ和歌を定義して、次ぎに効用を述べ、種類を分かち、起原變遷を說き、代表歌人の作風を批評し、生れて歌人となるの榮譽を高唱して、昭代の盛事を謳歌したものである。前代を合一し、止揚して後代の種子を蒔いたもの、時を得たる漢文を尻目にかけて國文の時代威を示したものである。

吾等は『古今集』の假名の序文を通覽して、先づ和語仕立一相の純粹振を偉なりとし又快なりとする。吾等は先きに、『土佐日記』に、準國語と見るべき十六個を除いては、一つの漢語も用ゐられて居らぬことを述べたが、『古今集』の假名の序は、更に嚴格なる純粹振を見せて、「喜撰」「萬葉集」等の固有名詞、及び固有名詞に附着した「僧正」「大內記」「右衛門の府生」等の肩書を除いては、全く一個の漢語をも見出だすことが出來ぬ。漢文隆盛の時代に於いて此の徹底的漢語排斥は相當の難事で、餘程の見識ある者でなければ仕遂げ得なかつたことであらうと思はれるが、更により以上の難關を突破したと思はれるのは、漢文體製の格式を破り、無造作に筆を着けて筆を收めつゝ、その間に無限の落着を見せた味である

漢文の序は、その初發が

寶惠本古今集假名序
（宮內省圖書寮藏）

夫和歌者、託其根於心地、發其華於詞林者也

となつて居り、その結尾が、

嗟乎人丸既没、和歌不在斯哉。于時延喜五年歲次乙丑四月十八日、臣貫之等謹序。

となつて居る。まさしく『古事記』や『懷風藻』『凌雲集』『文華秀麗集』『經國集』等の序の流れを汲んだ首尾の構であるが、『古今集』の假名の序は、すつかり此の極つた格式をはづし、冒頭には、「夫、抑も、臣惟ふに」などいはずして、まづ

やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。

とくだけた態度を見せて居る。而して友則、貫之、躬恒、忠岑等、撰者の名をば行文の中間に目立たぬやうに疊み込めて、最後をば、

歌のさまをも知り、事のこゝろをも得たらむ人は、大空の月を見るが如くに、古を仰ぎて、
今を戀ひざらめかも。

と、儀式ばらずに、風流に、餘意を見せて止めてゐる。　此の文體の轉換は、修辭的には一種の革命ともいふべき創試で、大膽なる意氣と手腕とを有たぬ者の成し得ぬところであらう　かういふ所から推すと、漢文の序の方にある「長歌」「短歌」「旋頭」「混本」等の大切な名稱を、假名の序の方には、すつかり省いて、唯だ「三十文字あまり一もじ」の一種のみを記したのは、當時音讀された長歌、短歌、旋頭、混本を、漢音なるが故に忌避したので、かういふ心遣が、此の序のあらゆる方面に用ゐられたことであらうと思はれる。　とにかく四角な文字を騈麗に構へた漢文の序を參考しつゝ、倭詞本來の作用を十分に發揮させて、あの長い假名の序を作り了せた貫之が作古の意氣は壯んなもので、同時に、その成功は實に鮮かなものであつた

假名の序に於いて、次ぎに偉大なる、恐らく最も偉大なるは、和歌に關する諸概念の綜合、開眼及び自主精神の確立である　序に記されたるところは、定義、効用、分類、歴史、批評の凡てに通じて、嚴格には貫之の發見とも始唱とも言ひ難いものであらう　殊に効用、分類に關する所説は毛詩の序に負ふ所が非常に多く、中には彼れの成説を半熟に奪ひ來つて、適まに彼れに擬したやうな苦々しい節もある。　けれども大體から觀察して、是等の諸概念が力強く

一つに纏められたのは驚くべき事であり、また從來我が『萬葉集』や、詩論や、歌式やの中に覺束なく說かれたものが、新に魂を吹き込まれ、支那の毛詩や詩格論の中に見えた外國論議が、尋常に歸化せしめられ、而してこれらの凡てが心を併せ魂を一つにして、新しき和歌集のために調和した序曲を肅々と奏して居るのは、殊に愉快なる驚異といはねばならぬ。要するに、上は『萬葉集』から『濱成式』を經て『菅家萬葉』までを見渡し、傍ら『懷風藻』から『凌雲』『文華秀麗』『經國』に至る詩集の序を見渡すと、貫之が『古今集』の假名の序は、和歌勃興の潮先に乘つて、蒐集本位の編輯意識より藝術觀の宣言意識に進んだものであるか、幼稚なる臚列意識より根據ある統一意識に進んだものである。古に倣ひ世に連る、隨作意識より我れ自ら古を作す創建意識に進んだものである。『古今集』の假名の序の中心の價値はこゝにある而して創作者貫之の最も偉い點も亦こゝにあるであらう。

二

吾等は次ぎに、假名の序、眞名の序の前後、優劣、その他について管見を述べて見たいと思ふ兩序の前後については、『袋草紙』に、第一には、まづ貫之の假名の序が成り、猶子の淑望が感

歎してその漢文譯を試みたといひ、第二には、貫之が自身假名の序を書くために、先づ淑望に囑して眞名の序を試みさせたといひ、第三には、貫之が假名の序を作つて、後に淑望に漢譯せしめたといふ、この三説を擧げて居る。外に上田秋成が假名の序、眞名の序、共に貫之の筆に成つたといふ説があつて、古來多數の聽説、この四つの外に出でぬやうに思はれるが、吾等は先づ、眞名の序が前に成つて假名の序が後に成つたと考へる旨を斷り、更に貫之が破天荒の創試を首尾克く成就せんが爲めに、先づ根幹の大旨意を話した上、猶子の淑望に漢文の起草を託したのであらうといふ、『袋草紙』の第一説にほゞ等しき想像を加へて、論を進めることにする。

吾等は先づ秋成の貫之兩作説を、面白いが危いものと思ふ。第一に、『本朝文粹』に眞名の序を紀淑望作と記してあるのは、有識者の間に久しくしか傳へられてあつたからであらう。而してしか傳へられたのは、假名の序の方は、たしかに貫之の筆に成つたが、といふ事を裏書する對稱の證明となつてゐるのであらう。若し眞名の序をも貫之が書いたならば、『新撰和歌』の漢文序をあれ程に書く手腕のある貫之に、「貫は他人の作」といふが如き噂の立つ苦がないであらう。また貫之自身が書けぬからとて、その書ける漢文を他人に託して書かしめるといふ事がないとは限らない筈である。また極端にいへば、とにかく

一淑望作」とあるものを、唯だ推あての想像で淑望の作でないといふことが出來るならば同じ論法で貫之の作と稱せらるゝ假名の序をも、貫之の作にあらずといふことが出來るであらう。要するに、帝の殊寵を蒙り、歌界の重望を負うた貫之が、人にも許され自らも任じた結果、他の三人の撰者等を代表するつもりで、假名の序では「貫之ら」といひ、眞名の序には「臣貫之等」と書かせたので、その依託の事實をば貫之も、淑望も、世間も少しも怪しむことなく、双方の名譽としてかくは言ひ傳へたのであらうと思はれる。

次ぎには、假名の序を先とする『袋草紙』の第一第三の二説である。但しこれは感歎の餘り進んで譯したのか、或は依頼されて受身に譯筆を執つたのかといふ手順の相違があるばかり、結局は同じ事になるのであるが、吾等は、いづれにしても、成立ちにくい説であると考へる。それは好んだにせよ、賴まれたにせよ、先輩大家の既製の名文に對して、あの思ひ切つた換質、換位、大削除、大添加を施すことが不可能であらうと思はれるからである。何故にしかいふか。

先づ冒頭の一鎖、

夫和歌者、託其根於心地、發其花於詞林者也。人之在世、不能無爲、思慮易遷、哀樂相變。

やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事わ

ざしげきものなれば、心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて、いひ出だせるなり。これはいづれを本としても、それ〳〵に、因はれぬ名譯とも名文ともいはれるであらう。假名の序の「人の心」については、眞名の序の「託其根於心地、發其花於詞林」の對偶に對して、殊の外見劣りがするといひ、一本によつて「ひとつ心」の誤りと見做す說もあるけれども、「ひとつ心」は「同じ心」と取られる憂へがあつて、絕對に優つて居るとも言ひ難く、また「人の心」といへば、却つて對偶を離れた、自由な素直な味があり、次ぎに來る「世の中にある人、事わざしげきものなれば、心に思ふ事を、見る物聞く物につけて言ひ出だせるなり」にも照應して、却つて面白いとも見られるであらう。

で、此の一鎖は前後をも優劣をも問はぬとして、さて問題はその次ぎなる二鎖の續き方である。假名の序には、かうある。

花に啼く鶯、水にすむかはづの聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、たけき武夫の心をも慰むるは歌なり。この歌天地の開けはじまりける時より出で來にけり。しかはあれども、世に傳はることは、久方の天にしては、下照姫に始まり、あらかねの地にしては須佐之男の尊よりぞ起こりける。

部分的に見てもよく出來てゐるが、「……慰むるは歌なり＝この歌あめつちの……」の連接には、尻取連鎖の味があつて非常に面白い。こゝを漢文の方には、かう書いてある

是以逸者其聲樂、怨者其吟悲。可以述懷、可以發憤。動天地、感鬼神、化人倫、和夫婦、莫宜於倭歌。倭歌有六義。一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌。

これは恐らく毛詩の序に、

故正得失、動天地、感鬼神、莫近於詩。先王以是經夫婦、成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗。故詩有六義。

とあるのを見て、之れを模したのであらう。而して毛詩の序の「莫近於詩」から「故詩有六義」に讀みつゞけ、それに引きずられて、

莫宜於倭歌＝倭歌有六義

と續けたのであらう。「倭歌」を詩に植ゑ換へたのもよく、「故」を省いたのもよく、中間の五六句を省き「莫宜於倭歌倭歌」とつゞけて、蟬聯の風味を加へたのは更に面白いが、しかしながら、假名の序の連接が、和歌の効用より歴史に移つて、しかも、

……慰むるは歌なり＝この歌

と、連鎖式の名調子を見せてゐるのに、それを感歎した後輩が、若しくは先輩に委囑された者

輩が、原文の二三十行を飛躍して、しかも効用から分類に續け變へることが出來るであらうか。吾等は此の一事でも、假名の序先任說の成立を危ぶむのである。

次ぎには、同じく內容の省略と順序の轉換とについてであるが、假名の序には、神代以來の歌の變遷を敍して、

この歌天地の開けはじまりける時より出で來にけり。しかはあれども、世に傳はることは、久方の天にしては、下照姬に始まり、荒金の地にしては須佐之男命よりぞ起こりける。ちはやぶる神代には、歌の文字も定まらずすなほにして事のこゝろわきがたかりけらし。人の世となりて、須佐之男命よりぞ、三十文字あまり一もじはよみける。かくてぞ花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれび露をかなしぶ心詞多く、さまざまになりにける。遠き所も出で立つ足もとより始まりて年月をわたり、高き山も麓の塵ひぢよりなりて、天雲棚びくまでおひのぼれる如くに、此の歌もかくの如くなるべし。難波津の歌は帝のおほん始めなり。淺香山の言の葉は、采女の戲れよりよみて、このふた歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人の始めにもしける。

と書いてある所を、眞名の序には、左の如く略敍して居る。

神世七代、時質人淳、情欲無分、倭歌未作。逮于素盞嗚尊到出雲國、始有三十一字之詠、今之

反歌之作也。其後雖天神之孫、海童之女、莫不以倭歌通情者也。爰及人代、此風大起。

此の二つを比較すると、假名の序の方は、和歌は開闢の初めから詠まれた事、傳はらなかつた。傳はつたのは、天上では下照姫から、地上では須佐之男命からである。天上の神世時代には文字の數も定まらなかつたが、地上の人間界となつて、須佐之男命から三十一字の短歌が詠まれるやうになつた。それから花鳥風月戀無常、萬事につけて歌を詠むやうになつたが、帝王の御作では仁徳の「なにはづ」の御製、臣民の作では采女の「淺香山」、この君臣の詠みはじめが、歌の父母として習字の手本にもされたのであつた―といふのであるが、眞名の序の方は、神代には「倭歌未だ作らず」と云つて、これが先づ有無の相違となり、人の世の素尊が、こゝでは神代扱ひされ、而して帝王、人臣の詠み始めとして、歌の父母とまで見られた「難波津」「淺香山」の二歌が、すつかり無視されて居るのである。勅撰歌集の卷頭を飾る先輩大家の作に對して、それを感歎し若しくは依託されて執つた後輩の謬筆が、かういふ逆説無視、或は大省略を施すことが出來るものであらうか。

次ぎに怪しまれるのは、眞名の序に於ける思ひ切つた添加である。眞名の序には、右に引いた歌史上半の略敍に引きつゞけて、左の如く書いて居る。

爰及人代、此風大起。長歌、短歌、旋歌、混本之類、雜體非一、源流漸繁。譬猶拂雲之樹生自

寸苗之煙、浮雲之波起於一滴之露。至如難波津之什獻天皇、富緒川之篇報太子、或事關神異、或興入幽玄。但見上古之歌、多存古質之語、未爲耳目之翫、徒爲教誡之端。古之天子每良辰美景、詔侍臣預宴筵者獻和歌。君臣之情由斯可見、賢愚之性於是相分。所以隨民之欲擇士之才也。自大津皇子之初作詩賦、詞人才子慕風繼塵、移彼漢家之字化我日域之俗。民業一改、和歌漸衰。

これは假名の序に殆んど見出だされぬ内容であるが、假名の序が三十一文字の一種だけを擧げて居るのに對して、長歌、短歌、旋頭歌、混本と、數々の諸體を列擧するのは、譯筆としては鳴許の沙汰であらう。つゞいて「拂雲之樹」や「難波津之什」の數句は、假名の序にある「高き山も麓の塵ひぢ」や「難波津」の獻歌の句意を任意に料理し、場所をも置き換へて、漢文の特色美を成立たしたと見れば、それもよいが、古の天子は良辰美景毎に賜宴して、侍臣に和歌を奉らしめ、教化の料とされたとか近江朝に詩賦が始めて行はれ、段々盛れになるに從つて和歌が衰へたとかいふ類の重大な事で、原文に影も見えないのを、長々と添加するのは、長者の名文に對する譯筆としてあるべきことではあるまい。上古の歌について、「古質の語を存し」や、「未だ耳目の翫びとならず」は聞こえるが、「徒らに教誡の端となる」は恐らく貫之の本旨ではあるまじく、また次ぎなる古の天子が賜宴に於ける奉獻の和歌によつて

君臣の情を謹み、臣下の賢愚を察知された聖旨とも相容れぬものであらう。要するにこれらの大削除といひ、殊に大添加といひ、すべては可なりの自由を與へられた者の新に起草する場合にのみ許さるべき事であつて、既製の原文に對し、殊に重大な典儀に伴はれたる先輩大家の文章に對する譯筆としては、到底考ふべからざる背理非禮であらう。

三

次ぎに假名、眞名兩序の前後を考へさせられるのは、六歌仙の歌の批評である。第一に僧正遍昭について假名の序には、

僧正遍昭は歌のさまは得たれどもまこと少なし、たとへば繪にかけるをんなを見て徒らに心を動かすが如し。

とあり、眞名の序には、

花山僧正、尤得歌體、然其詞花而少實、如圖畫好女徒動人情。

とある。此の二つを比べて見ると、一歌のさまは得たれども一と「尤得歌體」とは、いづれを先としても、名譯であり名句であるけれども、一得一の一語は漢文に、より多く相應はしく、

いづれかといへば眞名を先として、假名を後とすべきであらう　次ぎに漢文には「其詞花而」があり、和文には無いが、「少實」は本來「花」に對して書かれたので、和文は恐らく頗はしさを厭ひ「實」を「誠」の意味に換へて、直ちに形式美を具へ得たとに對せしめたのであらう。綺の女の譬喩については、從來多く漢文に理があつて、和文は筋が立たぬやうに云されてゐるが、吾等は嚴密に云つて、筋の立たぬは双方同じことで、和文の方が寧ろ比較的筋合が聞こえるであらうと思ふ　何となれば「詞の花があつて實の少ないのは、畫中の美女が無駄に人を迷はすやうなものだ」と云つては、比喩の相對が成立たぬ道理で、察するに「徒らに」の一語は、和漢兩樣とも、これに對して心を動かす者について云つたのであらう、而して和文の作者は、その考に基づき、「さやうな歌に感じ入ることの愚さは」の一句を略したつもりで、「畫中の女を見て心ときめきさせるやうなものである」とは云つたのであらうと思はれるからである　もう一つの問題は漢文の方の「花山僧正」であるが、本來官職の稱を姓名の後に附けるのは一種の敬稱になるので、花山僧正、在原中將、野宰相、在納言等の非禮な稱呼は勅撰歌集の序などに書くべきものではなく、和文のは之れに心づき改めて僧正遍昭、在原業平とは云つたのであらう。

第二に業平の歌に對する批評は、眞名假名、左の如く相對して

其情有餘、其詞不足、如萎花雖少彩色而有薫香

その心餘りて詞足らず、しぼめる花の色なくて、にほひ殘れるが如し

殆んど巧みなる逐語譯ともいふべき相似の姿を見せて居るが、殊は「その心」の「その」は和文としては寧ろ不要なので、これも漢文に引きずられて用ゐた名殘の一語であらうと思はれる。第三第四の康秀、喜撰についてはいづれを先とも考へられるやうで、定かには言ひ難いが第五の小野小町に對する批評は、やはり漢文が前に出來たことを示して居るやうである。何となれば

艶而無氣力、如病婦之着花粉

あはれなるやうにて強からず、いはゞよき女の惱めるところあるに似たり

の二つを並べて考へると、「花やかだが力のないのは、病氣の女が紅白粉をつけたやうだ」といふ漢文の方は、本義、喩義がぴたりと來ぬやうで、それを見て、和文が「美妙なやうだが強い力の無いのは美しい女の惱み煩らふ風情である」と改めたやうに見えるからである。また「よき女の惱む」といふのが原文ならば、恐らく「病婦が花粉をつける」とは譯すまいと思はれるからである。最後の大友黑主は必ず漢文を原としたいのであらう

頗有逸興而體甚鄙、如田夫之息花前也

そのさまいやし、いはば薪負へる山人の、花の陰に休めるが如し。

の二つを並べて見ると和文は花の傍らに立たせる相應はしさの比較から、漢文の田夫を樵夫に換へたので、一薪負へる山人一とある原文を一田夫一と譯さうとは、想像することが出來ないからである。また參考案に一逸興一とあるのを、責任者が意見の相異で削ることは容易であるが、長者先輩の原文に唯だ一そのさま卑し一とあるのに、後輩が風變りな特殊の意味を持つた一有逸興一の一句を添へるのは非禮不穩當であらう。

徒動人情。在原中將之歌其情
有餘其詞不足。如萎花雖少
彩色而有薰香。文屋康秀詞鋒
然文林巧詠物。然其體近俗也
如賈人之著鮮衣。宇治山僧喜撰其詞
華麗而首尾停滯。如望秋月

清輔本古今集眞名序
（前田侯爵家藏）

六歌仙論の次ぎから最後に至るまでは、出入が非常に多く、文句や修辭が比較對照を許さぬ程度の相違を見せて居るが、この大なる相違は、恐らくは固定既存の大家先輩の原文を後輩が添削變更したと見るよりは、先づ試みた後輩の參考案を、責任ある署名者の先輩が自由に取捨したと見るのを合理的とすべきで

あらう。のみならずその中の一二についていふと例へば漢文の方に

此外氏姓流聞者不可勝數、其大底皆以艶爲基、不知歌之趣也

とあり、和文に

この外の人々その名聞こゆる野邊に生ふるかづらの這ひひろごり、林にしげき木の葉の如くに多かれど、歌とのみ思ひて、そのさま知らぬなるべし。

とあるのは、眞名の原文に「以艶爲基」とあるのが、多數の歌人の特色を無視する嫌ひがあるので、制限の詞を削り、唯だ何心なく歌を詠むのみで、歌の本領趣味を辨へて居る者がないといふ意味に改めたのであらう。また其のすぐ次ぎなる漢文の方の

悲哉々々、雖貴兼相將富餘金錢、而骨未腐於土中、名先滅於世上。適爲後世被知者、唯倭歌之人而已。何者語近人耳、義慣神明也

の如きは、原文に無き譯者の入筆としては甚だ不當僭越のものであらう。尚ほまた假名の原文が唯だ「千歌はたまき名づけて古今和歌集といふ」だけで滿足してゐるところへ、漢文の序が決定以前の名題なる「續萬葉集」までを擧げて

各獻家集並古來舊歌日續萬葉集。於是重有詔、部類所奉之歌勅、爲二十卷、名曰古今倭歌集。

と書く如きは、譯文としては僭越の追加であらう。この「續萬葉集」を省いたのは一つは貫之が純粹和語仕立の序文に漢語の要素を少なくする爲め一つは文章を管々しくせぬ爲めの用意であつたであらうと思はれる　また漢文に「家集並古來舊歌」とあるのを、和文が詞を前後して

萬葉集に入らぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ

としたのは、自分等の私集を先きに擧げ古人先輩の作を後にした、漢文の順序立の非禮なることを感じて前後を換へたのであらう。

要するに、文章修辭の上からの觀察では假名の序の成立を先とし眞名の序を後とする論はまづ成立つまいと思はれる。

四

之れに反して眞名の序を先とし假名の序を後とすれば、二つの序に於ける凡べての相違が及を迎へて解決されるであらう　長い段落の間に於ける順序の轉換も譬喩や例證の差替も、語句排列の變更も責任者の大家が後輩の參考案に對する自由なる取捨と見れば、少し

の差支もないからである　但し、さう見る場合に於ける一つの遺憾は貫之の努力及び獨創に對する疑問で、かくまで類似した他人の作の漢文にすがりつゝ、局部的の瑕疵を修正し見落しを補塡するだけで、勅撰歌集の名譽の序文、開闢以來の假名の序文の作者を名乘るのも仰山過ぎるやうに思はれるがしかしながら貫之が漢文試案の起草依託は勅命の畏さに名譽獨占の慾を離れて大事を取つた結果であつたのであらう　彼れは恐らく考へたであらう『古今集』の撰も大事業だが、自分一己に取つては假名の序の創試完成は、更に一世一代の大事業だ　撰歌の大命を蒙つてその中心人物となるさへあるに、千首の歌集に、更に我が歌百首を加へる光榮まで擔ひながら、先代の『萬葉』に對し、唐土の詩經、文選に對して、昭代歌集の存在理由を高唱すべき序文、此のやまと歌の勅撰集に相應はしい假名の序文が、滿足に出來ないことでは、我れ一人の名譽ばかりか、日の本昭代の貫祿にもかゝはるであらう　是れはうッかり輕卒にやれる事ではない　先づ第一に日本現時の國文で行かねばならぬが、我が國に於ける先行の序文は悉く漢文で、大和詞の序文といふものの先例は一つもない、仕方がないから、漢文を參考とし、成るべくは同じ内容を漢文で書いたのを參考として、更にその上に出る工夫をしたいと思ふが、さてこの漢文を自分で書くのはいかゞであらう　他山の石ともいふ　これは誰れか然るべき者に書かせそれを取捨して、因はれずに、新らしい

獨立性のある國文の序を出來すに限ると　かう考へて、さて先づ紀氏の一門を見渡すと、幸ひ漢文を善くするしかも猶子關係の淑望が居る　彼れこそ屈竟と、そこで淑望に向つてこの大任の前準備の骨折を託したのであらう　恐らく根幹の大趣意位は一つ書きにし、定義効用、分類等は、まづ毛詩の序文あたりを狙ひたいといふやうな事で、淑望も猶父が名譽の委囑に踴躍して懸命の筆を揮つたのであらう　かくして、集にも載せられ『本朝文粹』にも採り入れられた眞名序が出來たので、貫之もその勞を多として內心滿足したのであらうが同時に假名の序を作製するに當たつて第一には、成るべく漢臭を脫して大和詞の特色を發揮しようといふ考から、又同じくは彼れを踏まへて是れに第一義底の存在資格を與へようより善くなる限り原文の內容をも順序をも變へようまた漢文には嵌まつて國文には相應はしからぬ文句事例は遠慮なく取除いて、國文に相應はしい修辭や譬喩や例證は十二分に書きつゞけようといふ考からあのやうな思ひ切つた內容の差替や順序の改變を試みたのであらうと思はれる。　無論出來た結果について、後世の知識から見れば、史實に於いては、奈良朝末期に出來た『萬葉集』を、平安朝初期の平城天皇の御宇に出來たやうに書いた誤認があり、支那の六義說を借りながら、我れを先きとし本とする負け惜しみの滑稽などもあるが、貫之のけなげな心根は諒とすべきで、とにかくあれだけ纏まつた論を樹て、あれだけに純

粹味を發揮した位少なくとも漢臭排除に成功した假名の序を完成したのは一種偉大の大事業として讃歎すべきものであると考へる。

五

『古今集』の二つの序の成立事情を右の如く假定すれば、兩々相對して假名の序に於ける苦心と優越味とが著しく明らかになつて來る。先づ最初の數行が拔群に面白い。

やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事わざしげきものなれば、心に思ふ事を、見る物聞く物につけて言ひ出だせるなり。花に啼く鶯水にすむ蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ猛き武士の心をも慰むるは歌なり。この歌天地の開けはじまりける時より出で來にけり

これは眞名の序の

夫倭歌者、託其根於心地、發其花於詞林者也、……

とあるのに對して、その意を取つて、その形に囚はれず、同時に一種の新味を加へて、一段優越の存在を見せようとした苦心慘憺の結果であらう。先づ漢文式發語の「夫れ」を去つたのがよく、次ぎには、「託」に對する「發」、「根」に對する「花」、「心地」に對する「詞林」の、わざとらしい對偶を離れて、「人の心を種として、よろづの言の葉となる」と、おツさりと云つたのがよい。また漢文の方は「根を心地に託し、花を詞林に發す」と、やかましい華語を用ゐながら、その折角の譬喩が中斷して居るのに對して、假名の方は、初句の字眼なる「人」「心」「言」に對して、「世の中にある人……心に思ふ事を……言ひいだせるなり」と、極めて穩かに受けて居るところもよい。「ひとの心」も穩かで、之れを「ひとつ心」とした異本は、恐らく文品を無下に引きさげるものであらう

「春鶯之囀花中」をそのまゝ「花に啼く鶯」とし、「秋蟬之吟樹上」を「水にすむ蛙の聲」と改めたのは、一段の妥當で、同時に一段の優越である。春と秋の對偶を變へて花と水にしたのも、大和詞の持味に相應して非常に面白い。漢文の「可以發憤」から「動天地」への連接は、しつくりしないが、和文の方の「いづれか歌をよまざりける」から「力をも入れずして天地を動かし」へのつゞきは、言語道斷の妙味である。歌の精神が天地に瀰漫して鳥も蟲も皆歌をよむのだ、人間の眞情の歌がそのまゝ天地を動かすのは理の當然である、と連

るからである。漢文に於ける「莫宜於倭歌」から「倭歌有六義」へ、いつたのは、前にも云つた通り、多分淑望が參考した毛詩の序の「莫近於詩」から「詩有六義」への連絡を學んだのであらうが、和文の方の「猛き武士の心をも慰むるは歌なり」から「この歌」へのつゞきは、同じ修辭の姿ながら、一段と立ち優つて居る。總じて此の冒頭の一段、定義效用歷史と次第して、倭歌は、お互人間の心が無數の姿を取つて言語に現はれたものなること、あらゆる生物が皆歌を詠むので、人間の歌は天にも地にも神にも人にも感應すること、起原を云へば遠く人類の生れ始めより存在したるものなる事を書き連ねて居るが、その着眼の高さ、遠さ、觀察の深さ、つゞきの自然さ、而して特に事を叙し情を抒べ論を行る文章の三拍子を面白く兼ね備へた表現の立派さ、たとひ酷似したる淑望の原文があつたにしても貫之の苦心はまた容易ならぬものであつたであらう。

次ぎは和歌六種別の論である。これは無論漢詩の方の六義說によつたのであらう。それは淑望の指示を待つまでもなく、貫之の疾くより取り入るべく豫想してゐたことであらう。人に借りながら「唐の歌にもかくぞあるべき」は子供らしい負け惜しみであるが、とにかく日本を元祖としようとした意氣は殊勝なりといふべきである。六種の意義は極めて曖昧である。「そへ歌」「かぞへ歌」「なずらへ歌」「たとへ歌」「たゞごと歌」「いはひ歌」の順序が、眞

名の序の風、賦、比、興、雅、頌の順序に並行させたものであらうとは、第二に賦と並んで「かぞへ歌」があり最後に頌と並んで「いはひ歌」があるのによつて察せられるが、一々の本義は大體の見當をも附け得ぬばかりに漠然たるものである。殊に疑はしいのは「そへ歌」「なずらへ歌」「たとへ歌」といふ、殆んど同義語とも思はれる三語が別々に取扱はれて、分類全部の半ばを占めてゐることであるが、最初の「風」にあたる「そへ歌」が、とにかく漢家の本義なる風俗竹枝の歌にあたりやうがないことを考へると、外のも恐らく貫之が當座の思ひつきによつたので、もとより學問的精確を期待すべきものではあるまい。ど、古來の推量說の列擧をば暫らく差控へて、試みに吾等の所見を述べると、此の分類方式は「一と二、三と四、五と六」の二つづつ相對照せしめたので、三對、六種となるのではなからうか。第一の「そへ歌」は添加された要素を持つ歌の意で、枕詞であれ、序詞であれ、譬喩であれ、直接傳達の必要ある內容以外の景物を言ひ添へる歌をいふのであらう。第二の「かぞへ歌」は、之れに對して言ひ傳へる必要のある內容だけを、漏れなく數へて列擧する歌をいふのであらう。第三の「なずらへ歌」は準ずべき喩義のみを擧げて本義をば讀者の想像に任するもの、謂はゆる諷喩のアレゴリーで、例へば在原業平が、惟喬親王の寢所へ入らせられる事を、月が西の山に隠れるのに諷喩した

あかなくにまだきも月のかくるゝか
　　山の端にげて入れずもあらなむ

の類であらう。第四の「たとへ歌」は、本義喩義が二つながら姿を現はして居る譬喩の歌の意で、例へば大和舞の古歌なる

しもとゆふかづらき山に降る雪の
　　まなく時なくおもほゆるかな

の類であらう。第五の「たゞごと歌」は人を慶祝する第六の「いはひ歌」に對して云つたので、祝ひ悦びなどに屬せぬ一切の歌、他人に對する辭儀、禮讓を考へずしてお構ひなしに詠む平常安易の歌を指すのであらう。最後の「いはひ歌」は、これこそ名が實をあらはした慶祝賀頌の歌で、貫之が此の一つについてのみ、特に内容の性質を言ひ現はしたのは、長上を敬ひ、殊に皇家を尊び壽ぎ奉る日本の國情を重んじたので、弘法大師が「文鏡秘府論」の最後に、特に「帝徳錄」の一章を設けて、君主に對する尊稱、敬記の種々相を教へたのと同じ動機に出でたものであらう。

かう考へると貫之の和歌六種別は、いかにも幼稚な兒戲のやうにも思はれる。彼れは「文鏡秘府論」をはじめ、自由に讀み得べき支那の詩論を取入れなかつた「いはひ歌」が

あれば、それに對するくやみ、哀傷の歌もあり、同時に戀愛の歌もあるべき筈で、『萬葉集』には已に挽歌、相聞の名目を見せてゐるのに、彼れは之れに對して一瞥をも與へなかつたのみならず、自ら編纂した當の『古今集』には、まざ〳〵と春、夏、秋、冬、戀、離別、羇旅、哀傷等の類別を實行して居りながら、それとは全く拘はりのない分類を、序文に於いて誇らしく高唱した何の爲めであらうか。思ふに貫之は此の序の分類の部を書くに當たつて、當の歌集の內容との關係をば全く考へなかつたのであらう。また和歌に關する日本の國情との關係をも深く意に留めなかつたのであらう。而して初めから漢土の六義說に囚はれ囚はれながら成るべく異つた面目を新分類に與へ、創始の名譽を贏ち得ようとして、此の不思議な命名、‖言葉の調子がすつかり日本式で、全く違つた聯想を喚び起こしさうな命名‖を試みたのであらう。しかしながら貫之には、此の命名に對して彼れ一流の解釋が無かつたわけではあるまい。而してその解釋は、材料を蒐集し整理し、分括して類名のもとに諸現象を漏れなく統一しようとする科學的のものではなくして、我が心を惹く同じ傾向の群を寄せ合はせては一種類として命名するといふ、遭遇本位、擲本位のものであつたのであらう『萬葉集』が已にさうであつた。『萬葉集』は卷首に先づ「雜歌」の名目を掲げて數十首の名作を並べ、次ぎには「相聞」の見出を置き、次ぎには「挽歌」の見出をおいて居る。今日の吾々から

すれば、「雑歌」は主要現象の分類を爲し了へて後にいづれにも屬させ得ぬ枝葉除外例のはれのけ歌といふ意味に見られるであらう。しかしながら萬葉歌人に取つては、少なくとも橘諸兄、或は大伴家持等の萬葉編者に取つては雑歌は最初に彼等の目に留まつた最も重要なる歌群の一つであつた。かくして彼等は心が惹かるゝまゝに、目に留まるがまゝに、先づ雑歌の一群を掲げ、次ぎには相聞本位の歌群を集め、次ぎには挽歌本位の歌群を收め、また對比の趣向の面白き歌群に心惹かれては、それらを「譬喩歌」の名目の下に集め、相聞、挽歌、或は雑にして特に季節に因んだ興味に光つてゐる作の群を悦んでは之れを「春相聞」「夏雑歌」或は「秋挽歌」等の名の下に收めたのであらう。後世では、能謠曲に於ける神男女狂鬼の五分類なども全く之れと同じく、遭遇本位、勘本位の、出逢頭に同類を束ねては命名するといふ方式のものであつた。是等を以て西洋式、科學式の合理的、總括的の分類、例へば「自然詩、人間詩」「抒情詩、敍事詩、劇詩」「主觀詩、客觀詩、主客兩觀詩」などと分ける類別に比べると、全く違つた心の産物のやうに思はれるが、貫之の六種別も、大體は此の日本式、萬葉編者式の遭遇本位、勘本位で行つたのであらう。而して此の點から見れば、必ずしも漢土の六義說を眞似たのではなくして、貫之朝臣一個の新らしい見識とも見れば見られるであらう。彼れは考へたであらう。歌の面白味は、第一に懸かつて添加足前（たしまへ）ぶりの如何にある「春の雨

が降る」では面白くないが、「梓弓おしてはるさめ今日降りぬ」といふと、驚くべき興味が降つて湧いて來る。さうだ第一種としては、此の添加本位の歌を擧ぐべきであると、さてこそ「そへうた」の風流な名稱を與へて、之れを第一位に置いたのであらう。そして之れに對して、迂闊のこと言ふべきことを素直に數へあげただけの歌を、「かぞへ歌」と名づけて、第二位に置いたのであらう。さて其の次ぎに面白いのは、關係の似寄つた外の事を言つて、當の實事を推量させる諷諭式、寓言式の歌だ。「難波津に梅の花咲く」と言つて聖天子の御代しろしめすことを暗示し、「さいよ〳〵」と騒しげに雛鶯の二羽も啼きかはす」と云つて、貴人の似合はしい婚儀を賀する心を匂はす。かういふのは、事その事を正面

紀貫之像　岩佐又兵衛畫
（武岡豐太氏藏）

かゝ述べるのに立ち優つて遙かに面白い。前の第一種の「そへ歌」は言ふに及ばぬ事を言ひ添へるのであるが、これは言ふべき事をも陰に隱し似寄りの通へものを出して、それを奥床しく想像させるのである。かういふ大省略の味のものを舉げて之れを「なずらへ歌」と名づけよう、そして之れに對し、此の陰に隱した本物を押し出して、二つの類似對比の關係をあらはに見せたものをば、已に萬葉の一部にも入れてある譬喩歌を聯想させて「たとへ歌」と名づけよう。

さて、先進漢土の六義說を向うにまはすと、もう二種類あるが、我が日の本では漢土にいまし、金枝玉葉御ほとりに榮えます、それに長上を敬ひ壽ぐの禮儀の國、君子の國のめでたき風習になつて居る、この上をことほぎ祝ふ歌、これを見遁してはならぬ。しかし是れは最終の花なる眞打の座に据ゑることにして、その對稱には、何の造作も、儀禮も、挨拶もない、自然平常の歌、これを第五位において、一寸變だが、まあよい、「たゞごと歌」と名づけ、最後の至上位をば「いはひ歌」と名づけて此の慶頌のことほぎ歌にさゝげることにしよう。これでよし！ これなら、何も支那の六義の眞似といふではなし、我れには我れの國風に卽した眞骨頭があるのだ。いしくも考へついたるかな。さて、「唐(から)の歌にもかくぞあるべき」一かう考へて、貫之朝臣が會心(ゑしん)の微笑を湛へたでもあらう。そして是れが貫之の本心であつた

であらうと、吾等は想像するのである。

六

『古今集』の假名の序、眞名の序の相違は、趣意文句、順序の各方面に通じて、可なりに多くあるが、最も甚だしい相違を見せたのは此の六義說の部分で、同時に貫之が最も得意を感じたのも恐らく此の部分であつたであらう。前典を我が藥籠の中に收むる事を世に換骨奪胎といふが、これこそ言葉通りの換骨奪胎である。彼れの形體六種を借りて來てすッから日本式、貫之式の骨を入れ換へたではないか。彼れの胎兒をこッそりと奪つて來て、すッから別樣の成人、倭歌分類說と育て上げたではないか。而してすッから新しき日本樣式の和歌分類說を仕立てあげた上で、昂然と見返して、「唐の歌にもかくぞあるべき」の高唱は、徹頭徹尾人手假らずの創試には及ばずとも、とにかく一種の痛快事ではないか。

六義說についでは六歌仙の批評である。此の批評に於ける漢和兩樣の前後については已に前に略說を試みたが、これは我が假名文に於ける創造批評(creative criticism)の最初の試みともいふべきものであらう。創造批評は理論を主とする抽象的批評に對して、具體的描

實によつて批評し批評その物が一種の創作になつてゐるものをいふので、西歐ではゲーテカアライル等の名の聯想される新しい起原をもつ批評であるが、「古今集」の假名の序は此の點でも、特別の地位を占めることの出來るものである。

右の外にも漢先和後の次第を證據立つべきものが、双方の彼處此處に少なからず見えるが、さまではと省くことにしてさて漢和兩樣、おの〳〵その美を競ひ妍を爭つてゐるのは延喜聖代の大業盛事を頌した條で、漢文では、その一部の『朗詠集』に收められた

陛下御宇于今九載、仁流秋津洲之外、惠茂筑波山之陰。淵變爲瀨之聲寂々閉口、砂長爲巖之頌洋々滿耳、思繼既絶之風、欲興久廢之道。

といふ和式駢麗の美を極めたところ、和文の方では

今すべらぎの天の下しろしめすこと、四つの時九かへりになむなりぬる。あまねきおほんうつくしみの浪八洲の外まで流れ、廣きおほん惠みの陰筑波山の麓よりもしげくおはしまして、よろづの政をきこしめすいとまもろ〳〵の事を捨てたまはぬ餘りに、古の事をも忘れじふりにし事をもおこし給ふとて今も見そなはし後の世にも傳はれとて、延喜五年四月十八日に……

のあたり、いづれも甲乙し難い雅調であるが、和文の方では最も見るべきは、此處と最後なる

人麿なくなりにたれど、歌の事とゞまれるかな。　たとひ時うつり事さり、たのしびかなしび行きかふとも、この歌のもじあるをや。　青柳の絲絶えず、松の葉の散りうせずしてまさきのかづら長く傳はり、鳥の跡久しくとゞまれらば、歌のさまをも知り、事のこゝろをも得たらむ人は、大ぞらの月を見るが如くに、古を仰ぎて、今を戀ひざらめかも。

といふ、大鳥の空高く羽搏つが如き、調子の高い一節である　この最後の一節は「嗟乎人丸既沒、倭歌不在斯哉」の二句を除いては、相伴ふ眞名の文句の全く無い部分であるが恐らく貫之が、やうやく漢文と對照の煩累を脱却して、獨歩邁往の意氣を見せた掉尾の一振であつたであらう。

『古今集』の序文は、その六種別が集の分類の實際と一致せぬ點に於いて、及び史實の相違、論旨の不徹底、その他の點に於いて、一種の缺陷を見せて居るけれども、全體としては編輯意識より宣言意識に進み、臚列意識より統一意識に進み、隨伴追從の意識より自ら古を作す獨創の意識に進みたる點に於いて、鮮かなる飛躍的向上を見せたものである　殊に假名の序に於ける絶大なる功勞は、始めて和樣の論文體を創建したことで、その知識本位なる斷理の文致と感情本位なる描寫の文致とを協調せしめて、鳳凰の尾を曳く如く、春の海の浪うつ如く、悠揚連綿たる、調子の高き文章を成就したのは、後の『土佐日記』に於いて成就した、洒落

な短截式の文章の成功と相對して、散文に於ける貫之の二大文勲と稱すべきでもあらう。『古今集』の假名の序が一たび成つて、後の勅撰私撰の歌集は皆之れに倣つた。而して多くは『古今』の序の糟粕を嘗めて、ひたすら美辭を弄ふのみで、論旨と風格とに於いて乃祖と拮抗するものが殆んど無かつた。此の意味に於いて此の假名の序は、『古今集』が爾後の歌集群の上に君臨して居る以上に、後の序文群の上に君臨して居る。

以上吾等は『古今集』の序に對して可なりに長い横議を試みた。此の序を冠とした集の内容なる和歌に關しては、後出の六代集と相並べて別冊に述べるであらう。

附言　『古今集』には眞名の序文を添へたのと添へないのとがある。勅撰歌集の随一と仰がるゝ此の由緒の大歌集に、どうしてかういふ不統一の現象が起こつたのか、また本序たる假名の序に取つて必ずしも利益とはならぬ此の參考案の眞名の序を、何故に伴はせることになつたのか、是れは恐らく永久の疑問であらうが、察するに、當時の勅撰歌集といふものは、奏上の一部だけは、定められた文句と歌の數とを正確に盛つてゐたのであらうが、それを寫し傳へる者は、銘々可なり自由に、歌をも追加し、文句をも改めたのであらう。而して眞名の序も、さういふ好事の詞人によつて、無邪氣に寫し加へられたのであらう、而して淑望も、また貫之自身も、恐らくその一人であつたであらうと思はれる。此の序が成り、同時に此の歌

集の成つたのは、「延喜五年四月十八日」であつたと、二つの序に書いてあるが、卷第十九の雜體長歌五首の最後に、「七條の后うせ給ひにける後によみける」と題した伊勢御の作が載つてゐる。七條の后は宇多天皇の中宮藤原溫子(よしこ)のことで、その薨去は延喜七年六月、即ち「古今集」が成つてから二年餘り後のことであつた。これを見るとかういふ變はつた形式の長歌などでも、二年も後に追加されたので、それより更に後の歌までが入つてゐるのを見ると、眞名の序も、恐らく後人の追筆であらう。奏上された序文が、或本には除かれるといふことは、先づ考へられぬことである。

第十三　愛慾に翼したる『和泉式部日記』

一

あらゆる人間は他のあらゆる人間の備ふる精神要素を具有し、あらゆる時代は他のあらゆる時代の持つ性質を含蓄する。平安朝は、或分量に於いて、奈良、鎌倉、室町、江戸、明治各時代のもつ特色を分有したであらう。剛健質實洒落淡泊節慾、通往禪味茶味、俳味さびつれ〴〵等、凡そ此の時代とは縁遠く見えるいろ〳〵の思想傾向をも有つてゐたであらう。けれども量に於いて多く質に於いて優れつゝ、此の時代の著しい特色をなしてゐるのは、第一には愛慾の生活に多大の興味を持つてゐたことで、次ぎには文藝の風流、及び自然美、四季の移りかはりに興味を有つてゐたことであらう。此の點から見て『土佐日記』につぎ、天暦から一條朝に至る數十年の間に現はれ出でた女流日記、『蜻蛉日記』『枕の草子』『和泉式部日記』『紫式部日記』等の中で當代隨一の代表とすべきものは、まづ和泉式部の日記であらうと思はれる

四つの女流日記は、それ〴〵に異つた目的を以て書かれたものであるが、また頗る類似した心境のもとに書かれたものであつた『蜻蛉日記』は虐げられたる女の姿を寫したものであるが、同時に虐げられたることに興味を持ち、少なくとも男女の合性の不思議な縺り合はせから流れ出でた必然の成行を、藝術的に表現することに深き興味を持つて書かれたことは、その冒頭に「昔の小說を覗いて見ると、好い加減な作り話でも相當人に悅ばれて居るやうである。私の人らしくもない身の上でも、假名の日記に委しく書いたら、讀む人に珍らしがられるでもあらう戀する人々の參考にもなるであらう」と言つて居るのを見ても察せられる『枕の草子』は醒めたる女の皮肉な觀察を書いたものであるが、その最後に、

この草子は見たり聞いたり、思つたりした事をば、どうせ人の見るではなしと思つて、里住ひの退屈しのぎに、勝手に書き集めたのであつたが、その中には人の爲めに氣の毒な過言なども書いてあるので、人に見せようといふ心の時々起こるのを、怺へ〳〵て、ようこそ隱して來たと思つてゐたのを、ふとした事から、意外に世に知られるやうになつたのは、泣いても足らない悔しさである。……歌や木草鳥蟲の事などを、書いたのならば、讀む人も、思つた程ではないが、作者の心意氣はさすがに見えるなどと云つてくれるであらうか、唯だ自分のひがんだ心に思ひ出すまゝを、いたづら半分に書きつけたので、とても古來の立派な書物の仲間入をし

て、世間並の批評などを受けられるものではないと覺悟して居ると「これは、頭の下る私だ、

なぞと云つて褒めて見てくれる人もあるといふのは、段々不思議な世の中ではある。」

と云つて居るのを觀ると、謙遜しい／＼、湧きあがる感興に導かれて縱横の筆を揮つたことが察せられる。「和泉式部日記」は捺へ目ぶりを見せつゝ、放たれたる女の熱情を書きなぐつたものであるが、その最後に

宮の上の御文書き女御殿の御言葉ざしも、おろ／＼書きなしなんあり

「宮樣の北の方の御手紙の書きぶりや、それから姉君東宮の女御の御言葉つきなどは、作者の想像で極あらッぽく書いたのです」と但書をしてゐるところを見るとお二人に關する以外の、愛人相互の交渉は、委曲をつくして精細に書いてあるといふ意識をほのかにしてゐるやうで、その得意さが想像される。「紫式部日記」は主として道長一家の榮華を頌する爲めに書かれたもののやうであるが、その平靜謙虛な素振で、人を寫し自然を叙する間に於いて、抑揚の風致おもしろく自家を輝かして居るところを見ると、これまた一種の意氣に躍つた得意の筆であらう　　かう並べて考察すると、彼等四人は或は苦痛の、或は得意の、或は皮肉の、或は諦觀のそれ／＼違つた態度で、違つた世界を描いては居るが、いづれも一種の感興に驅られた筆のすさびで、その藝術的表現に於いて、或は涙でも現はし足らぬ苦惱の感情を見

出だし、或は欺かるゝを常とするといふ女の身に生まれた幸福をすらも感じたであらう
殊に彼等が、幸と不幸とに拘はらず、身を以て描いた生活に藝術的表現を與へつゝ、いつしか
天下の文權を握るに至つた悦びは天にも地にも換へられぬものであつたであらう。吾等
は今や此のかよわい女流が、外戚政策と、情愛生活と、ひきつゞく泰平と、文化の發揚とが、呼吸
を合はせて彼等を待ち受けた時代の大波に乘つて、謙遜誇りの中に、卽身卽藝の妙技を見せ
た日記文學を研究せんとするのである。

吾等は先づ女流日記の祖としての『蜻蛉日記』を見るであらう。

二

『土佐』に於いて女人の假面を冠つた日記は、『蜻蛉』に於いてまさしき女人その人の顔
を見せた。『土佐』に於ける紀行の日記は、『蜻蛉』に於いて心境推移の描寫となつた。春
の若草のやうな『蜻蛉』の作者は、意地わるき男子の久しき重壓を蒙つたが、重石の下から
弱々しい芽を出しつゝ咲きつゞけた花は、實に美しかつた。その文章は必ずしも上乘でな
かつたけれども、生活そのまゝの記述と、眞情の流露と、同時代の女性を代表して泣く涙とは

表現技巧の瑕疵を忘れて、作者の誠實に傾倒せしむる力を持つてゐた。

『蜻蛉日記』は實名を失ひ、愛兒の名によつてのみ記憶せらるゝ右大將藤原道綱の母の作である。彼女は藤原倫寧の二女で、本朝三美人の一人と稱せられ、同時に歌の名手として稱せられた。彼女は妙齢にして關白大政大臣藤原兼家の愛を受けた。兼家が通ひ始めたのは天暦八年(一六一四)の秋、彼れが二十六歳、從五位下右兵衛佐の時であつた。それから天延二年(一六三四)彼れが四十六歳、正三位大納言右大將になるまでの二十一年間に亙り、兼家との關係が次第に惡性に縺れて、離れもえせず、撚をも戻し得ず、たまさかに逢うては、逢ふ毎に心の阻隔の加はるのを如何とも爲し得ずして、到頭準超越的の悲しいあきらめに達するまでの身邊及び心境を寫したものが、此の日記である。彼女は兼家の露骨な二心を見せた意地惡き仕打を極度に惡みながら、同時にさうならざるを得ない必然の事情を寫して居る。虐げらるゝ自分の身の上を極度に怨み泣きながら、同時に自分のみを道理化する依怙の筆を少しも弄んではゐない。無心に筆を運んで居りながら、男女の二人が、運命に操られ性格に餘儀なくされ、環境に引き廻されて、互に愛せんと勤めながら愛し得ず、離れんともがきながら、離れ得ざる關係、作者の謂はゆる「とにもかくにもつかで世を經る人」の哀切な生涯を、我儘に書いたつもりで實は公平に、當座のすさびのつもりで實は深刻に書き得たところ

が、此の日記の貴いところであらう。

作者自身が「かくありし時過ぎて」といひ、「過ぎし年月ごろの事も覺束なかりければ」と云つてゐるのを見ると、此の日記は相當の年を經て後に回顧の筆を取つたものであらう。藤岡作太郎博士は、記事の精密、當面の熱情、此事の書入等の事情によつて、作者が天祿二年(一六三)頃に筆を執り始め、それに當初の思出を書き添へたものであらうと想像して居る。さうでもあらう　要するに、此の日記は大體興味中心に年次を逐うたといふだけで、日毎月毎の書きつぎではなく、先づ作の後半中最も油の乘つた部分のどこかで筆を執り始め、「過ぎし年月」の事は、手控の歌などによつて想ひ浮かべつゝ、徐々に筆を進めたのであらう。そして其の後興味の薄らぐまゝに、段々記事も粗雜になつて振はない結末を見せるやうになつたのであらう。「かげろふ」と名づけたのは上卷の末に

かく年月はつもれど、思ふやうにもあらぬ身をし歎けば、聲あらたまるも、よろこばしからず、なほ物はかなきを思へば、あるかいかなきかの心地ぞする。かげろふの日記といふべし。

とあるのを見ると、本來春の空にちら／＼する陽炎、游絲の意であつたので、同音の緣によつて、いつしか蟲の名の蜻蛉に書きかへられたのであらう。　尚ほ此の日記は前後二十一年の

中天德三年から應和元年までの三年を缺いて居る。

三

『かげろふ日記』が創作の暗示を受けたのは、『土佐』その他の日記からよりも、むしろ小說、物語からであつたであらう。而して作者の祕められたる意圖は、物語、日記、二つの特色を併せて、小說よりも奇なる我が身の上を年代順に寫して行くにあつたのであらう。日記の最初の一節がこれを證據立てる。

かくありし時過ぎて、世の中にいと物はかなく、とにもかくにもつかで、世に經る人ありけり。容貌とても人にも似ず、心魂あるにもあらで、かう物のやうにもあらであるも道理と思ひつゝ、たゞ臥し起き明かし暮らすまゝに、世の中に多かる古物語の端などを見れば、世に多かる空ごとだにあり、人にもあらぬ身の上までかき日記して、珍しき樣にもありなむ。天が下の人の品高き女と問はむためしにもせよかしと覺ゆるも、過ぎし年月ごろの事も、覺束なかりければ、さてもありぬべきことなむ多かりける。

印刷術の行はるゝ以前の古典は、大切に傳へられたものでも、多少の誤脫錯簡を免れぬの

が普通であつた。『かげろふ日記』は、「時」にさいなまれ、傳寫の誤脫に害はれた古文の痛痛しい面影を隨所に見せて居るもので、文章の拙く難解に見えるのも、一つはその爲めであるが、此の一節も恐らく幾多の誤脫があるのであらう。はつきりはしないが、大體左の如き意味かと想像する。

新婚生活の花やかさもほんの一時で、やがて世に有り甲斐のない、どッちつかずの境遇となつて、久しき年月を送つてゐる一人の女があつた。容貌がすぐれて美しいではなし、また立派な精神氣象を持つてゐるにもあらず、かやうな見る影もない逆境に沈むのも、當然の事とあきらめて明かし暮らす中に、世間に多い小說などを覗いて見ると、その中には好い加減な作り話を、隨分澤山書いてあるが、それでも人が悅んで見てゐるらしい。それならば、下らぬ自分の身の上でも、假名の日記にして讀み易く書いたならば、人に珍しくも思はれよう。天下の身分を誇る男達が、女通ひをする時の心得ともなるであらうと思つて、筆を執つては見たが、久しい歲月に記憶が蟲ばまれて、滿足にも書きこなせず、こんなことならば、なまじ書かぬ方がよかつたと思ふことが多いのであつた。

全體が解りにくいが、殊に疑はしいのは「かき日記」「女と問はむ」の二句である。「かき日記」は一本に「うき日記」とあつて、『解環』の著者は之れに從つて、うきは憂の意であ

らうが、こゝは浮日記で、うかみたる意に相違ないと云つてゐるが、「心憂き日記」「浮かみたる日記」いづれにしても適切とは思はれない。それならば「かき」の方はといふと、まづこれが上につゞくか下につゞくかが不明で、前につゞけて「身の上まで」書き、」と云つても落ちつかず、後につゞけて「かき」日記して」と云つても納まらないやうに思ふ。ついて思ふに、此の「き」は平假名の「な」を「き」に誤つたので、「かな日記」卽ち假名の日記の意ではなからうか。もしさうだとすると、鹿爪らしい漢文の日記ではなく、「土佐日記」が女人の名で試みたやうな、當世の口語を假名に書き現はす、書き易く讀み易い日記といふ意味になつて、合理的の解釋を可能にするであらう。次ぎに

天が下の人の品高き女と問はむためしにもせよかし

も實に紛らはしいが、恐らく「と」は「を」の寫し誤りであらう。而して句讀は「品高き」の次ぎに打つので、天が下の品高き人が、女を訪ふ時の例にもせよ、といふのであらう。これは察するに兼家が攝家の威光を笠に着て、微々たる地方官の娘を妻問ひし、やがて冷遇した事に對する不平を漏らしたので、名門の貴公子等が微官者の娘を要する時の心得にもせよかしといふのであらう。

かう見ると、この一節が文學史的に、重要な二三の意義を暗示して居るやうに思はれる

第一の暗示は、此の作者の時代までに可なり多くの物語が作られたといふことである。第二の暗示は、作者が、『竹取』『伊勢』『大和』等の外にまた『宇津保』や、『落窪』や、『枕の草子』や『源氏』やが、名を擧げてゐるやうな、例へば『交野少將』『狛野』『埋れ木』『國讓』『道心すゝむる松が枝』『月待女』『正三位』等の外に、名さへも傳はらぬ、可なりに多くの物語を讀んで、我が身の上の實際が、小説家の趣向を凝らした假作よりも更に奇に、更に意味深きことに心づいたことである。第三の暗示は、作者が我が身の體驗は、物語式に書き現はすよりは、當世口語の假名日記に現はすを最適と考へたことである。要するに、道綱の母は當時行はれた小説の示唆に目ざめて、我が戀愛經驗が大きな時代思潮の現はれであり、自分は此の經驗によつて、一世に漲る大潮流に參加して居るのみならず、その面白さ意味深さに於いて代表的選手たることを自覺したであらう。同時に之れを珍らしく生き／＼と表現するには、物語の作者が試みるやうな趣向筋立に倣はずして、生起の順序に從ひ有りのまゝに寫して行く日記の體を取るべきだと考へたであらう。而してその日記としての文體は現代語を假名書きにすべきであると考へ、尚ほその上に、之れを當世戀愛道の龜鑑にも供へたいと考へたであらう。取りすべていふと、彼女はその稀有なる經驗に新しき表現を與へんとして、物語と日記とを提携させ、而して我が身の上を見本として當代の戀愛道を説明しようと

したのであらう。無論作者自身意識して、この通り考へたのではあるまい。けれども時代の魂が彼女をして此の通り考へさせ、胸の佛がこの通り行動せしめたので、吾等は之れに於いて文學の現顯及び發達の機微を知ることが出來ると考へる。

四

「世に多かる空言だにあり」と、小說家の假作を睥睨した『かげろふ』の作者の身の上は果たして、どんなものであつたか。

作者が兼家に靡いた時の年齡は明らかでない。とにかくそれは天曆八年(一六一四)兼家二十六歲の秋であつたが、歌の贈答を繰返すうちに、二人はいつしかたゞならぬ仲となつたそして翌年の八月晦日に、彼女は早くも愛兒を擧げた。右大將道綱がこれである。

さて翌九月になつて、彼女は或日兼家が手馴れの筥を開いて、彼れが他の女に遣らうとした艶書を見出だした。淺ましさに胸のつぶれる思ひしたが、とにかく見たことを知らさうとして、

うたがはし外にわたせる文見れば

こゝやとだえとならむとすらむ

と書きつけておいた。十月の末になつて、雍家の通ふのが町の小路の或る女であることを知つたが、その中に、曉近く門を叩く者があつた。無論雍家である。彼女はつひに門を明けさせなかつた。雍家はそこから轉じて、町の小路へ行つた。そして女は翌日朝早く

歎きつゝ獨りぬる夜の明くる間は

いかに久しきものとかは知る

と詠んで、色の褪せた菊の枝に附けて、雍家に送つた。

これが悲劇の端緒である。讀者はこの一挿話に於いて、二人が性格悲劇の芽を讀まれたであらう。同時にそれがなまなか小說的の趣向を立てずして、そのまゝ書かれて居る假名の日記ぶりに、無邪氣な奧床しさと含蓄の深さとを看取されたであらう。雍家は積極質の、陽性の、そして政治家肌の、人に臨まうとする、片意地の活動家である。女は消極質の、陰性の、潔癖の、そして藝術家肌の神經質な、負けぬ氣の皮肉屋である。女は當時の女性の多くが馴らされた如く、また雨夜の品定が教へた如く、男の他女通ひを「のどやかに見忍ぶ」ことが出來なかつた。同時に淚にも訴へず、眞向から攻めかゝることをもせずして、皮肉のあてこすりを連發した。片意地で勝氣なる攝家の子の雍家が、どうして我慢が出來よう。その後

彼等は事々に衝突した。そして衝突しながら、互に互の性格の何處かに惹きつけられて、離れることが出來なかつた。かくして彼等は諍ひつゝも離れかね、離れかねつゝも親しみ得ずして煩悶愁歎の二十一年を送つたのである。例へば、兼家は賑やかに前驅はして女の家の前にさしかゝる、そして、女の家人等が中門に跪いて待ち受けてゐるのを冷やかに見ては行き過ぎる。女は、男が取りいそぐ裁縫を依頼して來ると、冷やかに突返す、そして男が彼處此處と持ち廻つて困りぬいたと聞いて、痛快の笑みを浮かべる。山寺に行くとては、「貴方が門前を素通りなさらぬ世界を求めて、今日これから……」（前わたりせさせ給はぬ世界もやあるとて、今日なむ）と消息する。これが二人の繰り返した應酬であつた。相契つて三年目の七月の部に、

かくあり續き絶えず來れども、心のとくる夜なきに、荒れ勝りつゝ、來ては氣色惡しく

と書いてあるが、これは恐らく十幾年後に振返つて、ありし二人の仲を總括的に説明した詞であらう。その中に男は第三の女を設け、第四、第五の女を設けた。女の惱みは段々に深くなり、段々にこじれて來た。時には愛の衰へた女を相手に、男の寵を得てゐる女が寵を失ひ、愛兒をも喪つたのを悦び合ふ音づれを言ひかはして悦んだ。石山、初瀨と遠出、長逗留の物詣をも試みたが、繰返す祈りは常に無駄であつた。一度は二十日も籠つて尼にならうとし

た西山の鳴瀧から、强ひて連れ戻られ、戻るとやがて、門前素通りの憂目を見せられて、剰へ「あまがへる」の渾名まで附けられた。「雨蛙」に「尼歸る」を寄せたのである。かやうな引きつゞく苦惱の間にも、身寄や世間にいろ〳〵傷心の出來事があつて、或は母の死に逢ひ、或は西宮左大臣の配流や、兵衛佐夫妻の相次ぐ遁世などが、更に彼女の心を暗くしたが、その間に彼女に取つて、燒野が原に於ける一輪の花ともいふべき、唯だ一つの望み樂みは、愛兒道綱の生長と立身とであつた。しかしながら、その子の愛すらも、時々は更に傷心の種となり、最後には兼家の愛を取り戻す「もしや」の一策として、競爭者なる女の生んだ少女を養つたが、その女に對する思ひ設けぬ人の戀愛沙汰などによつて、つく〴〵世の中に愛想をつかして、いつしか消極的な諦めの心境を辿るやうになつた。これが此の日記の大荒筋ともいふべきもので、この不幸な作者に慰めを與へたのは、わかき時の父母の愛、夫を持つて後の子の愛、まづ是れだけであつたが、しかしながら始終に通じて變はらぬ慰藉を彼女に與へたのは、恐らく彼女の文學であらう。悅びを歌ふ時に覺えたのみならず、悲愁煩悶の心境を寫す時に於いてすらも、筆端に我が影の再現さるゝ藝術世界にほゝゑんだ藝術家の心地であつたであらう。

五

『かげろふ』の作者が日記に描いた二十一年の生涯は、彼女の謂はゆる「生きて生けらぬ」生活の連續であつた。彼女はその間を「夜見ぬこと三十夜」「晝見ぬこと四十日」なぞと指を折つては歎きつくし、たまさかの文を見ても、「天が下の大空言ならむ」などと思ひ思ひして、やる方なき月日を送つた。吾等は左に二三の實例を擧げて、彼女が苦惱の一端を暗示するであらう。康保三年、道綱十二歲の八月頃の記事に、かうある。

心のどかに暮らす日、はかなき事言ひ〳〵の果てに、我れも人も惡しういひなりて、うち怨じて出づるになりぬ。端の方に歩み出でて、幼き人を呼び出でて、「我れは今來じとす」など言ひおきて出でにける。すなはちはひ入りて、おどろ〳〵しう泣く。「こはなぞ〳〵」といへど、答へもせで、論なうさやうにぞあらむと推し量らるれど、人の聞かむも、うたて物狂ほしければ、問ひさして、とかうこしらへてあるに、五六日ばかりになりぬるに、音もせず。

これらは誤脫もなく、ほゞ滿足に寫し傳へられた部分であらう。一寸した事から諍ひが募

つて、自分に對しては何とも云はず、ぷいと立つて、緣側に子供を呼んで、「お父様は、もう來ないぞ」と云つて出て行く。子供は直ぐに入つて來て火のついたやうに泣く。「どうしたんだ、どうしたといふのだ」と問ふが、答へない。無論そのやうな事とは推量するが、人に聞かれても、氣違ひじみてゐるので、問ふのは中止して、いろ〳〵とだましたが、それから五六日經つても音沙汰がない。――こじれた小小いさかひが手に取るやうである。たまさかならば是れも地堅めの雨降りとも見做されようが、彼等の間には、これが不斷であつた。

またこんな夜もあつた。天祿元年、道綱十六歲の十二月の月央のことである。

雨の脚おなじやうにて、火とぼす程になりぬ。南面にこのごろ來る人あり。足音すれば、然にぞある。あはれ、をかしく來たるはと、湧きたぎる心をば、傍らにおきて、打ち言へば、年頃見知りたる人むかひて、「あはれ、これに勝りたる雨風にも、古人のさはり給はざんめりしものを」といふにつけてぞ、うちこぼるゝ涙のあつくてかゝるに、覺ゆるやう、

思ひせく胸のほむらはつれなくて
　涙をわかすものにざりける

と繰りかへしいはれし程に、寢る所にもあらで、夜は明かしてけり。

南面に來る人は、多分作者の妹に、或男が通ふのであらう。足音がすると思ふと、果たして

その人であつた。—まあ優しくも、此の雨によく來たこと！—と煮えくり返る心を押かくして、苦く居る傍らの女房に、かういふと、—ほんとに、昔は、これよりひどい大雨風にもめげずに入らつしやいましたのにねい—といはれるより早く、熱い涙が滂沱々々と流れる。篝は水に消されるものだが、私の胸のほむらは、涙を湧かして、煮たてるのだ、といひ〳〵、寢所にも入らずに夜を明かした—隣室なる妹の逢瀬に刺戟さるゝ彼女の閨怨が寫し出されて、文字の間に嗚咽を聞くやうである。

これは溯つて同じ年の夏のことである。約束した兼家を待ちに待つたが、見えないので、つく〴〵と思ひつゞくる事は、猶ほいかで心として祈りにも死にしがなと思ふより外の事もなきを、唯だこの一人ある人を思ふにぞ、いと悲しき。人となして、後ろ安からむ女などに預けてこそ、しかも心安からむとは思ひしか。いかなる心地して、さすらへむずらむと思ふに、猶ほいと死に難し。いかゞはせむ、形をかへて、世を思ひ離るやと試みむと語らへば、まだ深くもあらぬなれど、いみじうさくりもよゝと泣きて、「さなり給はば、まろも法師になりてこそあらめ。何せむに世にも交らはむ」とて、いみじうよゝと泣けば、我れもせきあへねど、いみじさに、戲れに言ひなさむとて、—さても鷹飼はでは、いかゞし給はむずらむ」と言ひたれば、やをら立ち走り、手に据ゑたる鷹を握り放ちつ。

見る人も涙せきあへず。

神佛に祈つても死にたいと思ふが、此の幼い子一人を殘すのかと思ふと、やッぱり死ねない。「では仕方ない、尼になつて、世の中が思ひ切れるかどうか、試して見ようか」と、相談するやうに話しかけると、まだ十六の深い考のある筈もない子が、しやくりあげて、「お母さまがさうお成りなら、わたしも坊さんになりませう。何の爲めに、世間などに交はるものですか」と云つて、よゝと泣くので、自分も涙を抑へかねたが、冗談に紛らさうと思つて、「でも、坊さんになつては、鷹が飼へませんよ」といふと、徐かに立つたが、チョコ〳〵と走つて行つて、大事にする鷹を手に据ゑてゐたが、堅く握つた手を、ぱッと解いて、放してやつた。これを見る母たる者が、どうして涙をせかれようか。」——まことに天地の悲哀を、たよりなき身一つに集めたやうではないか。

作者は此の年の七月、石山に詣でた。十日ばかり籠つて、歸り路の早朝の船出を、かう寫して居る。

明けぬといふなれば、やがて御堂よりおりぬ。まだいと暗けれど、海の面白く見えわたりて、さいふ〳〵人二十人ばかりあるを、乘らむとする舟の、岸陰の方へばかりに、見下されたるぞ、いと哀れに怪しき。御燈奉らせし僧の見送るとて、岸に立てるに、唯だきし出

石山に參籠したる道綱の母　　石山寺緣起

でにさし出づれば、いと心細げにて立てるを見やれば、かれは目慣れたるらむ所に、悲しくやとまりて思ふらむとぞうる。男ども「今來む年の文月伴ひまゐらむよ」と呼ばひたれば、「さなり」と答へて、遠くなるまゝに、影のごと見えたるも、いと悲し。空を見れば月はいと細くて、影は海の面にうつりて雨風うち吹きて、海の面いと騷がしう、きら〳〵とさわぎたり。若き男ども一聲細やかにして面やせにたる」といふ歌を歌ひ出でたるを聞くにも、つぶつぶと涙ぞ落つる。

例の脫落や書き誤りも可なりある、であ

らうが、調子の美しく暢びやかにつゞいたところには、『源氏』の先驅ともいふべき趣がある。またその觀察にも描寫にも、新しい活きた所があつて、例へば燈明の世話をしてくれた坊さんが、見送つて來て、湖の岸に立つてゐると、舟がずんずんと漕ぎ出でる。段々離れて心細さうに見える坊さんに向つて、女の供をして來た男どもが、「來年の七月も、またお供してまゐりますよ！」と大聲に呼びかけると、坊さんが「是非さう願ひますわ」と答へてゐる中に、岸の人が段々に遠ざかつて影のやうにぽツちりと見えるだけになつた」などは、ひどく面白い。が同時にまだ落ちつかぬ拙い所もあり、殊に

（石山寺藏）

空を見れば月はいと細くて、影は海の面にうつりて、雨風うち吹きて、海の面いと騷がしう、きら〳〵と騷ぎたり。

の如きは、前半の細き月影の海に映るところは、空晴れて海は凪ぎたるが如く、後半の雨もつ風に海面の騷ぐ所は、空晦き暴風雨に波の荒るゝが如く、とても同じ時所位に起こつたとは思はれぬ矛盾を見せてゐて、讀む者の印象をかき亂すであらう。この時所位の不調は和泉

式部にも見え、紫式部にも嘆ずあることで、王朝文學に於ける一種通有の遺憾とも見るべきものであるが、とにかく此の最初の女流日記に表現の未だ至らざる所のあることを示すものである。最初に「世にいたづらに經る人ありけり」と第三人稱式に書き出して、あとは棟作者自身の第一人稱式になつてゐるのも、作者として思慮の不足を暗示してゐるものである。

六

『かげろふ日記』には、無意識に挿入した他人の記事で、作家の心境の添景として、主要事相の趣を加へ味を深めるに役立つのみならず、時代相の說明として特別の興味を見せて居るものがある。例へば二首まで載せた百二十三句、八十九句といふ長い長歌が、當時の歌壇の趨勢を示してゐるが如き、兵衛佐某が俄に遁世し、その妻がやがて後を追うて尼となつた挿話が、佛教の無常思想が段々時人の心奥に浸潤して、やがて寂昭法師の大江定基が出で、西行の出づることを豫示してゐるが如き西宮左大臣の配流が、藤原氏中心の權力爭ひや、不覺悟なる公卿の醜態を見せて居るが如き、いづれもその點から見て特別の價値と興味とを持つものであらう。

安和二年(一六二九)に於ける源高明—醍醐天皇の皇子、西宮左大臣と稱せられた、「西宮記」の筆者—の左遷は、右大臣藤原師尹が左に昇らんがための讒構によつたと云はれる。

(正月)二十五日六日の程に、西宮の左の大臣流され給ふ。見たてまつらむとて、天の下ゆすりて、西宮へ人走り惑ふ。いといみじきことかなと聞く程に、人にも見え給はで、逃げ出で給ひにけり。愛宕になむ、清水になむ、とゆすりて、遂に尋ね出でて、流し奉ると聞くに、あいなしと思ふまで、いみじう悲しく、心もとなき御事に、かく思ひ知りたる人は、袖をぬらさぬといふたぐひなし。あまたの御子ども、あやしき國々の掾になりつゝ、行くへも知らず散り〴〵別かれ給ふめるぞ。御髮おろしなど、すべていへばおろかにいみじ。大臣法師になり給ひにけれど、强ひて帥になし奉りて、追ひ下し奉る。その頃はひ、たゞ此の事にて過ぎぬ。身の上をのみする日記には、入るまじきことなれども、なしと思ひたりしも、誰れならねばしるしおくなり。

詞藝有職に誇り榮えて、武道を忘れ、肝魂の鍛錬をおろそかにした長袖者流の哀れな末路を、女性が同情の筆に美化した光景であるが、權力爭ひの生んだ太平の世の小波瀾が、活きたる環象背景を添へて、實に面白く寫し出されてゐる。藤原氏の仲間に起こつた醜體ではあるが、これに極めてよく似通つたのは、これから二十六年を隔てゝ、長德二年(一六五六)に内大臣

藤原伊周及び弟中納言隆家の配流に處せられた折の光景であらう。それは隆家が花山院天皇に對する大不敬の結果、彼れ及び彼れの兄に課せられたもので、兄は太宰權帥に、弟は出雲權守に處せられたのであつたが、二人が妹なる中宮定子宮の御許に隱れたので、如何ともすることが出來ず、遂に勅許を乞ひ、中宮御所の夜の大戸を破壞して兄弟を捕へようとした騷ぎである。事は藤原實資が『小右記』に、左の通り記されてある。『小右記』は謂はゆる男のすなる漢文日記の最も主なるものの一つである。

廿八日(長德二年四月)　中宮與權帥相携不離給、仍不能追下之由、再三令奏之、京内上下舉首、亂入后宮中、凡見物濫吹無極、彼宮内之人、悲泣連聲、聽者拭淚、

五月一日　出雲權守隆家、今朝於中宮捕得、遣配所、令乘網代車、依稱病也　見者如雲云々。權帥出雲權守共候中宮御所、不可出云々。仍降宣旨、撤破夜大殿戸、仍不堪其責、隆家出來云々。權帥伊周逃隱、令宮司搜於御在所及所々、已無其身者。ケリ

前にも已に述べた和樣漢文の一種で、これにも無論一種の面白味はあるが、しかしながら何となく硬直した、餘所行きの、親しみにくい所があり、之れに對して『かげろふ日記』は、同じやうな事を、無造作に簡單に書いて居りながら、時所位に馴染んで、事實の生きた味を傳へ、同

時に日本的、平安朝的、王朝女流的の流動してゐる周圍をそのまゝに傳へる面白味がある。貫之が『土佐日記』の冒頭に喝破した「女もして試みむとてするなり」の宣言は、道綱の母が、まことの女性たる立場から、更に適切に宣し得るところであらう。

『蜻蛉日記』は男に虐げられたる女の悲しい聲である。男女おの〳〵が特殊の天賦を持ち、稀有の運命に操られつゝ、天から定められたる曲折無類の難行路を素直に辿つて、身を以て描いた廿一年を、して離れ得なかつた悲痛の聲である。愛せんとして愛し得ず、離れんと天賦の詞才をあだにせずして、克明に寫し取つたものである。我が與へられた人生行路が小說以上に奇にして、意義に富んでゐる事を自覺して、それを追歩漸進の日記に寫し留めたものである。作者は自ら「なほ物はかなきを思へば、あるかなきかの心地ぞする。かげろふの日記といふべし」と云つた。けれども、此の「かげろふ」は、はかないながら、誠實、獨創深刻、いろ〳〵の色彩と光輝とを見せて、高く長く我が文學史の大空に搖曳するであらう。

七

『かげろふ日記』の著者の悲戀が小康を得た折でもあらう、日記に、三年の中斷を見せたこ

とがあつた、その最終なる應和元年(一六二一)の十二月五日に、藤原氏北家嫡流の謂はゆる九條殿師輔を父とし、兄弟に五人の太政大臣をもち、妹に二人の后妃をもつた藤原高光が、俄に比叡の横川に登つて剃髮した。高光は西行、長明等の先覺として、『大日本史』に於いて隱逸傳の筆頭に擧げられた才學の世捨人で、

かくばかり經がたく見ゆる世の中に

うらやましくもすめる月かな

の代表作によつて知られた歌人でもあつたが、その遁世の事實環象が深く世の人に物の哀れを感ぜしめたのであらう、おそらく彼れが山入を餘り遠ざからぬ年代に於いて、その顚末を寫した短篇の日記物語が現はれた。『高光日記』と呼ばれ、或は『多武峰少將物語』とも稱せられる。高光は翌應和二年の八月を以て横川から多武峰に移つた。『多武峰少將物語』は、この移つた後の山の名によつたのであるが、此の物語の內容が應和二年の五月に終はつて、多武峰の籠居については、かすかな暗示をも與へて居ないところを見ると、或は應和二年の六七月の頃に書かれ、後年に及んで『多武峰少將物語』の異名が加へられたのでもあらう。或は可なり後に書かれたけれども、物語の筋の緊縮のために横川を離れた後の記事が割愛されたのであるかも知れぬ。

『高光日記』は『蜻蛉』『和泉式部』『紫式部』を日記と呼ぶのとほゞ同じ意味で、日記と呼び得るものであるが、しかしながらそれは時の順序を追つたといふだけで、日附としては殆んどなく、唯だ一三月ばかり二四月ばかりに二四月つごもりばかりに二五月ついたちに一等の大まかな暗示が四五ヶ所にあるばかりである。記述の樣態の最も似寄つてゐるのは、後に出た『和泉式部日記』で、和泉の日記が帥宮との戀愛交渉を中心に、きりッと纒められて、宮の音信を得てから、宮の御殿に引き取られ、妃の宮の離別を見るに至る十ヶ月の記事に完了して居るのは、恐らく『高光日記』が、主人公の出家遁世を中心として、父師輔の薨去が出離の機會を與へたことに始まり、翌年の夏に於ける都の人々からの衣贈りに終はる、約半歳の記事に完了してゐるのに暗示を得たのであらう。日記文學が日録の義を輕視し、日附を疎らにして、狹く定められたる中心事項の開展を精しく纒めて寫すやうになつたこと、言ひ換へれば日記の小說化を示してゐることが、此の短篇日記の最も主要なる史的意義である。

此の日記は、地の文の間に、短歌、長歌、及び手紙を取りませつゝ叙述を進めてゐる。高光の事、高光對一族知己の事を寫して居るのみならず、高光に對する同情者同士の交渉をも寫してゐる。恐らく高光に深く同情する近親者の筆に成つたのであらう。叙述の運びは單調で、轉折の彈みに乏しく、深透の力が少ないけれども、趣向、章句の風致に骨折つた跡も見え、稀

にはユウモアの遊びを見せたところもある。順序のまゝに特に面白い場面を擧げると、て師輔の薨去に機會を得、北の方に暇を告げて山に入つた條。横川の弟君なる尋禪法師を訪ねて剃髮を賴んだが、弟君は從はず、増賀の聖も諾はずして、到頭手づから髻を切つた條。急ぎの知らせが都に到ると、北の方、妹の愛宮、姬君等がふしまろんで泣き惑はれ、帝もいたく驚かせられ、長兄の伊尹は夜を籠めて横川にかけつけたが、變はつた姿を見て茫然と呆れた條。それから高光法師と都の人々との間に取りかはされた歌消息の哀れの數々、高光法師の從妹なる桃園の姬君に對して、姬との片戀に失戀した男から、高光の山入について皮肉の挨拶を寄せた條、新入道と父師輔との夢中の應答、五月の初めに兄弟達が破子もちての山訪問などを經て、夏なれど山は寒からうとて、都の女達から、黑貂の皮衣や、衾などを贈られる條などであらう。而して發端に、

本よりかゝる御心ありけれど、父大臣（師輔）おはしける程は、制しきこえ給ひければ、え思し立たざりけれど、うせ給ひて後、腹々の君達は、皆ころとおはしませば、大臣おはしまさねども、ことに物しきこともなし。

と言ひ、結尾に

すべて〳〵言ひつくすべくもなく、いみじう哀れになむ。

と言ひ続べた所を見ると、とにかく作者に日記を小説化する心理が潜んでゐたので、此の心理が働いて、特殊の一事を中心に立てゝ、之れを統一的に精寫しようとはしたのであらう。

此の日記の文章は概ね單調で弛緩したものであるが、處々に見える味な筆致にはさすがに人を惹きつける所がある。例へば主人公が北の方に別かれて山に入るところを寫した一鎖の、

よろづの事心細く思ひ給ふまゝに、たゞこの事のみ御心に急がれ給ひつゝ、出で給ふ度ごとには、女君に、法師になりに山へまかるぞと聞こえ給ひければ、例の事と戯れにおぼしてなむ聞こえ給ひける。まことに此の度はと聞こえ給ひければ、例の夜さりは歸り給へらむをこそは、法師歸るとは見めと聞こえて、笑ひ給ひければ、誠にやと聞こえて出で給ひけり。

の如き、事實のまゝを寫したのではあらうが、ユウモアが利いてゐて面白い。山入りして坊さんになるのだ、と口癖に云つて居られたので、北の方はまた例の冗談であらうと聞いて居られると、「今度は本當ですよ」と云はれた。しかし、「いつもの通り、宵にはお歸りになりませう、その時こそは、また、「坊さんのお歸り」と云つて囃しませうよ」など云つて笑はれると、「いや今度は本當ですよ」と云つて出て行かれた。――などは非常に面白く、かういふ處

に味を見出だし、耳に留めて、これ程に書いたのは、作者に一種の詩の耳詩の筆のあることを證據立てるものである。

一篇の中、高光が弟の禪師と阿闍梨とに拒まれて、自ら落飾する所、殘された幼き子が太刀帶く人を見ては父君かと尋ねて、母君達を泣かす所などは、最も人の涙を誘ふ所であらう。

比叡に登り給ひて、御弟のおはしける室におはして、疾う禪師の君を召して、かしら剃れと宣ひければ、いとあさましくて、禪師の君、「などかくは宣ふ、御心がはりやし給へる」とて、宣ふまゝに泣き給ふ。剃れと宣ふ阿闍梨も、泣きて承らざりければ、御髻を手づから剃刀して切り給ひにければ、いかゞはせむとて、猶ほ剃り給ひける。禪師の君泣き惑ひ給ひけり。阿闍梨も、いとあさましきわざかな。御はらからの君達も、已れをこそ宣はめ、御消息をだにも聞こえあへずなりぬると泣く。

さてかの入道の御子は、太刀帶き給へる人を見給ひては、父君かと宣ふに、あらずと宣へば、母君こそ、てゝきにはあらず、などか父君の久しく見えざらむとて泣き給へば、姫君よよと泣き給ふ。御髪かき撫でて、「君は山にぞおはする」とて泣き給ふ。

道綱の母にも、和泉式部にも、無論、紫式部、清少納言にも、かけても及ばぬ筆ではあるが、誠實があり、文學的意識があり、一種の技巧もあつて、當代文學の進運に貢献した作であることは

窺はれる。殊に一高光が遁世の要求に對して、已に佛道を慕つて入道した弟の尋禪が剃刀を辭み、濟度商賈の增賀がまた拒み、口癖のやうに出家を床しみ、御弱年の花山天皇を要して剃髮せしめた藤原氏の一門が慌てゝ泣き騷ぐ光景などは、此の時代に流行した佛教關係の實相を、如實に、而して皮肉に說明してゐるものである。

八

『蜻蛉日記』は天延二年の十二月の大晦日の夜更を寫した

年のはてなれば、夜いたう更けてぞ叩き來る。今は平に

といふ、中途で切れた文句で、終はりを告げて居る。これは結尾のわづかな文句が失はれたのか、或は惜しむべき長い文章が、前なる天德より應和に至る三年間のそれのやうに散佚してしまつたのか、明らかでないが、假りに天延二年の除夜の記事を大團圓として、この最後の記事を距ること遠からざる機會に擱筆されたものと見ると、『かげろふ』に次いで現はれたのは、恐らく、それから約二十年を經て、正曆の末頃(淸少納言の初宮仕は正曆三年一五六二であつた)から筆を執り始めて長保の四年(一六六二)頃に及んだ『枕の草子』であらう。その

次ぎに現はれたのは、長保五年(一六六三)の四月に帥宮から最初の御使を受けたのに始まり、十二月には宮の御殿に迎へ取られて、翌年の正月に於ける北の方の御離別に及ぶ約十ヶ月の戀愛急轉の始末を、事件を距ること遠からざる或時に記錄したらしい『和泉式部日記』であらう。而して最後は、それより數年を經た寛弘五年(一六六八)の秋より、飛び〳〵に翌々七年の正月に及んでゐる『紫式部日記』であらう。それ故、年代の順序によれば、『蜻蛉』の次ぎに『枕の草子』を擧げ、『和泉式部』を經て、最後に『紫式部日記』を廻すべきであるが、『枕の草子』は、日記である以上の主要資格によつて、寧ろ最高級の隨筆として取扱ひたく、また『和泉式部日記』は、最も短いものではあるが、その時代相を象徴し、作家特殊の個性を凝結せしめ、而して又、首尾呼應して無駄のなき開展、統一振を見せてゐる等の點から、時代を代表する最尤者と見て取扱ひたい特殊の事情があるので、こゝには、特に繰上げて、まづ『紫式部日記』を觀察したいと思ふ。

九

『紫式部日記』は寛弘五年の七月紫式部の宮仕へした彰子中宮が、御産のために、父道長が

私邸の土御門殿に里歸りされた折の光景に筆を起こして、九月の十一日に皇子を產まれ、三日、五日、七日、九日の產養を經て、十月十六日には新皇子の父帝陛下を迎へ奉り、五十日の御祝儀を濟まして、十一月十七日、御母子めでたく內裏に入らせられるまでの記事を根幹として、

紫式部木像　霽祐爲作
（石山寺藏）

その年の十一月に於ける五節の事、加茂の臨時の祭の事、大晦日に引剝夜盜に襲はれた事、寬弘六年に於ける正月の一日、二日、三日、十一日の四日の事、及びその翌寬弘七年に於ける正月の初三、及び十五日に於ける第三皇子の五十日の御祝儀等を、『源氏物語』に似た筆意で、美しく寫したものである。思ふに作者の本意は我が奉仕する中宮の御慶事を中心として、藤原道長一家の榮華を頌するにあつたのであらう。而してその中に於いて、或は好むがまゝに裝束や儀式の見聞を詳記し、或は筆序に側道しては他人の批評や、謙遜ぼこりの自家辯護をも添加したのであらう。

此の日記は、その詳略斷續のまち／＼なる所から、殘闕であつて、完本ではないと云はれ、或

は清澥なる日記の中のほんの一部分が擇り出だされたものであるとも云はれる　いかさま、さうでもあらう　けれども吾等は、寧ろ作者が空想の小說『源氏物語』に見せた非凡な手振を、事實の記錄に見せるつもりで、初めは一種の抱負を以て書き出したものが、興味の減退から段々不精になつて、筆の瘠せ細りが自然に文章の貧寒となつたのであらうと思ふまた『枕の草子』などの刺戟を受けつゝ、隨筆式なる横逸れ、飛入り式の離れ業を試みようとしたが、本來大組織の物語を作るに適した天才が、天の許さぬ第二技に失敗して、傍徑飛入りの文句を挿入しては、つい錯雜、紛糾を感ぜしめる結果に終はつたのであらうと考へる此の物語に於ける飛入らしい不調和な内容の中、殊に目立つて不調和を感ぜしめるのは寛弘六年の正月三日の記事のつゞきで、

このついでに人の容貌を語り聞こえさせば、物いひさがなくや侍るべき。

とある所から、宰相、小少將、和泉式部、清少納言等、十五人の女房の容貌性格品定の最後に至る第二人稱式の風がはりな文體で、此の日記の約五分の一を占める部分である　此の部分を紫式部が人に送つた消息文の紛れ込みであらうと見たのは明治期に於ける脫俗清節の畸人學者中根香亭翁で、木村正三郎氏が之れを承けて『紫女手簡』の一卷を成し、關根正直博士がまた二者を承け、實證的に合理化して、式部がその娘に送つて庭訓の料とした書簡に相

違ないと說かれた。これは一應道理のある說ではあるが、吾等は俄に服することが出來ぬのを遺憾とする。仔細は、先づ此の部分が本來獨立した書簡であつたと見らるべき理由が三つあると思はれる。第一は文體の急變で、他の部分が「なり」「けり」の第三人稱式になつてゐるのに、此の部分が定められた相手に物言ふ態度で、第二人稱式の「侍る體」になつてゐることである。第二は最初最後の兩端にある附屬文句が、最初には、

この次に、人のかたちを語り聞こえさせば、物いひさがなくや侍るべき。只今をや。さしあたりたる人のことは煩はし、いかにぞやなど、少しもかたほなるはいひ侍らじ。

とあり、最後には、

御文にえ書きつゞけ侍らぬ事を、よきも惡しきも世にある事、身の上の憂へにても、殘らず聞こえさせおかまほしう侍るぞかし……つれづれにおはしますらむ。またつれづれの心を御覽ぜよ。また思召さむことの、いとかうやくなしごと多からずとも、書かせ給へ。見給へむ。ゆめにても散り侍らばいといみじからむ。まだまだも多くぞ侍る。

―あなたもお淋しいでせう。それならば、これを讀んで私の淋しい心持を察して下さい。あなたの考へられる事は、私の書くやうな、つまらない事ではないでせうが、書いて御覽なさいな。拜見いたしませう。私の書いた事は他見無用の極祕もので、一寸でも人に知れたら

えらい事になりますよ。かういふ材料はまだ〳〵澤山あるのです」などあつて、日記の末文に對して、前後から一種の境界を劃して居ることである、最後の第三は、關根博士の言はれた事で、此の部分のすぐ前なる正月三日の條に、「宰相の君」の事を言つて居るのに、書簡の部の最初に於いて、また同じ人の事を繰返して居るのは、同じ作のつゞきでないことを證據立てるといふのである。此の中、初めの二つは吾等の假想論であるが、吾等はこの三つ共に成立の可能性があると考へる。けれども、第一なる文體の急變は、前後兩端の繼ぎ合はせ目に於いて著しく目立つては見えるが、しかしながら「侍る體」の第二人稱式は、數こそ少なけれ、前なる日記の部にも度々ある事であり、また謂はゆる消息の部にも「なり―けり」體が澤山交つてゐるので、これはいづれにしても絶體の差別と見ることの出來ぬものであらう。次ぎに、第三なる宰相の君の容貌の品定めの重出は、いかにも不思議で、此の部分が別途の作品であることを證するもののやうにも見えるが、しかしながら、それならば、前段の中に於いて「大納言の君」の裝束容體を、何故間をおいて二度重ねて書いたか、また前段で書いた「大納言の君」「宣旨の君」の二人を、書簡の部で何故に省いたか、殊に「宣旨の君」をば理想的女性として、「あてなる人は、かうこそあらめと、心ざま、物うちのたまへるも覺ゆ」とまで激稱してゐる、その人を、娘に對する庭訓の手紙になぜ省いたかといふことも問題にさ

れるであらう。かう考へると、消息說を肯定する根據は專ら第一、理由なる前後兩端の附屬文章にあるといふ事になると思はれるが、吾等は之れをば、紫式部が、知人の陰口や自家の辯護を耳障りならぬやうにするための一種の添筆で、委しくいへば、彼女が女性的の衝動と、文學的の興味とから、此のゴシップ本位の一部分を加へ、而してその刺擊の緩和劑として、此の前後兩端の文句を加へたのであらうと推考するのである。何故であるか。

吾等の見る所によれば、此の書簡部の存在について、第一に怪しいのは、正月三日の日記本部から謂はゆる書簡の部に轉ずる移り際の極めて自然なることである。それが、此の書簡部をつゞけることが、いかにも自然なるやうに、日記本部の最後を準備したかのやうに見えることである。作者は正月の三日に若宮が參內されたが、その折に宮をば道長公が抱かれて、宰相の君が御佩刀を取つて、その後に從つたと書いてある。

宰相の君御はかし取りて、殿の抱き奉らせ給へるに續きてまうのぼり給ふ。

而してその時の服裝を細かに敍して後に、

髮なども常よりつくろひ、ましてやうだいもてなし、らう〳〵しくをかし。たけ立ちよき程に、ふくらかなる人の、顏いと細かに、にほひをかしげなり。

と書いてある。

これはその場合に於ける特殊の様子で、日記としていかにも相應はしい叙述であるが、次ぎなる「大納言の君」の容貌の記載は、大分特殊の場合をかけ離れてゐて一種の獨立記事であるかのやうに見える。言ひ換へると後の書簡部の取扱振と全く同じやうに見えるではないか。

大納言の君はいとさゝやかに、ちひさしといふべき方なる人の、白う美しげにつふ〳〵と肥えたるが、上べはいと聳やかに、髪たけ三寸ばかり餘りたる、裾つき、かんざしなどぞすべて似るものなく、細かに美しき。顔もいとらう〳〵しく、もてなしいとらうたげになよびかなり。

しかし是れは正月三日の記事の初めに、「今年の御まかなひは大納言の君」とあるから、此の大役をもつ人の容子を、重ねて委しく寫したのであると云へば、それも一つの辯解になるであらう。けれども次ぎなる「宣旨の君」は、全く此の場合に無關係なる女房であるが、その人について、

宣旨の君はさゝやけ人の、いと細やかにそびえて、髪の筋こまやかに清らにて、生ひさがりの裾より一尺ばかり餘り給へり。いと心恥かしげに、際もなくあてなる様したまへり。物よりさし歩みて出でおはしたるも、煩はしう心遣ひせらるゝ心地す。あてなる

人は、かうこそあらめと、心ざま、物うちのたまへるもおぼゆ。

といふ記述をしてゐるのは、日記としては甚だ相應はしくない事であり、また次ぎなる書簡部の小少將や宮の内侍や和泉式部、清少納言等に對する取扱振と、何等の相違をも見ぬものである。また宰相の君の重出を見咎むるならば、正月三日の初めに、その裝束を委しく書いた大納言の君について、再び取り出して書いて居るのも、同じ理由で同じ程度に疑はれることであらう。で、これは無論想像であるが、恐らく紫式部は正月三日の日記を書いて、「大納言の君」「宰相の君」と書き並べて行く中に、引きつゞけて、此の場合には關係のない朋輩の女人群像をも描いて見たい氣分になつたのであらう。そして「帚木」の品定めに、眞名を書き散らす女の氣障な素振を說き、「これは上臈の中にも多かることぞかし」と書いて、清少納言あたりに當てこすつたやうな、比喩めいた小あたりには滿足し切れなくなつて、責任の主なる人物に對する列擧的品定めを試みようとしたのであらう。で、先づ素知らぬ振してわざと前に擧げた「大納言の君」を重ねて出し、次ぎに新しい顏の「宣旨の君」を出し、これで三人も擧げたから、此の邊で、「物言ひさがないやうだが」といふ申譯を附けて、前に大納言の君を重出したと同じ順序で、「宰相の君」をも、少部分を同じくし、大部分を違へて重出したのであらう。かういふ心持を合點して前から讀みつゞけて來ると、「この次に」の

一句が、前後の接續句として、實に相應はしく働いてゐることが解る。少なくとも「この次に」の一句を、別途の長い消息文の中なる繫ぎの文句と見るよりは、遙かに自然なることが解るであらう。――これが此の書簡部が本來日記の一部であつたと見る理由の第一である。

謂はゆる書簡部が本來日記本部のつゞきであつたと見るべき第二の理由は、前後に不調和なる材料の象嵌的挿入が、意識的に工夫された此の日記の趣向の一つであるやうに見えることとである。例へば、作者が土御門殿の池に水鳥の日々に多くなるのを見て、雪景色を待ちこがれてゐるが、容易に降らず、たま〳〵里下りした二日目に、生憎と降つてしまつたことを忌々しく呪つた序に、近頃の身境心境を歎いて、一憂き事の有りたけをしみ〴〵と味はひさせられる昨今ではある。紛れるかと試みに小說などを讀んで見ても、昔のやうには興味がない。古馴染との間にはいつしか心の隔てが出來、同じ局住の仲間と物いうては辛うじて慰めるとは物はかないことだ」などと、長々しい問はず語りを挿入してゐるのなども、前後に不調和なる、これは感想文の象嵌ともいふべきものであらう。また書簡部の女人群像の第十一回目で、齋院に仕へる「中將の君」の棚下しをした序に、齋院に仕へる女房と中宮に仕へる女房との特色の相違を、書簡部の三分の一強、日記全體の一割弱の長きに亘つて書きつゞけて居るが、これは辯解的論文の象嵌ともいふべきものであらう。作者にかういふ著

しい異分子挿入の嫌があつて、それが隨筆的の興味を添へる爲めの一種の趣向とも見られる以上は、女人群の品定めから成立つ謂はゆる書簡部を日記に固有した一部と見るのも、あながち不合理ではあるまい。

第三の理由は女人群像の部分を別途の書簡と見るのが、日記本來の一部と見るよりも更に不合理で、不穩當で、のみならず筆者の人物を損傷する傾きすらあることである　作者は此の部分の初めに、人の容貌の棚おろしは凡そ不嗜みな事で、今の人に關する事は尙更であり目前周圍の人に關する事は殊に尙更である。で少しでも惡口めいて、どうだらうかと思はれるやうな事は言ひますまい、と言つて居るが、事實は反對で、大分突込んだ惡口を云つて居り、殊に淸少納言に對して言つて居る「淸少納言といふは、したり顏の出しやばりやで、知つたかぶりに漢字などを書き散らすが、よく見ると堪らないことが多かつた。あの樣に好んで異を立てたがるつむじ曲りは、段々見劣りのして行くもので、あの女の將來もろくな事ではあるまい」などは、罵詈讒謗の域を通り越して呪詛にまで及んだもので、どの道言ふ者の爲人(ひとゝなり)を揚げるものではないが、之れを個人あての手紙に書くのは、日記や隨筆に書くよりも、一層罪が深いであらう。またかやうな事を我が子に與へる手紙に書いたところで、何の教訓になるものではあるまい。概して此の日記の作者には卑下自慢の自己擁護が多いと

共に、用もなき惡口を書き殘す癖も多分にあるやうに見える　例へば九日の産養の記事の末に、

こまの御許といふ人の恥見はべりし夜なり

とある如きが、それで、これは人情やみ難く、殊に女人に天賦的なる弱點の發露でもあらうがとにかく同じ事を書くにしても、さッぱりと日記隨筆に書いたと見る方が、個人あての私信殊に我が娘に寄せる消息文などに書いたと見るよりは、筆者の人物を傷つけることが少ないであらうと思ふ。　また前に擧げた齋院方の女房と中宮方の女房との特色相違論なども主として中宮及び道長一家の頌德禮讃の爲めに書いた日記に於いて、事の序に中宮方辯護の長談義を試みたものと見る方が、對個人の私信に於ける挿說と見るよりは妥當且つ合理的であらう

第四は謂はゆる書簡部最後の境を劃した附屬文句で、これが別途書簡說に取つては最も有力なる味方であり、日記固有說に取つては最も有力なる敵である　その中に「これかかりそめにも漏れたら大事ですよ」「讀み下せぬところや、文字の書き落しも多いことでせう見のがして下さい」などあるところを見ると、いかさま正眞の書簡らしくも思はれるが、しかしながら先行文學の『和泉式部日記』には、已に風雨の荒るゝ一夜を眠らずに書いた歳

想文を、そのまゝ封じて手紙に代へて、帥宮にさゝげたといふ離れ業の先例がある。紫式部自身も、已に「須磨」の卷で、源氏が、繪入の日記を書いて、その處々には、女君に質問する體の文句を書き入れたといふやうな、風變りな日記を想像して居る。さすれば前には日記の中に二三人の女房品定めの記事があつたのに引きつゞけて、十數軀の女人群像を寫し寫し終はつて、之れを一團と見て、書翰化の文句を添へる位は、『源氏』の作者に取つて何の造作もないことであらう。雨夜の品定めをなし終へて、「辛うじて、今日は日のけしきも直れり」と書いた氣分が、取りも直さず書簡部最後の

かく世の人ごとの上を思ひ〳〵て、果てにとぢめ侍れば、身を思ひ捨てぬ心の、さも深う侍るべきかな。何せむとにか侍らむ。

知つてゐる人名々の事を、考へては書き〳〵して、かう一纏めに極りをつけて見ると、自分を思ひ捨て得ぬ執着心が、いかにも深さうに見えますね。何のためにこんな事をしたのでせう」を書き了へて、さて筆を改めて、

十一日の曉、御堂へわたらせ給ふ。

と、遙かに前段を承けて朗らかに書きついだ氣分ではなかつたであらうか。

一〇

『紫式部日記』には、『源氏物語』を書いた餘力を以て、中宮及び道長に對して、我が佛尊しの文章報恩を勤めたかのやうに見えるところがある。彼女は、初め『源氏』ばりの磨かれた文章により、眼前當面の事實を寫さうとして、開卷第一章の朗々たる

秋のけはひの立つまゝに、土御門殿の有様いはむ方なくをかし。池のわたりの梢ども遣水のほとりの草むら、おのがじし色づきわたりつゝ、おほかたの空も艶なるにもてはやされて、不斷の御讀經の聲々あはれまさりけり。やう〳〵涼しき風のけしきにも例の絶えせぬ水の音なひ、夜もすがら聞きまがはさる。

の數行に筆を着けたのであらう。而して『源氏』で空想的に描いた王朝公卿生活の繪卷を、時の第一人者道長が私邸に於ける事實の中に縮寫しようとして、折々は目先にちらつく審美心象に恍惚として自他の別をも忘れつゝ、自分が道長に言ひ寄られた事をも寫し、十七歳なる關白の小作が、女房溜に來ては、「おほかる野邊に」＝かう女郎花の咲き揃うた所にぐつ〳〵してゐては、仇名を立てられるだらう　おゝ怖や〳〵」＝などと戲言して立ち去

る風情などをも寫したのであらう。裝束のやゝこしい寫實も、女人群像の品定めも、主として、彼女がかういふ氣分の産物であつたので、從つて作中の言々句々、悉く淺からぬ一種の意味を持つてゐるのであるが、描寫の面白さから見、殊に時代を現はし、人をも事をも生き〳〵と寫した點から見て、一部の壓卷と稱すべきは、左に揭ぐる二節であらうかと思はれる。

その第一は、皇子＝敦成親王、後の後一條天皇＝御誕生あつて後三十餘日を經た十月のなかばの事、道長が皇子を抱いて、あやして居ると、皇子の御尿が道長の衣を濡らした。道長はすぐに衣の紐を解いて、几帳の後ろへ行つて、火桶にかざして、それを焙つた、その趣を書いたところである。

殿の、夜中にも曉にも參り給ひつゝ、御乳母の懷を引きさがさせ給ふに、うちとけて寢たる時などは、何心もなくおぼほれて驚くも、いといとほしく見ゆ　心もとなき御程を、わが心をやりて、さゝげ愛しみ給ふも、道理にめでたし　或時はわりなきわざしかけ奉り給へるを、御紐ひき解きて、御几帳のうしろにて、あぶらせ給ふ　あはれ此の宮の御尿にぬるゝは、うれしきわざかな　この濡れたるあぶるこそ思ふやうなる心地すれ一と、悦ばせ給ふ

一道長公は初孫なる皇子のお可愛ゆさに絆されて、晝はもとより、夜中、曉の嫌ひなく、御室へ

入つては、乳母の懷ろをさがして、抱き取つて、あやして居られる。まだ生れ立ての〳〵と危ッかしいのを、心して抱き上げ、さし上げてはあやされる。可愛ゆい娘の生んだ初孫の しかも皇子でおらせられる。お道理至極のことである。或時などは、皇子が穢い御小水をおしかけなさると、殿は大悅びで、すぐに上衣の紐を解いて御几帳のかげへ行つて、火桶にかざして焙らせられる。そして仰つしやる詞に、—あゝ此の宮樣の御尿に濡れるとは、嬉しいことだ。この濡れた衣をあぶるこそ、まことにこの上もなく難有いことだ—と言つて悅ばせられた—といふのである。關白の榮職に居る尊い人が、孫の皇子の小水に汚れた上衣を焙つて、泣くばかりに悅ぶ心地、こゝに外戚政策の根本義が存在し、同時に藤原氏榮華の鍵が潛んでゐるのではないか。寬弘五年は道長四十二歲、中宮二十一歲の時である。彰子中宮が定子皇后の向うを張つて入内されたのは、長保元年、十二歲の春であつた。それより定子皇后の忘遺兒、第一皇子、敦康親王の成長されるのを眺めつゝ、我が娘に懷姙の樣子のないを見ては、頻りに焦躁の念に驅られてゐたが、入内後十年目の春になつて圖らずも中宮受胎の快報を耳にした。

道長の悅びは天にも登るばかりである。それより祈禱、養生と、周到な用意に手を盡くして安産の日を待つたが、その間にも、心にかゝる事が數々あつた。御産の期の近づいた頃、お

る日中宮の御帳の中に犬が入つて來て子を生んだ。思ひ設けぬ椿事なので、大いに驚いて早速博士大江匡衡を呼んで占はせた。そして氣味のわるい占形を期待して、匡衡の顏を凝視めてゐると、答は意外であつた。

これは御目出度い御瑞相で御座りまする　犬の字は大の字の側に點を添へまするが、其の點を下に付くれば太の字で、子を添へて太子となり、上につくれば天の字で、子を添へて天子となりまする。これは今度御誕生の皇子が、先づ太子とならせられ、後に天子とならせらるゝ御吉兆と伺ひまする。

と合はせた。かくして憂愁恐怖の種は片端から消え去つて新しい悦びが後から〳〵と湧いて來た。

その中に九月十日の未明に、中宮がいよ〳〵産氣づかれたので、山々寺々を尋ねて驗者といふ驗者を殘りなく召し集め、ある限りの陰陽師を悉く呼び寄せて、加持、祈禱と丹精を凝らしたが、たゞ頻らせられ、苦しませらるるのみで、容易に御産にはなりさうもない。かくして呻きと、祈りと、物怪騷ぎとの間に、その日は暮れて、やはり同じ苦惱のつゞいた翌十一日の正午近き時分の事、道長も、もう堪らなくなつたのであらう、障子を明けて、「誰そある」と呼んだ。聲に應じて來たのは、後の勘解由相公有國卿であつた。

—御召しで御座りまするか。—

「されば、今以て激しい御惱みと見えるが、どうしたものであらう　重ねて御讀經の沙汰に及ぶべきであらうか。」

といふと、有國は卽座に答へて、

—もう御安産になりまして御座りまする。重ねての御讀經には及びますまい。—

といふか云はぬに、女房が走つて來て、「もう御産に成りまして御座りまする」と知らせた道長が怪しんで、「どうして御産に成つたとは知られたぞ」—と尋ねると、有國は

—されば、障子は子を障へると書きまする。その障子が廣く開きましたによつて、もう御産に成つた事とは存じました。—

と答へた。『紫式部日記』は此の正午の御産を記して、

「午の時に空晴れて、朝日さし出でたる心地す。平らかにおはします嬉しさの類ひもなきに、男にさへおはしましける悅び、いかゞは斜めならむ。」

と書いて居る。實にいかゞは斜めならむ。豫定の計畫を胸に畫いて、娘を大内に進めてから、長い十年を待ちつくした後の希望の實現である。或は運命により、或は人爲によつて、行手を塞がれ〳〵したのを、開闢し排除して、やうやく迎へ得た榮光の照射である。而して孕

まれて安産されたるさへあるに、降誕されたのは、輝くばかりの玉の御子、御男子の皇子君であつた。その皇子の御尿を上の衣に承けて焙ることに泣くばかりの歡喜を感ずるのは、げに道理であらう。日記の此の短章は簡單ながら、此の關白道長が稀有の心境を現はし同時に外戚政策を基調として開展し轉旋し行く時代相を象徴して、無限の味はひがあると思ふ。

その中に陛下の御成があつた。主人の道長すつかり悦に入つて。

あはれ前々の御幸を、などて面目ありと思ひ給へけむ。かゝりける事も侍りけるものを。

「皇子がおはせぬ頃の、唯だの臨幸を、どうして面目とは思つたのであらう。こんな有難い事もあればあるのに」と云つて、醉ひ泣きしたと、これもこの日記に書いてある　或時などは、悦びの酒宴の果てに、紫式部等が道長の公達にからかはれて御帳の陰に隱れて居ると、泥醉した道長が、御帳を拂ひ退け、女達を捉へて、「歌を一つ詠め、詠まぬ中は許さぬぞ」といふ式部がおびえながら當座の頌を献げると、「これはうまい」と、二度ばかり讀み上げて、つゞいて自分の即詠を詠み上げた。そして中宮に對ひ、妻の倫子に對ひ、ふざけつゝ、からかひつして、榮花に醉へる恍惚氣分を縱横に發露した、その光景を寫した一節が、謂はゆる此の日記の二名文の第二である。

五日の夜の殿上の御産養　池の汀から

おそろしかるべき夜の御酔ひなんめりと見て、事はつるまゝに宰相の君に言ひ合はせて、隱れなむとするに、東の表に殿の公達、宰相中將など入りて、さわがしければ、二人御帳の後ろに隱れたるを、取り拂はせ給ひて二人ながら、とらへすゑさせ給へり「和歌一つ仕うまつれ、さらば許さむ」とのたまはす　厭はしく恐ろしければ聞こゆ

いかにいかゞ數へやるべき八千歳の
あまり久しき君が御代をば

あはれ、つかうまつれるかなと、二度

篝火ぞも木の下に　（蜂須賀家本紫式部日記繪卷）

ばかり誦せさせ給ひて、いと興うじたまはせたる

あし田鶴の齢しあらば
君が代の
千年の數もかぞへ
とりてむ

さばかり醉ひ給へる御心地にもおぼしける樣なれば、いとあはれに道理なり。……「宮のお前聞こしめすや。つかうまつれり」と我ればめし給ひて、宮の御父にてまろわろからず、まろが娘にて宮わろくおはしまさず。母もまた幸ひありと思ひて、笑ひ給ふめり。よい男持たりかしと思ひたんめり」と戯れ聞

こえ給ふも、こよなき御醉ひのまぎれなりと見ゆ　さることなれば、騷がしき心地はしながら、めでたくのみ。聞きゐさせ給ふ殿の上、聞きにくしと思すにや、渡らせ給ふめるけしきなれば、「送りせずとて、母恨み給はむものぞ」とて、急ぎて御帳の内を通らせ給ふ。「宮なめしと思すらむ、親のあればこそ子もかしこけれ」と、うちつぶやき給ふを、人人笑ひ聞こゆ。

大意は、〃式部が「八千年もつゞく久しい大御代は、とても人間には數へられませんわね」と詠むと、公は「何、鶴ぐらゐ生きさへすりや、わけはないさ」と云つて御自分の御詠を讀み上げられ

「中宮の御前、今のわたしの歌をお聞きですか。うまく出來たでせう」

と、自慢をして、

中宮のお父樣とあれば、わしは滿足ぢや。わしの女で、中宮も不足には思召しますまいあれ〳〵、阿母も身の仕合せを悅んで、にこ〳〵して居る。立派な亭主を持つたと思つてゐるのであらう。

と、ふざけ散らされる。妻の倫子が聞きかねて、座を立つと、

「送らないツて阿母に恨まれちヤ大變だ。」

と追つて出て、

「中宮はわたしを無禮だと思召すでせう。しかしながら、親があればこそ、子も立派になるので御座りまするぞ。」

などと、くだを巻かれた。＝といふのである。やう／＼外祖父になりおほせた、時の巨人關白の醉態を寫し得て、實に面白く、筆神に入ると云つてもよい。『大日本史』はこゝを譯して、

道長曾自矜曰、以后爲子、於我乎無可恥、以我爲父、后亦可無憾。然則后母得良夫、亦可爲榮耳。

と書いて居るが、これは場合を無視し、藝術味を忘れ、洒落の筆に袴を着せた儒者譯で、おそらくさういふ味はひの文ではあるまい。『平家物語』は「御産卷」に、清盛が、その娘徳子中宮の御産により、始めて外祖父となつた時の心境を寫して、

中宮は隙なく頻らせ給ふばかりにて、御産も頓に成りやらず、入道相國二位殿、胸に手を置いて、こはいかゞせん、いかにせんとぞあきれ給ふ。人々物申しけれども、唯だ兎も角も好き樣に／＼とばかりぞのたまひける。哀れ淨海軍の陣ならば、さりとも是れ程までは臆せじもののをとぞ、後にはのたまひける。……御産平安のみならず、皇子にてこそまし／＼けれ。……堂上堂下、一同にあつと喜び合はれける聲は、門外までもとよみて、暫しは靜まりもやらざりけ

り。入道相國嬉しさの餘りに聲を揚げてぞ泣かれける、悦び泣きとはこれをいふべきにや。」と書いて居るが、『紫式部日記』と『平家物語』と、それ〴〵の此の部は、王朝第一の榮華關白と、武家時代第一の榮華相國とが、始めて我が娘に皇子を得た甚深微妙の外威感を寫した雙璧文學といふべきであらう。

『紫式部日記』は大體に於いて、品を保ち、嗜みを見せた、淑やかな文學である。しかしながら、嗜み謙下る間にも、博識を見せ、誇揚を見せ、かねて諧謔を見せて居る所があつて、そこに時代及び作者の僞らぬ特色を覗かせてゐるところが、何とも云はれぬ味である。この日記はさすが天才の筆だけあつて無數の味を持つてゐるが、際立つて面白いのは、王朝第一人者の道長が榮花生活の核心を捉へ、あらゆる公卿の渇望した最大關心事を捉へて、その前後の光景を、克明に生寫し活描したる點と、用心深き天才女性が、謙遜し辯解しながら、眞實の自己をちら〳〵と覗かせたる點と、おそらくこの二つであらう。

二

一條朝までに現はれた四篇の女流日記は、それ〴〵に一種の「第一」を持つてゐた。一か

げろふ日記』の持つてゐたのは誠實第一であつた。作者は、泣いた、拗ねた、苦悶した、嫉妬した、皮肉の八つあたりをした、時としては他の不幸を悦ぶの殘忍をも敢てしたが、同時にそのいづれにも憎み得ざる誠實が現はれてゐた。彼女の文章は必ずしも巧みではなかつたが、その文章の拙さにすら一種の誠實味の現はれがあつた。『紫式部日記』の持つてゐたのは溫淑第一であつた。作者はしば〳〵ふざけた記述をした。時としては自ら男に言ひ寄られたことを寫し、時としては人を毀り自ら揚ぐるの不嗜みをすらも敢てしてゐるけれども、それにも拘はらず、文章全體に漂つてゐる溫藉典雅なる落ちつきは、他の何人も企て及ばざるものである。『枕の草子』の持つてゐたのは清新奇峭第一であつた。作者は常に氣を負うて人に臨み、表現に於いて優先第一の地歩を確保しようとした。孤高の持續は彼女が常に望んで贏ち得たる第一義であつたであらう。最後に『和泉式部日記』の持つてゐたのは熱愛第一であつた。彼女の愛は盲目の愛、玩弄の愛、平地波瀾の愛、忘一切他の愛、男女の相惹く力を思ふまゝに働かした愛であつたが、彼女は傍目も振らずに之れを行爲し、而して其の行爲したる所を勇敢に表現したる觀がある。世に初一念は神也ともいふが、彼女の愛行爲は、概ね初一念の敢行であり、而して此の日記は最も代表的なる敢行であつたであらう

王朝貴族の男女が身も世もなくあこがれたのは戀愛であつた　和泉式部の愛行爲はそ

の深さに於いて、一心不亂さに於いて、また其の姿態の豐富なることに於いて、一世に卓越したものであつた。彼女は當時の女人界に於ける在原業平とも云はれるであらう。王朝に於ける教養社會は詠歌を以て片時も離るべからざる男女の身嗜みとした。而して戀愛に和歌を纒綿せしめることによつて、やゝもすれば醜悪に墮せんとする愛行爲を風流化した。吾等は彼女の日記に於いて、戀愛と和歌とが不卽不離の一體をなして、一種の美しき幻影を浮動せしめてゐるのを見逃がすことが出來ぬ。王朝人はまた自然の觀察翫賞を日常生活に絡むことを一種の嗜みとし、また誇りとした。兼好法師は「つれ〴〵草」に於いて、或人の雪の朝に認めた手紙が、一言も雪にいひ及ぼさぬ廉により、不風流見るに足らずとて、讀まずに返されたことを書いてゐるが、自然現象に馴染んだ生活は修養ある王朝人の理想であつたのである。彼女は此の日記の歌に於いて手紙に於いて、常に自然現象の鑑賞を添へた。帥宮から氣象の變化ある每に寄せらるゝ消息をば「折過ぐし給はぬををかしと見奉る」と云つて、度每に悅んだ。戀愛の徹底的實行、和歌の豐富なる詠出、自然の身に沁みた鑑賞、而してこの三者を有機的に連關せしめたる燃ゆるやうな愛の生活、これが「和泉式部日記」の可なり高義に實現して居るところで、此の日記は此の意味に於いて、時代相を象徵し代表して居るといふことが出來るであらう。

もう一つ、吾等が『和泉式部日記』に於いて見出だす第一性は、物語としての緊縮された姿である。斷片より連絡に、孤立より背景添付に、群の列擧より一の詳寫に、是れが『伊勢』、『土佐』、『古今』、『大和』以來、王朝文學の辿つて來た道であつた。かくして、孤立した話の數を並べた物語が、擇り拔きの少數を委曲に寫すやうになり、日また日を逐うた日記が、要所から要所へ、興味本位に飛躍するやうになり、和歌の詞書には物語めいた長文句の添書が前置されるやうになつた。『高光日記』の如きは短篇の拙いものながら、此の推移の、一種の窮極地を暗示したものであつたが、此の趨勢に乘じ、此の特色を極度に發揮して、意義深き立派な物語的日記を成したのが『和泉式部日記』である。彼女と敦道親王との戀愛を中心として、その愛の萠芽から勝利に至るまでを、夾雜物なしに寫し、和歌と自然現象とに伴はせて數數のあやを見せつゝ、豐富なる愛の姿を描き、而して、その間に和泉式部及び帥宮といふ戀愛道の選まれたる男女二選手の特色ある個性面目を浮彫りのやうに躍如たらしめたもの、これが此の日記であるとすれば、『かげろふ日記』以來一條朝の末までに現はれた女流日記群の峯々を縱走して一瞥しただけでも、『和泉式部日記』の史的に秀でて居る所以が理解されるであらう。

二

『和泉式部日記』は長保五年(一六六三)式部三十歳、帥宮二十三歳の四月の十日過ぎに、式部が宮から謎のやうな求愛の音信を受けたのに始まる。それは式部と最初の夫和泉守橘道貞との間に生れた小式部が九歳の時であつた。彼女は道貞と別かれて、冷泉院第三の皇子、彈正宮爲尊親王の寵を受けたが、長保四年の六月十三日に宮が薨去されてから、凡そ十ヶ月目の或日、彼女が夢よりもはかなき世の中を歎きつゝ、日毎に色を增す新綠を眺めてゐるところへ、故の爲尊親王に近侍した小姓の童が、忍びやかに音づれた。彼女が「宮様の緣故の人が懷かしくて堪らないのに何故今まで來てはくれなかつたのです」といふと、童は

「用もないのに不しつけと思ひまして、つい遠慮いたして居りました。その後、山寺詣でを仕事にして居りましたが、あんまり寂しいので、此頃は弟御様の帥宮様に御奉公いたして居りますよ。」

「それはよい事をしましたね。その弟御の宮様と仰しやるのは、大層御上品で、とてもお美しくいらッしやるといふぢやないの？（いとあてに、けけしうおはしますなるは）しかし、も

との彈正宮樣のやうでは、とてもいらつしやるまい?」

「エヽ。しかし大層お親しみのあるお方でしてね。「お前、和泉の處へ行くかい?」とお尋ねなさるんでせう。「ハア、參りまする」と申上げますと、「では、これを持つて行つて、これを見て、どう思ひなさるゝと云つて、尋ねて來ておくれ」と仰しやつて、花を着けた橘の一枝をお渡しになりました。これで御座います。」

和泉式部像（京都誠心院藏）

と云つて、橘を取り出した。女は「そりや、昔の人の御袖の香りを思ひ出しますわね」といふと、「わかりました。では、かうお暇いたします」といふので、

かをる香によそふるよりはほとゝぎす
　　聞かばやおなじ聲やまさると

「同じく先宮樣を思ひ出しますするにも、橘の香りなどよりは似寄つた御兄弟のお聲を聞い

て、偲び上げたう御座います――これをお目にかけて下さいと言つて、さし出した　童が歸つて復命すると、宮からは折返して、

　おなじ枝に鳴きつゝをりし郭公
　　聲はかはらぬものと知らなむ

「兄弟連枝の間柄で、譬へば同じ枝に鳴いてゐた郭公のやうなものだ、聲も似て居らう男も違はぬものと思つて下さい」――といふ御返歌があつた。

これが此の日記の冒頭の一節である。物語は第三人稱式で、かの金枝玉葉と、この國守の娘にして、同じく國守の妻であつた才女との戀愛關係の可なりに長い過程が、疎密、緩急、高低、いろ〳〵の變化を見せつゝ、女が宮を獨占するまで書きつゞけられてゐるが、作全體の情調は、この一節によつて推察されるであらう。兄宮の喪に泣く女に弟の宮がかういふ調子で誘ひの水を向けられるのである。故愛人の弟に對して、喪に籠もる未亡の女人が、かういふ合點々々の柔手をさし伸べるのである。しかもその交渉が、折節の景物なる花橘、時鳥に美化され、みやびたる和歌に風流化されて、異性の互々を優雅温柔なる雰圍氣の裡に包むのである。此の日記が、時代を代表した心持は、之れによつて容易に推測されるであらう。

和泉式部は當時の和歌者流の隨一であつた。而して彼女の歌は心境そのまゝの發露な

るを特色としたと云はれる。吾等は彼女が象徴的なる代表歌の二三によつて、側面より此の日記の特色を說明し得るやうに思ふ。彼女が歌集に、—語らふ人多かりなどいはれける女の、去年見たりける誰れが親といひたりければ、程へていかゞ定めたると、人のいひければと詞書して、

この世にはいかゞ定めむおのづから

むかしを問はむ人にとへかし

といふのがある。小式部を生んだ時のことであらう。懇ろにした男が何人も居るんだから、去年逢つた男の中の誰れが、赤ン坊の父やら、知れたことではない、なぞと噂されたが、程へて皮肉な朋輩が、—「お子さんの父御を、誰れとお決めになりまして？」—と尋ねたので、

さあ、此の世では、とてもはツきり定めるわけに行きませんよ。お互はいづれ地獄へ行くのですからね、その時に、娑婆で犯した罪を問ひ糺す閻魔王にお尋ねなすつたら解るでせう

といふのである　彼女の身邊をば、常に多くの男性が取りまいてゐたのであらう、而して彼女は、かういふ心を以て彼等に應對してゐたのであらう　此の日記の中にもしば〳〵さういふ關係の噂が立ち、これが爲めに宮の疑ひをも受けて、彼女も宮に對しては、さすがに苦悶憂鬱を感じたやうに書いてあるが、此の習癖と心境とは、王朝女人特有の風流に美化されつ

つ、永續的に、日記の主流をなしてゐたのであつた。

同じ集の中に、「觀身岸額離根草、論命江頭不繫船」と題した四十三首を、ひた並べに並べたところがある、その最後に、

寢し床に魂なきからをとめたらば

なげの哀れと人も見よかし

といふのがある。一種の辭世らしくも見えるが、大意は、今まで生身を横たへつゝ、多くの男とも寢て戀を生き、人にも惡まれた、その床に、いよ〳〵最後の亡骸を留めるやうになつたら、此の女には「あはれ！」と言ひたいやうな要素が微塵もあるまいとわたしを思つてゐた人々も、その時だけは、どうぞ「あゝ可哀相に！」と思つて見てやつて下さい、といふのであ る。床を用ゐ盡くし、男と寢つくした女も、最後の心は悲しかつた。彼女が意馬心猿の誘ふに任せて、宮の懷ろに入り、宮を擒にして、正妃を追ひ出した、傍若無人の愛慾記を書く中にも奥底には、やはり「無げの哀れ」を人に要める氣持が見えて、人をしんみりさせる所がある。

和泉式部が書寫山の性空上人に寄せたといふ歌に、

暗きより暗き道にぞ入りぬべき

はるかに照らせ山の端の月

といふのがある。作者彼女とは遠くかけ離れた歌のやうであるが、この懺悔、厭世、及び魂の救を求める心は、此の日記の中にも屢々のぞいてゐて、日記に一種の哀れさ及び深み、味しみを添へてゐる。凡そ此の愛慾の思ひ切つた實現、愛慾に溺れつゝ、同時に魂の救ひを求める心、これは此の日記の中に流れつゝ、作者の身上に現はれつゝ、同時に一代に流行した思潮を象徴してゐるものであらう。

三

二人の仲は、見ぬ戀の中から烈しいものであつた。花橘の贈答があつて後、二人の間に始めて交はされた歌と歌とは、宮の

うち出でてもありにしものをなか〳〵に
苦しきまでも歎く今日かな

に對する女の

今日のまの心にかへて思ひやれ
ながめつゝのみ過ぐす月日を

であつた。「今日の間」は「昔は昨日からお便りを賜はり始めて、まだ唯だの一日ではありませんか、その今日一日の間の待遠しさ」といふ意味で、唯だの今日といふのではない。「今日の間」の類語に「今の間」「今朝の間」などがあつて、この日記の中にも、

今の間はいかゞかと怪しくこそ。

今朝の間に今はひぬらむ夢ばかり

ぬると見えつる手枕の袖

などと、幾度も繰返されて居るが、いづれも「今別かれて來ながら、その今の間がもう堪らなく戀しいとは、どうしたものかといふ味はひの特別の蔭を持ち、戀に活き、戀に遊び、戀に死ぬる王朝人が、愛人に離れた一刻を千秋と見做した特別心境を象徴する意味深き語であるが、此の語が此の日記に於いて、他に類例のないほど屡々繰返されてゐるのも、要するに彼等が愛慾の深さ烈しさを語るものであらう。

譯

その中に、宮は不意に女を訪はれた。無論夜である。女はどうしようかと迷つたが、居留守も使はれず、西の妻戸に請じて、お相手をしてゐる中に、月が出た。すると宮は

いとあかし。古めかしう奧まりたる——これは眩しい。わたしは時代おくれの、御殿育ち

身なればかゝるところには居ならはぬを、いとはしたなき心地もするかな。そのおはする所にすゑ給へ。

で、かういふ端近な明るい處にはゐなれないので、どうも極りがわるくて仕方がないのだ。そのあなたの居られるところへ入れて下さい。

と云つて、しづかにすべり入られた。やがて二人の契りは成立つて、翌くる朝は、もう「今の間はいかゞと怪しくこそ」の後朝が來たのである。

二人の愛の進行にはいろ／＼の曲折があつた。宮は兄宮の喪や左右の諫めに憚り、世間の噂に恐れて、幾度か跡絶された。女は宮の跡絶にむづかつて、或時は起きながら空しく宮を歸し、或時は佛詣に託して宮を避け、或時は野山遊びの違約をふくんで暫らくの駄々をつづけた。しかしながら二人の愛は一難を經る毎に常に一倍し、また數倍した。二人の愛は常に烈しかつた。殊に宮のは常規を逸した烈しさで、或時は夜深く啼いて二人の別かれを早めたとて、鷄を殺して、その羽に、

殺してもなほあかぬかな寢ぬ鳥の
　折ふし知らぬ今朝の初聲

と書いて女に送られた。恐らくほんとに殺されたのであらう。或時は童の曉の出仕が後れた爲めに、女の歌に先んぜられたとて、焦躁されて、「この童殺してばや」と言ひ出され、女

に諫められて、

ことわりや今は殺さじこの童

しのびの妻のいふことにより

など詠んで返されたことがあつた。女の熱愛も一つは宮のかういふ異常性に打ち込んだのであらう。彼等は情が募つて來ると、一人は「今すぐに逢ひたい」といふ、一人は「戀しくは入らつしやい、誰れに遠慮を」といふ。そして『古今』や『伊勢』の古歌を借り用ゐて、宮は

あな戀し今も見てしが山賤（やまがつ）の

垣ほに生ふるやまとなでしこ　（古今集）

と、女は

戀しくは來ても見よかし千早振

神のいさむる道ならなくに　（伊勢物語）

と、卽送し卽答したことなどもあつた。

さる程に、宮は女の家を訪ふだけに滿足されなくなつて、女を迎への車に同車して、我が御殿に伴ひ、人なき細殿に一夜を過ごされたこともあつた。

やをら人もなき廊のあるに、さし寄せて、下りさせ給ひぬ。月もいと明ければ、「下りね」と忍びて宣へば、さま惡しきやうなれば下りぬ。「さりや、人も見ぬ所ぞかし。今よりも、かやうに聞こえさせむ。人などもある折にやと思へば、つゝましうてなむ」など、物語あはれにし給ひて明けぬれば、車寄せ給ひて、乘せ給ふ

譯

こッそりと、人のゐぬ細殿の前に車を寄せて、下りなされた。月は明るし、宮が小聲で下りよ〳〵と仰しやるし、それにぐつ〳〵してゐるのも見ッともないので、女は下りた。「それ御覽なさい、誰れも居ないでせう。これからも度々此處へ來ませうよ。お前の家へ行つて、誰れか來てはゐないかと思ふと、氣にかゝつてねい」などと、いろ〳〵のお話を、しんみりとなさつて、明けると、車を寄せて、女をお乘せになつた。

宮は女の連れ出し、餘所泊りを再びし、三たびされた。一度は知人の公卿の邸内の車宿りに車を立てつゝ、二人で車中に一夜を明かされたこともあつた。宮はやがて別居しての逢瀨に滿足されなくなつた。そして到頭我が御殿に引取る相談を持ちかけられた。女は我が身の周圍と、宮家の事情と、世間の評判と、捨てられた日の萬一とを想像して、暫らく心の動搖を感じたが、遂に宮の勸めに應ずべく決心した。宮は、女の多情に警戒しつゝも、女のひた

寄る心の可愛ゆさと、和歌の才とに惹きつけられ、女は、階級相違の結果を氣遣ひつゝも、この身分、容貌、風流の最上を皆具した貴公子を前にしては、他の好色者流に目も立たなくなり、かくして互が互に引かれ惹かれて、定められたる運命を辿つたのである　日記に

　好きごとどもする人々のもとより、棚機彦星などいふ事ども、おまた見ゆれど、目も立たず。

と書いてある、彼女自身の言葉は、彼女が周圍に寄りたかる好色群を振りもぎつて選まれたる高貴の第一人者に突進した心境を告白したものである、

　さる程に十二月十八日の月夜である。月のよき程に、宮は自身車に召されて女を迎へられた。女が一人乗ると、人を伴へと云はれるので、然るべき二三の侍女をつれて御供した。彼女も初めには躊躇したが、やがて持前の度胸を据ゑた。日記は書いて居る

　さればよと思ひて、「何事かは。」「わざと仕立てむ。」「いかでかはまゐらまし。」「いつ參りしぞ。」

譯

女は豫期した通りだと思ひつゝ、世間はやがて屹度自分の噂をするであらう。

甲「何だ、何事が起こつたのだ。」

乙「宮家へ行くなら、大びらに乗り込むさ。」

丙「あの女、どうして行くもんか。一人の專有物にな

と、なか〳〵人も思へかしと思ひて明けぬれば、櫛の筥など取りにやる。

どに成る女ぢやないよ。」
「何、ほんとに行つたつて？　何時行つたんだ？」
などと、勝手に推量して噂をするがよい、と思ひつゝ、その中に明けたので、家に手廻りの小道具などを取りにやつた。

宮家にはやがて大きな悲劇が起こつた。北の方は悲しみ、恨み、且つ憤られた。北の方づきの乳母や女房等は、揃つて憎しみの目を新參の闖入者に向けた。女は心苦しくは思ひながら、特別なる宮の保護を憑みにして、當てがはれた室に籠つてゐる。宮は板挾みの境遇に在つて、彼れと是れとを執り成されながら、御心は次第に北の方と離れつゝ、同時に式部の方へ寄つて來た。

年はやがて改まつて、寛弘の元年となる。同じ家に住みながら、宮の式部と共に居らるゝことが日に〳〵多くなり、北の方への御入りが益々間遠になつて來た。北の方は胸が張り裂けるばかりになつて居られるところへ、お姉君なる東宮の女御から御たよりがあつた。

いかにぞ。この頃人のいふことあり、まことか。我れさへ

譯

どうして入らつしやる？　昨今世間が宮についていろいろ噂をして居りますね。あれは眞實ですか。あなた

なむ、人氣なう覺ゆる、夜の間にも渡りたまへかし。

はさぞかし、わたしでさへ、すッかり顔をつぶされた氣持がしますよ。晝は人目がある。夜分にでも入らつしやいな。

北の方は答へられた

承りぬ。いつも思ふさまならぬ世の中の、この頃は見苦しきことさへ侍りてなむ。あからさまにも、參り侍りて、宮達をも見まゐらせて、心も慰め侍らむとなむ思ひたまふるを、迎へに賜はせよ。これよりはよも耳にも聞き入れじと思ひたまへてなむ。

譯

うれしくいたゞきました。前々から始終惠まれぬ生活を送つては居りますが、此の頃はまして、餘處から下司女を引き入れて、それに見かへられるなど、心外な事がありましてね。ほんとに堪りません。一寸なりとも伺つておかはゆい若宮樣達にもお目にかゝり、ふさいだ心をも慰めたいと思ひますが、迎へのお車を下さいませんか。こちらから仕立てゝまゐるといふわけには、とても。私の賴みなどを耳に入れてくれるやうな人ではないと思ふものですからね。

この二篇の手紙は、共に作者和泉式部の創作らしいが、簡潔で要を得て柔らかで、奧があつて實によく出來てゐる。

この手紙の往復によつて、事件は急轉した。北の方はやがて宮とお別かれの用意をされて、腰許達に打あけられると、

人々「いでさま悪しきや。世の中の人の、あさみ聞こえさすることよ。」「まゐりけるにも、おはしましてこそは、迎へさせおはしましけれ。」「すべていと目もあやにこそ侍るなれ。」「かの局に侍るなるべし。晝も三度四度おはしますなり。」「いとよし、暫しこらし聞こえ給へ。」「あ

譯

侍女達が、

甲「ほんとに人目のわるいことで御座いますね。世間の人が、好い笑草にして、陰口を申上げて居ると云つたら、ありませんよ。」

乙「彼女が上つたのも、宮様御自身お出かけで、お迎へなすつたといふではありませんか。」

丙「一から十まで、目ざはりな事だらけで、とても見ては居られませんわ。」

丁「あのお室に居くさるんでせう。そこへ宮様が晝間でさへ、三度も四度も入らつしやるといふんですからね。」

戊「えゝ／＼、結構ですとも。暫らくさうして油を取つてお上げなさいまし。」

まり物聞こえさせおはしまさず」など憎みあへるに、御心にもいとむつかしう思召す。

己「それに、向うへ入らしても、あんまり、お便りなどなさるんぢや御座いませんよ。」と、女憎さに、口々に言ひ合ふと、北の方も忌々しく、御心がむしやくしやされるのであつた。

恐らく五人若しくは六人の慴言を、不連續式に列記したのであらう　滅撥、驚異、嘲笑、顧望いろ〳〵の變化を見せて非常に面白い。前なる、女に對する世評の列記と相並んで、此の作者の戯曲的手腕を見るべきものである。

かくして此の戀愛悲劇は、いよ〳〵終局に近づいた。宮の乳母はたゞならぬ樣子に驚いて宮に意見した　宮は直ちに、北の方を訪はれた。そして、

「ほんとですか、女御殿の處へ入らつしやるといふのは。どうして車をお言ひつけにはなりません？」

と云はれると、北の方は

「どういふことですか。向うから來いといはれるものですから。」

と言はれたきりで、何とも仰しやらない。

あとは双方大沈默で幕！　これで此の日記が終はつてゐる。全體が月日の順序を逐ひ

法談にいそぐ和泉式部　誓願寺縁起

（京都誠心院藏）

起筆と大團圓とには、首尾らしい工夫を施し、而して内容は我が戀愛の萠芽より成功、勝利に至る、纒まつた一事件の顚末を中心として、種々の環境により、副人物の言行により、文體のあやにより、歌や書翰の挿入によつて、形式をも情味をも豐富にしてゐる。王朝日記中の尤たる貫祿は、これによつて、まづ許さるべきであらう。

一四

二人の戀は熱烈であつた。熱烈ではあつたが、それは常に優しい自然觀に彩られ、美しい和歌に柔らげられて、風流典雅な姿を見せた。自然と人事との美しい調和、人事と和歌との渾然たる融會。平安朝人文の美はおもにこゝに宿つたのであらう。和泉式部が戀愛の美觀もまたとして此處に宿つたのであらう。而して王朝の戀愛が動物的とならず、戀愛記が肉慾の記事とならなかつたおもなる因由は、こゝにあるのであらう。左に日記から此の方面の一例を引いて見る。

二度の連れ出し、外泊があつて間もない六月頃のことであつた。女が明月を見て君を憶ふといふ意味の歌を詠んで宮に送ると、宮は常着の略裝のまゝで、大急ぎに女の家に驅けつ

けられたことがあつた。かう書いてある。

月の明き夜、うち伏して、羨まし
くもなど眺めらるれば、宮にか
うぞ聞こえける

　月を見て荒れたる宿に
　ながむとは
　　見に來ぬまでも
　　誰れに告げよと

ひすまし童して、「右近の尉に、
さし取らせて來ね」とてやる
宮は御前に人々して、物語して
おはします程なりけり。人ま
かでなどして、入らせ給ふに、右
近のぞうさし出でたれば、「例

譯

その中に、ある明月の晩である。丁度宮から疑を受けて
ゐる女は、頭を垂れては、自分は此の通り悲み惱んでゐる
のにと、しづかに澄んだ天上の月を羨ましく眺めつゝ、

　君を思うて、私はこの見る影もない宿に、ぼんやりと
　月を眺めて泣いてゐるのに、御自身見舞つて下さら
　ぬまでも、苦衷を誰れに訴へよとて、お便りさへ下さ
　りませぬ。

と詠んで、「これを右近尉に渡して來い」と云つて、小さ
い掃除女を差出した。使の行つたのは、丁度宮が、御前に
人を集めてお話の最中であつたが、その中に人々が退出
して、宮が奥へお入りになる其の折に、右近尉が和泉の歌
を差出すと、宮は

　「では、いつもの車を用意せい。」

と仰しやつて、すぐに女の家に御出かけなされた。

の車に裝束せさせよ」とて、おはします。女端にながめてゐたる程に、人の入り來れば、簾うちおろして居たれば、まことに目馴れたる御樣にはあらで、御直衣などの、いたう萎えたるしもぞをかしう見ゆ。物ものたまはで、たゞ御扇に文をさし入れさせ給ひて、「御使の疾くまかりにければ」とて、さし入れさせ給へり。物聞こえむに、程遠くて便なければ、女扇をさし出だして取りつ。宮ものぼりなむと思したり。前栽のをかしき中を歩かせ給ひて、「人は

女はまだ縁側に坐つて、ぼんやりと空を眺めてゐたが、ふと人の氣配がしたので、簾をおろして用心してゐると、それは宮樣で、しかも御樣子が、これまで御見うけしたとはすつかり違つて、御不斷着でもあらう、ひどくやつれたのを御召しになつたが、それがまた一味で大層お立派に見えた。

宮は何とも仰しやらず、唯だお持ちの扇にお文を載せて、簾の下からお入れになつて、

「すぐに返歌をと思つたがお使が疾ツくに歸つてしまつたのでね。」

と仰しやつた。物を申上げるにも、間が遠くて都合がわるいので、女は默つて、扇をさし出して御受けした。

宮は上らうと思召したが、前の植込の面白く茂つてゐる中を歩かせられつゝ、

「戀人は草葉の露か、思ひかけると、すぐに袖がぬれる。」

草葉の露なれや」などのたま
はす　いとなまめかし。近う
寄らせ給ひて、「今宵はまかり
出でなむとよ。誰れに忍びつ
るぞと見あらはしになむ。明
日は物忌といふなりつるに、な
くは怪しと思ひなむ」とて、歸
らせ給へば、

　こゝろみに雨も降らなむ
　宿すぎて
　　空ゆく月の影や
　　とまると

人のいふ程よりも子めきて、あ
はれに思さる「あが君や」と
て、暫しのぼらせ給ひて、出で給

なぞと口吟んで入らつしやる。實にしやれたお樣子である。

宮はやがて椽の前へ近くお寄りになつて、

「今夜はこれで歸りますよ。お前がこツそりと誰れに逢ふのか、見あらはさうと思つて來ただけなんだよ。それに、明日は謹愼日だのに、留守にしては、怪まれるからね。」

と云つて、歸らうとなさるので、女は詠んだ。

「ためしに雨も降つて見よ。折角來ながら、素通りする、月の宮樣、そのお姿の留まるように。」

宮は、女が世間で噂するとは違つて、いかにもうぶで子供子供してゐるので、ひどく可愛ゆいと思召した。それから

ふとて

あぢきなく雲井の月に
さそはれて
影こそ出づれ
心やは行く

とて、おはしましぬる後、簾をあげて、おりつる御文見れば

我れゆゑに月をながむと
告げたれば
まことかと見に
出でて來にけり

とぞある。うれしくおはしますかな　いかに怪しきものに聞召したるべかんめるに、聞召し直されにしがなと思ふ。宮

「いとしい我が君。」

と呼びつゝ、室に上つて、暫らくして、お出かけなさるとて

情ないが仕方がない。天上の月に誘はれて、私も
行くが、行くは影だけ、何、心までが行くものか。

と云つて、歸つておしまひなされた。その後女は簾をかゝげて、先刻いたゞいた御文を見ると、

わたしを思ひ〳〵月を眺めてゐると云つて來たので、嘘か誠か、たしかめようとして、飛び出して來たのだよ。

と書いてある。うれしくも來て下さつたことではある。世間の陰口を聞いて、どんなにか怪しからん女と思召したであらうに、難有い！　どうか、これで私を見直していたゞきたいものだと思ふ。宮もこれなら捨てたもので

もいふかひなからず、徒然の慰
みにはとおぼさる

はない。本妻といふではなし、淋しさ慰めの相手には、ま
づ結構と思召した。

要を摘めば、女が「君戀しさに、月を見て思ひに耽つてゐる」と言つてやつたので、物好きな宮が、女が果たして月を見てゐるかと、常着のまゝ、すぐに飛び出して、だしぬけに見に來られた。そして女が月に見入りつゝ悵然として遠人を憶つてゐる實際を見て滿足された、といふのである。そしてその前後に絡んである添景は、古人の歌では藤原高光が「かくばかり經がたく見ゆる世の中に、うらやましくもすめる月かな」と『拾遺』の「我が思ふ人は草葉の露なれやかくれば袖のまづそぼつらむ」との二首、それに宮と式部のと合はせて四首、自然の風物では始終に通じて用ゐられた明月に前栽の草その他、而して女は月により歌によつて切なる情を訴へ、男は牛車を驅つて返歌をもたらし美しき扇に授受して、西に行く月に伴はれつゝ、淸く美しく別かれて行く。これが遊戲玩弄の愛、平地波瀾の愛、風流典雅の愛、男女の相惹く力が藝術化されたる愛でなくて何であらう。和泉式部の愛は、一面傍若無人な度胸の愛ではあつたけれども、一面に於いては物質慾を超絕した優美な愛でもあつた。而して此の特色は少なくとも此の日記の過半を領し、この傾向は此の日記の全面に浸透してゐる。吾等が王朝男女が生命とした戀愛の美しき方面の代表として、此の日記を取る所

以の一つはこゝにある。

一五

『和泉式部日記』の中、文章として最も勝れたのは、九月の二十日過ぎの夜半に、宮が女の門を叩きあぐんで歸られた後、女が起きて、燈火をかゝげ盡くして曉まで書きつゞけた感想文を、一綴りにして、手紙にかへて宮に奉つたといふ一章と、その次ぎなる、宮の御依賴によつて和歌の御代作をした件りの一章とであらう。この第二は、九月の末に宮から御手紙があつて懇ろにしてゐた女が今度遠方

應永寫本　和泉式部日記
（京都帝國大學所藏）

へ行くことになつた。その女に名殘の歌を送りたいと思ふのだが代作を賴む、と云つてお遣はしになつた。折角の仰せをお斷りもしかねて、御目に懸けた、といふので、それについてしやれた歌の贈答のあつた交渉を書いたものであるが、趣意はもとより文章としても非常に優れたものであり、殊に他の部分が概ね傳寫の誤謬に滿ちてあるのに、此處の系は不思議に美しい完璧の面影を見せてゐるので、左にその全文を揭げて見る

かくて晦日がたにぞ御文ある。日頃の覺束なさなどいひて、「怪しきことなれど、忍びて物いひつる人なむ、遠く行くなるを、哀れといひつべからむことを一つ、いはむとなむ思ふ。それよりのたまふ事のみなむ、さは覺ゆるを、一つ。」とのたまへり。あなしたり顏と思へど、さはえ聞こえじと申さむも、いとさか

譯

その中、晦日ごろになつて御文があつた。暫らく逢はないので案じられるなどいふ文句があつて、「變な事で、いひ惡いが、忍び〳〵に親しい關係になつてゐた女が、今度遠國へ行くことになつたのでね。それについて、先方が見て、「あゝほんとにしんみりする！」といひさうな事を、一言云つてやりたいと思ふのだ。今までのところでは、お前から貰ふ歌だけが、さういふ味があるやうに思ふのだが、一首、代はつて詠んでは下さるまいか。」

しければ、「宣はせむ事は、いか
でか」とばかりにて
　をしまるゝ涙に影は
　とまらなむ
　　心も知らず秋は
　　行くとも
まめやかには、かたはら痛き
ことになむ侍る」とて、はしに、
「さても、
　君をおきていづち行く
　らむ我れだにも
　　うき世のなかに
　しひてこそ經れ
とあれば、「いと思ふやうなり、
と聞こえさせむも、見知り顔な

と、かうある。まあ、飛んでもない、出來し顔に御代作など
が、と思つたけれども、しかし「それは迚も致しかねます
と申すのも、いかにも勿體ぶるやうなので、
「仰しやることを、どうして否と申されませう。」
とだけ、前書きをして、
「惜しむ者の心も知らず秋は逝く。たとひ逝くと
も惜しまるゝ涙に影よ留まれかし。惜しむ者の心
も知らず人は行く、たとひ行くとも我が惜しむ涙の
おもに、せめて名殘をとめよかし。」
と書いて、そのあとに、
「それにしても、
「その人が、宮様をおいて何處へ行くのか、氣が知
れませぬ、疎まれつゞけの私でさへ、宮戀しさに、
つらい世の中を我慢して、生きて居るではありま
せんか。」
と書いて、さし上げると、

り。あまりぞ、推しはかり給へる、世の中と侍るめるは、

うち捨てゝ旅ゆく人は
さもあらばあれ
またなきものに
君しおもはゞ

ありぬべくなむ」と宣はせたり。

「かういふと、他人行儀らしいが、いやもう此上なし私の意中をそのまゝだよ。しかしあて推量の「つらい世の中」は、あんまりだらうぜ。

「自分を見捨てゝ旅立つ人などは、どうでもよいその自分を上なき者と、お前さへ思つてくれゝばね、‥‥くれゝばだ‥‥滿足して居られますよ。

と、かういふ御返事を下さつた。

この、どん底から相愛して居りながら、しかもそれに執着せず、悠揚と戀愛の大海に棹して平地波瀾の藝術把握に餘裕を樂しんで居る樣子を御覽なさい。前にも云つた通り、吾等は此の日記に現はれた和泉式部の愛をば、盲目の愛、玩弄の愛、平地波瀾の愛、忘一切他の愛、男女の相惹く性質動作を藝術的にあやなした珍らしき愛であると思ひ、而して此の點に於いて此の作をば、此の時代に現はれた他のいづれの作よりも立派に、時代思潮の最高潮を寫し出だして居ると思ふ者であるが、此の一章の如きも、はかなきすさびの一節ながら、これらの意義を豐かに含蓄し美しく説明して居るやうに思はれる。戀に生き、戀に遊び、藝術に活き藝

術に遊んで、そこに悠揚典雅の夢幻世界を創造する。　これが善い方面から見た平安王朝の理想の一面であるが、この一章の如きは、まさしく此の時代の此の姿を、小規模に見せたもので、同時に時代思想の權化たる彼女の生活の代表部分を最も美しく見せたものである。　同時にまた、この文字少なくして餘意に豐かな、枯れた文致、裏に婀娜濃艶の限りを覗かせて、表に少線白描の簡素味を見せた趣、省略に無理がなくして、要點を力強く引き立たせ、散文と歌との掛合に不即不離なる巧緻の限りを見せた手腕等に於いても、もし此の種の斷章を集めて、相應の數に纏めることが出來たならば、堂々と『枕の草子』の向うを張ることが出來たであらうにと、惜ましめるものである。

平安朝は自由戀愛の時代であつた。　自由戀愛が自由に行はれるには、我が行ふところを他に許す寛裕な心持がなければならぬ。　此の一章の如きは、此の時代の貴族男女に於ける此の心持の存在を說明するものであらう『源氏物語』が空想的に描いた朱雀院對源氏、源氏對栢木等の關係を、現實的に、而して更に簡潔に描いたものであらう。

一六

讐顧い扉なたゝく和泉式部

和泉式部は自然の風物に特別の親しみを感じたやうに見える。彼女は自然を愛して、風物それ〴〵の趣致を獨得の和歌に詠じ出でたばかりでなく、物我同體を感じて、しばしば自然に我れを見出だし我れを自然に沒入した。而してその感じを詠み出でて宮にさゝげては、捨てがたい女だとめでられ、その感じをあらはした宮の歌をいたゞいては、折過ぐし給はぬを哀れと見奉つた。例へば

雨うち降りて、いとつれ〴〵なる頃、女はいとゞ雲間なきながめに、世の中はいかになりぬるならむと、盡きせずのみながめて……

の一筆双叙は、「常にも降る五月雨が、更に更に雲切れも見せぬ程に降りつゞくので、これ

誓願寺緣起　（京都誠心院藏）

では天地がどうなることかと、限りなき思ひに耽つた」といふ意（こゝろ）と、「常にも思ひ悩んで居るのが更に絶間なき思ひに耽りつゝ、此の戀の行方がどうなることかと、限りなく心のめいるのを感じた」といふ意とを兼ねさせて、天地人間一如の心持を寫したのであらう。

端近うふさせ給ひて、哀れなる事の限りを宣はするに、かひなくはあらず。見ればは月の曇りてしぐるゝ程なり　わざと哀れなる樣をつくり出でたるやうなり。

は、月の曇つてしぐれてゐるのは、自然が我が爲めに此の哀れな現象を現はしてくれたかのやう、我が感傷の心持を代はつて泣いてくれるかのやうに思はれたといふ意味であらう。かういふ筆致の數々を綜合して、吾等は

彼女が對自然の態度をば、清少納言、紫式部等と相並べて考へるに値したものであると考へる。

和泉式部はまた戀にあこがれ、歌に耽る間々に於いて、魂の救を求める心の消息を覗かせた。帥宮が始めて宮の御殿への參入を式部に勸められたところに、

げに今更に、さやうに便なき有様はいかゞはせむと思ひて、一の宮の御事も聞こえ聞かであるを、さりとて山のあなたにしるべする人もなき程に、かくて過ぐすは明けぬ夜の心地のみすれば……

とあるのは、「この年齡、此の境遇になつて、故愛人の弟の宮の、しかも鬪ひ者などになるといふ事は、どうしたものであらうと考へて、故兄宮の事はわざと申上げぬやうに、承はらぬやうにしてゐるのであるが、さればとて、山奥へ伴つて、靈界修行の手引をしてくれる人もないのに、このまゝ日を送るのは闇の夜に迷ふ心持がする」といふ心持を見せたのであらう。おもふに、彼女には戀愛に突進する間にも、和歌愛、自然愛の意識と共に、宗教愛の意識も微かながら、活動してゐたので、それが年と共に發達して性空上人への歸依ともなつたのであらう。而してさういふいろ／＼な意識の混淆潛在が、此の一見病的とも、非人情的とも見える戀愛記に、淺からざる床しさと美しさとを與へることになつたのであらう。

要するに、和泉式部は平安朝に於ける時代好尚の最も主要なる一面を人化して、極端に偏倚的に發達せしめたやうな女性であつた。而して『和泉式部日記』は彼女のさういふ性格の中の最も特異なる代表部分を、十二分に働かしめた行動の記錄であつた。此の日記が善惡の兩面から見て平安朝思想の縮圖と見られる理由はこゝに在る。當代の女流日記の代表とも、中心とも見られる理由も亦こゝにある。

第十四　大空に孤高を持したる『枕の草子』

一

平安朝は清少納言が『枕の草子』に於いて、詞藝史上の一大驚異を見出だした。『枕の草子』は日記ではない、物語ではない。勿論歴史でも、歌の集でもない。彼女は片言隻句を唐突に書き出しては、そのころ〳〵並びの斷片語句を一種の文學たらしめた。相次ぐ前段後段に何等の連絡なき記述を連ねては、連絡したる日記、物語よりも更に興味あるものたらしめた。當時の貴族男女が戀愛に囚はれたる間に於いて、殊に女人等が男性の玩弄に甘んじて、悲み、喜び、浮かれ狂ふ間に於いて、戀愛を笑殺し、男子を睥睨しつゝ、女王の如く振舞つた、自然に對し、人間に對し、事毎に獨自の見識を發揮して、それをば優婉柔弱なる當時の流行とはすつかり異つた簡淨勁健なる文章に現はした。かくして彼女が異彩ある觀察と見識とを新風に表現した未曾有の文學は、曾有の文學のいづれよりも偉いものであつた。それは此の種の文學の最初にして同時に最大なるものであつた。而してそれは日本アルプスに

於ける大槍ヶ嶽の如く孤高の誇りを持して我が詞藝界の天空に聳え立つた。

『枕の草子』は一條天皇の正暦三年(一六五二)頃から長保四年(一六六二)頃までの間に書かれたものと云はれる。それは大體清少納言が宮仕の繼續した期間で、彼女はその間に於ける里居の暇々に書き集めたのであらう。段別の順序は必ずしも年月や起稿の順序によつたのではないらしく、恐らく彼女自身も興味本位に次第し、後人も亦多少づつ順序の轉換を試みたものであらうが、とにかく可なりの分量が纏まつた時に、一旦世間に歩き出したものらしい。源經房が伊勢守であつた時(長徳元年正月より同四年十月までに)に、彼女を訪ねて莚蓙の上に乘つてゐた此の草子の自筆本を强ひて借り出したといふ事は、彼女が自ら此の草子の中に云つてゐる所である。彼女が始めて宮仕したのは三十歳頃であつたと想像される

『枕の草子』は恐らく清少納言自身の命名であらう。彼女自身此の草子の最後の段で、「このさうしは」と云つて居り、中宮に對して「枕にこそはし侍らめ」と云つて居るところを見ると、此の二語の結合は、彼女自身の命名として最も自然に近きものである。古書に『清少納言が記』『清少納言』或は『清少納言枕草子』とも書いて居るが、彼女自身かやうな命名を敢てする筈がなく、これは恐らく後人が古名家を尊んで、私かにその名を冠らした異名であらう。「枕」の謂はれの根本は、此の草子の最後の段に、左の如くあるのによつたと

云はれる

物ぐろうなりて文字も書かれずなりにたり。筆も使ひ果てて、これを書きはてばや。この草子は目に見え心に思ふ事を、人やは見むずると思ひて、つれづれなる里居のほどに書きあつめたるを、あいなく人のため便なき言ひ過ぐしなどしつべき所々もあれば、よう隱したりと思ひしを、涙せきあへずこそなりにけれ。

宮の御前に内の大臣の奉りたまへりし御冊子を、「これに何を書かまし、上の御前には、史記

譯

物くさくなつて、もう文字も書けなくなつた。筆も使ひつくしたから、書きをさめに、大團圓をつけることにしよう。もと此の草子は、見たり、思つたりした事をば、どうせ誰れが見るものかと高を括つて、里住の退屈まぎれに書き集めたのであつたが、その中には、人の爲めに氣の毒な過言などをも記してあるので、人に見せようと思ふ心の、時折起こるのを、じッと我慢して、ようこそ隱して來たと思つてゐたのを、意外に世に知られるやうになつたのは、泣いても足らぬ悔しさである。

この冊子を書いた抑もの起りは、いつぞや内大臣の伊周公から美しい紙の綴本を、中宮に獻上されたことがある。それを中宮が私に御見せになつて、

「これに何を書いたものであらう。皇上は史記と

といふ書をなむ書かせたまへる」と宣はせしを、「枕にこそはし侍らめ」と申しゝかば、「さば得よ」とて賜はせたりしを、怪しきを、こよや何やと、盡きせず多かる紙の數を書きつくさむとせしに、いと物おぼえぬことぞ多かるや。　おほかた是れは、世の中にをかしき事、人のめでたしなど思ふべき事など、なほえり出でて、歌などをも、木草鳥蟲をも、いひ出だしたらばこそ、思ふ程よりはわろし、心見つなりとも知られめ、たゞ心一つにおのづから思ふ事を、戯れに

いふ書物を御書きになつたがな。」

と仰せられた。わたしは

「身を離さずに持つてゐて、思ふ事を片端から書きますわ。」

と申上げると、

「面白い。では持つて行け。」

と云つて、下さつたのであつた。

それから浮かぶまゝに、怪しい事を、何か彼やと書き集めてゐる中に、澤山綴ぢ込んだ冊子の紙を書き盡くさうとしてゐるのであるが、我れながら胡亂な事だらけである。大體この草子は、世の中の面白い事や、人が結構と持囃しさうな事を、此の上にも澤山擇り出だし、それに歌や木草鳥蟲の事などをも加へたならば、讀む人も、思つたほどではないが、さすが作者の心意氣は見えてゐるなぞと云つてくれるであらうが、唯だ自分の心一つに思ひ出すまゝ

書きつけたれば、物に立ちまじり、人並々なる耳をも聞くべきものかはと思ひしに、はづかしなども、見る人はのたまふなれば、いとあやしくぞあるや。げにそれもことわり、人の憎むをもよしといひ、譽むるをも惡しといふは、心の程こそ推しはかるれ。たゞ人に見えけむぞ妬きや。

を、慰み半分に書きつけたので、とても古來の書物の仲間入りをして、世間並の批評などの聞けるものではないと、覺悟して居ると、「いや、恐れ入つた御文章で！」などと云つて、褒めて見てくれる人もあるといふのは、さて／＼不思議な世の中ではないか。しかし思へばそれも道理、人の憎むものを善いといひ、褒めるものを惡いといふあまんじやくの多い世の中だもの、賞める人の本心もまづ推量されるといふものだ。とにかく此の恥かしい筆ずさみを人に見られたのは悔しいことである。

「枕」は當時慣用された言葉の「枕冊子」を略したので、座右を離さぬ綴本の意であらう。而して「枕にこそはし侍らめ」は、その前後に「これに何を書かまし」「…多かる紙の數を書きつくさむ」などあるのを見ると、隨感隨錄の用に供したいといふ意味であらう。本來此の問答は文脈のつゞかぬ飛躍式で、破格の名文とも稱すべきものである。中宮の「これに何を書かまし」と言はれたのは、『抄』に云へるが如く、「汝に與ふべきが、何事を書かうと

は思ふぞ」といふ義ではなくして中宮御自ら「何を書いたものであらうか」といふ御下問があつたのであらう。委しくいふと、内大臣は同種同質の優良紙を綴ぢた二冊の冊子の一冊を皇上に、一冊を中宮に獻上したので、そこで中宮は「皇上は史記を寫させられたが、その姉妹巻たる此の冊子に、わたしは何を寫したらよからうか」と尋ねられたのである。で、尋常ならば「伊勢物語をお寫しなさい」「古今倭歌集を遊ばしては」など答ふべきところであるが、紙狂ともいふべき程に良き紙を好み、筆執ることを好んだ清少納言が、皇上の御手馴らしと姉妹冊子を成す稀有の紙本に顫ひつく思ひがして、我れ知らず、

「私ならば、枕冊子にして、座右を離しませんわ。」

と云つた。中宮はその飛躍的な妙返答に莞爾なすつて、

—さば得よ。—

—では、やらうぞ—と云はれたのであらう　清少納言は趣味家の凝屋で、病的ともいふべき紙好きであつた。百三十三段(春曙抄)「うれしきもの」の續きにある左の一節は、彼女が性格のこの特色を示す最もよき一例であらう

御前に人々あまた、物仰せらるゝ序——
などにも、—世の中の腹立たしう、む——

譯

中宮の御前に人々が數多伺候して、御物語などのあ

つかしう、片時あるべき心地もせで、いづちも／＼往きも失せばやと思ふに、たゞの紙のいと白う清らなる、良き筆、白き色紙、陸奥紙など得つれば、かくても暫しありぬべかりけりとなむ覺え侍る　また高麗縁の疊の筵の青う細やかに、縁の紋のあざやかに黒う白う見えたる、引きひろげて見れば、何か、なほ更に、この世はえ思ひはなつまじと、命さへ惜しくなむなる」と申せば、「いみじくはかなき事にも慰むなるかな　姨捨山の月はいかなる人の見るにか」と笑はせ給ふ。侍ふ人も「いみじくやすき息災の祈りかな」といふ。

る序に、私が「世の中が腹立たしく、小五月蠅く、一時も立ち交つて居る氣がせぬので、何處へでも行つて、死んで了へと思ふやうな折にも、眞白なきれいな紙や、良い筆、紙は白くてきれいなれば、只だのでもよいが、殊に白い色紙や檀紙などを手に入れると、つい取紛れて、このまゝのうるさい世でも、一寸位は生きてゐた方がよかつたと覺えまする。また高麗縁の疊表の色が青く目が細かで、縁の模様の黒い白いが、くつきりと浮き立つたのを引き廣げて見ますと、どうして／＼何の事、此の世の中が思ひ切られず、命までが惜しくなるので御座りまする」と申上げると、「ほんの一寸した事にも心が慰むと見える　紙や疊表位で紛れる人もあるのに、姨捨山の月をば、どんな人が見て、慰めかねつとは云つたのであらう」と云つて笑はせられた。一座した人々も、「まあ、おやすい災難除けのお祈りですこと！」なぞと興じて

さて後に程へて、すゞろなる事を思ひて、里にある頃、めでたき紙を二十、包みに包みて賜はせたり。仰事には、「とくまゐれ」など宣はせて、「これは聞召しおきたる事ありしかばなむ。惡かんめれば、壽命經もえ書くまじげにこそ」と仰せられたる、いとをかし。むげに思ひ忘れたりつる事を、思しおかせ給へりけるは、猶ほ只人にてだにをかし。ましておろかならぬ事にぞあるや。心も亂れて、啓すべき方もなければ、たゞ

　かけまくもかしこき紙の
しるしには

笑ひ合つた。

それから程へて後のことである。一寸氣にかゝる事があつて、里に下つてゐた時であつたが、ある日きれいな紙を二十帖、鄭重に包んだのを下さつた。仰言には「早く來るやうに」とあつて、何ほうち添へて、「これは聞き覺えてゐる事があるので、遣はすのだ。これで機嫌を直して、世を捨てる心を飜して、長生して貰ひたいのだが、この惡い紙では、壽命經を書く料にはなるまいな」と仰せ下された。何といふ面白い事であらう。言つた當人がすつかり胴忘れしてゐた事を、始終御心に留めておいて下さるとは。それは只人同輩の間でもうれしいことだのに、まして是れが疎略にならうかと、氣も顚倒して、別に申上ぐべき事も思ひつかぬまゝ、唯だ、

　「畏れ多い思召の立派な紙をいたゞいて、難有う御座ります。此の紙を戴いた靈驗には、ゆ

鶴のよはひに
なりぬべきかな
餘りにやと啓せさせ給へ」とて、ま
ゐらせつ。

つくりと鶴の千歳を重ねることで御座りませ
う。
それでは、ちと長過ぎませうか」と、かう申上げて下
さいと云つて、此の歌を奉つた。

この一節は、趣味狂ともいふべきこの天才の特異性の現はれであり、同時にその特異性と中宮の性格との間に於ける美しき一致の現はれであるが、前に擧げた草子の最後の章は此の肝膽相照らした二人の趣味家が美しき由緒の冊子を挾んでの應對である。一人は好むがまゝに我物顏の無遠慮な奉答をする。一人は刹那に會得して惜げもなく之れを與へるこれは極めて自然な經過で、こゝに機緣相熟して畏き御手澤と姉妹卷を成す冊子の純白なる紙面が、この天才女が千古の名著隨筆に輝くこととはなつたのであらう。

とにかく吾等は此の最後の一段に於いて、『枕の草子』の二つの特色が現はれてゐるのを見出だすことが出來る。一つは他見を度外視した、無遠慮なる隨見隨想の記錄といふことである。「目に見え、心に思ふ事を、人やは見むずると思ひて、書きあつめた」といふのが、之れを證據立てる。彼女は之れを書くに當たつて、初めから人前をかねなかつた。初めから秩序、聯絡、統一などいふ事を眼中におかなかつた。無論、秩序、聯絡、統一を重んじないわけで

はないが、それは世の文章家の謂はゆる秩序、聯絡、統一ではなかつた。それは限られたる一句、一節乃至一章の間に存するのみで、隣接した他の句、他の節、他の章との間には、寧ろ孤立、隔離、不相關焉の姿のあるのを本領とした。草子全體としての秩序、聯絡、統一の如きはもし有りとすれば、彼女の極めて風變はりな、稀有の性格や手振が、隱約の間に文字の底を貫流して紛るべからざる特色を賦與してゐる處にあるであらう。吾等はこゝに、彼女が隨筆文學の第一義を捉へ得たことを珍とし、奇とし、また偉大とする。

第二は人眞似をせずして獨自の世界を創造しようとしたことである。

おほかた是れは、世の中にをかしき事、人のめでたしなど思ふべき事など、なほ擇り出でて、歌などをも、木草、鳥蟲をも言ひ出だしたらばこそ、思ふ程よりはわろし、心見つなりとも知られめ、たゞ心一つに、おのづから思ふ事を戲れに書きつけたれば、……

の本文が、之れを證據立てる。此の一段には、彼女の柄になき謙遜振が見え、殊に內容が彼女には不得意な論文がかつてゐる爲めか、ごた／＼して明快を缺く憾みはあるが、彼女の本意は、必ず、世間の常識で面白いと極めてゐる事、人々が結構だと思ふに相違なささうな事例へ歌の事、木草鳥蟲の事などを書けば、好い評判も聞けるであらうが、それは自分の屑しとするところでない。自分はあくまで我が道を立てゝ、自ら古を作すであらう、自分に卽した合理

的なる異を樹てるであらう、といふにあつたであらう。かくして彼女は、當時の文人の殆んど悉くが囚はれてゐた歌物語の形式を振り捨てた。もし歌の事に言ひ及べば、之れをばすつかり散文に隷屬せしめた。彼女は無論花鳥風月を寫さなかつたのではないが、しかしながらその見方、寫しかたは、從來文人のそれらとはすつかり調子を異にした。この舊套を奪て去り、新しき目ざましき異を立てゝ見せるといふことゝ、これが彼女が此の草子に於いて自主的の誇りを感じた第二であらう。

見るまゝ思ふまゝを、見次第、思ひ次第に、書き散らしては集めること、世間と合流せずして自己の新異を立てること、この二つは、此の草子の最後の章に於いて、作者自ら揚言して居るところで、同時に此の草子の根本義を成してゐるものであるが、こゝにもう一つ此の草子の根本義を成してゐるのは、表現上の誇りである。清女は、他の段で、文字一つの使ひ方次第で同じ事が怪しくも、立派にも、美しくもなるものだといひ、また文學的の文章を描く書いたのを見ると、作者までが氣の毒になると云つて居るところを見ると、彼女は文章に於いて必ず特殊一流の誇りを持つてゐたのであらう。この一事は後段の説明に讓ることにするが、とにかく、「圖拔けて新らしい觀察を、目の醒めるやうな異彩のある文章で、離れ〴〵に書いて見せること」——これが『枕の草子』を書きつゞけた十年間明けても暮れても清少納言

の頭を離れなかつた詩の建前であつたであらうと思はれる。

二

『枕の草子』の中で、最も多く、最も氣が利いて、人をあッと云はせるもの、前置の準備もなく說明も議論もなく、普通人の常識常感に訴へて、一語を發し、一字を並べる、やがて讀者の心に旺盛なる感興を惹き起こすものは、一何は二何々なるもの二何々しきもの一といふ、ころころ並べ、ぽつ〱書きの段々である。此の種の段々は、作者が簡單奇警を愛する性格の最もよく現はれたるもの、雋鋭なる機鋒の最もよく閃發したものであるが、歌より短き散文文學の存在し得べき事、單語單句を列べて立派な文學を成し得べき事を教へた點に於いて、彼女は實に國文學史上の第一人者であり、同時に最優者、最大者である

むつかしげなるもの 刺繡の裏。猫の耳のうち。鼠の子のいまだ毛も生ひぬを、巢のうちより數多まろばし出でたる。裏まだ附かぬ皮衣の縫目。ことに淸げならぬところの暗き。異なることなき人の、ちひさき子供などあまた待ちて、扱ひたる。いと深うしも志なき女の、心地あしうして、久しく惱みたるも、男の心の中には、むつかしげなるべ

し。（春曙抄、七十八段）

單語の意味が解れば、もう解釋の必要がない。經驗のある人は、一讀直ちに破顔して頷くべきものである。殊に並べて行く段取が、外界有形の手近な物から始まつて、貧乏人手澤山の人生觀物に進み、最後に、さまで打込んでもゐない、厭きの來た女の長煩ひにうんざりするといふ男のきはどい心理の一抉りで、ウンと利かせたところなど、譬へやうもない面白さである。

ありがたきもの　舅にほめらるゝ聟。また姑にほめらるゝ嫁の君。物よく拔くる銀の毛拔。主そしらぬ從者。つゆの癖かたはなくて、容貌心樣もすぐれて、世にあるほど、いさゝかの疵なき人。同じところに住む人の、かたみに恥ぢかはし、いさゝかの隙なく用意したりと思ふが、つひに見えぬこそ難けれ。物語、集など書き寫すに、本に墨つけぬ事。よき草紙ならば、いみじく心して書けども、必ずこそ穢げになるめれ。男も女も法師も、契り深くて語らふ人の、末まで仲よきこと難し。使ひよき從者。搔練うたせたるに、あなめでたと見えておこす。（三十九段）

例の、誰れも知つてゐて氣がつかぬ事を見出だし、氣がついても言ひ表はし得ぬ事を巧みに言ひ表はして、讀者を惹きつけて耽味させるところが實に面白い。此の草子のきまりで、

理由は少しも添へてゐないが、趣味の精髓を捉へてゐるので、讀む者各々がそれ〳〵の經驗液に浸して、とツくりと噛みしめられるのが面白いのである。十個條の有りがたきもの、いづれもそれ〳〵の風味で、一つとして屑がない。舅、姑に褒められる聟、嫁の有りがたいことこれは人情千古の皮肉である。銀の毛拔は事實でもあり、虚業、見掛だふしに對する諷刺でもあらう。完全なる人の有り難いこと、最後まで無事に愼みおほせ得る人の有りがたいこと、これも千古の恨事である。好い紙、好い草紙、好い人にやる手紙、さすがの清少納言も、これには堅くなつたものと見える。印刷の行はれぬ世とて、彼女ほどの天才も、前代、同時代の貴くもない物語や歌集文集を、墨つけて汚すのを苦にやみつゝ、丹念に寫したのかと思ふと、をかしい。親交は長くつゞかぬもの、可なりに親しい人の名ばかり記した交遊名簿が、十年も經つと、半ば其の人を想ひ出せぬやうになるものである。使ひよき從者、男でも女でも、とても有る筈がない。使はれよき主人も恐らく同樣であらう。搔練の事はよく知らぬが美しく、むらなく光澤を出すのは、むつかしいことであらうそしてそれが神經質な我儘者の清少納言に特に強く感ぜられたのであらう。

樣式については、單語、短句をころ〳〵と並べた後へセンテンスを成した長文句をつゞけ長い文句から、また單語、短句のころ並べに移る鹽梅、その奇趣妙味は、巧みなモサイクでも見

るやうで、これが此の天才女の頭から出た創試の工夫かと思ふと驚く。總じて清少納言は趣味の眼の冴え、筆の冴えは開闢以來の獨壇場でたとへば雙眸の明が千里透照の眼鏡を借り、同類の全部を一瞥してその尤を探るかの趣があつた。而してそれが簡潔な文字となつて、讀者の心の網膜に現はれると、直ちに蕾の開くが如く一種の美しき幻影を生ずるのであつた。「人にあなづらるゝもの」と云つては、

家の北おもて。築地のくづれ。

を擧げる。「似げなきもの」と題しては、

髪あしき人の白き綾のきぬ着たる。あしき手を赤き紙に書きたる。げすの家に雪の降りたる

と云ふ。「すさまじきもの」と題しては

晝ほゆる犬。乳子の亡くなりたる産屋。火おこさぬ火桶炭櫃。

を擧げる。「にくきもの」と題しては

いそぐ事ある折に長言する客人。硯に髪の入りてすられたる。墨のなかに石こもりてきしきしと軋みたる。

と云ふ。何といふ奇警で、妥當で、同時に簡潔無類の表現であらう。彼女は萬人共知共讃の

物像を指頭にかざして萬人の曾て知らなかつた奇怪の如く思はせる奇術師であつた。

里は 逢坂の里。ながめの里。いさめの里。人づまの里。たのめの里。あさ風の里。夕日の里。とほちの里。ながゐの里。妻とりの里。人に取られたるにやあらむ、わが取りたるにやあらむ、いづれもをかし。

の如きは、殆んど地名の唯だの羅列でありながら、驚くべき選擇の巧みさは、その一つ一つをして、一種の風情ある幻影を吾等の心に生み出さしめる。而して十一顆の固有名詞を、ころころと列べた後、最後の一つに、文章に成つた三折返しの尾鰭をつけて、人情葛藤の一面を覗かせた、とぼけ振の面白さは言語道斷である。

枕草子（前田侯爵家藏）

彼女はまた「說教師は」と題して、

說敎師は顏よき　つと凝視らへたるこそその說く事のたふとさも覺ゆれなぞと手放しに興じてゐる。似而非信心家ぶらない傍若無人さが、たまらなく面白い　謂はゆる佛に逢へば佛を殺す、活きた筆の冴えであらう。

三

『枕の草子』が「花は」「鳥は」「風は」「蟲は」「山は」「原は」「寺は」「經は」「文は」「佛は」「哀れなるもの」「つれ〴〵なるもの」「覺束なきもの」「あぢきなきもの」「あさましきもの」「胸つぶるゝもの」「なまめかしきもの」「ねたきもの」「かたはらいたきもの」「恥かしきもの」「はしたなきもの」「なほ世にめでたきもの」といふ調子に、枕の題を置いては、その見出のもとに、面白く自然人事を分類して居るところから、加藤善喜氏は、之れをスヱーデンのリンネが始めて植物の分類を試みたのに比べて、淸少納言は、自然人事に對して、趣味の上から、一種の科學的分類を試みた第一人者であると云つた　多少好事の氣味はあるが、道理の無いことではない。若し『萬葉集』『古今集』の和歌六種別を以て、初歩ながら、國歌の科學的分類の魁をなしたものとするならば、『枕の草子』の同類列擧も亦、自然人事に對する一種の

趣味的分類と見ることが出來るであらう。

それにしても、此の分類的な物の見方、委しくいへば一類の名に括つて、その中に含まるゝ尤者を拾ひつゝ、その特殊の趣味を巧妙に發揮するといふ開闢以來の新式藝術を、淸少納言は如何にして試み始めたのであらう。これは彼女が全くの獨創であらうか。或は內國、外國の先代もしくは同時代の文學に負ふところがあつたのであらうか。吾等は之れに對して何等の確答をも與へることは出來ぬが、若しいさゝかばかりの類緣を辿るならば、外來の機緣は、或は唐の李義山の小品『雜纂』にあつたでもあらう。國內の機緣は、或は『古今和歌六帖』にあつたでもあらう。但しこれは二つながら吾等の創見ではない。

『雜纂』は「必不來」「不相稱」「怕人知」「不如不解」「殺風景」「無見識」等、四十條の見出の下に、二字乃至十六字から成る思附の句を、四五句、乃至十四五句並べたものである。例へば「必不來」の見出の下に「把棒呼狗」「窮措大喚妓女」等の數句を連ね、「殺風景」の見出の下に「花の下に褌を曬す」「月の下に火を把る」「妓宴に俗事を說く」等の數句を並べる類で、この題を提げて類事を擧げる點は、いかにも『枕の草子』に酷似してゐるが、但し『雜纂』には唯だぽつ切れの短い句を並べた一種があるだけで、此の點に於ける類似は『枕の草子』のほんの小部分に止まるのみならず、此の點だけの比較から見ても、『枕の草子』は

量に於いて遙かに多く質に於いて遙かに高く、加之長短錯綜し、趣致豐富にして、とても『雜纂』の敵し得るところではないのである。

『雜纂』に類似した粒々列擧の部分の比較が、此の通りである上に、『枕の草子』には、此の形式には似ても似つかぬ、而して價値に於いても遙かに高い無數の小品、短篇がある。さすれば、『枕の草子』が類擧の思附に於いて『雜纂』から暗示を受けたとしても、それは全體としての『枕の草子』の價値にも、獨創の資格にも累ひを及ぼすべきものでないであらう。また『雜纂』の舶載したのが室町時代で、平安朝にはまだ傳はつて來た形跡がないらしいのを見、更に是等二作の類擧の調子が著しく異つてゐるところを見ると、此の二作は恐らく作者各々が別々に試みたので、その試みが偶然に暗合したのであらう。

『古今和歌六帖』の形式的特色はその風變はりな分類振にある。それは大分け小分けの二重式で、大別は歳時、天、山、田、野、都、田舍、家、人、佛事、水、戀、祝、別、雜思、服飾、色、錦綾、草、蟲、木、鳥の二十二種になつて居り、更に之れを細別して、例へば、「戀」には片戀、夢、おもかげ、うたゝね、涙河、うらみ、うらます、ないがしろ、雜の思、等を擧げ、「色」には紅、紫、くちなし、綠、等を擧げてゐるが、その分類振は「別」の中に別離には何の關係もない長歌、旋頭歌の全部を取り入れるといふが如き、極めて雜然たるものであるけれども、當時の詞人として讀んでゐたに相違ない『枕の

草子の作者が、之れを見て、何等かの暗示を受けなかつた筈がないやうに思はれる。無論稚拙な『六帖』の分類に、學ぶべき資格があつたのではないが、清女が天才の鋭い感じと、優れた表現の技巧とが、『六帖』に於けるほんの思附を堂々たる存在となし、皮相を實質として襤褸を錦と化し、砂礫を黄金と變じたのであらう。

四

無聯絡のぼつ〳〵書きと時流を離れた新異の試みと、この二つが『枕の草子』の作者が持つてゐた創作意識の最も主なるものであることは、作者自身の言葉に據つて、吾等の已に述べたところであるが、吾等は更に題材接離の形式に關して、作者の持つてゐた、もう一つの創作意識を想像し得るやうに思ふ。それは作者が筆を運ぶに當たつて、題材を如何に思ひ浮かべ、如何に前後し、如何に結びつけ、如何に引離したかの心理、即ち材料の獻立、或は取纏めの意識もいふべきものである。随筆が如何に無聯絡を原則とすればとて、絶對の無聯絡で藝術的の文章が書けるものではない。思ふに清少納言も必ず或る事物を束ね合はせ、或る事物を引き離すことについて、若干の工夫を凝らしたであらう。時としては、先づ抽象的に

「おぼつかなきもの」「憎きもの」などいふ事を心に浮かべて、後に具體的なるそれ〳〵の事物や場合を考へたであらう　時としては覺束なき、憎き多くの事實や逸話を考へ集めて後に之れを抽象的の見出に締め括つたでもあらう。　かやうに、或は演繹的に、或は歸納的に思ひ浮かべては、之れを隨筆形態に表現する工夫を凝らすに當たつて、先づ彼女の心に起こつた考は、第一に或る類似した事物をば面白く連絡させて一團をなさしめ、やがて聯想の脈路を斷ち截つて、他の一團に飛び移るといふことであつたであらう。　言ひ換へれば、内容の連鎖、結束、斷絶、飛移、これが此の草子を書くに當たつて清少納言の可なりに心を痛めたものであつたので、或は天稟によつて此の呼吸を手に入れてゐたのであるかも知れぬがとにかく彼女が此の方式によつて實際に處理して行つた痕跡を想像すると、彼女は常に、第一に「何は」「何々なるもの」といふ枕を掲げて、之れに屬する名詞様の單語、單句を連ね、次ぎに多少の長さを持つたセンテンスを並べて、最後にその標準に適應した自他の逸話乃至故事などを書き連ね、而して今度は一切の連絡を截斷して、全く無關係なる他の問題に飛び移つたやうに見える、　此の點から見ると、作者が意識したると否とに拘はらず、「枕の草子」の題名の本質的意義は、「先づ掲げたる枕言によつて單複いくつかの話群を括りつゝ叙述を進めた草子」といふことになるであらう。

例へば先づ「こと〳〵なるもの」といふ枕を置き、異風な事物の代表として、一法師の詞一男女の詞」と、二つの名詞句を連ね、次ぎにはセンテンス式に變化をつけて、

下司の詞には必ず文字あまりしたり。

と書き、今度は長い說話をつゞけて、第一に、普通人と違つた法師の生活、第二には、大進生昌の家へ中宮行啓の折に門が小さくして車を入れ得なかつたこと、及び深夜女房の室に音づれて來たことにつき、生昌を揶揄したこと、而して最後には、禁裡に養はれて五位を賜はり、「命婦の御許」といふ名まで賜はつた名譽の猫に、「翁丸」といふ犬が飛びかゝつて、爲めに、遠島に處せられ、死ぬばかり打擲されたこと、といふやうな異風づくめの珍事を敍し、而してかく同類の話群一束を述べ了はると、突然目先をかへて、「山は」の新しい標題提出に人を驚かしたる如きは、先づ此の方式の一例と見るべきものであらう。

或は「家は」と題して、

近衞の御門。二條、一條もよし。染殿の宮。清和院。菅原の院。冷泉院。朱雀院。洞院。小野の宮。紅梅。あがたの井戶。東三條。小六條。小一條。

と十五字の風情ある家居を連ね、ぽつ〳〵の列擧は、それで打切つて、今度は畏き皇居の清涼殿に移つて、勾欄のもとに活けられた櫻の大枝や、櫻重ねの直衣を着た大納言の悠揚なる容

姿を叙し、つゞいて名譽の勅諚に、清女が『古今』の成句の一字をかへ。

年ふれば齡は老いぬしかはあれど
君をし見れば物思ひもなし

と詠進して、お褒めにあづかつたこと、それから『古今集』の諳誦の事、つゞいて村上の御宇に、宣耀殿の芳子女御が、帝の御試みに應じて『古今』二十卷を一字も違へず答へ奉つた事と、同類の逸話をつぎ〳〵と書きつゞけたのも、此の方式の面白き珍しき例であらう。

或は「くちをしきもの」と枕言して、

五節、佛名に雪ふらで、雨のかきくらし降りたる。節會、さるべき折の御物忌にあたりたる　いとなみ、いつしかと思ひたる事の、さはる事出で來て、俄にとまりたる。

など、七個條の短句を列べおとはすツかり調子をかへて、五月の或日、女房が車をつられて賀茂の奥に時鳥の聲をたづねたが、生憎と時鳥を聞き得ぬ上に、大雨には逢ふ、歌一つだに詠み得ぬといふくち惜しづくめで、空しく歸つたといふ、興味の長談義をつゞけたのも、此の同じ形式の現はれであらう。無論多少の除外例らしきものもあらうが、吾等は此の單語短句の列擧に、可なりの長さを持つた興味の物語をつゞけ、それらを一團に括つては、すツかり風の變はつた他の世界に飛び込んで行くといふ形式、――人にはふと心づかれずして、いかにも

自然に、無技巧らしく見えつゝ、同時に隱された魔の暗示の微妙な線で、讀者を釣つて行くといふ形式が、『枕の草子』が持つ藝術味の主要部を成すもので、此の無組織らしい一種の組織が無かつたならば、此の國寶草子の光輝の一部が失はれたのであらうと思ふのである

五

材料取纒めの觀點から見た『枕の草子』の興味は、右の如く、主として群々割據といふ點にあつた。けれども『枕の草子』の大いなる興味は、內容の種類わけからも得られるであらう。吾等は此の草子の內容を極めて通俗的に分類して、左の四種目とすることが出來ると考へる。

第一種は「何は」「何々なるもの」「何々しきもの」の見出のもとに並べられた、單語、短句、短章の一群である。

第二種は逸話、或は物語ともいふべき長文の部類である。その大半は作者の手柄話で、或は畏きあたりのお褒めを蒙り、或は廷臣等にめでられ、同輩下僚に羨まれた物語であるが、その中には立派な短篇小說の體を備へたやうな作もあり、また『靈異記』を承けつゝ、同時に

『今昔物語』の先蹤を成したやうな傳說記文學例へば「蟻通明神緣起」の如きものもある。其も最も多く藝術的に見て此の草子の中心本部をなすのは、これであらう。

第三種は自然描寫の部分である。これは第一種、第二種の作の中にも象嵌的に交つてゐて、あちこちに光を放つてゐるが、最初の四季の品定めの如く、それのみを書いた部分もあり、中には古文に稀有なる寫生文とも名づくべき小品などもある。

第四種は一種の論說文ともいふべきものである。これはあちこちにたまさか象嵌的に散見するのみであるが、後に引く文字文章論の如きは、きりツと纏まつて一章を成した稀有のものであらう。此の草子の最後の段のやうな述懷めいたものも、此の種目の中に取り入れられるであらう。

右は極めて大雜把な常識的の分類であるが、これで『枕の草子』の內容は、凡そ盡くされるかと思ふ。その中第一種は已に上に擧げたので、左に第二種の例として、初めに清少納言が性格の中心隨一なる獨自第一性の現はれた一章を引いて見る。彼女が主君と賴み奉つた定子中宮との知遇感の簡潔に洒落に寫し出されたものである

御方々、公達、上人など、御前に人多くさぶらへば廂の柱によりかゝ

譯

或日のこと、御身內の女性方、公達、それに殿上人などが

りて、女房と物語してゐたるに、物を投げ賜はせたる、あけて見れば、「思ふべしや否や。第一ならずはいかゞ」と書かせ給へり　御前にて物語などする序にも、「すべて人には、一に思はれずは、更に何にかせむ。唯だいみじう憎まれ惡しうせられてあらむ。二三にては死ぬともあらじ。一にてをあらむ」などいへば、「一乘の法なり」と人々笑ふ事の筋なんめり。筆紙賜はりたれば、「九品蓮臺の中には、下品といふとも」と書きてまゐらせたれば、「むげに思ひくんじにけり　いとわろ

加へて、大勢の人々が、中宮の御前に居並んで居られるので、私は少し離れた廂の間の柱に倚りかゝつて、仲間の女房達と話をして居ると、中宮が不意に、物を投げ與へて下さつた。開いて拜見すると、「可愛がつて上げませうか。第一でなくッてもいゝか。どう？」と、書かせられてある。これは以前、御前でお話などをする序に、よく私が「人に可愛がられる以上、第一位に可愛がられずば、何にしよう。いッそひどく憎まれ、いぢめられてゐた方がよい。二位や三位には死ぬともなるまい。一位でこそ、第一位でこそ」などいふと、傍から、「では、法華經流の一乘式といふのだわ」なぞと、まぜ返して笑はれたことがある。それについてのお尋ねであると見える。筆に紙を下さつたので、「あなた様の御恩澤に浴する蓮の臺の上ならば、下々の等級でも厭ひませぬ」と書いて差上げると、「何だ、すッかり降

し。言ひそめつる事は、さてこそあらめ」とのたまはすれば、「人に隨ひてこそ」と申す。「それがわろきぞかし。第一の人に、又一に思はれむとこそ思はめと仰せらるゝも、いとをかし。（第五十段）

參してしまつたぢやないか。情ない。言ひ出した事は、そのまゝ通すがよいに」と仰しやつたので、「それは相手の人様次第でござります」と申上げた。すると「いゝや、それが悪いのだ。なぜ第一位の人から第一位に可愛がられようとは思はないのだ」と仰せられた。いや面白いこと〱。

清少納言が一位を欲する勝氣な性格の稜々たる現はれで、同時に、彼女と中宮との珍らしき知遇史の最も面白き一節であり、外戚政策が醸し成した宮廷生活の最も興味ある斷面でもある。筆の冴えは二人の才女の冴え切つた應對振を雕り込むやうに寫してゐるが、殊に面白いのは、悍馬の如き年増女が、何人にも屈せざる剛愎性を知己の威に和らげて、全我を高貴なる一少女の前にさゝげてゐる心境の描寫である。蓋し中宮は清少納言に取つて第一の知己であつた。中宮は『榮花物語』の作者から、「御かたちとゝのほり、ふとり清げにて色あひまことに白くめでたし。かの光源氏もかくやありけむ」と稱へられた藤原伊周の妹で、絶世の美人であつた上に、學問の嗜みも深く、殊に才かしこく趣味高くして、古典を踏まへた秀句の應酬に特別の興味を感ぜられた。清少納言が殊寵を蒙つたのも、彼女の性格教

養が中宮の此の嗜好に適つたからであらう　二人の心は打てば則ち響いた。二人は互の發する一語の中に十語二十語を讀んだ。二人の間の簡潔な、氣の利いた、壺に嵌まつた、呼吸の合つた應酬には、禪林の名僧の問答を聞くやうな趣があつた。古來その間柄の君臣たると、親子たると、朋友たると、愛人たるとを問はず、此の二人のやうに、反の合つた例は、めつたに無かつたであらう。かくして彼等の君臣は、やがて朋友であり、姉妹であり、同時に愛人であつた。一人なしには他の一人が暮らされぬ。この、中宮が清少納言に於いて生き、清少納言が中宮に於いて活きた、微妙な交渉を書いたこと、それが『枕の草子』の中心の味はひであると云つてもよい。而して此の短い一段は、此の作者の性格と、中宮と相得たる消息と、及びその好みの中心趣味と文致とを、極めて面白く見せてゐると云つてもよいと、吾等は思ふ。

定子中宮と清少納言とは、相識ること十年、その間常に齡を忘れ、地位をも忘れて、趣味の世界に遊んでゐた。清少納言が、中宮に仕へたのは、中宮十七八歲、清女三十歲前後であつたであらう。彼女はその初宮仕の頃の消息を、左の如く記して居る。

宮にはじめて參りたる頃、物の恥かしきこと數知らず、涙も落ちぬべければ、

譯

中宮に始めて御仕へ申した頃は、恥かしい事だらけで、涙がこぼれさうに思はれた。で、夜毎に伺つ

夜々まゐりて、三尺の御几帳の後に侍らふに、繪など取り出でて見せさせ給ふだに、手もえさし出だすまじうわりなし。「これはとあり、彼れはかゝり」—などのたまはするに、高坏にまゐりたる大殿油なれば、髪の筋なども、なかなか晝よりも顯證に見えてまばゆけれど、念じて見などす。いと冷たき頃なれば、さし出ださせ給へる御手のはつかに見ゆるが、いみじう匂ひたる、薄紅梅なるは限りなくめでたしと、見知らぬ里び心地には、いかゞは、かゝる人こそ世におはしましけれと、驚かるゝまでぞ凝視りまゐらする。曉には疾く

では、三尺の御几帳の陰に小さくなつてゐると、繪などを取り出しては、おやさしく見せて下さつたが、私はおど／＼して手をさし出すことも出來なかつた。「これは斯う、あれはあゝ」なぞと說明して下さる間にも、高坏の上に置いた燈火とて、晝よりもあらはに、近々と髪筋などを照らすので、やつと我慢をして、さしうつむいて見てなどゐると、眞冬のひどく冷たい頃とて、差出させられた御手の先が、御袖口から薄紅梅色につや／＼と見える。その貴やかな美しさに見とれて、御所の事など少しも見知らぬ里人心には、どうして斯ういふ人も世の中には居られるのかと、驚きながら目を離すことが出來なかつた。

夜が明けると、早く下らうと急ぐ。すると、

「葛城の神様も、もう少しはよからう。」

などと仰しやつて、まともに此方を見て入らづし

など急がるゝ、「葛城の神もしばし」など仰せらるゝを、いかで筋違ひても御覧ぜられむとて、伏したれば、御格子もまゐらず。女官まゐりて、「これ放たせ給へ」などいふを、女房聞きて放つを、「侍て」など仰せらるれば、笑ひて歸りぬ。物など問はせ給ひ、のたまはするに、久しくなりぬれば、「下りまほしうなりぬらむ。さらば、はや」とて、「夜さりはとく」など仰せらるゝ。

やるので、せめては斜になりとも見ていたゞかうと伏目になつてゐると、私を歸さぬために、わざと格子をあげさせられぬのであつた。そこへ下役の女官が來て「もうお上げなすつては！」といふ。女房が開いて上げようとすると、「まあ待て」と仰しやるので、にッこり笑つて歸つて行く。それからいろ／＼お尋ねやお話があつて、暫らくすると、

「さぞ歸りたかつたことであらう。では早う下つて、夜になつたら、また急いで來るやうに。」

と仰しやるのであつた。

この差恥家は間もなく宮中生活に馴れて、やがて宮廷の男女を片端から籠弄する皮肉屋となつたが、その間始終之れを御し、之れを懷け、之れを養つて、同心同味の友に作り上げられたのは中宮であつた。一方下手には世間を知りぬいた三十面の學者女が、几帳の後ろに小

さくなつて控へてゐる。上手には十七八の高貴の女性が、品よく坐つて、物やさしく繪などを取出しては、―是れは、彼れは―と、親切に說明してやつてゐる。夜が明けて、三十女が、局に引取らうとすると、―葛城さまも、もう暫らく居てくれては、どう？―など、面白く止めて、そして格子を放たうとする女官達を制して、―まあ待て、朝の光がさすと、葛城の神樣がお歸りなさる。このまゝ暫らく夜の燈火のもとで話しませうぞ―と云つて、やゝあつて、―さぞ歸りたかつたらうね　では、早う歸りや。そして夜になつたら、又早うね、よいか―と云はれる。中宮はこれが關白家の十八娘が、したゝか者の三十女に對する應對振であつたのである。才學に於いて此の悍馬を御する資格があり、之れに加ふるに美しい容色と、心の廣い物やさしい德とを備へられて、すつかり此の女の心を占領して了はれた。かくして彼等の間には、十年榮枯を共にして變はらない交誼が成立つたのである。『枕の草子』が清女の自傳たると同時に、半ば中宮の傳記ともなつたのである。『枕の草子』は一方に淸少納言の天才があり、一方に中宮の背景があつて始めて成立つた文學で、從つて此二人の才女の間に於ける稀有の知遇の消息を知ることが、この草子の最も深き意義と趣味とを知る所以となるのであらう。

六

吾等は次ぎに清少納言と中宮との機智と趣味との合作ともいふべき短章を掲げる。それは世に最もよく知られた「香爐峯」の逸話の一段である。

雪のいと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃に火おこして、物語などして集まり侍ふに、「少納言よ、香爐峯の雪はいかならむ」と仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く捲きあげたれば、笑はせ給ふ。人々も皆さる

譯

或日のこと、雪が折角高く積もつたのに、例になく御格子を締め切つて、火鉢に火をかん〳〵おこして、無駄話などして、みんなで中宮のお側におつきしてゐると、中宮が外面の方床しげに、突然、「中納言や、香爐峯の雪景色は、どんなだらうね」と仰しやつた。すぐに御格子を上げさせて、自ら御前の簾を高く捲きあげると、にッこりとお笑ひなさつた。「よく解つたな。お前の心はわたしの心だ。わたしはお前の氣轉のおかげで、清涼殿の御庭の雪と、白樂天が香爐峯の山居の雪の趣とを、同時に併せ賞することが出來たぞよ」との御心であらう。仲

事は知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつれ。なほ「この宮の人には、さるべきなめり」といふ。

間の人達も、此の位の事は皆承知して、歌などにさへ取り入れてゐるのであるが、差當たつては思ひ浮かばなかつたものと見える。それでもやつぱり負け惜みで、「中宮様づきの女房だもの、それ位の氣轉は當然さ」などといふのであつた。

簡潔無比であるが、要點はちやんと盡くして、豐かな餘意をば俤（おもかげ）に見せてある　時代の好尚であり、殊に中宮と清少納言とが深く好いた古典暗示の風味の極致を見せたもので、二人の間に於ける神通默會の面白さは佛、羅漢の拈華微笑にも比すべきものであつた。清少納言の古典渉獵は必ずしも驚くべく豐富ではなかつたであらう。けれども彼女は役立つべき少數を選擇して、しツかりと之れを把握した。而して一旦臨機の場合には電光石火の如く、之れを應用し活用した。その應用表現の神速と妥當と巧妙とは、多くの劣等知をして呆然として舌を捲かしめ、優等知をしては、自己の蓄積の豐富なるが爲めに、知らず／＼買ひ被つて、感悅し耽味せしめた。而して此の古典暗示の意表に出づる早業が彼女の特殊技と見らるゝに從つて、いやましにその效力を發揮したであらう。清少納言が此の方面の詞藝に於ける驚くべき成功は、半ばは此の微妙なる心理の爲めで、而して同好相憐の愛撫の情から彼女の活動に拍車をかけられたのは中宮であつた。

御簾高く捲きあげたれば、笑はせ給ふ。

の簡單な二句の中には、少なくとも右に試みた現代語譯以上の意味が含まれてあるであらう。吾等はこれに於いて彼女の文章がいかに簡潔に妥當に表現されてゐるかを知ることが出來る。而して同時に彼女の佳作の多くが、如何に彼女と中宮との異體同心史の一部であるかを想像することが出來ると思ふ。

七

吾等は次ぎに第二種の佳作群の中から、一種の組織のある物語、人と事と景とが面白く撚り合はされて、一種の小說とも云はゞいふべきものとなつた長篇の物語を擧げて見たいと思ふ。それは淸少納言が中心性格なる負けじ魂、一位欲の現はれであり、當時の流行兒たる公卿、殿上人、女房達の間に於ける交遊史の具體的表現であり、時代の中心趣味の一つなる古典暗示の面白き現はれであり、用語修辭の凡てにわたる淸女が文章美の集まりでもあるが、こゝには主として當時の貴族男女が宮廷生活の縮圖と見、時代思想の具現として見たいと思ふ。それは『春曙抄』の四十三段、一とりもてるものの一のつゞき、白樂天が名高き「蘭省

花、時錦帳下、廬山雨、夜草庵中」を踏まへた物語で、全文は左の通りである、

頭中將(藤原齊信)の、そゞろなる空言を聞きて、いみじう言ひおとし、何しに人と思ひけむなど、殿上にても、いみじくもなむのたまふと聞くに、恥かしけれど、まことならばこそあらめ、おのづから聞き直し給ひてなむ、など、笑ひてあるに、黑戸の方へなど渡るにも、聲などする折は、袖をふたぎて、つゆ見おこせず、いみじう憎み給ふを、とかくもいはず、見も入れで過ぐす。

二月つごもりがた雨いみじう降りてつれ〴〵なるに、御物忌

譯

頭中將が、人の好い加減な出鱈目をいふのを聞いて、信じて、ひどく私の上を言ひ貶され、あの人でなしを、どうして人とは思つたのであらう、なぞと、宮中でまで、えらく悪口を云はれるといふ事を、聞くにつけて、恥かしくはあるけれども、事實ならばこそ、辯解もしようが、その中には自然根なし言と聞き直されることもあらうなぞと思ひながら、笑つてゐると、黑戸の方へ見えた折にも、私の聲などがすると、袖で隔てゝ一寸も目をくれず、恐ろしく憎んで居られるのを、私もまた何とも云はず、見入れもせずに、打過ごした。

その中に二月の晦日ごろ、雨がひどく降つて退屈な晩であつた。頭中將が御所の御物忌に籠られて、「絶つては見たものの、彼女が居なくては、やつぱり淋しくて仕方がない、何か一つ言つてやらうか」なぞと言つて居られる

にこもりて、「さすがにさうざうしくこそあれ、物や言ひにやらまし」となむのたまふ」と、人々語れど、「よにあらじ」などいらへてあるに、一日下に暮らして參りたれば、夜の御殿に入らせ給ひにけり。長押のしもに、火近く取り寄せて、さし集ひて篇をぞつく。「あなうれしや、疾くおはせ」など、見つけていへど、すさまじき心地して、何しに上りつらむと覺えて、炭櫃のもとに居たれば、またそこに集まり居て、物などいふに、「某さぶらふ」と、いと花やかにいふ。「あやし。

と、傍の人々の言ふのを聞いて、「噓ばッかり。好い加減な事を云つて調戲ひなさるな」など答へてゐたが、それから一日下の局に暮らして、夜に入つてから、中宮の御座所に伺ふと、もう御就寢になつた後であつた。と見ると、女房達が長押下の廂の間に、火を近く取り寄せて、寄つてたかつて偏突をして遊んでゐたが、私を見つけて、

「まあ嬉しい。早く入らつしやい。」

などといふけれども、中宮のお見えにならぬ淋しさに、氣が進まず、何の爲めに參殿はしたのであらう、など考へて、火鉢のもとに、しよんぼりとしてゐると、また其處へ集つて來ては話しかけて居るところへ、

「何某が參りました。淸少納言さまに、よろしく御取次を。」

と、晴れやかな聲で言ふ者がある。「をかしいな。今上つたばかりなのに、もう知つて？　何の用事だ」と、尋ねさせると、それは御所守の主殿司であつた。そして

いつの間に、何事のあるぞ」と問はすれば、主殿司なりけり。「たゞこゝに人傳ならで申すべき事なむ」といへば、さし出でて問ふに、「これ頭中將殿の奉らせ給ふ。御返り、とく〳〵」といふに、いみじく憎み給ふを、いかなる御文ならむと思へど、只今いそぎ見るべきにもあらねば、「いね、今聞こえむ」とて懷に引き入れて入りぬ。なほ人の物いふ聞きなどするに、すなはち立ち歸りて、「さらば其のありつる文を賜はりて來となむ仰せられつる。とく〳〵」

「エヽ、お直々に申上ぐべき用事が御座りまして！」

といふので、自ら立ち出でて尋ねると、

「これは頭中將樣からの御手紙で御座いまする。すぐに御返事を。」

といふ。恐ろしく憎んで居られるといふのに、どんな御文であらうと、氣にかゝるけれども、人前で慌てゝ見るべきでもないので、

「御歸りなさい。御返事はすぐに。」

と云つて、懷にさし入れて、座に歸つたが、そのまゝ人の話に耳を借してゐると、その使がすぐ樣歸つて來て、

「では先刻の手紙を戴いて來いと仰しやりまする。どうぞお早く〳〵。」

といふ。ハテ變な！　伊勢物語式な好き沙汰のお使ひでもあらうかと、披いて見ると、青い薄樣にきれいに書いてある。扨はと見れば、案に相違して、胸をとゞろかす程のものではなかつた。唯だ

といふに、あやしく、「伊勢の物語なるや」とて、見れば、青き薄樣に、いと清げに書き給へるを、心ときめきしつる樣にもあらざりけり。「蘭省の花の時錦帳の下」と書きて「末はいかにいかに」とあるを、いかゞはすべからむ、御前のおはしまさば、御覽せさすべきを、これが末知り顏に、たど〳〵しき眞名に書きたらむも見苦しなど思ひまはす程もなく、責め惑はせば、ただその奥に、炭櫃に消えたる炭のあるして、「草の庵を誰れかたづねむ」と書きて取らせつ

「蘭香の花の時錦帳の下。」

と書いてある。どうしたものであらう。中宮が起きて入らつしやれば、御覽に入れて、御智慧を貸しても載かうものを、後の句を知つたか振に、下手な四角の文字に書いてやるのもまづし、などと思案をする餘裕もあらせず、「お早く〳〵」と責め立てるので、すぐ、その手紙の奥の餘白に、火鉢に消えた炭があつた、それを拾ひ取つて、

「草のいほりを誰れかたづねむ。」

「草の庵づれを尋ねるものが、何處にありませうぞ。そんな物を尋ねるとは、餘つぼと氣の利かぬ愚者、殊に一旦見捨てた草藪の庵を、お辭儀までして訪ねるのは、どこい誰れです？」と、漢詩の前句に、三十一文字の末の句を番うて、書いて渡してやつたが、そのまゝ、向うからは返事もなかつた。

その夜はそのまゝ皆と一しよに御所に寢んで、翌くる朝

れど、返りごともいはず。

皆ねて、つとめて、いと疾く局におりたれば源中將の聲して「草の庵やある、草のいほりやある」と、おどろ／＼しう問へば、「などてか、さ人げなきものはあらむ。玉の臺もとめ給はましかば、出できこえてまし」といふ。「あなうれし。下にありけるよ。上までたづねむとしつるものを」とて、昨夜ありしやう、頭中將の宿直所にて、少し人々しき限り、六位まで集まりて、よろづの人の上、昔今と語り出でいひし序に、「猶ほこのも

早く局へ下つてゐると、源中將(經房)の聲がして、

「草の庵があるか、草のいほりは居るか。」

と、恐ろしく呼び立てられるので、

「怪しからん。何で、そのやうな人らしくもない者が居りませう。金殿玉樓があるかとでも云つて、御搜しなさらば、「ハイ、此處にこそと、御返事もして上げませうが。」

と答へると、

「これは嬉しい。仕合せと、局にゐてくれたのか。若し居らずば、御所までさがすつもりであつたが。」

と云つて、昨夜あつた通りの次第を語られるのを聞くと、頭中將の宿直所で、いさゝか人らしい限り、六位の者までが寄り集まつて、いろ／＼の人の上を、昔の今のと、段々に物語つて、話の進む中に、頭中將が、

「やつぱり、彼奴と絶交つてからが、どうも淋しくて仕方がない。もしや誰でも入れるかと、心待ちはし

のむげに絶え果てゝ後こそ、さすがにえあらね。もし言ひ出づることもやと待てど、いさゝか何とも思ひたらず、つれなきがいとねたきを、今宵惡しとも善しとも定めきりてやみなむかし」とて、皆言ひ合はせたりし事を、只今は見るまじきとて、入り給ひぬとて、主殿司來たりしを、また追ひかへして、「たゞ袖をとらへて、東西せさせず乞ひ取りもて來ずは、文を返し取れ」といましめて、さばかり降る雨のさかりにやりたるに、いと疾く歸り來たり、これとてさ

てゐるが、一寸も氣にかけては居ぬ樣子で、平氣で居るのが、ぢれッたくて仕樣がない。今夜は何か一つ、題を出して、試驗をして、善惡ともに決めてしまはうではないか。」

と言ひ出して、それから、皆で相談して、例の「蘭省の花の時」を持たしてやると、

「今すぐには見られぬ、と云つて、お入りになりました。」

と云つて、主殿司が歸つて來たので、すぐ追ひ返して、

「唯だもう、袖をつかまへて、有無を云はせず返事を取つて來い。でなくば、手紙を取り返して來い。」

と、嚴重に言ひ渡して、あの通り、ざアざと降りしきる雨の最中に出してやると、折返しに歸つて來て、「これを！」と云つて差出したのが、先刻送つた手紙であるから、扨はそのまゝ返したのかと、ちよッと覗くと、のぞいた連中が異口同音に、

し出でたるが、ありつる文なれば、「返してけるか」と、うち見るに、おはせてをめけば、「怪し、いかなる事ぞ」とて、皆寄りて見るに、「いみじき盜人かな、猶ほえこそ捨つまじけれ」と見さわぎて、「これが本つけてやらむ。源中將つけよ」などいふ。夜ふくるまでつけ煩ひてなむやみにし。この事、必ず語り傳ふべき事なりとなむ定めし」と、いみじくかたはら痛きまで言ひ聞かせて、「御名は、今は草のいほりとなむつけたる」とて、急ぎ立ち給ひぬれば、「い

「あッ！」

と叫んだので、

「けしからん。何事だ？」

と云つて、みんなが額を鳩めて見ると、「草の庵を……」とあるではないか。

「盜人め、うまくやつたぞ。これではやッはり捨てられぬ。」

と、騷ぎ囃して、それから、「これの本句をつけてやらう。源中將、お前一つ試みるがよい」なぞと言ひつゝ、夜更けまで智慧を絞つたが、到頭附けかねて、そのまゝになつたのであつた。で、是れは是非とも千古に傳ふべき逸事であると、評議一決したやうなわけだよ」と、極りのわるい程、褒め立てゝ、

「で、お前の名は、もう「草の庵どの」と極めましたぞ。」

とわろき名の、末の世まであらむこそ、くちをしかるべけれ」といふ程に、修理亮則光、「いみじきよろこび申しになむ、上にやとて參りたりつる」といへば、「なぞ。司召ありとも聞こえぬに、何になりたまへるぞ」といへば、「いで、まことに嬉しき事の昨夜侍りしを、心もとなく思ひ明かしてなむ。かばかり面目ある事なかりき」とて、はじめありける事ども、中將の語りつる同じ事どもをいひて、「この返事に從ひて、さる者ありとだに思はじと、頭中將のた

と言つて、急いで立たれた。わたしは、きたならしい名が後世まで殘るのは口惜しい事であらうなど云つて居ると、今度は修理亮則光がやつて來て、

「一大事のお悦び申しに、……或は御所にかと思つて、まゐりましたが。」

といふ。

「何ですツて？　敍任の御儀があつたとも承りませんのに、拜謝のお悦びとは？　ハテ何に御成りなすつたぞ。」

といふと、

「いや、とても嬉しい事が昨夜あつたのを、早く聞かせたい、聞かせたいで、氣が氣でなく、一夜を明かしたのだ。いや、こんなに面目を施したことはない。」

と云つて、それから源中將の話された通りを繰返して、

まひしに、たゞに來たりしは、なか／＼よかりき。持て來たりし度は、いかならむと胸つぶれて、まことに惡からむは、兄のためもわろかるべしと思ひしに、なのめにだにあらず。そこらの人の褒め感じて「せうとこそ聞け」とのたまひしかば、下心にはいとうれしけれど、「さやうの方には更にえさぶらふまじき身になむ侍る」と申ししかば、「言加へ聞き知れとにはあらず、たゞ人に語れとて聞かするぞ」とのたまひしなむ、少しくちをしき兄人の覺えに

「この返事一つで、もう彼女の存在などを認めることではない。」

など、頭中將が言つて居られるところへ、使が空手で歸つて來た。「これは却つてよかつた」と、胸を撫でおろしてゐると、二度目には持つて來たので、どうなる事かと、肝を消して、

「萬一まづい返事でもしてくれたら、此の兄貴も頭があがらぬ、と思つてゐると、曲りなりどころの沙汰ではない。有りあふ人々が悉く感じ入り褒めはやして、「兄貴よ、まあ聞け」と云はれるので、心の底のうれしさを、さらぬ振して、「いや、さやうの風流筋にお仲間入りする資格は御座りませぬ」といふと、「いや、批評をせよ、妙味を聞き知れといふではない。唯だ世間に吹聽するやうに、言つて聞かせるのだ」

侍りしかど、これが本つけ試みるに、いふべきやうなし。ことにまた、これが返しをやすべきなど言ひあはせ、わろき事いひては、なかなかねたかるべしとて、夜中までなむおはせし。これは身のためにも、人のためにも、さていみじき悦びには侍らずや　司召に少々の司得て侍らむは、何とも思ふまじくなむ」といへば、げに數多して、さる事あらむとも知らで、ねたくもありけるかなと、これになむ胸つぶれて覺えし。

この妹兄といふ事をば、上まで

と云はれたのは、少々情ない此の兄貴の信用ではあつたが、しかしお歴々も、本句を附けようと試みられるが、さて何とも仕方がない。返歌などは尚更出來ぬ。めつたな事を云つては、却つて後悔の種であらうから、なぞと云つて、夜半まで居られたことであつた。これは我等がためにも、御身の爲めにも、さてさてすばらしい悦び事ではないか。之れに比べると叙目の御儀に、少しばかりの昇任をする位は、何とも思はんよ。」

といふ。ほんとに大勢して、そんな事があつたとも知らず、ぢれッたいことであつたと、これにはすッかり胸のつぶれる思ひがしたのであつた。

この妹人兄人と云はれる、則光との關係をば、主上までも悉く御承知あつて、宮中でも則光の官名をば呼ばずに

皆知ろしめし、殿上にも司名をばいはで、せうとゝぞつけたる。物語などしてゐたる程に、まづと召したれば、まゐりたるに、此の事仰せられむとてなりけり。「上の渡らせ給ひて、語り聞こえさせ給ひて、をのこども皆扇に書きて持たる」と仰せらるるにこそ、あさましう、何の言はせけることにかと覺えしか。さて後に、袖几帳など取りのけて、思ひなほり給ふめりし。

兄人々々と呼ばれたのであつた。それから暫らく話してゐると、中宮から「一寸來い」と、お召しがあつたので伺ふと、やはり此の事を仰しやらうといふのであつた。中宮の仰せには、

「陛下が入らせられて、その事のお話を遊ばされたが、昇殿する男どもが、みんな其の句を扇に書いて持つてゐるといふぞとよ。」

と仰せられたので、まあ飛んでもない、何が憑いて、あんな事を書かせたのであらうと、ひやひやしたのであつた。この事があつて以來、頭中將も袖の目ふさぎを取りのけて、もとの通り隔意なくなられたやうに見えた。

原譯相對比して、清少納言が筆の冴えを察することが出來るであらう。彼女が最も得意とした古典暗示の洒落を中心として、清涼殿に於ける一夜半日の風流劇を、隙間のない筆で簡潔に開展させた趣、内容と文致とがいかにも相應し調和して、寸分の乖離をも見せぬ

趣、同じ事實を、作者の筆、源中將の物語、修理亮則光の話、中宮のお詞と、四度、繰返して、少しの重複をも感じさせぬ巧みさ、頭中將、源中將、修理亮則光と相愛を三人、並べて之れに對する愛着輕重の關係を別々に書き別けた趣、ほぐれものにされた恥かしさから「草の庵」の功名、源中將の讃歎、則光の拜跪、兩陛下の御嘉賞を經て、當の敵、頭中將が到頭兜をぬぐまで、死中に活を見出だして睨んだ敵を睨み返す迄の段取を、層々にせり上げて無造作ながら、しッかりと落着かせた趣、いづれも讃歎に値ひするが、吾等の特に面白いと思ふのは、此の短い一段がいかにも平安朝宮廷生活の縮圖たる趣を備へてゐる事と、清女がその間に女王の地位を占めて文權、趣味權交際權を把握してゐる趣が、有り〳〵と寫し出されてゐる事とである　此の物語の舞臺は、日本の中心の京都の、京都の中心の內裏の、內裏の中心の清涼殿である　人物には上は聖上皇后のお二人を始めまゐらせ、人々しき限りの公卿殿上人を經て幾多の女房から主殿司までを含んでゐる　而して彼等の嘻笑應酬するところは、下觀公卿の理想たる詩歌風流の消閑事で、それが一人の中心女性をめぐつて面白く、縺れつ解けつしてゐるのである　これはまさしく藤原氏全盛時代に於ける宮廷生活の精粹ではないか　この狹いながら、含蓄の非常に廣く且つ深い舞臺の上に、一人の選まれたる女性——負けぬ氣を具へた、風流道の天才、趣味の權化たる女性——が現はれて、まづ仲間の女性達にもやはやされ、やがて

堂々たる上達部が、綺麗な薄樣に鄭重に書いた手紙に對し、消息なぐり書きの返事を與へて、その膽をひやし、三人の愛人――輕い慰みものの則光、一通りに見てゐた源中將經房、可なりに尊敬してゐた頭中將齊信――を跪かせ、廷臣一同に我が歌の句を扇に書かせ、最後に最高貴の人お二方の寵幸を一身に集めて、勝鬨勇ましく揚々として退場する。これはまさしく彼女の一生を煎じつめたともいふべき無類の寫眞ではないか。吾等は此の意味から、此の一段が、清少納言の面目を寫すことに於いて、他の百數十段に優るものであると思ひ、また平安朝の宮廷生活をまざ／＼と見せる點に於いて、大小幾多の歴史に優るものであると思ふ。紫式部は『源氏物語』の中で、歴史は或國の或時代に起こつた事を、抽象的、輪廓的に書いたものであるが、物語は神代以來人間のあらん限り存在する情生活を、具體的に精しく寫すものであるから、物語の價値は遙かに歴史以上であるといふ意味の事を言つてゐる。『枕の草子』の中、一種の物語とも、小說とも戲曲とも見らるべき此の一段は、特にこの絕大價値を擔ふに足るものであらう。全文を揭げ逐語譯まで施して、その光輝を發揚した所以である。

八

第二種の逸話、物語式に屬するものでもう一つ、古典暗示に關する中宮と清少納言との微妙なる共同感を示し、同時に戀愛に對する作者の不思議なる超越態度を示してゐる一段を揭げて見る。『春曙』の六十四段「はしたなきもの」のつゞきの一節である

故殿(中關白道隆)の御ために、月毎の十日、御經、佛供養せさせ給ひしを、九月十日、職の御曹司にてせさせ給ふ。上達部殿上人いと多かり。清範、講師にて、説く事どもいと悲しければ、殊に物の哀れ深かるまじき若き人

月・秋を期して(淺野侯爵家藏繪卷)

譯

中宮には、故殿の關白殿のために、月々の十日に、寫經、造像の御供養を營ませられたが、九月の十日には、中宮職の御曹司で遊ばされた。講師は文殊の再來とも云はれた説法無双の清範律師で、その説く事が、いかにも物悲しい、しみ〴〵したものであつたので、物の哀れなど、取りわけ感じさうもない若い人達ま

も、皆泣くめり。果てゝ酒飲み詩誦じなどするに、頭中將齊信の君、「月秋と期して身いづくにか」といふ事をうち出で給へりしかば、いみじうめでたし。いかでさは思ひ出で給ひけむ。おはします所に分けまゐる程に、立ち出でさせ給ひて、「めでたしな。いみじう、今日の料に言ひたることにこそあれ」と宣はすれば、「それを啓しにとて、物も見さして參り侍りつるなり。猶ほいと

でが皆泣くらしく見えた。

法事がすんで、酒を飲み詩を吟じなどする中に、頭中將齊信の君が、「月秋と期して身いづくにか」といふ菅三品の句＝菅原文時が謙德公を悼んで作つた秋にならば明月をと樂しんで期にして居られた人も、もう身まかられて御見えにならぬといふ意味の願文の名句＝を、しめやかに吟じ出されたので、みんな引き入れられてしまつた。どうして、折も折に、かういふ所を得たる名句を想ひ出されたのであらう。私は默つて居られなくなつて、中宮の御座所の方へ人込みをかきわけて進んで行くと、向うからも中宮がお立ちになつて、

「面白いな。ほんとに。今日の法事に吟ずるために作つた句のやうではないか」

と仰しやつた。

「さあ。それを申上げたい爲めに、見かけてゐ

ゐでたくこそ侍れ」と聞こえさすれば、「まして、さ覺ゆらむ」と仰せらる

わざと呼び出で、おのづから逢ふ所にては、「などか麿をまほに近くは語らひ給はぬ。さすがに憎しなど思ひたる樣にはあらずと知りたるを、いと怪しくなむ。さばかり年頃になりぬる得意の、疎くてやむはなし。殿上などに明暮なき折もあらば、何事をか思出にせむ」とのた

たのを中止してまゐつたので御座います。やつぱり、とても面白う御座いますね」と申上げると、「お前には尚更さう思はれるであらうぞ」と仰せられた。

頭中將をお褒めした序に、記したいことがある。中將は、わざ／＼呼び出されることもあり、また自然に御目に懸かることもあると、よく

「どうして私に親しい契りを許しては下さらぬ。まんざら憎いと思つて居られる樣子ではないと知つて居るのに、かういつまでも煮え切らぬ仲で居るのが、不思議でなりません。これ程久しく懇ろにした男と女が、他人行儀のまゝで止むといふことがあるものでせうか。今こそあれ、萬一お互のいづれかに故障があつて、殿上などで、朝夕逢はれぬといふ場合があつたならば、何を思出の力草にして生きては行きませ

まへば、「さらなり　難かるべき事にもあらぬを、さもあらむ後には、え譽め奉らざらむがくち惜しきなり。上の御前などにても、やゝと集まりて譽めきこゆるに、いかでか　たゞ思はせかし　かたはら痛く心の鬼出で來て、言ひにくゝ侍りなむものを」といへば、笑ひて、「など　さる人しも、よそ目より外に譽むるたぐひ多かり」とのたまふ。それが憎からずはこそあらめ。男も女も氣近き人をかた引き、思ふ人の、いさゝか惡

うぞ。」

と云はれるので、

「仰せまでもありませぬ。深い契りはむつかしいことではありませぬが、さうなつたら最後、思ふまゝにあなたをお譽め申すことが出來ぬかと思ふと、それが悔しいのです。例へば中宮の御前などで、皆が集まつてヤンヤとお譽め申すといふ時に、その關係であては、とてもでせう。だから、唯だ綺麗な仲で、思つてゐて下さいな。でないと、傍目笑止で、氣がさして、言ひにくゝなりますからね。」

といふと、淋しく笑つて、

「何の。さういふ關係の人で、他人以上に譽める仲間もあるではないか。」

と言はれる。

「それが厭でないなら、仔細はありませぬ。唯

しき事をいへば、腹だちなどするが、わびしう覺ゆるなり」といへば、「頼もしげなの事や」とのたまふもをかし。

だ男でも女でも、親しい人を身びいきし愛する人の惡口を、一寸でも言ふと腹を立てるなどいふのが、私には堪らなく氣障に思はれるのです」といふと、「さて〳〵頼もしくない事をいふね」といはれたのも、面白かつた。

模範的なる古典暗示と見ても、中宮清女異體同心史の一節と見ても、當時の貴族男女の間に於ける理想生活の一部の縮圖と見ても、清少納言が文章の特色の發露と見ても、興味は無限である。そも〳〵古典暗示の拈華微笑式會得は一種の高級なる漢文支配であるが、佛教法會の折の酒筵に於いて佛教式願文の名句を選誦したものとすれば、震旦天竺を左右に侍らせて、我が詞藝の綜合美を成したものともいふことが出來るであらう。とにかく古典暗示は當代を風靡した最高の興味の一つで、死ぬべき命もこれが爲めに助かり、斥けらるべき者もこれが爲めに重用せらるゝ程の勢力であつたが、之れを最も巧みに活用したもの殊に國文學的、藝術的に、最もよく之れを使ひこなした殊勳者は清少納言であつた。此の一段の如きも、その方面の最も優れた代表作品の一つである。

此の一段に於ける、もう一つの貴重な不思議は、清少納言が戀愛態度の現はれである。彼

女は此の一段の最後に於いて「頼もしげなの事やといたまふも、をかし」と言つてゐる。抑も「をかし」は『枕の草子』の基調をなした反覆愛用の語で、『伊勢物語』の「昔男ありけり」にも比すべきものである。彼女は自然界、人間界に於ける會心の現象に對して常に此の語を適用した。思ふに「をかし」は淡い歡びの氣分を現はす詞で、強き執着を伴はない興味を意味するのであらう。而して『枕の草子』に於ける此の語の愛用は恐らく何事にも興味を持ちつゝ、何事にも熱中せざる彼女の根本性格の表露であらう。彼女はあらゆる事物に對して常に高見の見物の態度を取つた。彼女が好惡の嗜好は可なり強烈であつたけれども、それは唯だ得れば樂しむだけで、何物に對してもさまでの執着を感じなかつたらしい。

職の御曹司に於ける供奉

世の中に、猶ほいと心憂きも

（淺野侯爵家藏繪卷）

のは、人に憎まれむことこそあるべけれ。誰れてふ物狂か、我れ人に憎まれむとは思はむ

とは云つてゐるが、人の反感や憎悪をも、さまで氣に懸けなかつたことは、前なる「一草の庵、玉の臺」の一段によつても察せられる。彼女は信仰をすらも一種の趣味と見、おもちやとすら眺めて、平然として說教師の顔よきを愛でてゐる。要するに、彼女は御殿女中性、野次馬氣質を最も高義に、最も藝術的に磨き上げた性格の所有者であつた。而して彼女は此の御殿女中式、彌次馬式なる高見の見物的態度を以て、月、雪、鳥、蟲、木の花、草の花、歌の題等に對すると同じ心持を以て、戀人にも對したのである。彼女が此の中性的、超越的態度は草子のあちこちに現はれてゐるが、一草の庵もその著しき一つで、則光、經房を弄び、當時の高名、四納言の隨一なる頭中

將齊信をも手玉に取つて居る趣は、赫奕姫が五人の宮人を飜弄したるが如く、又三人、五人の愛人公卿を雁並べにしてあやなして居る所には、光源氏が六條院の棟並びに多くの女君を養つたやうな趣がある。男が女を弄ぶのを當然と心得てゐた時代に於いて、一方に男を弄ぶ淸少納言のやうな女の一人や二人はゐても差支ないわけであらう。要するに、淸少納言は性を脫して性に遊び、戀愛を超越して戀愛を弄んだ女で、その「をかし」と感じた、中性的な、慾の無い遊離した戀愛の觀察描寫に、千古獨得の妙味があるのである。

逸話物語系として纏められる第二種の中の一種として、序に言ひ及びたいのは傳說記事である。それは例へば『春曙抄』の百十六段—社は—の社名列擧の後に添へた蟻通の明神の緣起の類ひで、その最初、最後の一部を揭げると、左の通りである

この蟻通とつけたる意は、まことにやあらむ、昔おはしましける帝の、唯だ若き人をのみ思召して、四十になりぬるをば失はせ給ひければ、他の國の遠きに往き隱れなどして、さらに都の中にさる者なかりけるに、中將なりける人の、いみじき時の人にて、心なども賢かりけるが、七十近き親二人をもたるに、かう四十をだに制あるに、ましていと恐ろしと怖ぢ騷ぐ、……(冒頭)

中將は大臣までになさせ給ひてなむありける。さて其の人の神になりたるにやあら

む、此の明神の御許に詣でたりける人に、夜あらはれて宣ひける、「七わだに曲れる玉の緒をぬきて蟻通しとも知らずやあるらむ」と宣ひけると、人の語りし。(結尾)

此の一段は、『雜寶藏經』といふ佛典に出て居る話の、世間に流布して居るのを、をかしと聞いて書き留めたものらしく、無論草子の中の秀逸といふべきものではないが、佛經式漢文の堅苦しく、極り過ぎ、干凋びてゐるのに對して、いかにも優美に、暢び〳〵して潤ひがある。殊に最初に「昔何々」と言ひ起こして、最後を「と、人の語りし」と止めてゐるあたりは、此の草子の他の部分とちがひ、一種の傳說記の體を備へて、『日本靈異記』を承けつゝ、『今昔物語』に於ける「今は昔何々の事あり――云々と語り傳へたるとや」と書く樣式の先縱をなしてゐる趣がある。廣い意味の叙事の文は、『古事記』や『風土記』から『竹取』『伊勢』以下に至るまで數多くあつたであらうが、立派な國文をなした傳說記の叙事文としては、まづこれらに起原を見出だすべきであらう。而してそれは美しく、品位高く、趣味の豐かなる點に於いて、遙かに『今昔』の上に位するものであつた。

『枕の草子』は『源氏物語』と同じく、前代の文學に對する一種の集大成と見るべきものであるが、『源氏物語』が綜合的、組織的に集大成したのに對して、『枕の草子』には孤立式、分散式のばら〳〵に集大成したかの趣がある。この草子の傳說文もその一つで、記紀風土

記から『靈異記』に傳はつた古傳記述の文學が、數は少なく形は短いながら、とにかく一種完成の姿を見せたものと見るべきであらう。

九

自然の描寫も亦『枕の草子』に於いて見出だすべき孤立分散的なる集大成の一つである。我が文學に於ける自然描寫は『古事記』、『風土記』等に於いて、已にその濫觴を見出だした。けれどもそれは一種の從屬的なる序、若くは他の主要事件を寫す場合に於ける附帶現象として添加されたものに過ぎなかつた。國文學に於ける獨立した自然描寫の最初の現はれは、恐らく『萬葉集』であらう。萬葉以後、延暦、弘仁、古今、後撰、拾遺と引きつゞいた代代の歌謠に於いて、自然の描寫は限りもなく多く現はれたが、散文に於いて自然風景それ自身を獨立的に取扱つたものは未だ曾て見えなかつた。『竹取』、『伊勢』、『土佐』、『庵ぬし』、『かげろふ』等に於ける多くの叙景も要するに主要事件に對する附帶添加の叙景で、叙景のための叙景は『枕の草子』を以て初めとする。清少納言は父祖二代の名聲ある和歌の家系を承けながら、家道を善くせざることについて、常に一種の引目を感じてゐた。天は常に二物

を與ふるに吝かであるが、時には一種の償ひを供給して其の大襟度を示すことがある　彼れは彼女に和歌の才能を惜しんだ代はりに、許すに散文の特技を以てし而して歌人等の特許されたる自然の獨立描寫を散文に試みることを許したのであらう而して此の方面に於いても一種の鼻祖たるの名譽を彼女に與へたのであらう

清少納言が概觀的の叙景を能くしたことは、冒頭なる四季の觀察が美しく證據立てゝゐる。―春はあけぼのの一の一段が、彼女が此の隨筆に於ける筆の執り始めであつたか、初筆ではないまでも、考慮の結果、之れを第一線に立たせたのであつたかそれは今から明らかに知るよしもないが、その新らしさ、面白さ、品のよさ、及び初段としての相應はしさから見ると、この冒頭配置は、恐らく作者の本意であつたのであらう。　吾等は此の第一節に於いてまづその文相の非凡なるに打たれる

春はあけぼの　やう／＼白くなりゆく、　山際すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

清少納言が着眼筆致の、人と異つて、奇警で、簡勁で、輕妙で、また要點を浮かし出して、讀む者の心にあり／＼と印象させる趣は、この一節を見ても明らかである　意味は「春での見どころは曙、そしてその曙の段々に白んで行くといふところだ　空は一體に夜の帷におほは

れて薄暗い中に、東の山際の處だけが少しばうッと明るくなつて、そこへ紫がかッた雲の細く棚引いたところ、そこが一番の見どころだ—といふのであらう。春の見所といへば、普通の人は櫻の花盛りとか、霞棚引く野山の眺めとかいふところを思ひ浮かべるであらうが、清少納言が人の思ひもつかぬ所に、格を破つて新しい觀察を試みたのも面白くしかもその書き方が春の現象の様々にある中から曙を選み出だし曙の景色の中から段々白んで行くところを選み出だし、白んで行く有様の中から、山際の一部分だけが、ばうッと明るくなつて紫の雲の細く棚引くところを選み出だし、廣い所から、段々狹く、特殊的に〳〵と、眼の着けどころを限つて行つて、「さア此處だ！」といふところの印象を、讀者の心に殘した手際は、感歎に値するものである。夏、秋、冬、皆同様の觀察による同様の寫し振であるが、彼女はかういふ新しい趣味のある觀察、要點を浮かし出して讀者の心に明確に印象せしめる寫し方を、始めて試みたばかりでなく、その後の文人の殆んど及ばなかつた程立派に之れを完成して居るのである。

吾等が『枕の草子』の自然描寫について、殊に感ずるのは、淸少納言が一見平凡で誰れもが看過するやうな光景に目を留めて、之れを丹念に描寫してゐることである。その平凡らしい光景を獨立させて、立派な藝術品に作り上げてゐることである、此の點に於いて彼女は

恐らく近代の謂はゆるスケッチ、寫生文の元祖とも云はれるであらう。第六十八段「なほ世にめでたきもの」のつゞきに、左の一章がある。

正月十日空いと暗う雲も厚く見えながらさすがに日はいとけざやかに照りたるに、えせ者の家の後、荒畠などいふものの、土もうるはしう青からぬに桃の木若立ちて、いと楉がちにさし出でたる片つ方は青く、今片つ方は濃くつやゝかにて、蘇芳のやうに見えたるに細やかなる童の、狩衣はかけ破りなどして髪はうるはしきが登りたれば、また紅梅の衣、白きなど引きはこえたる男子、半靴

譯

正月の十日のこと。空は大分暗く、雲も厚く重たげに蔽つてゐるが、それでも春は春だけに、厚い雲の切れ目から、鮮かに暖かい日の光が射してゐる。この光をあびて、郊外に、むさくるしい百姓家が立つて居る。その家の後に、荒らしたまゝの畑の、土も半ば踏みにじられて、一向美しい青黒い艶もない、その隅の方に、一本の桃の木が立つてゐて、若葉の細い楉が、生氣よく、ずんずんとさし出てをる。その日陰の一方は青く、日向の一方は艶々した淡い蘇芳色をしてゐるが、この桃の木に痩ぎすな、きかぬ氣の子供の、狩衣をば木の枝に引つかゝつて破るゝに任せながら、髪はきれいに結つてゐるのが、登つてゐると、その下に

はきたる木の下に立ちて、「われに好き木切りて　いで」など乞ふに、また髪をかしげなる童女の衵ども綻びがちにて、袴は萎えたれど、色など好き、うち着たる、三四人、「卯槌の木の好からむ、切りておろせ、御前にも召すぞ」などいふに、下したれば、走りがひ、取り分き、「我れに多く」などいふこそをかしけれ。黒き袴きたる男走り來て乞ふに、「待て」などいへば、木の下によりて引きゆるがすに、危ふがりて、猿のやうに掻いつきて居るもをかし。梅などの

紅い衣に白いのを重ねて着て、後の裾をふつくらと膨らました、優しい男の子が立つてゐて、「僕に好い木を切つて頂戴よ、ねい！」なぞと云つて頼むと、今度は髪をきれいに結つた女の子の、着物は大分綻びて居るが、袴はくた／＼になりながら、色の好いのを着たのが三四人、これも木の下に立ち寄つて、「こちらの御前樣にも御用がある、卯槌になりさうな好い木振のを切つておろせ」などいふと、面白がつて、すぐに切つては投りなげると、下では走せ違つて、我れ勝ちに取り分けたが、少ないのが惜しがつて、「わたしに、もッと澤山よ」など云つてゐるのも面白い。そこへ今度は黒い袴を着た、やかましい奴が一人走つて來て、「おい、頼むぜ」といふと、木の上では、「待つてゐろ！」といふ。「何を！」といふより早く、木の下に驅けて來て、ゆさ／＼と引き搖がす。怖がつて、木の上の腕白が猿のやうに嚙りついてゐる

なりたる折も、さやうにぞあるかし。

るのも面白い。梅の實の熟した時なども、こんな事はよくあるもの、

實にうまく書けてある。春先の空模樣から、一冬荒らされて土に光澤のない畑の樣子、木の立按排、威勢よく育つた楉の枝の日向日陰による色の相違、木の上には破狩衣の腕白小僧下には第一に紅白の衣の重ね衣に半靴を穿いた意氣な少年、つゞいて着物は萎えても口は減らぬ芝居掛りの御前樣娘、最後に黑裝束の暴力靑年と、實際に見たそのまゝではあらうが、うまくも次第して巧みに書いてある。殊にかういふ光景に特別の趣味を見出だして、これだけ切り離して、印象的、スケッチ式の、氣の利いた小幅を出來したところは、何といふ新しい着眼で、同時に氣の利いた描寫であらう。かういふ描寫にかけては、明治以前では、他の作家はもとより、紫式部といへども、恐らく雄を競ふことは出來まいと思はれる。

自然描寫を從屬的、挿入的の立場から引き上げて獨立の文學たらしめたことと、自然に對して空前の、而して半ば絕後のすぐれた觀察と描寫とを試みたこと、――これは隨筆といふ新文學の創建に比べて、部分的の小さい事ではあるが、見逃すべからざる『枕の草子』の作家の功績である。

十

吾等は最後に、第四種として類別した論說式の文章として、用語論ともいふべき一段を引かうと思ふ。淸少納言は「枕の草子」に於いて、殆んど文學論らしい意見を示さなかつた。これは紫式部が「源氏物語」の中で、可なりに纏まつたその方面の意見を發表して居るのに對して、限りなき遺憾であるが、しかしながら、此の言語文字に關する斷片的偶感の中に、才女性が懷いてゐた一種の文學意識のほの見えて居るのは、吾等に取つて、せめてもの慰めと云はねばならぬ。「春曙抄」の第百三十九段の全文がそれである。

わろきものは、詞の文字（もじ）あやしく使ひたるこそあれ。たゞ文字一つに、あやしくも、貴（あて）にも、卑しくもなるは、いかなるにかあらむ。さるは、かう思ふ人、殊に勝（まさ）れてもえあらじかし

譯

見ともないのは詞、文字を變な具合に使ふことである。たツた一字（ひとじ）の文字の使ひ方次第で、同じ事が可笑（をか）しくも、上品にも、下品にもなるといふのは、どうしたものであらう。といふのは、かく言ふ當人が、何も此の道に特に勝れてゐるといふわけではない。好き嫌

いづれをよき惡しきとは知るにかあらむ。されど人をば知らじ、たゞ心地にさ覺ゆるなり。何事をいひても、「その事させむとす」「いはむとす」「何とせむとす」といふと文字を失ひて、たゞ「言はむずる」「里へ出でむずる」などいへば、やがていとわろし。まして文に書きてはいふべきにもあらず。物語こそ惡しう書きなどすれば、言ひがひなく、作り人さへいとほしけれ。「ナホス」「定本ノマヽ」など書きつけたる、いとくちをし。「ひてつ車に」などいふ人もあり。「もとむ」とい

ひは人々名々で、どれを善いの惡いのと、どうしてはつきり知ることが出來よう。唯だ人は知らぬが、自分の氣持に、さう思はれるといふのである。何を言つても同じことだが、例へば「しかせむとす」「言はむとす」といふべき所を、「と」の字をぬかして、唯だ「何といはむずる」「里へ出でむずる」などいふと、もう詞の品位が、ぐツと下つて來る。口にいふのでさへ耳に障るもの、まして文章に書いては堪つたものでない。文章の中でも、殊に面白く書くべき物語小說などを下手に書いたのに至つては、愛想が盡きて、書いた作者までが氣の毒に哀れッぽく思はれて來る。また古文などの寫本に、自分が筆を入れたと云つては「直ス」と書き入れ、原本の通りだと云つては「定本ノマヽ」などと書き入れをしたのを見るのも、實に情ない。また卑俗な訛語を用ゐるのも文の品位を下げるものであるが、世間には「ひと

ふ事を「みとむ」なんど、皆いふめり。いと怪しき事を、男などはわざとつくろはで、故らにいふは惡しからず、我が詞にもてつけていふが、心劣りすることなり。

つ車に」といふ事を「いひてつ車に」といふ人もある。又「もとむ」といふ事を、みんな平氣で「みとむ」などと云つて居るらしい。甚だ怪しからぬ詞でも、男などはわざとつくろはずに使ふのも一味だが、下品な詞が口について、不用意の中に、自然に出るのは見下げられるものである。

『枕の草子』に於ける自然人事の類擧は、冒頭の「春は」「夏は」「秋は」「冬は」を四つに數へて約百七十項の多きに及んで居る。而して其の殆んど凡ては一項の中に少なきも二事、三事、多きは二三十事を含んでゐて、一項一事は「春はあけぼの」「夏は夜」「秋は夕暮」「冬はつとめて」「陀羅尼は曉」「讀經は夕暮」「霧は川霧」等の、ほんの數項位に過ぎぬが、その間にあつて、此の「わろきものは」が、一項一事の除外例の一つで、而もその中に、一轄ある見識が魂を込めて書かれてゐるところを見ると、此の一項は淸少納言に取つて、虎の子ともいふべき大切な思想であつたのであらう。その言ふところは詞、文字の事に限られて、甚だ狹く乏しい憾みはあるが、その狹い窓口を通ほして覗かれる奥行は可なりに廣くして、同時に重要な意義と見識とを暗示してゐるところがある　文章は詞一つの使ひ方で、活きもすれば死

にもする、落着きもすればぐらつきもする。同じく「ある」といふ意味の詞ではあるが、「御座り申す」「御座ります」「御座います」「ござりんす」「ござんす」「ごんす」「ごす」「げす」、皆それ〴〵に特殊の味があつて、使ひ方一つで、都人にもなり、田舎者にもなり、また紳士にも、娼婦にも俠客にも商人にもなる。これが何事を寫すにも最も妥當なる一語を用ゐねば落着かぬといふ、謂はゆる一語說の成立つ所以で、淸少納言がこゝに目を着けたのは、卓見と云はねばならぬ。けれども彼女は文字一つの威力を說いて一語說を認めながら自分自身の一流に執着することをしなかつた。趣味の上の好惡に絕對標準の無いことを知つてゐるからである。漢文好きと和文好き、雅文好きと口語文好き、簡潔好きと詳密好きとの好尙がどうして一致することが出來よう。彼女は之れを知つてゐるので、唯だ自分の感ずるまゝを述べるのだと言つて居るが、彼女の文章趣味は、概して平安朝式の優美上品本位といふところにあつたらしい。さればこそ「言はんとす」を「いはんず」と言ひ、「出でんとす」を「出でんず」といふ鎌倉詞の出來かゝつたのが、餘程癪に障つたのであらう。兼好法師は『徒然草』の中で、

　文の詞などぞむかしの反古どもはいみじき。たゞいふ詞もくちをしうなりもて行くなれ。古は「車もたげよ」「火かゝげよ」とこそいひしを、今様の人は、「もてあげよ」「かきあげよ」

といふ。

と云つてゐるが、まさしく清少納言の言語趣味を承け繼いだものである。清少納言はまた用語の妥當といふ事が、説話よりは文章に於いて一層大切に、普通の文章よりは文學的の文章に於いて、更に一層大切なることを知つてゐた。また一かどの文人が折角自家一流の文體で書いたものに對し、勝手に入筆して得意がる似而非文章家の陋を卑しんだ。彼女はまた文章の純粹といふ事に深く留意したらしく、卑俗なる訛語を用ゐる當世人を賤しんだ。彼女はまた、男がわざと不作法な詞を用ゐるのは、時として面白いが、不用意の間に出る不背みな卑俗語は興の冷めたものであることを説いた。不穩な語、下卑た語でも、特殊の場合に然るべく用ゐると、それが妥當化されて、却つて有効になるといふ、修辭上の除外眞理を會得したのである。

清少納言にも一種の時代的僻見があつた。王朝の優雅艶麗なる詞遣を絶對不變の標準と見たのがそれで、高邁無双の趣味家なる彼女が顰蹙したにかゝはらず、「言はんず」「出でんず」式なる強い調子の語が、「今昔」あたりから、次第に文學的に使ひ馴らされて、遂に鎌倉時代の中心特色語となつたのは、一種の皮肉であるが、とにかく彼女の此の論は、修辭の肝心を把握し、殊に、實際構文上極めて大切なる點を睨みつゝ、詞人としての立脚地を明らかに

したもので、かやうな深奥微妙な用語觀によつて此の草子が生み出されたものであることを考へると、此の一段は作者の心理說明の鍵として、評論史上の重要なる價値となるであらう。

十一

『枕の草子』は平安朝の最も磨かれたる趣味性が最高文化の十字街頭に立つて不斷の刺戟に應じた一觸卽發の藝術的記錄である　淸少納言は心の裏に淸新な上品な奇拔な深刻な雋銳な、而して洗練された爆發性の感情と趣味とを持つてゐたが、之れを突發的、孤立的に表現する素質に惠まれて、蓄積的、待機的、連絡的、組織的に表現する素質を賦與されなかつた彼れが詞藝の表現形式は、順序もない子供のおしやべりのやうなものであつた　小さく優しきは、土筆や蕨が思ひ出したやうに土から顏を出すが如く、大きく壯快なるは、孟宗の筍の群が土塊を割つて太き圓錐の奇貌を現はすが如く、乃至野中の一本杉や大樟樹が無遠慮な枝を八方に伸ばすやうな槪があつた。　彼女の初一念は恐らく咄嗟に飛び出して、急性に凝固したであらう。　而して火山の岩やラヴが出鱈目に飛び散り流れ出して、その跡が自然に

大小、高低、疎密、遠近、參差錯落として一種の變化ある奇景を成すが如く、單語の上下列擧、短句長文の交互布置、花鳥の品騭、哀樂の抒情、交游の逸興、禁裡の雲影など、限られたる自然・人事の觀察が、細大高下、貴賤尊卑、悲喜哀歡、飛び／＼離れ／＼に並べられて、その結果は、意識的に組織された文學と相對して毫も讓らざる新らしき文學「隨筆」を成したのであらう。

隨筆は清少納言によつて始めて試みられた新種の文學であつた。それは部分的には在來のあらゆる文學に負ふ所があつたけれども、全體としては、彼女自身の創試に成る頂天立地孤峰冲空の文學であつた。それは、先代の文學に負ふ所から見れば、一種の集大成ではあつたが、『源氏物語』に於けるが如く、綜合的、組織的の集大成ではなくして、分散的、孤立的の集大成であつた。まづ一物は一づくしの單語短句列擧については、『徒然草』や『古今六帖』はたま／＼の類似か、或はほんの觸目といふだけで、恐らく暗示程度の影響をも彼女に與へなかつたであらう　その外で先行文學に對する第一の類似は日記で、『枕の草子』は、主として身邊環象の記錄であり、その中には人をも、場所をも、年をも、月をも、時には日をまで明記したる所があり、從つてその主要部分と主要性質とについては、一種の日記といふべきものであるが、同時に日記の生命なる順序と連絡とを失つて、すつかり隨筆化されて居る。要するに『枕の草子』には、作者の傍若無人振と、自由な天才發揮振とが、手もなく先行日記を一

蹴して、日記ならば非日記か、或は超越日記ともいふべきものを作りなした觀がある

次ぎの類似は史實、傳説關係の先行書である『枕の草子』の或部分には、『古事記』や、風土記や、六國史や『靈異記』などに對しても一種の緣故がないではない　その宮中の御行事や、廷臣の逸話に關する記事などには逸史ともいふべき趣かありたまさかの昔物語には傳説記の繼承とも萠芽とも見るべきものもある。　けれども史實傳説いづれの關係の部分にも、歷史や傳説の體式を離れて、自由を保留したやうな傍若無人振があつてやはり孤影を聳やかして我が道を行く獨自の氣風が漂うてゐる。

第三の類似は小説の意味での物語であらう。　淸少納言が才識を誇り廷臣を揶揄した閒葛藤の逸話錄は、おほむね自己告白、環境寫實の短篇小説と云つてもよいものであるがやはり物語とは異つて、異風な一世界を成してゐる趣がある、　彼女は「一つれ〴〵慰むる物」と題しては、碁、双六に先んじて第一に物語を擧げ、また「物語は」と題して並べた十一篇の第一に住吉物語を擧げてゐるが、察するに彼女は彼等を與し易しと思ひつゝ、その顰に倣はずして、獨自の手振を發揮したのであらう　とにかく彼女の物語式なる段々には物語、日記、歷史、傳説等のすべてを樂籠に取り入れつゝ、そのいづれをも超脫して、未曾有の新式を發揮した趣がある

第四には自然描寫である。自然の描寫は古來の歷史にも地誌にも物語にも日記にも見出だされるが、それらは皆附屬的、介在的、挿入的であつたのに對して、『枕の草子』は之れに獨立の存在を與へ、のみならず未曾有の印象的、精寫的の新味を加へた。『枕の草子』の自然描寫が概描、精寫、共に在來、後至のいづれともその性質を異にしてゐることは、前章の引例によりて明らかなることである。

先行特殊の作品については、或は『伊勢物語』の「昔男ありけり」の「けり」連用や、こゝろ〳〵並べに暗示を得て、あの「をかし」の連續や不連絡式を試みたいではないかとも想像される。しかしながらたとひ暗示を得たとしても『枕の草子』は、すつかり化成の妙を極めて、『伊勢物語』以外及び以上の複雜なる美を備へて居り彼れの原始的なる小兒らしさに對して、文化圓熟期に於ける巨人の巨作たる貫祿を見せてゐるのは爭ふべからざることである。

『枕の草子』は『古今』、『後撰』等の歌集から何等かの影響を蒙らなかつたであらうか。あの無數の歌が一首毎に切り離して並べられた形、或は春、夏、秋、冬、戀、賀、哀傷、梅、櫻、月、蟲と、小さい群に寄せ集め、書きつゞけられてゐる形式が、たとひ無意識の中にでも、あの敏活なる清少納言の文學神經に何等の影響をも及ぼさなかつたであらうか。吾等は之れに對して大膽

に「否！」と答へることが出來ぬやうに考へる。

清少納言はとにかく先行文學の蘊蓄に富んだ天才であつた　彼女は意識的に、或は無意識の裡に彼等の大部分を藥籠中に收めたであらう　而して彼女の特別なる天賦は、それらを綜合的、組織的に集大成せしめずして、孤立的、分散的に集大成せしめたであらう　彼女は、譬へば精巧なる銃を取つて多くの銃眼を持つ城廓に籠つた手練の勇士のやうな者であつた。彼女は、勇士が東の銃眼から東の敵を覘つて見事に仕留むるが如く、或一事を寫し、勇士が西の銃眼から西の敵を、南及び北の銃眼から南北の敵を覘つて、物の見事に撃ち留むるが如く、他のそれ〴〵の對象を描いたのである　多くの先行文學のそれ〴〵から、それ〴〵別別に滋液を吸ひ取り、書きつゞけるそれ〴〵の章段に、それ〴〵別々の魂を吹き込み、而してそれらの連絡なき異質別性の小作品群を集めて、「無聯絡の大統一」といふ前代未聞の特色に輝く大文學を作り上げた。是れが『枕の草子』である　清少納言が無類の性格と天才とから生み出だされて、平安朝を輝かし、日本を輝かした偉大なる『枕の草子』である

かくの如くにして、『枕の草子』は、前代の文學と殆んど無縁なるが如き形を取りつゝ、孤獨の偉大を見せて、一條朝の長保四五年（一六六二―三）の交に成つた　而してそれは長保三年（一六六一）の四月二十五日に寡婦となつた紫式部が、哀を銜みつゝ、已に『源氏物語』の筆

を執り始めた時であつた

『枕の草子』の結尾と『源氏物語』の冒頭と、この王朝の二大作を折り重ねた光輩の長際期に於いて、吾等は暫らく名殘の筆を止める。吾等は今や天空に孤高を持する『枕の草子』の絶巓に立つてゐるのである。衆峰を踏まへて雲の彼方に聳ゆる大妙高の『源氏物語』は、やがて吾等を迎へるであらう。

平安朝文學史　上卷　終

索引

ア

イ

ウ

エ

オ

カ、クワ

キ

ク

ケ

昭和十二年六月廿四日印刷
昭和十二年六月廿九日發行
昭和十四年四月一日再版發行

日本文學全史卷三
平安朝文學史　上卷

不許複製

著者　五十嵐力

發行者　東京市麴町區九段一丁目七番地
株式會社東京堂專務取締役
大野孫平

印刷者　東京市小石川區久堅町一〇八番地
大橋光吉

發行所　東京市麴町區九段一丁目七番地
株式會社　東京堂
振替口座東京二七〇番
電話九段(33)自四一一〇番
至四一一九番

製本　仲村庄治

（共同印刷株式會社印刷）